る。これは石匕として分類すべきであろう。

不定形石器（第140図8；図版175－12）　用途不明のほぼ完形に近い石器をここに含めた。8は両側からえぐりを入れているが、周縁には刃部がない。他の石器の未成品の可能性があるものもある。

使用・加工痕のある石器　刃部のような細かい剥離痕のある剥片をここに含めた。小片の為、全体の形態を推定できない。

3　古墳時代から奈良時代の遺物　（第141～152図；図版176～183）

この時代の遺物は須恵器が大部分で、土師器はその1割以下である。その他に陶棺・埴輪・金環・紡錘車・土錘が出土した。その時期は陶邑編年のⅡ期中葉からⅣ期が主体である。

A　集落外縁部の遺構出土土器

比較的まとまって遺物が廃棄されていた遺構に土壙32がある（第141図；図版176－1～9）。出土遺物は須恵器坏蓋・坏身・甕が大部分で器台・高坏が少量出土した。やや時期幅があるが、Ⅱ期中葉に入る。他の土壙からは第16表にみるように遺物出土量は少ない。

大落ち込み1も遺物が少なく、Ⅱ期後葉の有蓋高坏（第142図2）が出土。最も出土量の多い大落ち込み2からは5～9・12・13に示すようにⅡ期後葉からⅣ期までの遺物を含む。12・13のような出土例の少い大型の鉢類も出土している。大落ち込みからは大型の横瓮（14）が出土。溝11はⅡ期後葉の遺物が多いが、長頸壺（3）などⅢ期の遺物も少量含む。

10・11・15・16は、中世以降の遺構・包含層から出土した比較的残りの良いものを図示した。

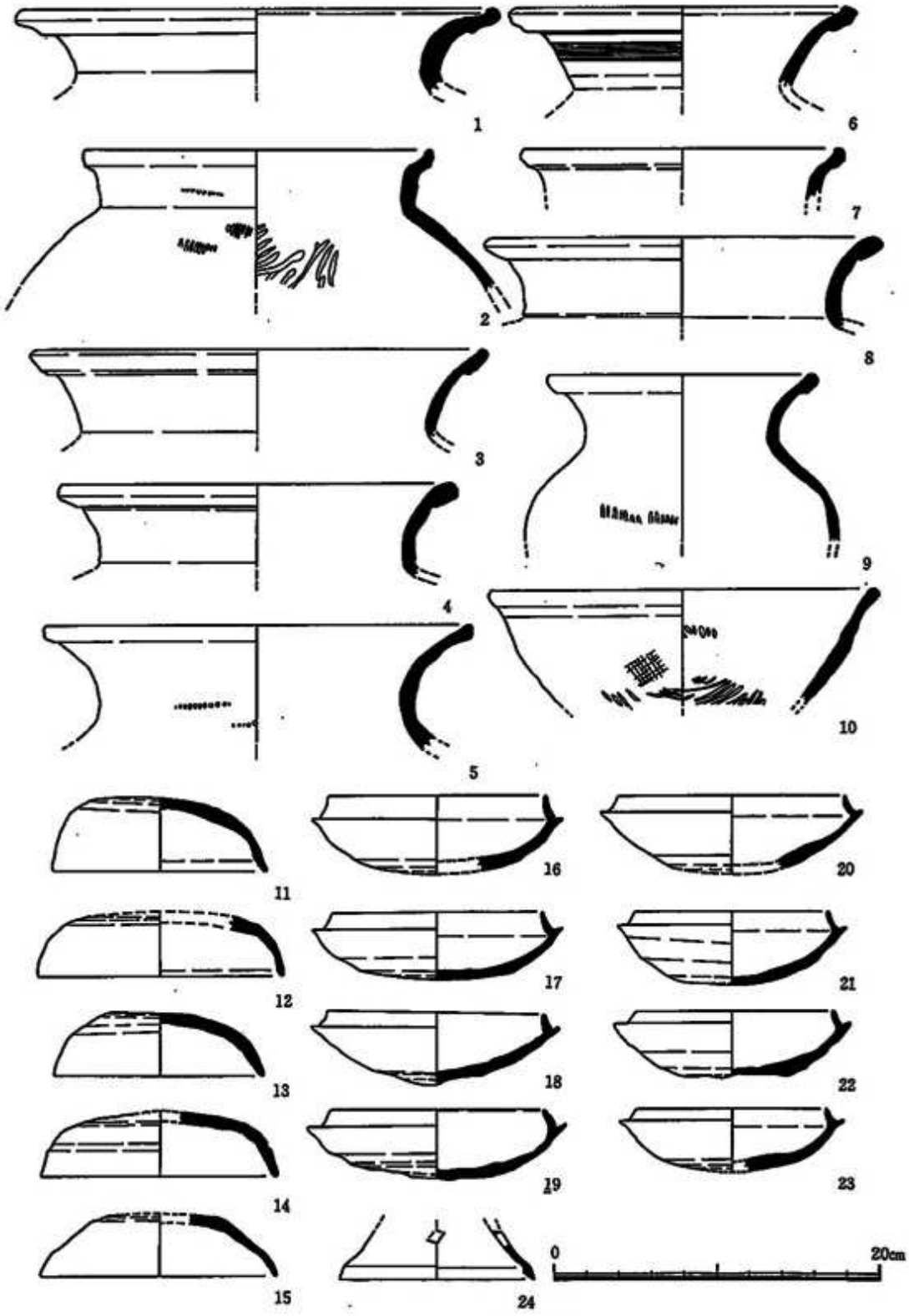
B　土壙墓出土の須恵器と土師器

土壙墓からは須恵器が1384片、土師器が 125片、合計1509片出土した。副葬品で土圧でヒビの入ったものは1個体でも1片と数えた。破片数は未集計のものも若干あるので合計数量は、これをやや上回るが、土壙墓総数 380基に比して出土量は少ない。中でも土師器は1割にも満たない。その多くは細片で図化しえたものは甕1点（第146図1）にすぎない。土壙墓の埋土内からは須恵器が副葬品として出土しているのに対し、土師器が副葬された例はない。また遺体を覆っている破片も須恵器のみで、土師器を使用した例はない。それゆえ埋葬時の副葬品や遺体被覆は、基本的には須恵器を使用したといえよう。

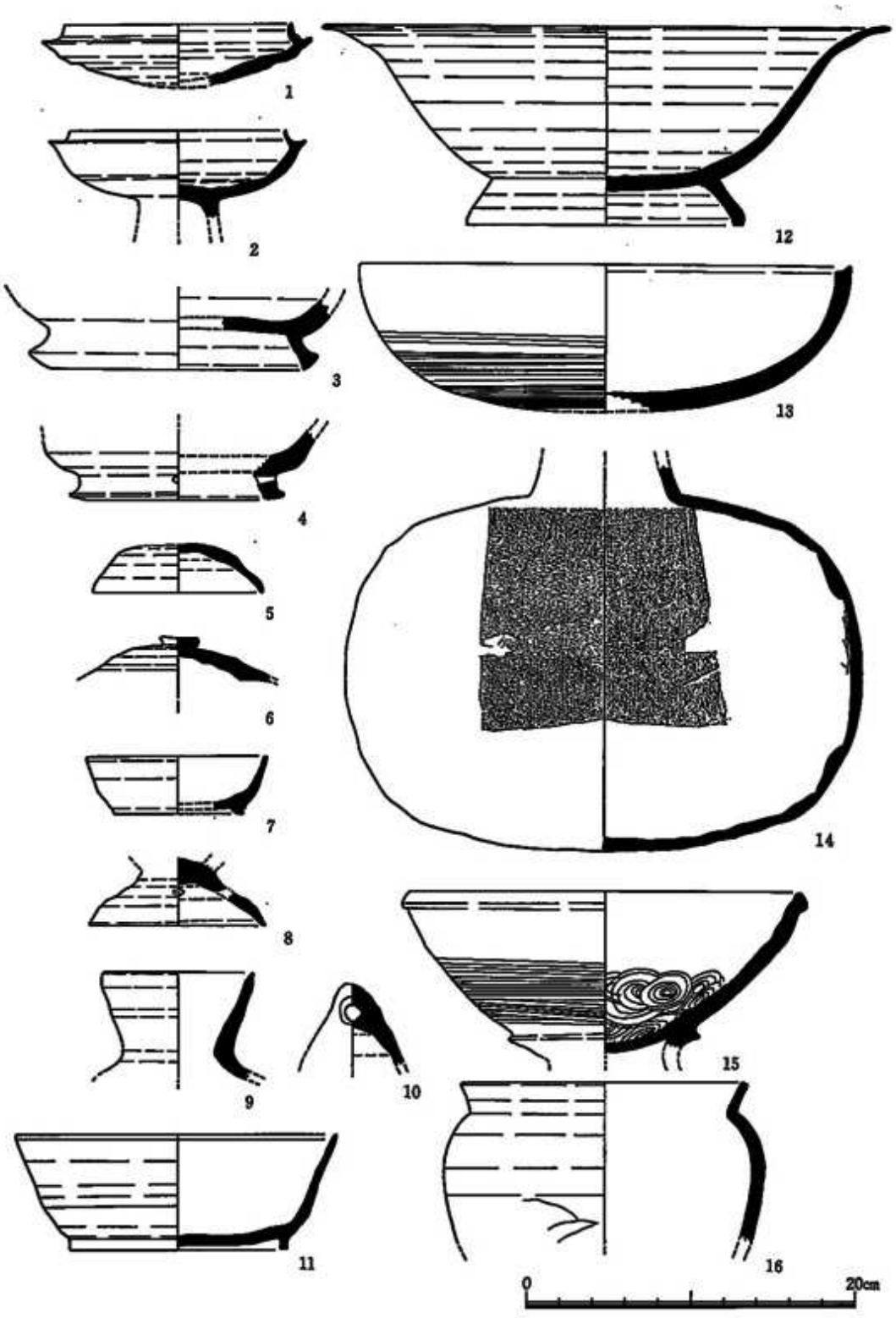
それでは1割を占める土師器はどう理解すべきであろうか。今のところ二通りの考え方ができる。ひとつは集落で使用していた土師器の流入、もうひとつは墓前祭に使用したものの流入である。後者は土壙墓が上部を削平され、少しはあったであろう土まんじゅうの高まりと、当時の地表面を失っている結果、今のところ検証することができない。

土壙墓に伴う須恵器の時期はⅡ期後葉からⅣ期である。Ⅱ期中葉以前のものもあるが、埋土中に破片で入っており、その量も少ないことから土壙墓に伴っていた可能性は薄い。

土壙墓中に入っている須恵器は、遺構の項で述べたように、副葬品や遺体の被覆等に用いられたものである。また墓前祭に使用されたものや、集落から廃棄されたものもあろう。



第141図　ＳＫＡ32出土須恵器



第142図　溝・大落ち込み等出土須恵器

器種別の破片数は一応数えたが、細片には同定の困難なものもあり、ここでは大ざっぱに坏類、甕、その他の器種に分けて数量を示す。最も多いのは甕で702片、次が坏蓋と身で307片、その他の器種が261片、器種不明が114片である。器種不明は細片の為器種の同定がむずかしいものだが、その多くは坏身・坏蓋・甕以外の器種と思われる。

破片数では形が大きいこともあって甕が最も多いが、個体数では圧倒的に坏身・坏蓋が多い。坏身・坏蓋の口縁の破片は143個体191片を数えた。ただ個体数に関してはかなり接合・同定を行ったが時間的制約もあって完全ではなく、実際の個体数はこれをかなり下回る。また有蓋高坏の蓋・身の口縁片は、明らかに高坏と認められるもの以外は坏身・坏蓋の破片に数えている。しかし有蓋高坏は、つまみがあって蓋と認められるものは１個体、有蓋高坏の接合部が存在するもの１個体、脚部４個体と少なく、坏身、坏蓋の中に数えられている有蓋高坏の個体数は非常に少ないと判断される。

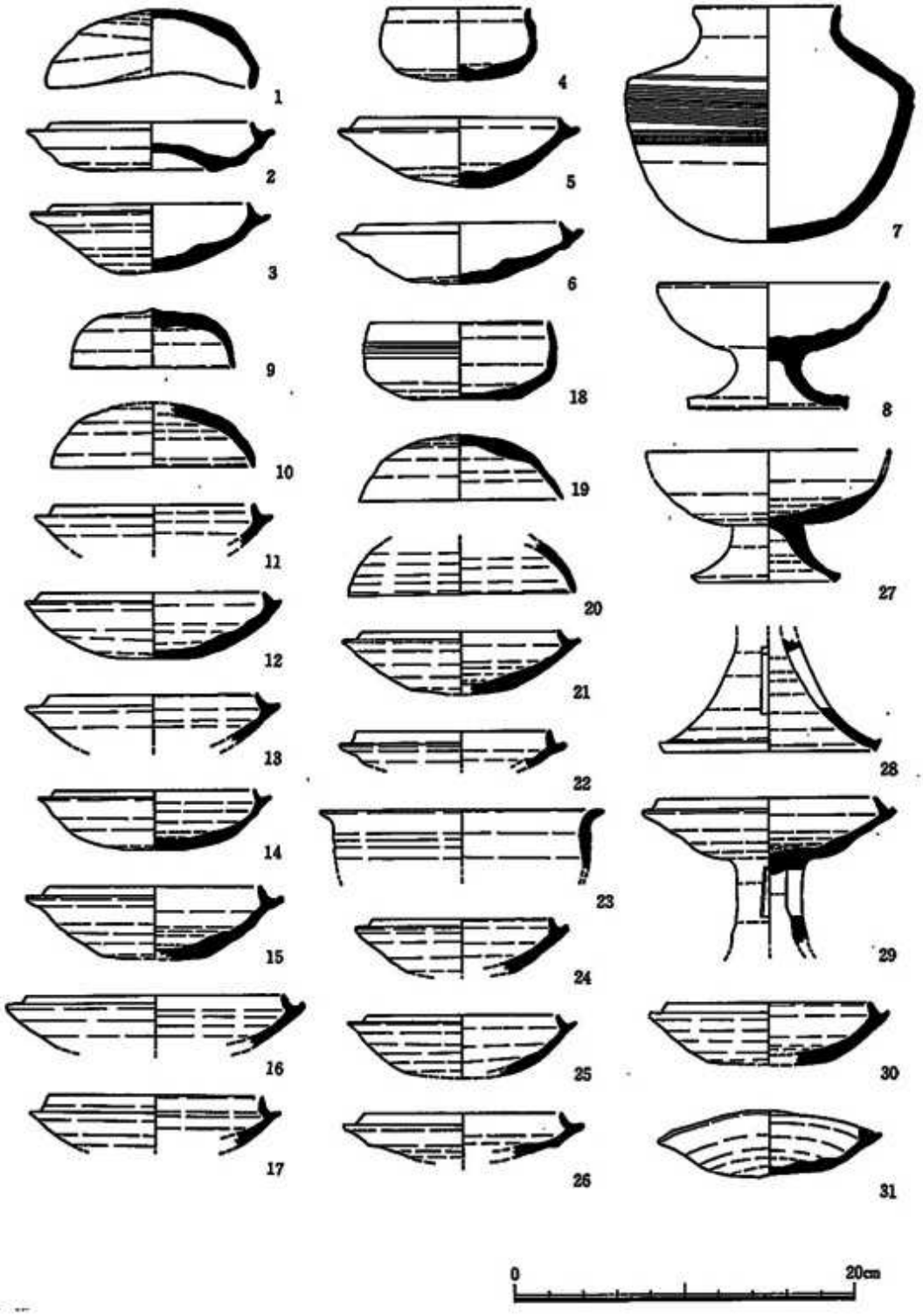
甕の口縁片は33個体167片である。破片数の多い割には良く接合されて個体数が少ない。土壙墓遺物接合表（第22表）をみると、甕の破片が他の土壙墓の破片とよく接合していることがわかる。

その他の器種も破片数の割に個体数は少なく、口縁の残るものは22個体にすぎない。ただ口縁部が遺存しないが完形に近い個体もあるので、別個体と識別できる個体数はこれをかなり上回る。器種としては有蓋高坏・無蓋高坏・小型甕・短頸壺・広口壺・長頸壺・細頸壺・堤瓶・横瓮・把手付鉢があり、副葬品・遺体被覆に使われている。それぞれの個体数は少ないがほとんどの器種が出土している。その他破片としてて盤・器台・たこ壺・平瓮の破片が少量出土している。

坏蓋と坏身（第143・147図；図版178・181）　坏蓋はⅡ期後葉のものがほとんどで、Ⅲ期・Ⅳ期に含まれるものはほとんどない。宝珠つまみの破片が土壙墓埋土内からは出土しておらず、土壙墓の上を覆う包含層中からの出土も希少であることから、Ⅲ期・Ⅳ期の坏蓋の利用は皆無か極めて希であったと思われる。

坏身は立ち上がり部の低いⅡ期後葉のものが大部分である。立ち上がり部のやや高いものが１点あり（第143図17）、やや時期が古くなろう。17は小片で入っており、副葬品として入っていたわけではない。Ⅲ期の坏身は土壙墓44から破片が出土しており（第143図18）、受け部がなく、やや内わんした口縁をもつ。高台はない。Ⅲ期前葉に位置する。Ⅳ期の坏身は土壙墓347（第147図３；図版181－８）と土壙墓356の西方にあるピット103中（第147図３；図版181－７）から完形品が１点ずつ出土している。いずれも高台が外底部の外側よりに貼付けられ、畳付きの全面が接地し、体部下半に丸みが残る。この２個体以外に、高台の付く坏身片は出土していない。

図化した坏身・坏蓋のうちほぼ完形品で埋納された状態で出土したものは、土壙墓111の６点（第143図１～３・５・６、図版178－２～７）と前記の土壙墓347とピット103の坏身２点である。割れていたが二つの土壙墓の破片を接合すると完形になり、どちらかに埋納されていたと思われるものに土壙墓243・249の坏身（第143図31）が１点ある。



第143図　第Ⅱ・第Ⅲ調査区土壙墓出土須恵器

その他の坏蓋、坏身は4分の1ほどの破片が多く、当初からその土壙墓に伴っていたかどうか不明である。特に土壙墓の切り合いが多く、ひとつの土壙墓の副葬品がこわされて、別の土壙墓に破片となって入ったものも多くある。

坏身、坏蓋の出土量は東Ⅱ群が 174片と最も多く、西Ⅰ群44片、西Ⅱ群36片、東Ⅱ群31片と続く。これらの出土量の多い群に対し、東Ⅲ群17片、東Ⅳ群5片とこの2群は少ない。坏身、坏蓋の時期も前4群がⅡ期後葉であるのに対し、後の2群はⅡ期後葉が少なく、Ⅳ期の坏身が副葬されている。

以上、坏蓋、坏身の副葬は、埋納時の状態で出土した点数は少ないが、かなりの出土量があり、図化できたものは未掲載分も含めて40個体を超えている。それらの多くは土壙墓埋土中に副葬されたものか、墓前祭に使用したものと考えられる。これらの多くは第143図にみるようにⅡ期後葉のものであり、それも西Ⅰ・Ⅱ群、東Ⅰ・Ⅱ群で使用されている。Ⅲ期・Ⅳ期には出土量が少なくなり、なかんづく坏蓋はない。坏身だけが東Ⅲ・Ⅳ群で使用されている。

椀（第143図4・23）　椀は土壙墓111から3分の2ほどの破片（副葬品か？）が出土（4）。Ⅱ期後葉。破片（23）として土壙墓56から1点出土。口縁部が外反し、Ⅲ期初頭に入るか。土壙墓56は比較的遺物出土量が多いが、ほとんどがⅡ期後葉でも終わり頃の坏蓋・坏身片が多く、この椀だけ新しいものとみるかどうか今後の検討課題である。

盤（第145図6）　盤と確認できたのは土壙墓77から出土したこの破片が1点だけである。体部に丸みがあり、口径に対して器高も高い点からⅢ期前葉に比定できる。

高坏（第143図8・27～29；図版177－2・4、178－4・8）　有蓋高坏・無蓋高坏とも出土量は少ない。有蓋高坏（29）は土壙墓160に脚端部を欠いたものを副葬していた。Ⅱ期後葉である。破片では同時期の脚部が5個体分出土している。無蓋高坏は土壙墓111から完形品（8）、土壙墓154からもほぼ完形品（27）が出土している。いずれもⅡ期後葉。

甕（第146・147図7～10、148図1～3・5；図版180－1、181－1・4・6）　甕は副葬品や遺体被覆に用いられた。副葬品と考えられる甕は、上部を削平され、完形で遺存しているものはなかった。出土した甕の多くは、遺体の被覆に用いられていたものである。遺体被覆に用いられた甕は、異なる土壙間の破片同志がよく接合でき、一個体の土器を複数の土壙墓で使用していることが判明した。

甕はⅡ期後葉からⅣ期まで出土しているが、Ⅲ・Ⅳ期の甕の陶色の編年は必ずしも十分でなく、また時期を特定できないものもある。口縁を折り返すタイプ（第146図4、第147図7・9）はⅡ期後葉にあるがⅢ期にも存在するらしい。やがて退化して口縁の断面が平坦になったり（第148図1）断面三角形を呈す（第146図7）。この三角の張りもやがて小さくなっていく（第147図8、第148図5）。或は口縁部がつまみ上げられたりする（第146図5・6）。このような変化を仮定してみると、甕はⅢ期以降に比定されるものが多い。

甑（第144図10；図版179－5）　副葬品に土壙墓101の1例があるだけで、破片としてもほ

とんど出土していない。10は頸部が細く伸び、Ⅱ期後葉頃であろう。

短頸壺（第144図2～7、147図1；図版179－1～4・6、181－2）　副葬品として入れる例が最も多い。図示したものは、出土した土壙墓に副葬品として入っていたもので、完形ないしはほぼ完形で出土した。第143図7は土壙墓111の一括出土品のひとつでⅡ期後葉でも終末に近く、肩が張る。第144図では2が土壙墓40出土で、頸がやや長くわずかに外反し、肩に丸味をもつ。3は土壙墓69出土で、底部が土壙墓75から出土した。図では底部を表現していない。やや大型で口縁部が外反する。肩は丸味をもち、沈線が一本入る。4は土壙墓254出土。口頸部は削平されていた。肩に張りがあり、沈線が1本入る。5～7は小型の壺で、5は土壙墓287、7は土壙墓215より出土した。

ⅢW区から第147図1が土壙墓352より1点出土。体部にキ裂が入る不良品だが、完形である。頸部にかき目が入る。

短頸壺はほとんどⅡE区で出土しており、ⅢW区での副葬は1点だけである。個々の個体の厳密な時期比定は、今後の検討課題としたい。

広口壺（第147図6；図版181－5）　1点出土。土壙墓356に副葬されていた。口頸部は削平を受ける。高台は外側に強くはり、更に内側に返りをもつ。陶邑の編年表ではこの種の広口壺はⅣ期の初頭から出現している。6は高台の返りが強い点で、最も古い時期の広口壺と考えられる。

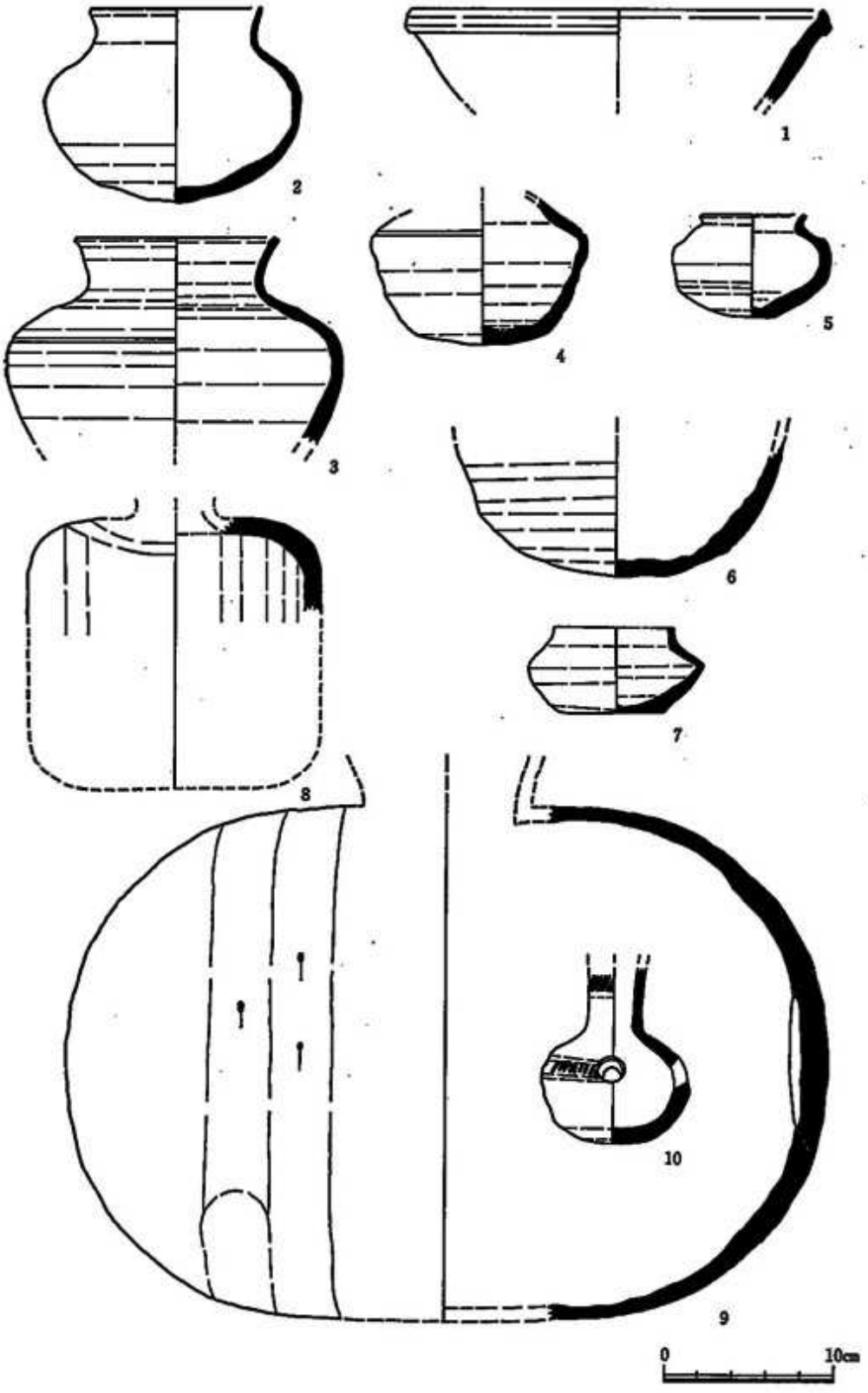
長頸壺と細頸壺（第145図7・8・9；図版180－6・7）　土壙墓109より長頸壺の体部（8）に、細頸壺の口頸部（7）をそえ、更に別の長頸壺の底部（9）をそえて出土した。8は肩が「く」の字に張って稜線があり、沈線が1本めぐる。高台も外底部内側について外に強く張り、Ⅳ期前葉に比定される。一方、9の長頸壺底部は、高台が外底部外側につき、張りも弱い点で、Ⅳ期でも新しい。また細頸壺（7）も、頸部が短く、口縁端部の立ち上がりも、2本の指で直立気味に引き上げておりⅣ期でも後葉に位置しよう。

提瓶（第148図4；図版181－3）　土壙墓300に1点副葬されていた。3分の1ほどの大破片で、当初から完形であったかどうか不明。口縁部は斜め上方に素直に立ち上がり、両肩に環状の双耳がつく。体部外周にカキ目が円形に施されている。Ⅱ期後葉。

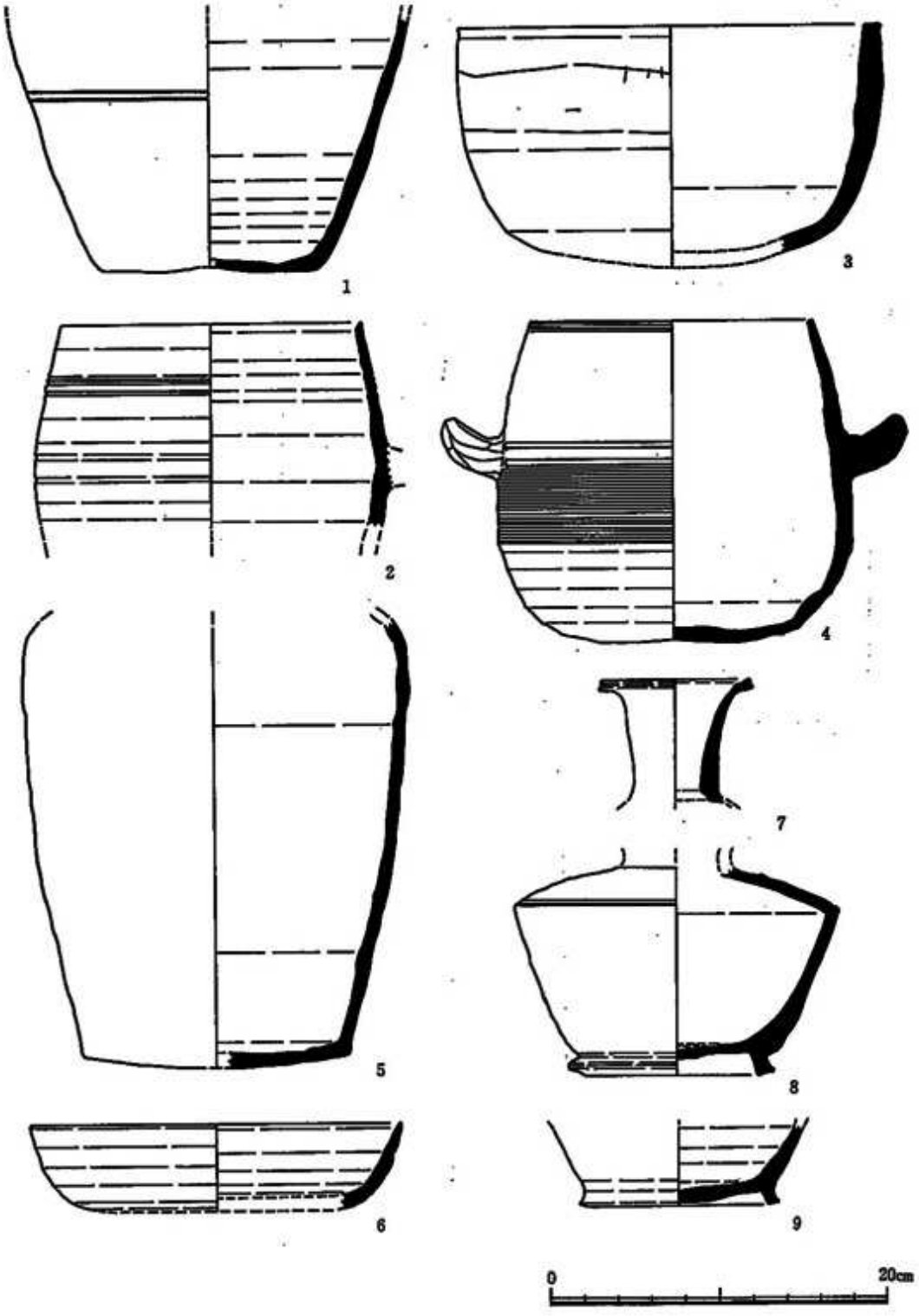
横瓮（第144図8・9）　土壙墓259に大型の横瓮（9）が副葬され、土壙墓239から肩部片（8）が出土した。8は口頸部が欠失しているので時期比定はむずかしいが、胴部が大型化するのはⅢ～Ⅳ期の特徴である。外面はケズリ、内面は図化していないが同心円文叩キが施されている。

鉢と把手付鉢（第145図1～4；図版180－2～4）　鉢は土壙墓265より大破片出土（3）。副葬品で半分を削平されたものと考えられる。口縁部が直口し、底部が広い点で、Ⅳ期以降の鉄鉢形の鉢とは異なり、あまり例をみない。器壁は厚く、体部外面ケズリ。

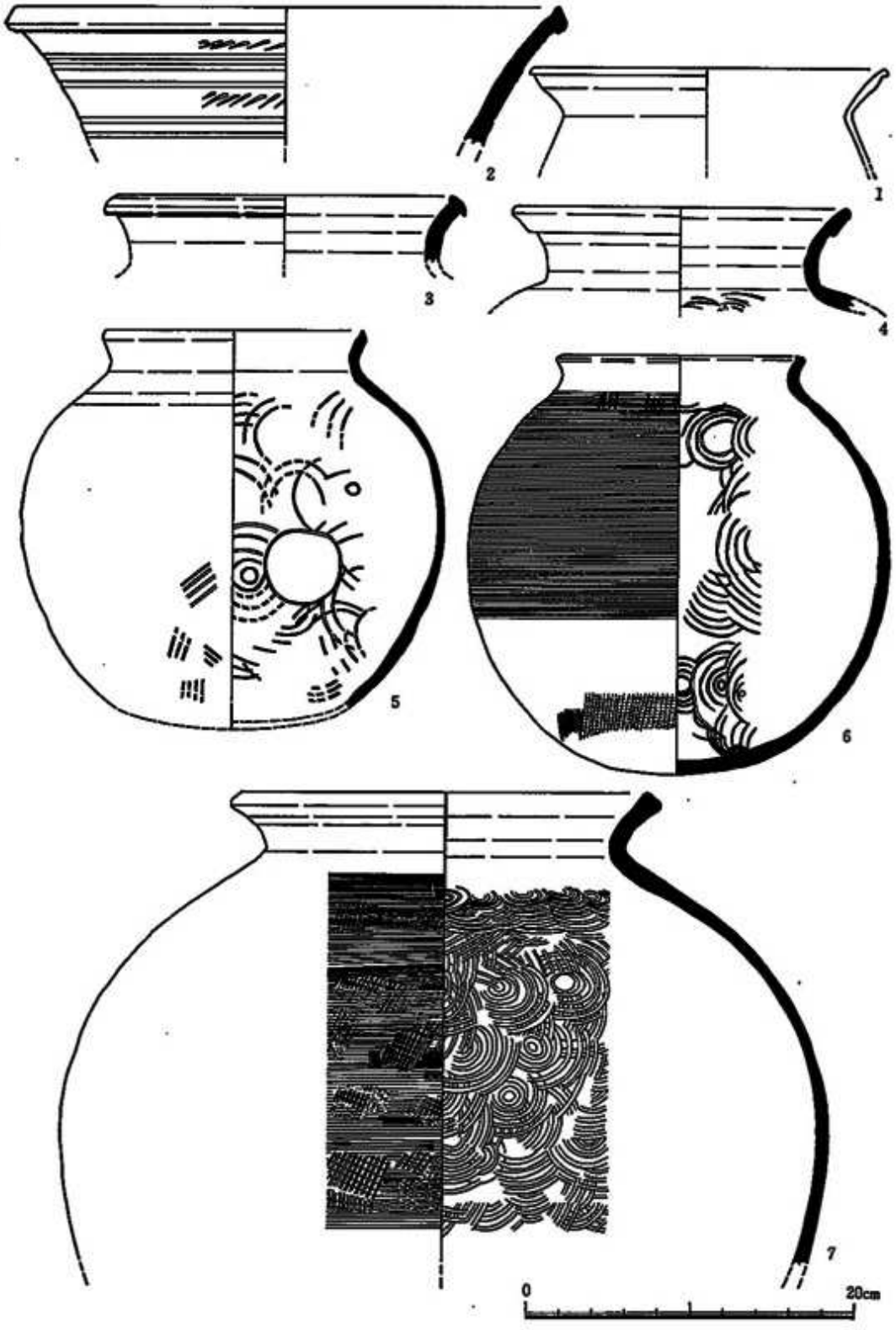
把手付鉢は土壙墓25の被覆物として出土（4）。両側に把手がつき、体部に2本の沈線がめぐ



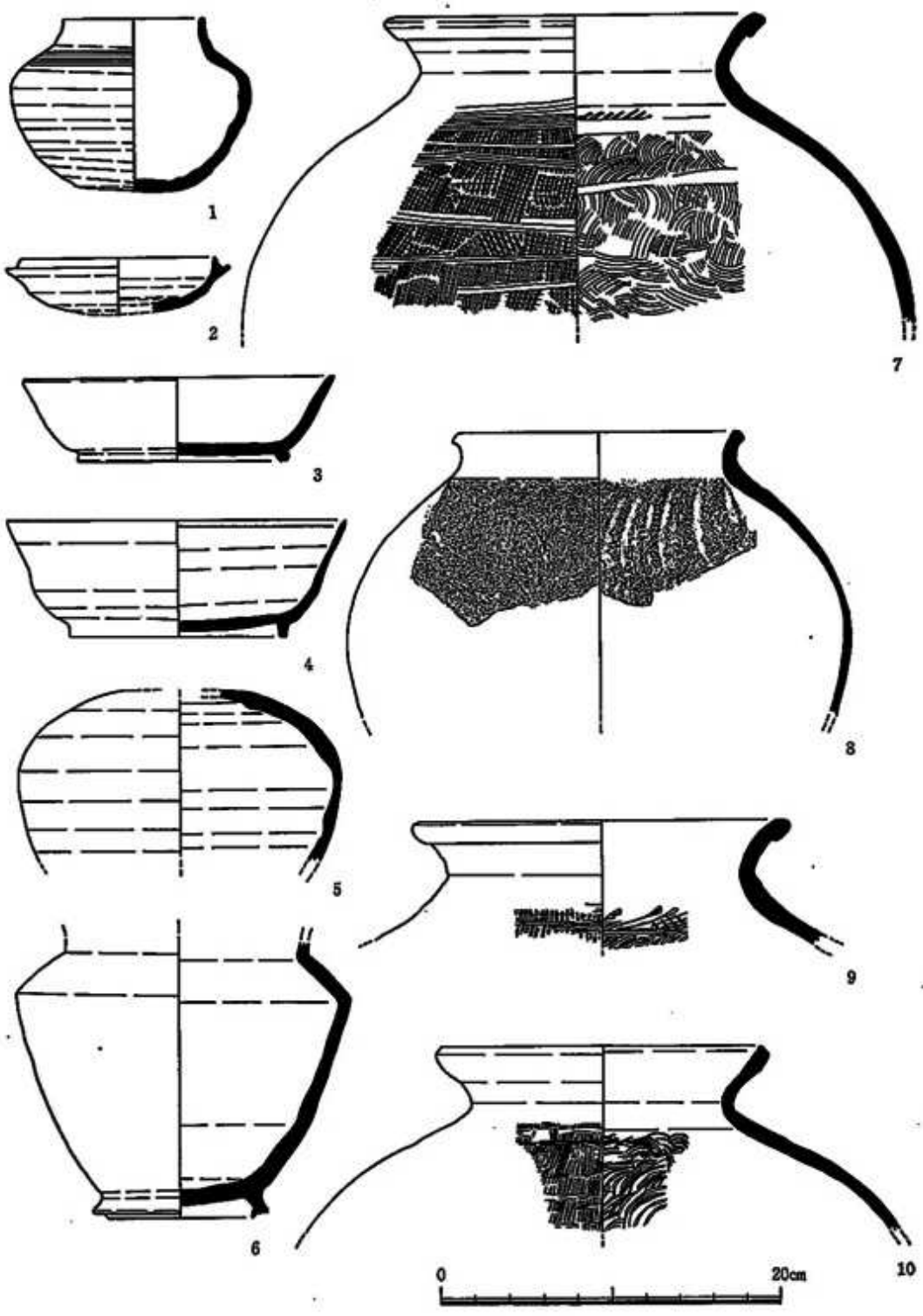
第144図　第Ⅱ調査区土壙墓出土須恵器



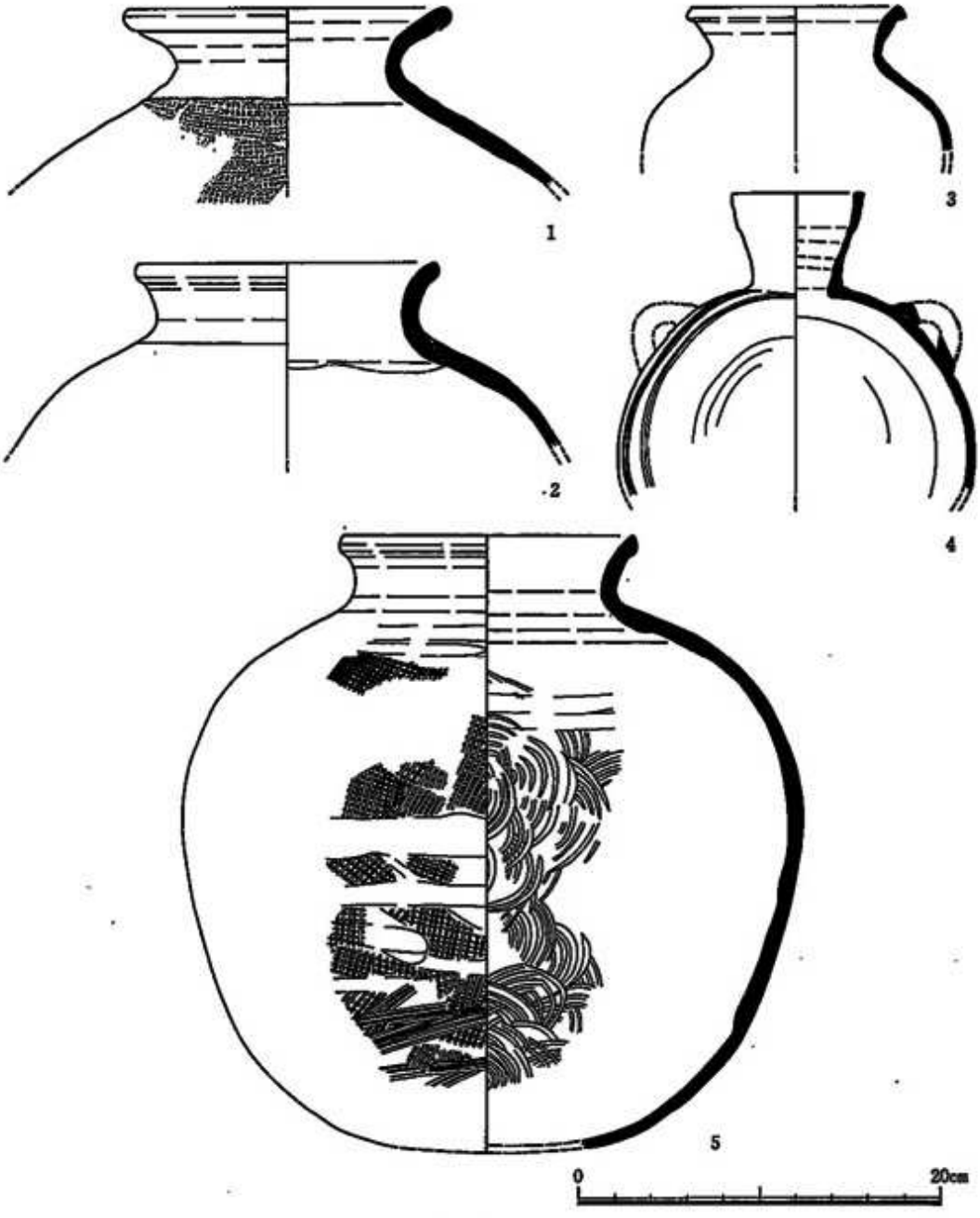
第145図　第Ⅱ調査区土壙墓等出土須恵器



第146図　第Ⅱ調査区土坡墓出土須恵器・土師器



第147図　第Ⅲ調査区土壙墓出土須恵器



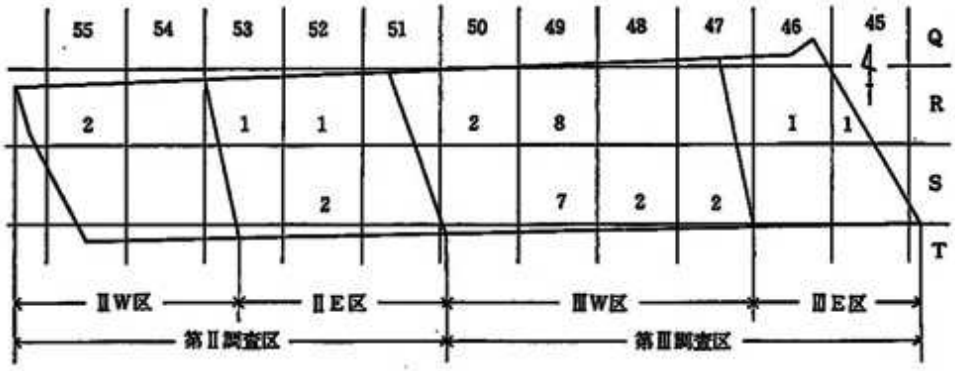
第148図　第Ⅲ調査区土壙墓出土須恵器

るが、把手の付根にはヘラで刺突を施す。口縁部直下と体部にカキ目が施される点で、Ⅱ期後葉に比定した。

土壙墓以外では、2が土壙墓263の西わきの包含層から、1が中世の大溝24から出土している。2は長い把手が片側につく鉢で、1も同種のものかもしれない。Ⅱ期後葉に比定される。

陶棺　（第149～151図；図版182・183、第38表）

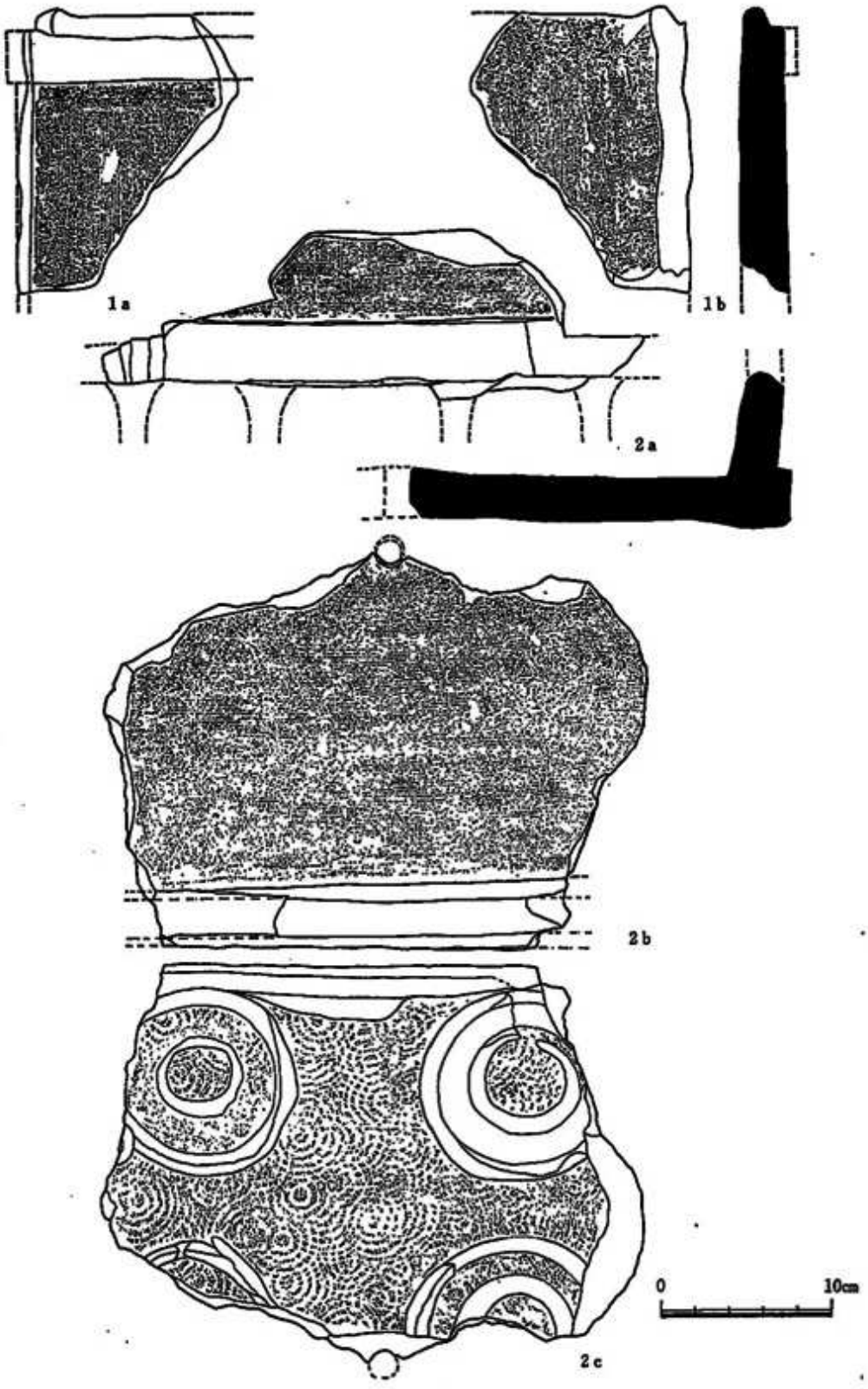
陶棺はすべて須恵質で棺身が9個体21片、棺蓋は5個体6片が出土している。棺身は大きく3



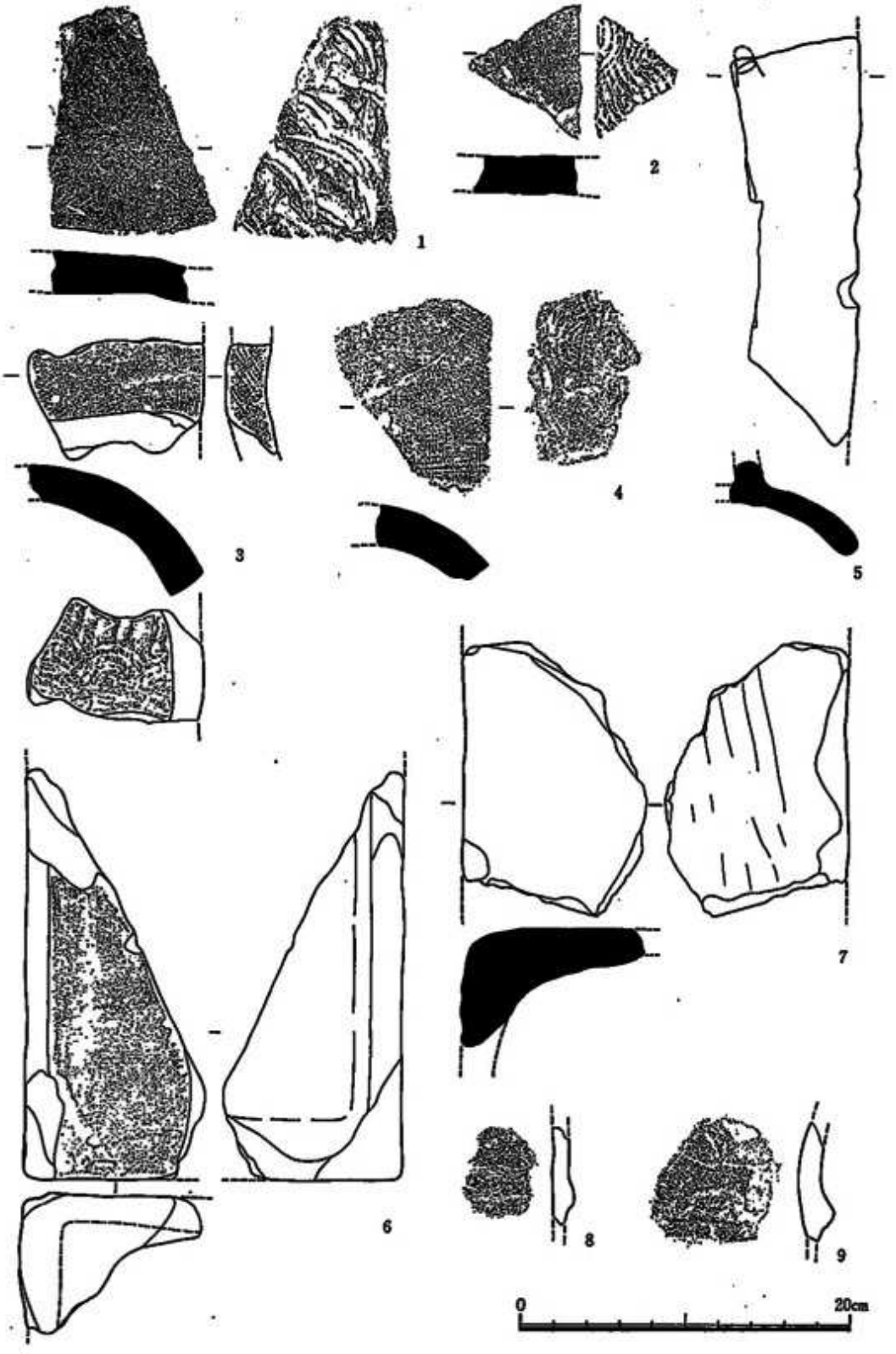
第149図 陶 棺 分 布 図

第38表 陶棺出土遺構一覧表

図	図版番号	陶棺部位	数量	調査区		遺構名	備考
150—1	182—1	棺身 側底部	4	IIIW		井戸6	すべて同一個体である。棺側の口縁下にタガを設け、蓋の受部をつくる。底部近くの側面にもタガを一周させている。全体に内外面とも細いハケ目を施すが、タガの周囲はヨコハケ。底部裏面に同心円文の叩き目があり、円形の脚がはがれた痕跡がある。また底に径8㎝ほどの円孔があく。
		〃 側部	2	IIW	R55	井戸2	
		〃 〃	1	IIIW	S49	溝30最上層	
		〃 底部	1	〃	S47	土壙71	
		〃 〃	1	〃	S48	土壙72	
		〃 側部	1	〃		溝28	
		〃 側底部	1	〃	R49	小丘	
150—2	182—2	〃 口縁・底部	2	〃	〃	〃	
		〃 口縁部	1	〃	S49	溝30最上層	棺側の口縁下にタガを設け、1と同様にハケ目
151—6	182—3	〃 側底部	1	IIE	R53	Pit77	外面ケズリ、内面ナデ
151—7		〃 側部	1	〃	S52	大落ち込み6	外面ナデ、内面ナデ
		〃 〃	1	〃	〃	溝25	棺側の口縁下にタガを設け、ハケ、内面ナデとハケ
		〃 側部	1	IIIW	S49	溝30最上層	外面ハケ、内面ナデ、内面ナデとハケ
		〃 口縁部	1	〃	S47	溝35	棺側の口縁下にタガを設け、外面ハケ、内面ナデとハケ
		〃 底部	1	IIE	R52	包含層2層	外面ナデ、内面ナデ
		〃 側部	1	IIIW	S48	包含層2層	外面ハケ、内面ナデ
151—3	183—2	棺蓋 口縁部	1	〃	S49	井戸13	外面・側面擬格子叩キ、内面同心円文叩キ
151—1	183—1	〃 天井部	1	〃	〃	溜群1	外面ケズリのちナデ、内面同心円文叩キ
151—2		〃 〃	1	〃	〃	井戸13	〃 〃
151—4	183—3	〃 口縁部	1	IIIE	R45	溝38	外面・側面擬格子叩キ、内面同心円文叩キの後ナデ
151—5	183—4	〃 〃	1	IIIW	R50	土壙34	外面、内面ともにナデルが、外面に突起が一ケ所ある
		〃 〃	1	〃	〃	土壙291	



第150図 陶　　棺



第151図 陶　　棺

類に分かれる。第１類は内外面ともハケを施す。最も多く破片が出土したものをみると（第150図１・２）、口縁部に蓋を受ける為のタガが一周し、底部近くにもタガが一周する。破片を見る限り、タガは上下のこの二本だけである。４個体ある。第２類は外面ハケで内面をナデルもの。２個体ある。第３類は外面がケズリないしはナデで、内面もナデのもの（第151図６・７）。３個体ある。２類・３類は口縁部の形状や脚部の有無は不明。

蓋は３類に分かれる。第１類は外面に擬格子の叩キ、側面にも擬格子の叩キがあり、内面に同心円文の叩キを施す（第151図３）。内面の同心円文の叩キをナデ消しているものもある（第151図４）。第２類は外面ケズリのちナデで、内面に同心円文の叩キがある（第151図１・２）。第１類の外面の叩キは一部にしか残っていないので、本来は同じものかもしれないが、大きな破片がないので判断がむずかしい。第３類は外面に突起をもつもので、全体がナデられている（第151図５）突起は基部径1.4cmと小さなものだが縄掛突起を模したものであろう。

円筒埴輪　（第150図８・９；図版183－５・６）

円筒埴輪は土師質のものが２片出土した。第150図９は幅３cm、高さ１cmの断面三角形を呈する凸帯をもつ。８は幅3.2cm、高さ0.6mmの極めて低い凸帯をもつ。表面調整は磨滅の為よく観察できない。両片とも凸帯がかなり退化しているので６世紀に比定できる。

10はⅡE区大落ち込み６、11はⅡE区土壙48から出土した。第Ⅱ調査区の一部から南方にかけては中塚の字名がかなり広い範囲で残っており、この埴輪片や次項の金環の出土から、この地区に古墳群が存在していたものと思われる。

金環　（第152図２；図版183－７）

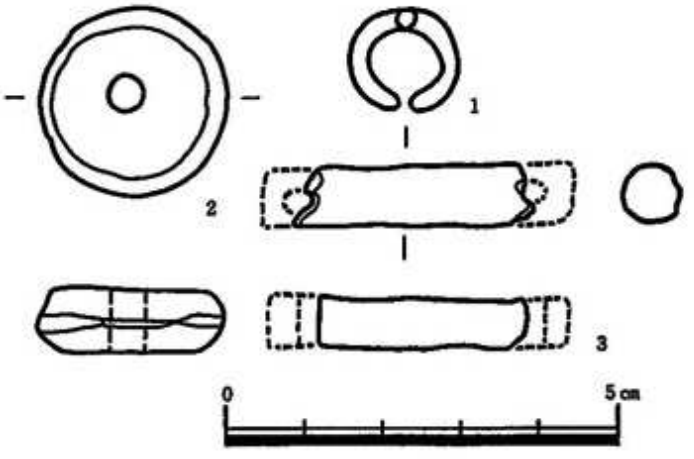
銅芯金張りの金環がⅡE区R52の中世の包含層より１点出土した。直径2.8cm、断面直径0.5mmである。

紡錘車　（第152図１；図版183－８）

暗灰色で須恵質に焼成。直径4.7cmの円形で、中央に９mmの孔があく。厚さ1.7cmで、断面は偏平なそろばん玉状をしている。ⅡW区高台の大土壙72より出土。

土錘　（第152図３；図版183－９）

細長い棒状を呈し、両端に孔があく。残存長5.9cm、直径1.4cm。土師質。ⅡE区土壙基162から出土した。



第152図　金環・紡錘車・土錘

４　平安時代後期から室町時代の遺物

ここでは中世の菱木下遺跡の遺物を中心に述べる。この時代の遺構・包含層出土の遺物はコンテナに約 400箱。江戸時代以降の遺構・包含層からも中世遺物は多量に出土している。時間的制約もあって遺物の分析には不十分な点も多いが、主要な中世遺構の土器・陶磁器類は約2万点、中世の包含層と江戸時代以降の堆積層中の中世の土器・陶磁器類をあわせると約4万点である。また瓦類が約1万2千点出土した。その他石製品・金属製品・木製品が多数出土している。

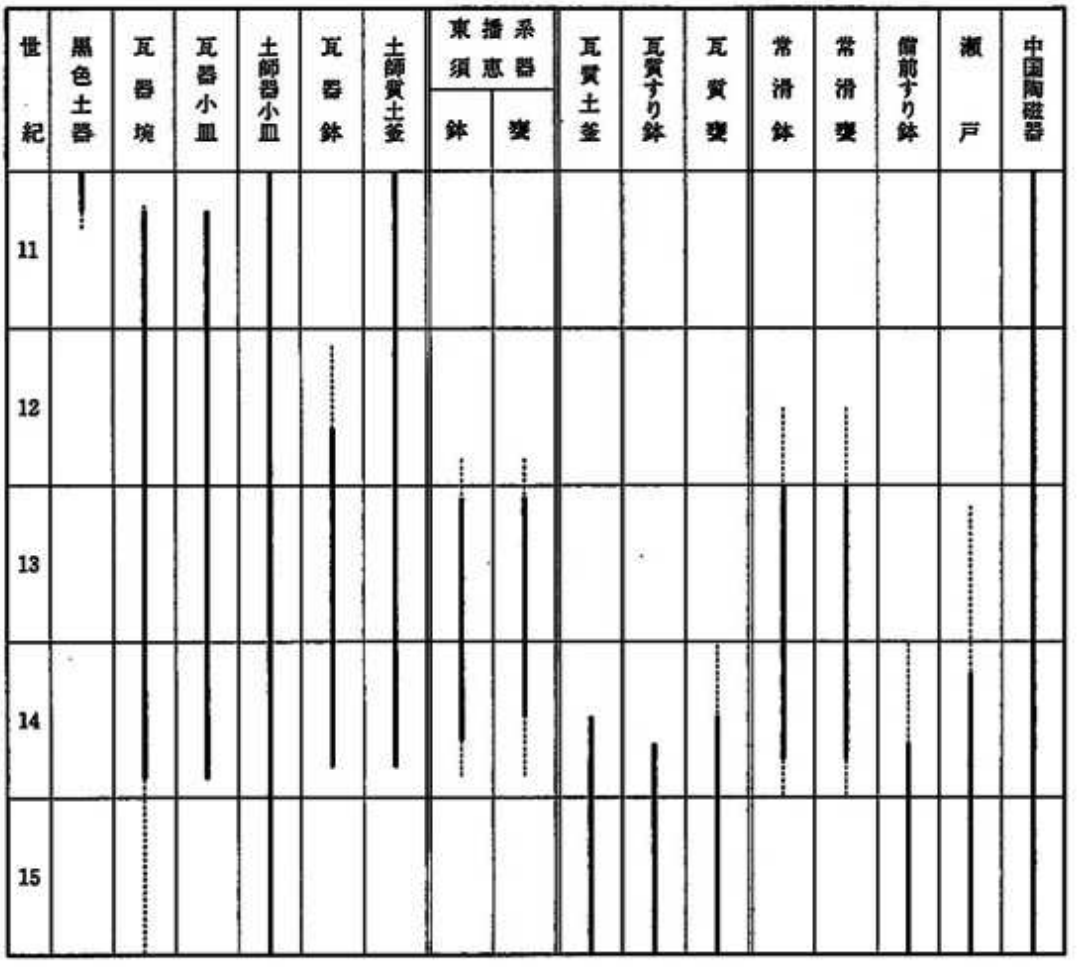
主要器種の組み合わせと変遷　（第39表）

平安時代中期には黒色土器・土師器が器種の主要な組み合わせとなっていたが、和泉国では11世紀になるとその組み合わせに大きな変化がおこった。

まず黒色土器が消失して瓦器が出現してくる。椀と小皿である。高台付小皿も少量ある。11・12世紀の主要器種には、その他に前代の伝統を引き継いで土師器皿・土師質土釜がある。

13・14世紀には瓦器椀・瓦器小皿・土師器小皿・土師質土釜が引き継がれるが、土師器の大皿・中皿の類はほとんど例をみない。さらに瓦器と同じ胎土・焼成で丸底の鉢がある。土師質の鉢は極めて稀である。13世紀になると東播磨から須恵質の甕とねり鉢がもたらされる。東播系と

第39表　菱木下遺跡主要器種の時期別推移



か魚住窯の製品と称されているものである。また常滑の甕とねり鉢も13世紀からみられるようになる。備前すり鉢も14世紀には少量みられる。

14世紀の中葉から末葉にかけても器種の組み合わせに大きな変化が生じてくる。東播系の須恵質の甕・ねり鉢がもたらされなくなった結果、在地でそれを模倣した製品を焼造し始める。形態は同時期の東播系の製品によく似ているが、鉢にはすり目が入って、すり鉢となっている。焼成は当初須恵質に近いものもあったが、基本的には瓦質の製品である。このような瓦質の甕・すり鉢の出現は、甕の方がやや先行するようである。また土釜にも新たに瓦質製品があらわれる。瓦質土釜は14世紀中葉には量も少なく、形態も土師質土釜と同じだが、14世紀末葉には、土師質土釜が消失し、以後瓦質土釜だけとなる。14世紀末頃には、丸底となり小型化してきた瓦器椀も基本的にはなくなり、瓦器小皿も消失する。ただ瓦器椀の系譜を引く皿状で、内面にハケ目を明瞭に残す製品が堺環濠都市遺跡を中心に流通しており、菱木下遺跡でも１個体だけ出土している。

14世紀末葉から15世紀にかけては、前述したように、瓦質土釜・瓦質甕・瓦質すり鉢と瓦質製品が主流を占める。飲食具としては土師器小皿があるが、古代以来の土器製の椀はまったくみられない。この時期には常滑にかわって備前の製品が多くなる。常滑のねり鉢は備前のすり鉢にとってかわられる。14世紀後葉におこる須恵質ねり鉢から瓦質すり鉢への変化は、すり目のある備前のすり鉢に接っすることによって生じたものと思われる。ところが甕は備前が入ってきていないようで、菱木下遺跡ではこの時期の明確な備前甕は出土していない。常滑の甕も14世紀の末頃までにおさまるもので、この時期の甕の大部分は在地の瓦質甕となっている。

その他中国製陶磁器が全期間にわたって存在し、比率は低いが器種の組み合わせの一部を構成し、瀬戸の施釉陶器も14・15世紀にかけて少量みられる。

A　遺構別遺物の概要

遺構内から出土した遺物は、埋没時期を示すものを掲載したが、やや古い時期を示すものも参考資料として掲載した。遺構の埋没時期は遺構一覧表に示し、建物・井戸・溝に関しては第25表で、推定も含めて建造・掘削時期と廃絶時期を示した。

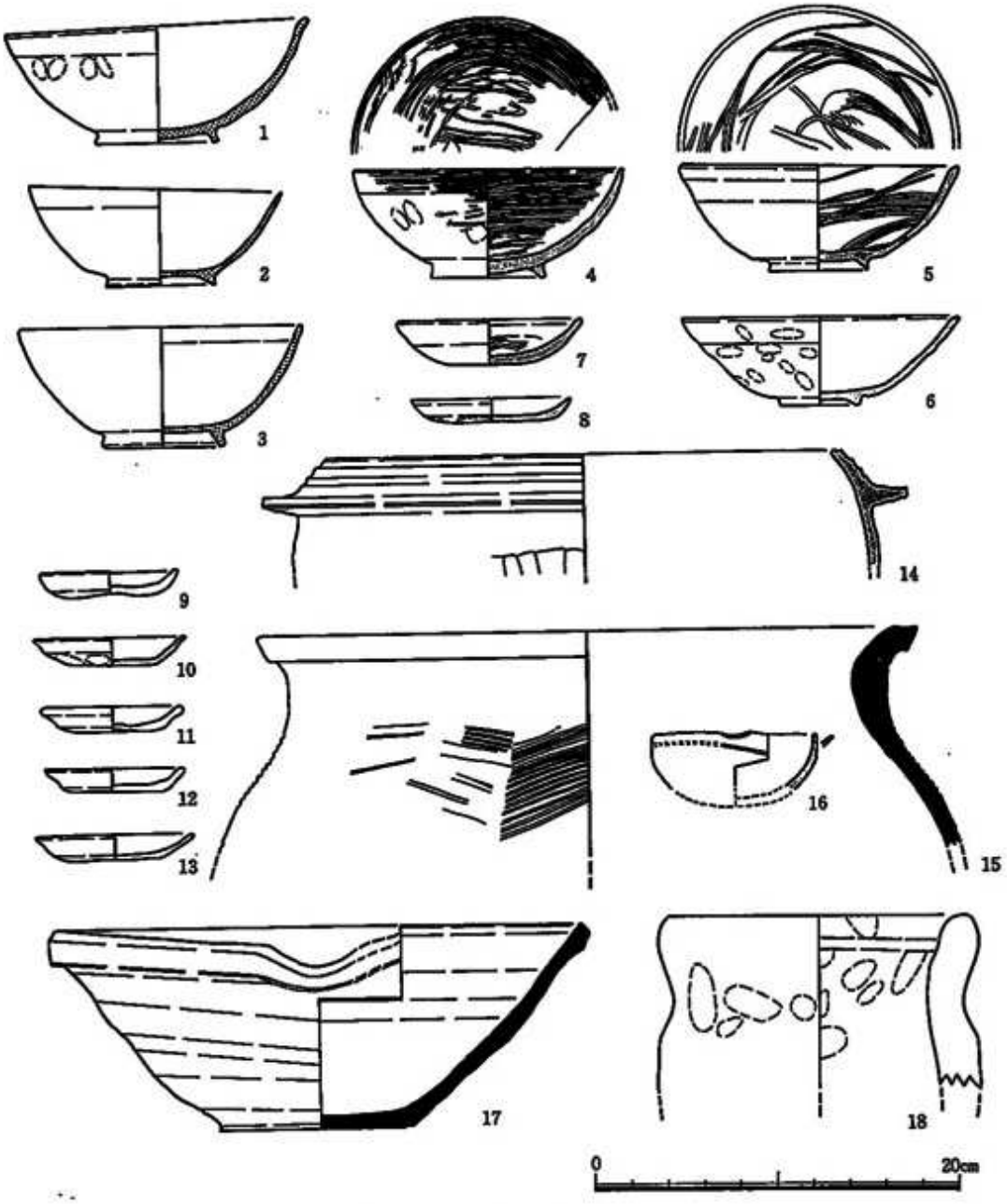
10世紀後葉から11世紀前葉の黒色土器の時期の遺物はⅡW区とⅢE区で出土し、特にⅢE区では細片だが、土壙を中心に出土量が多い。

12世紀から14世紀までは、遺物はほぼ全体から出土した。15世紀の遺物はほとんどが第Ⅲ調査区に集中し、第Ⅱ調査区からの出土は極めて少ない。主要遺構の器種別出土量は第50表に示した。

なお遺物の断面で黒色土器は粗い点々、瓦器・瓦質土器は細かい点々、土師質は白ぬき、須恵質は黒ぬりで表示した。

建物

建物遺構（第153図）　ピット内で時期を示すものを掲載したが、ⅡW区を除けば必ずしも実測可能な遺物に恵まれていない。高台には礎石建物があったと思われ、礫群が２面検出された。上面の礫群１の下には整地層があり、その下に礫群２がある。礫群の時代は、切り合い関係にあ

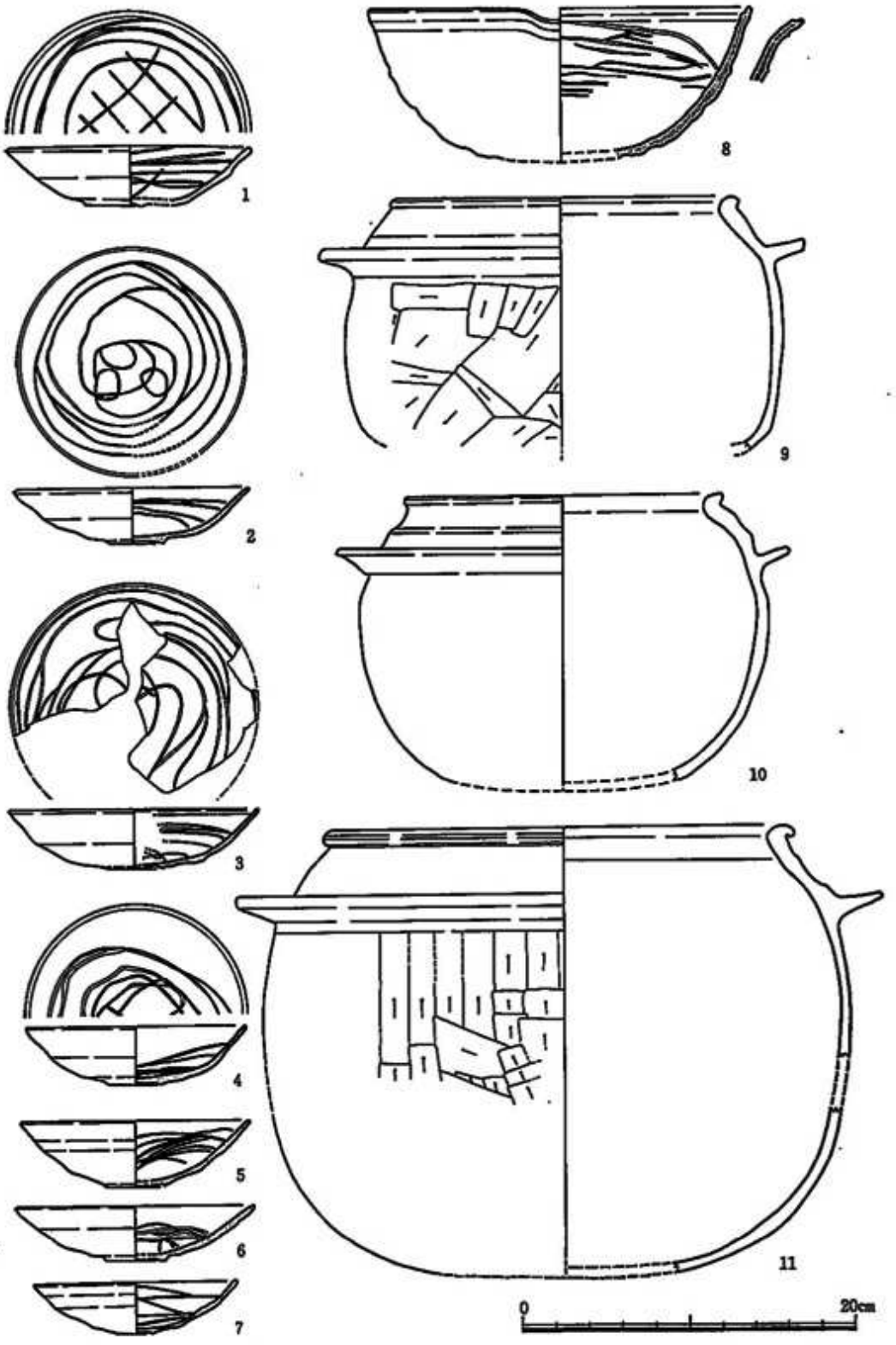


第153図　建物・礫群関係出土遺物

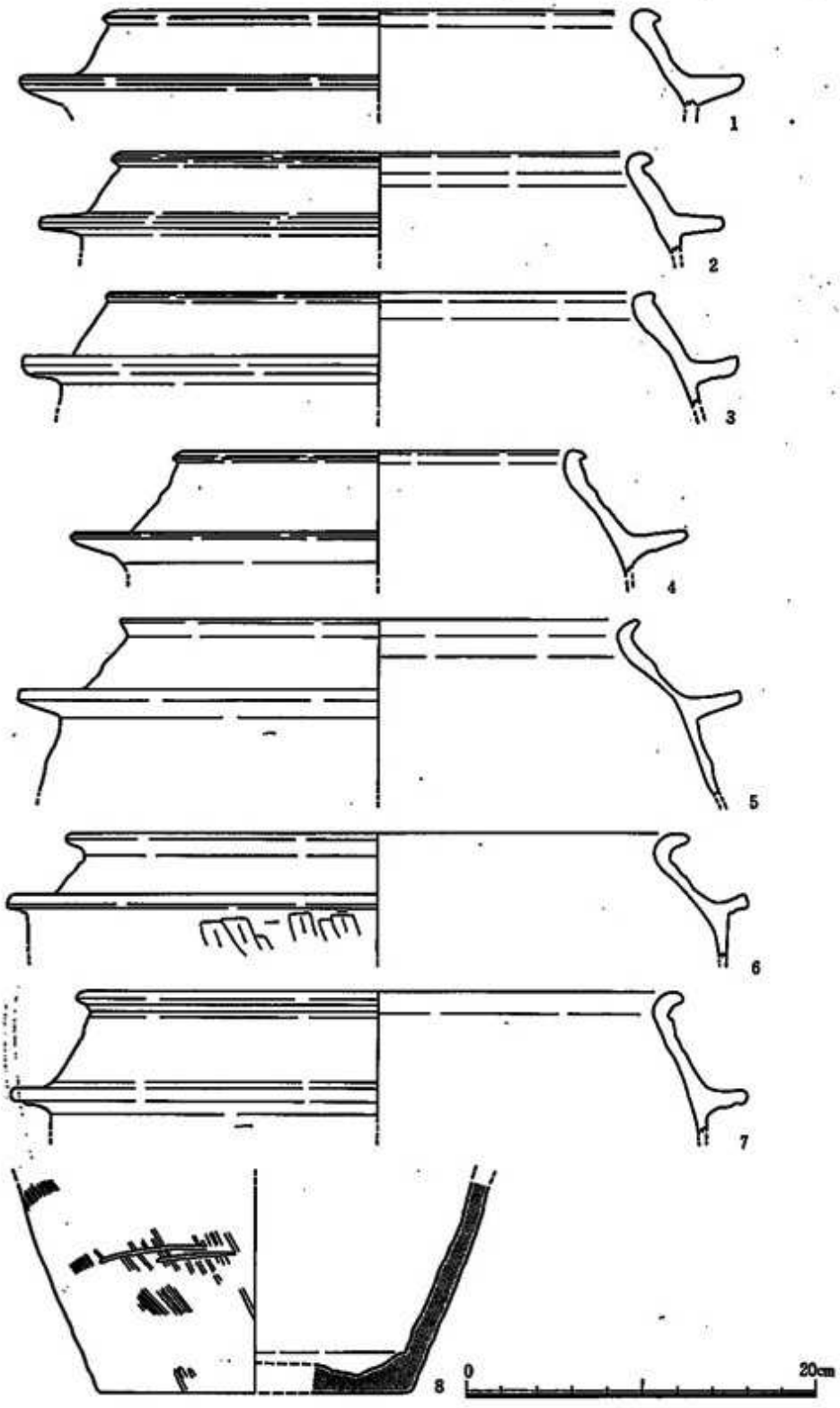
る井戸・溝によって決定できるので、遺物は出土点数の少ないものをあげた。15は東播系の須恵質甕である。17（図版195－3）は東播系のねり鉢で礫群2内からほぼ復原可能な状態で出土した。礫群1・2とも15世紀だが、ねり鉢は14世紀。

井戸

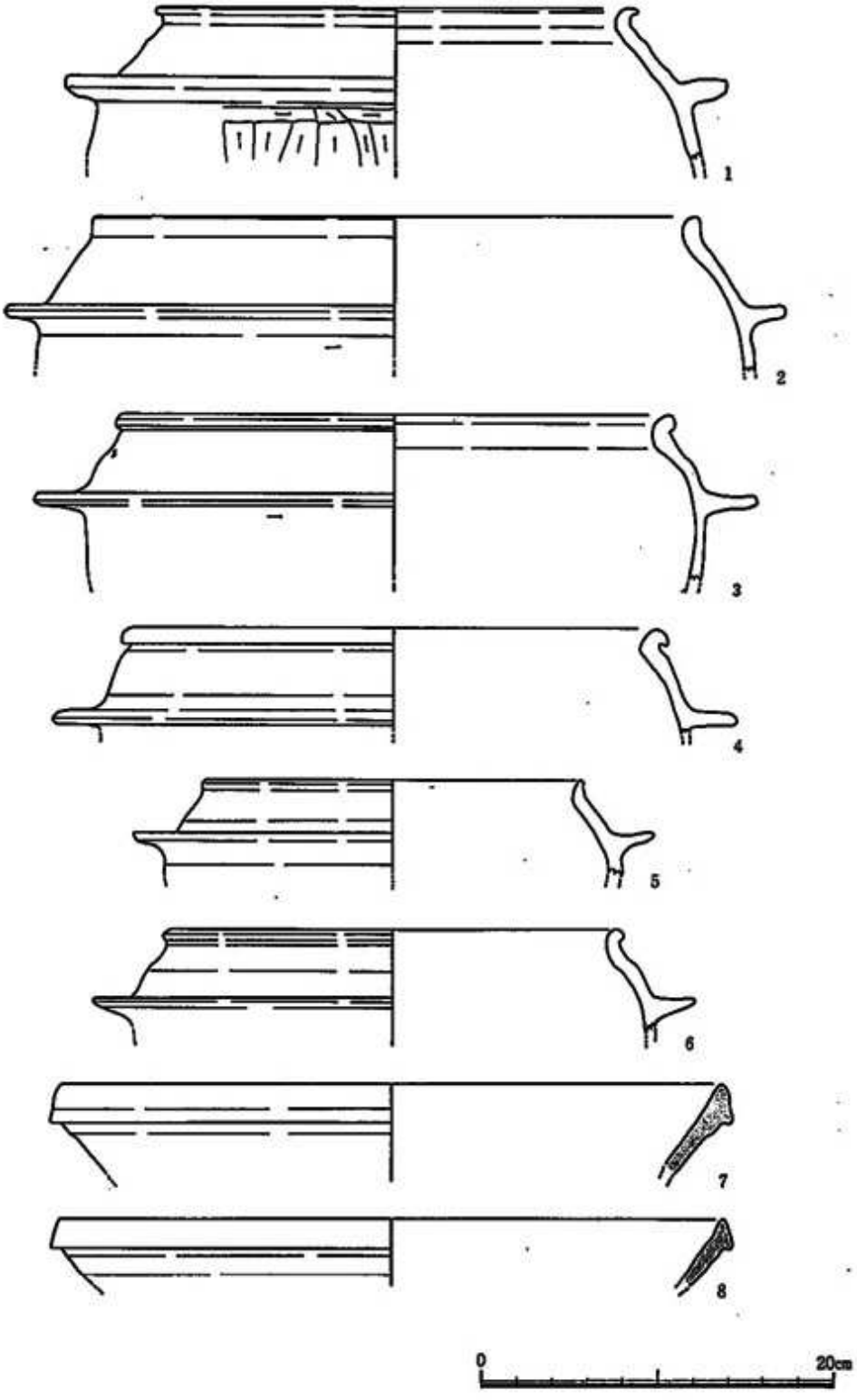
井戸1（第154～156図）　極めて多量の土師質土釜が出土した。20～30個体分があり、かなり形態が復原できたものが多い。まとまっている割にはやや時期幅がある。14世紀後葉に埋没。



第154図　ＳＥ１出土遺物



第155図　ＳＥ１出土遺物



第156図　ＳＥ１・２出土遺物

井戸2（第156図）　出現期の瓦質のすり鉢が少量出土し、14世紀末葉に比定される。

井戸3（第157図）　完形に近い瓦器椀4点・瓦器小皿6点が中層下部からまとまって出土し、土師質土釜の大破片が伴った（5～16）。中層上部には更に完形の瓦器椀4点（1～4）が出土した。瓦器椀を見る限り上部と下部でやや時期幅がある。13世紀の前葉頃に埋没したと推定している。

井戸4・5（第158・159図）　無高台の瓦器椀を出土するが、瓦質のすり鉢、有段の瓦質土釜は1点も出土していない。出土遺物を見る限り、ほとんど14世紀後葉の同時期の埋没が考えられる。8の土師質土釜の鍔部上面に焼成後の格子文の線刻がなされている。

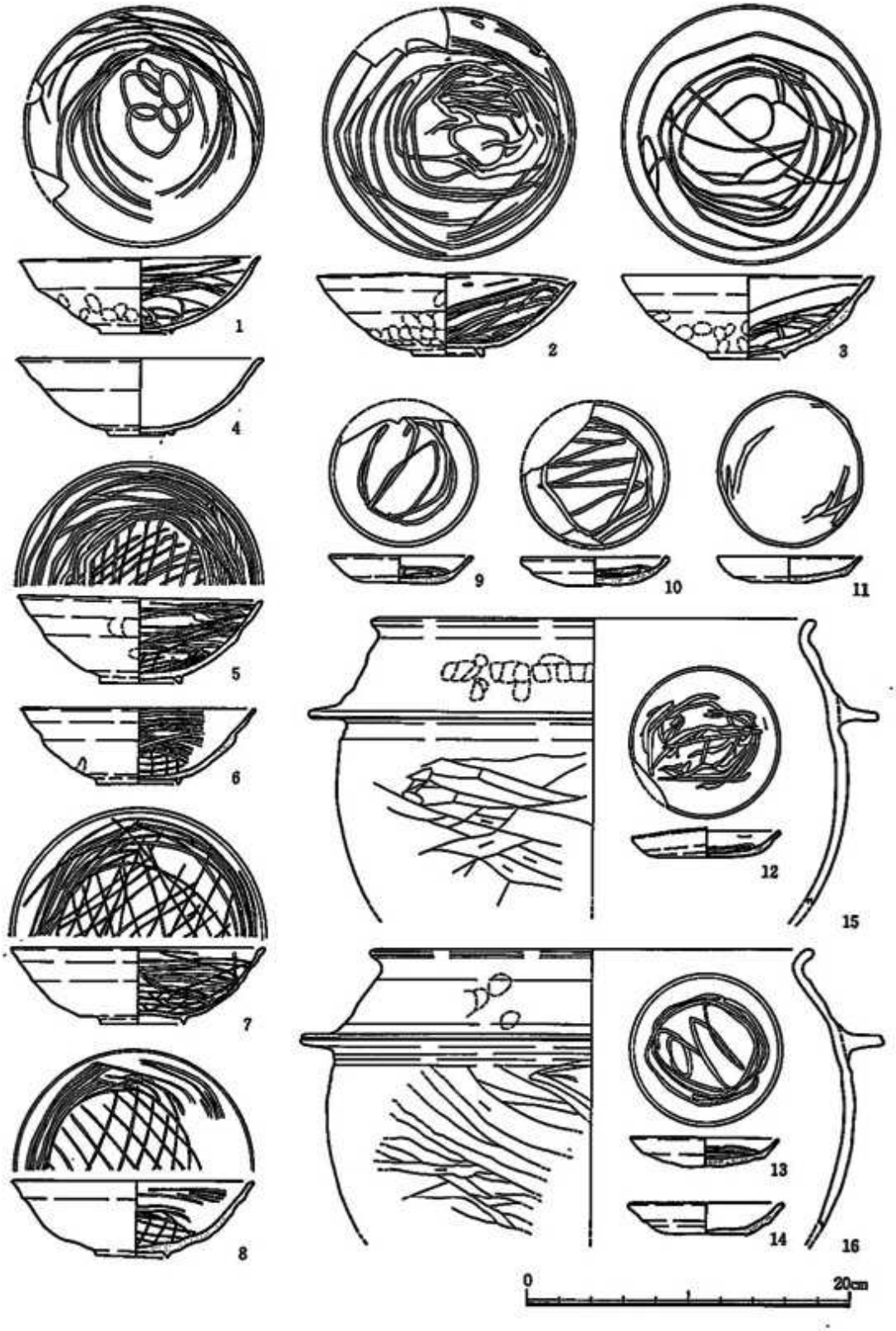
井戸6～8（第160図）　井戸6は13世紀の溝28を切っているため、やや古い遺物を多く含むが、土師質土釜に14世紀代のものを含む。この井戸からだけあまり例をみない土師質の鉢（11・12）と瓦質の鉢（13）が出土した。井戸7は遺物量が少なく、瓦器小皿から14世紀と判断した。井戸8は無高台の瓦器椀と共にこの時期には少ない瓦質の土釜が出土した。口縁部に丸味が残り、同時期の土師質土釜と同形態、同一調整が行なわれている。14世紀後葉。

井戸9～13（第161～164図）　高台上の井戸群のうち井戸9は瓦器椀・土師質土釜ともかなり古い要素をもち、土釜は12世紀でも早い時期であろう。全体の遺物から13世紀の埋没と考えている。井戸10（第161図）は瓦器椀にドーナツ状の高台が付いており、14世紀前葉。井戸11（第162図）は多量の遺物を出土し、土師質形態の瓦質土釜が出土している。平底の鉢（10）が珍らしい。8は須恵質の甕だが、粗い格子叩きが施され、内面に同心円文叩きがある。井戸11や高台を中心に同一破片が数十点出土した。東播系須恵質甕は、平行叩きであり、当初は古墳時代のものと考えたが、胎土がやや粗く中世の可能性がある。産地・時期等は不明である。14世紀後葉の埋没。井戸12は（第162図）は14世紀代の遺物が多いが、15世紀代の遺物を少量含む。15世紀の井戸13と切りあっていたので、遺構調査時に井戸13の遺物が少量混入したかもしれない。外面に削りを施す瓦器質の鉢（18）が出土した。井戸13（第163図）は実測図では、14世紀末葉から15世紀中葉までの遺物を掲載したが、15世紀末葉までの遺物を出土した。出土量の少ない瓦質の火鉢（11）が出土している。

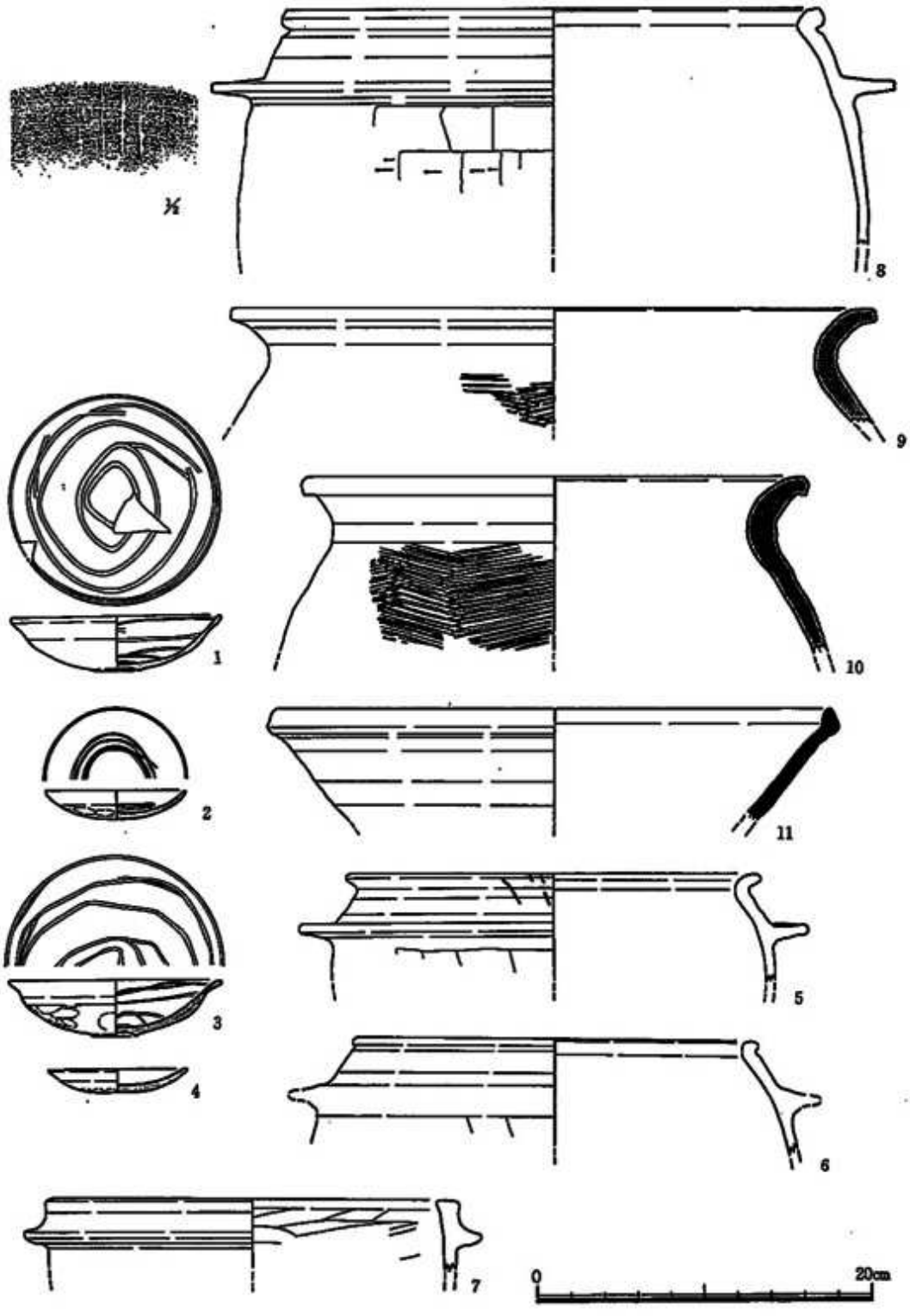
井戸14～17（第164～167図）　井戸14は瓦器椀の高台がドーナツ状となる。東播系ねり鉢が復原できた（第164図16、図版195－5）。14世紀前葉の埋没。井戸15は遺物量が少ないが無高台の瓦器椀を出土する。1点しか出土しなかった火炎宝珠文軒丸瓦（第184図1）がこの井戸から出土している。埋没時期は14世紀末葉。井戸16（第166図）は瓦質製品が多くなり、15世紀中葉の埋没。瓦質の井戸枠（第165図）が多量に出土した。井戸17（第166・167図）は多量の瓦質土釜・すり鉢・甕が廃棄されていた。

溝

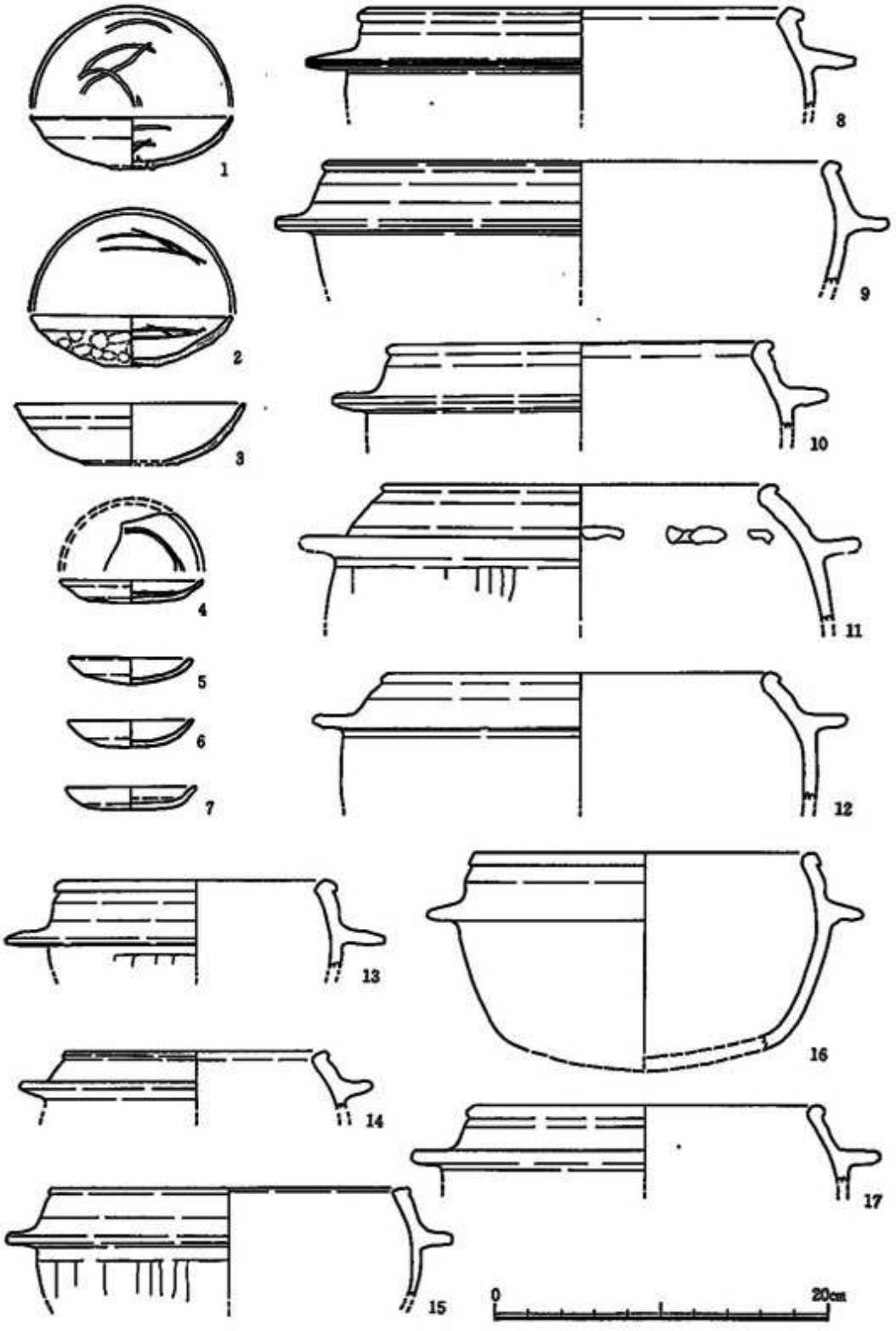
溝は、屋敷地・寺域を区画する溝の遺物を中心に、主要な溝の遺物を掲載した。ⅡW区の溝21（第168図1）は完形に近い瓦器椀（1）が出土した。高台がまだしっかりしており、13世紀代



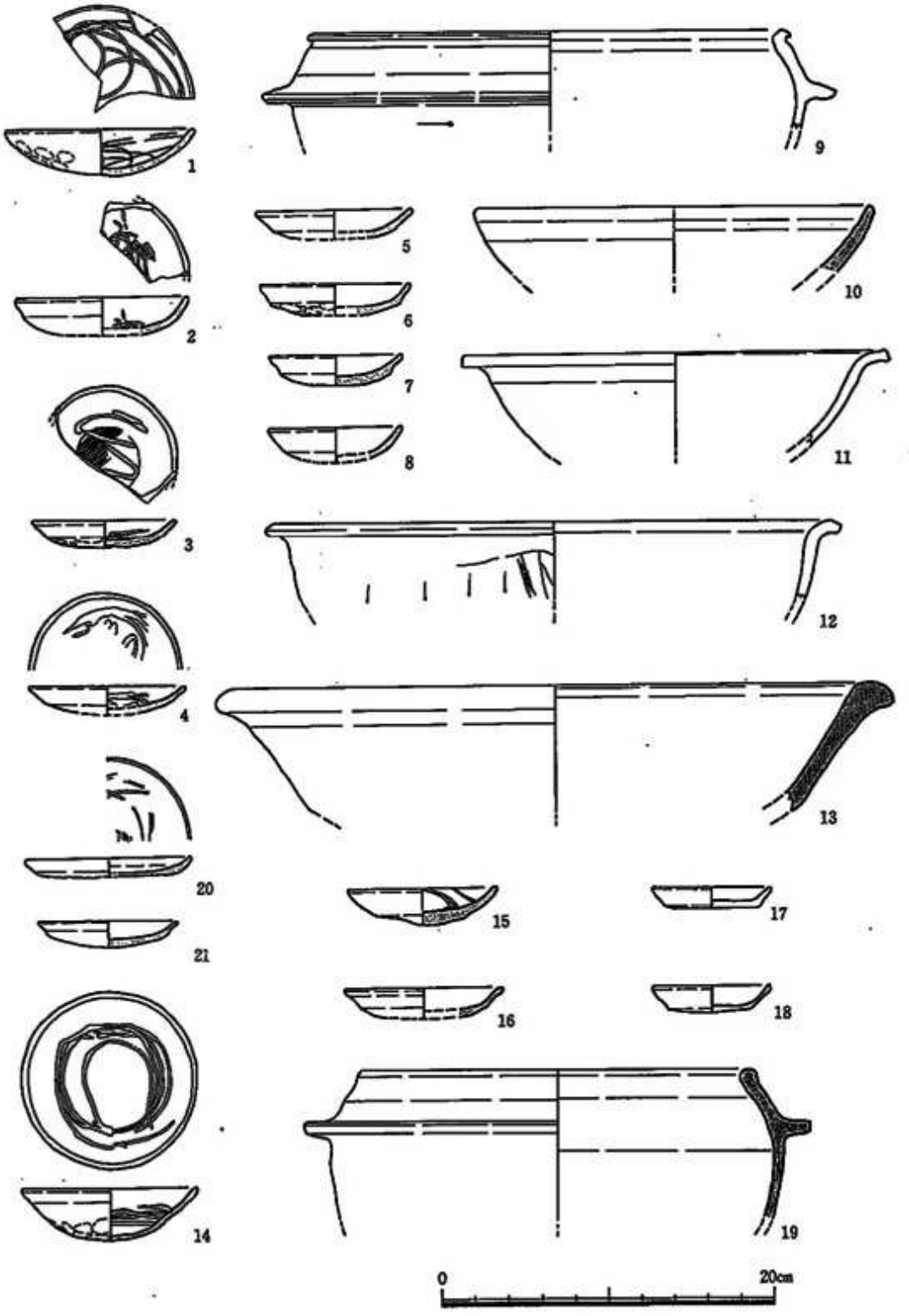
第157図　ＳＥ３出土遺物



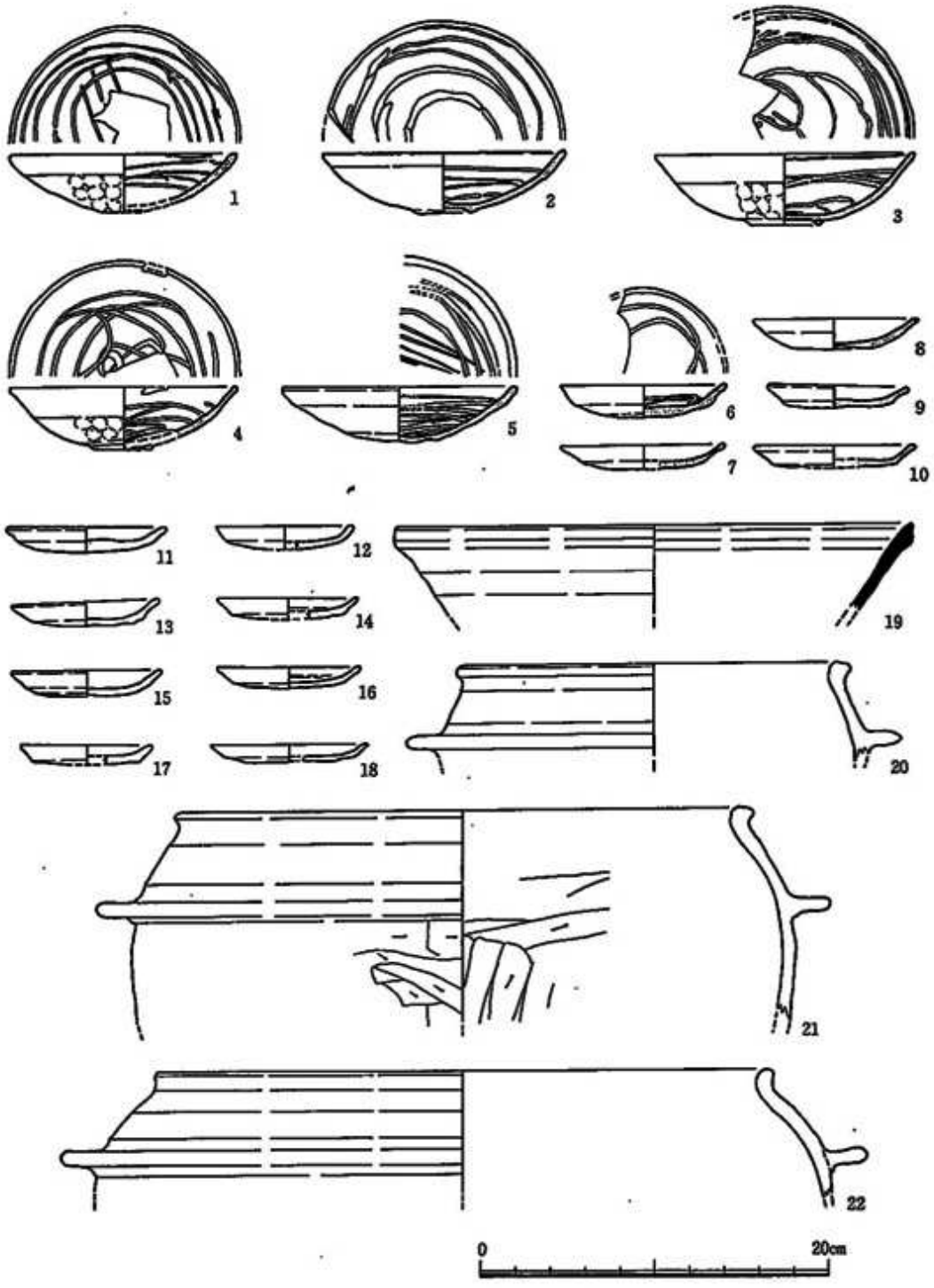
第158図　ＳＥ４・５出土遺物



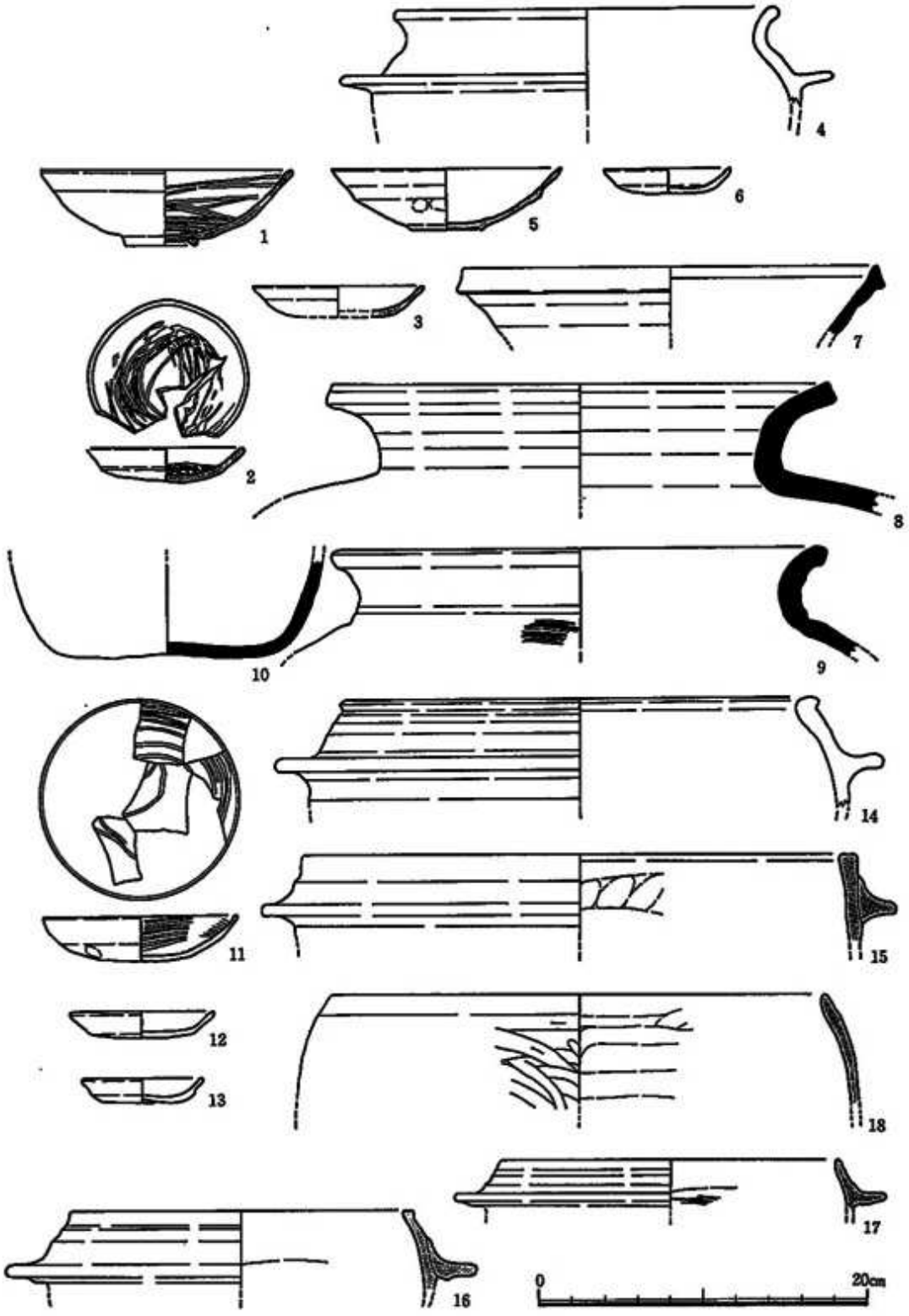
第159図　ＳＥ５出土遺物



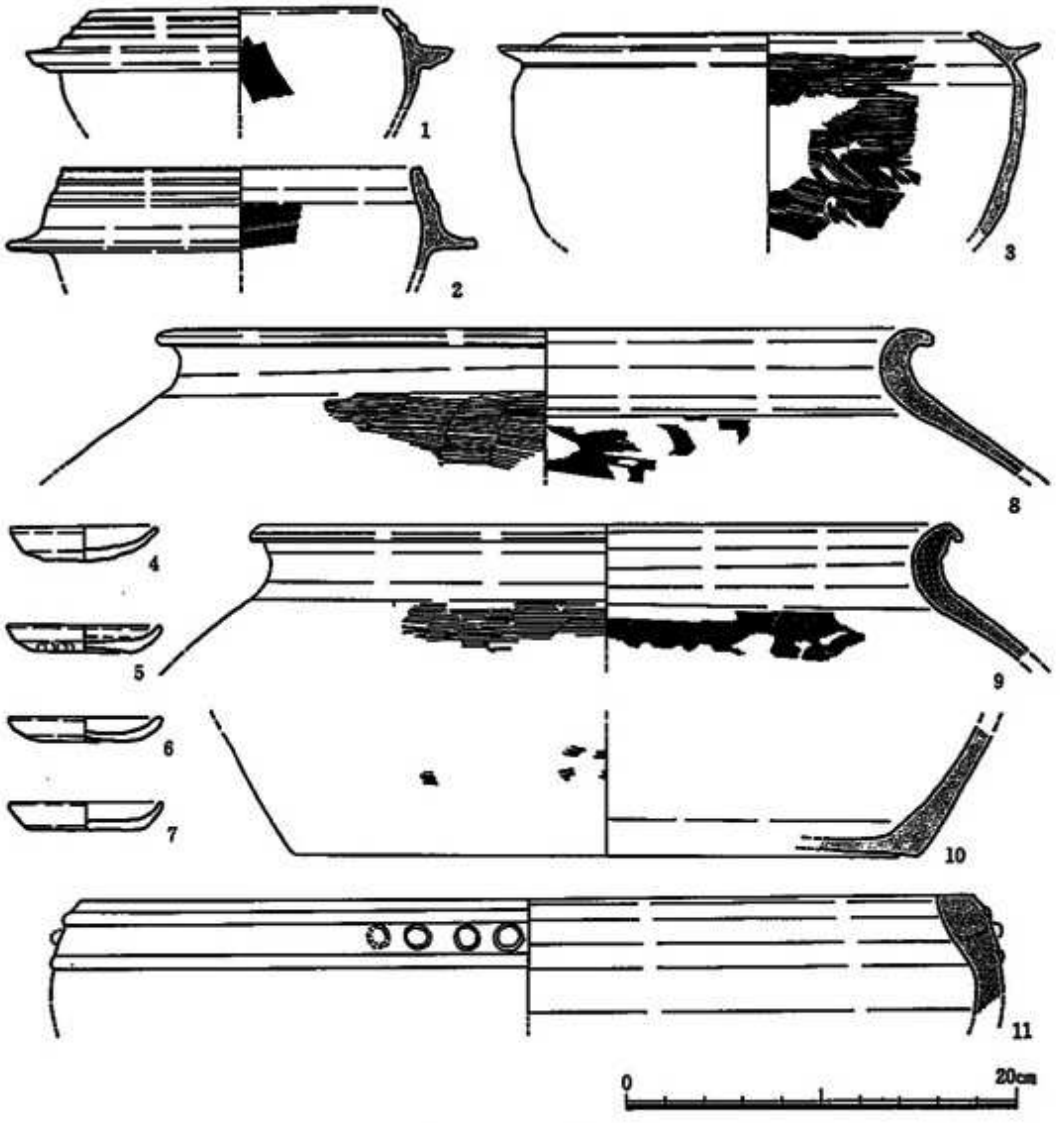
第160図　ＳＥ６・７・８出土遺物



第161図　ＳＥ10出土遺物



第162図　ＳＥ９・11・12出土遺物



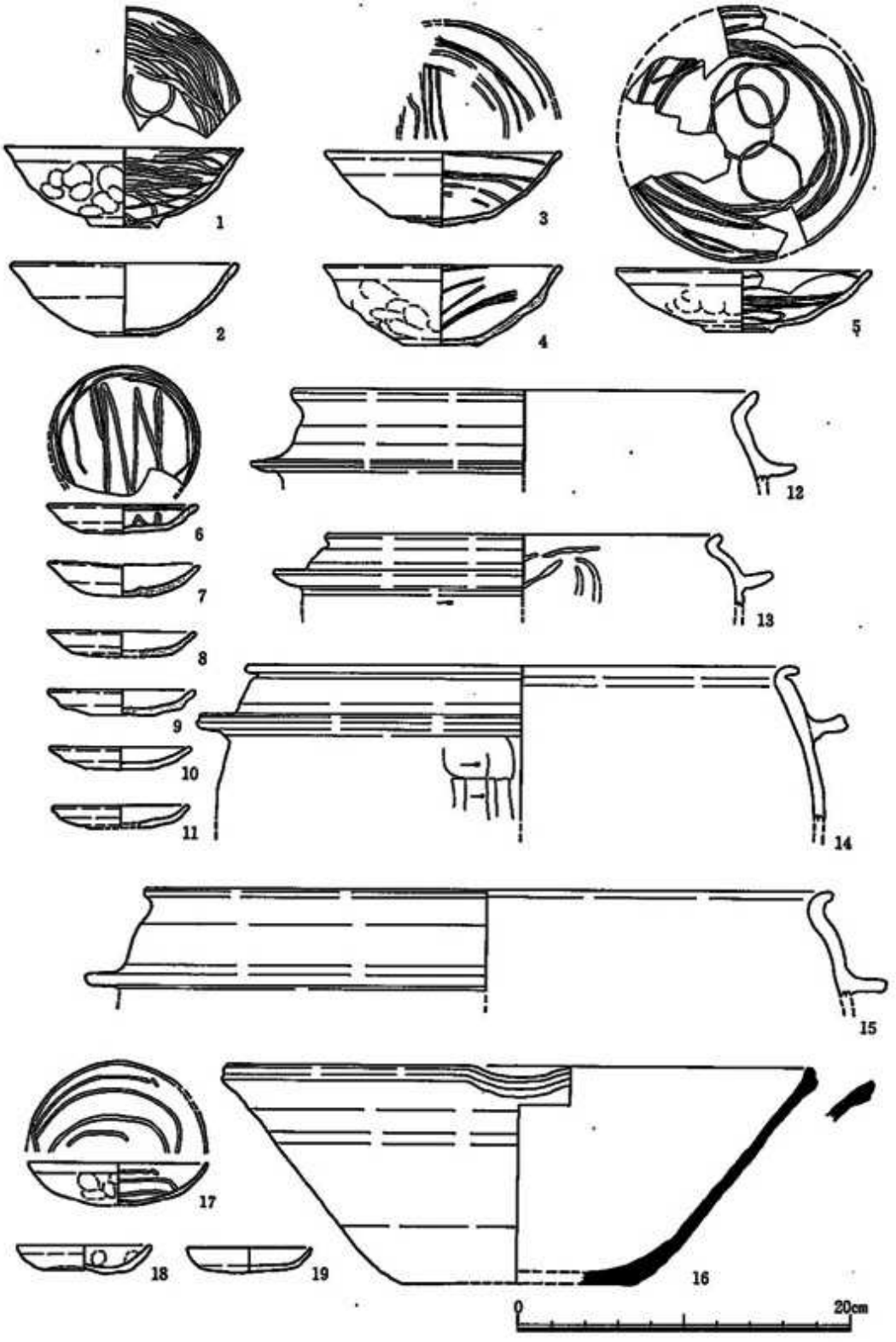
第163図　ＳＥ13出土遺物

に入ろう。ⅡＥ区溝24・溝25（第168図）は出土遺物の時期幅が広いが、無高台の瓦器椀が出土し、共に14世紀後葉の埋没。

溝28～30（第168～170図）　ⅡＷ区では溝28（第168図）が古く、12～13世紀代の遺物を出土する。高台上の溝29・30（第169・170図）は15世紀代の遺物を出土する。溝30からは、瓦器椀の系譜をひく皿状になった瓦器（第169図10）が出土した。15世紀代に環濠都市堺を中心に分布しているが、菱木下遺跡ではこの１個体のみ出土。内面にハケ目を丁寧に残すのが特徴である。

溝31～35（第171・172図）　これらの溝に15世紀代の遺物が多く、末葉の埋没。第172図１は口縁に鍔の付く瓦質製品で、復原口径45cmを測る。土釜としたが、或は小型の井筒かもしれない。同図４は上半部に丸味があり、大和型の土釜である。大和型はこれ１点しか出土していない。

溝37・38（第173図）　ⅡＥ区のこれらの溝は基本的には14世紀後葉に埋没し、図示していな



第164図　ＳＥ14・15出土遺物

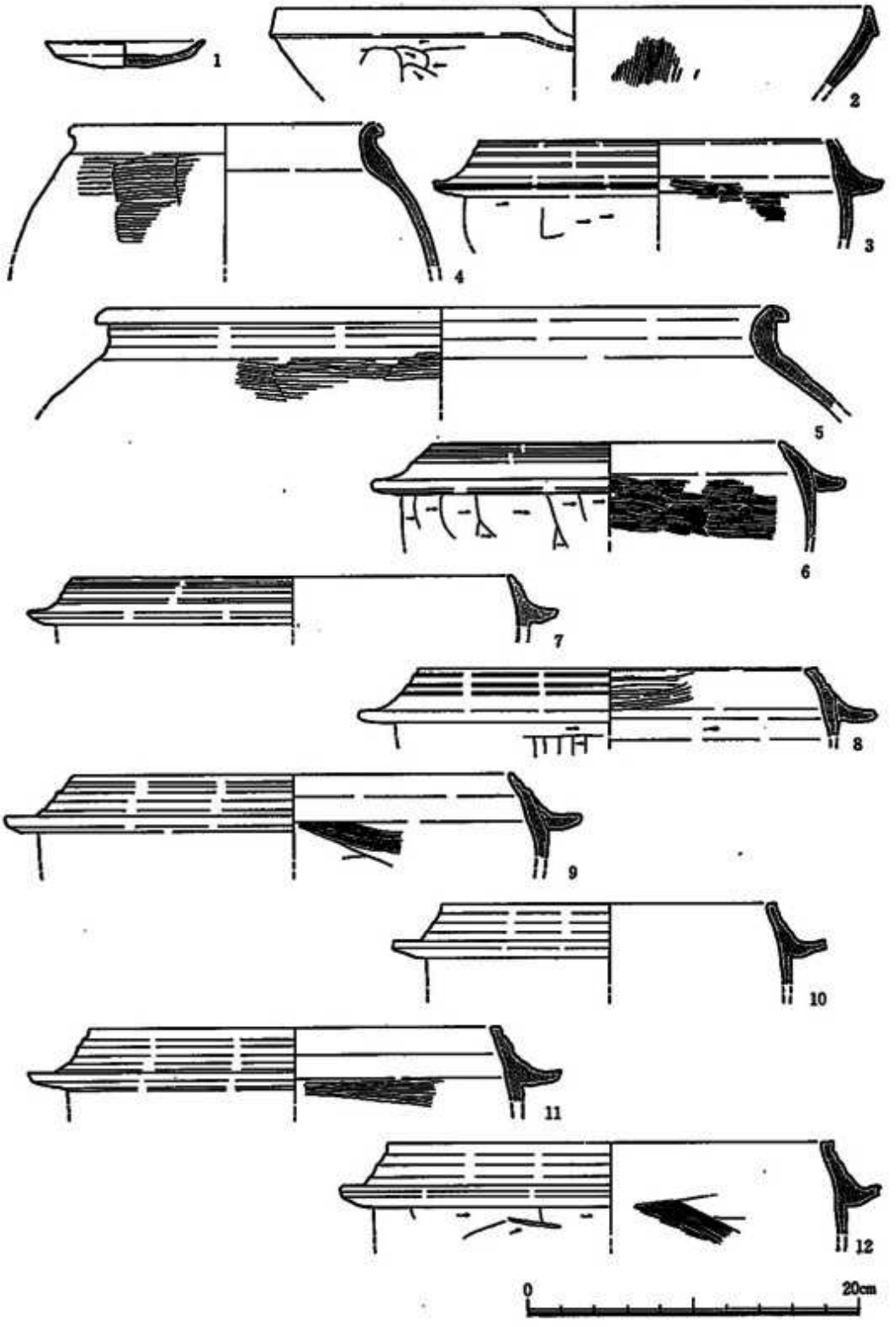
第165図　ＳＥ16出土瓦質井戸枠

いが無高台の瓦器椀も多く出土している。溝37は上部に窪みが残っていたようで、上層からのみ有段の瓦質土釜が出土しており、完全に埋没するのは、15世紀である。18は高台付の小皿で、菱木下遺跡では出土例が少ない。26はミニチュアの瓦質土釜である。溝37からは滑石製の亀形石製品（第199図１・図版212－１）も出土している。

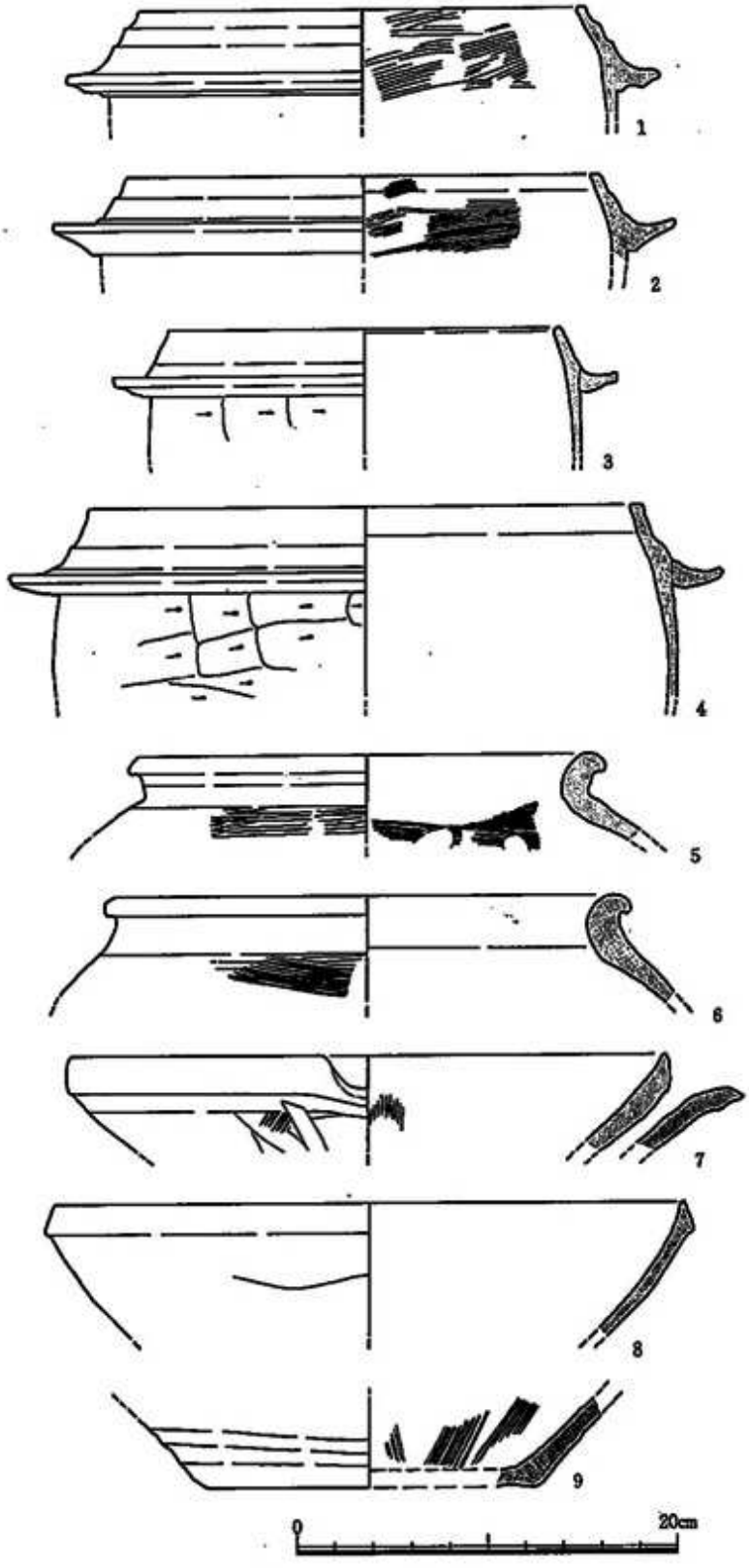
土壙

第Ⅱ調査区の土壙出土遺物は第174図に示した。１～９は、土壙43に50枚以上一括埋納されていた土師器小皿である。土壙102・139は14世紀の埋没だが古い良好な遺物が出土していたので図示した。これらの遺物が埋没時期を示すものではない。土壙47の遺物（24～29）は一括廃棄である。土壙59の瓦器椀（21）は完形品で埋納されたと考えられる。

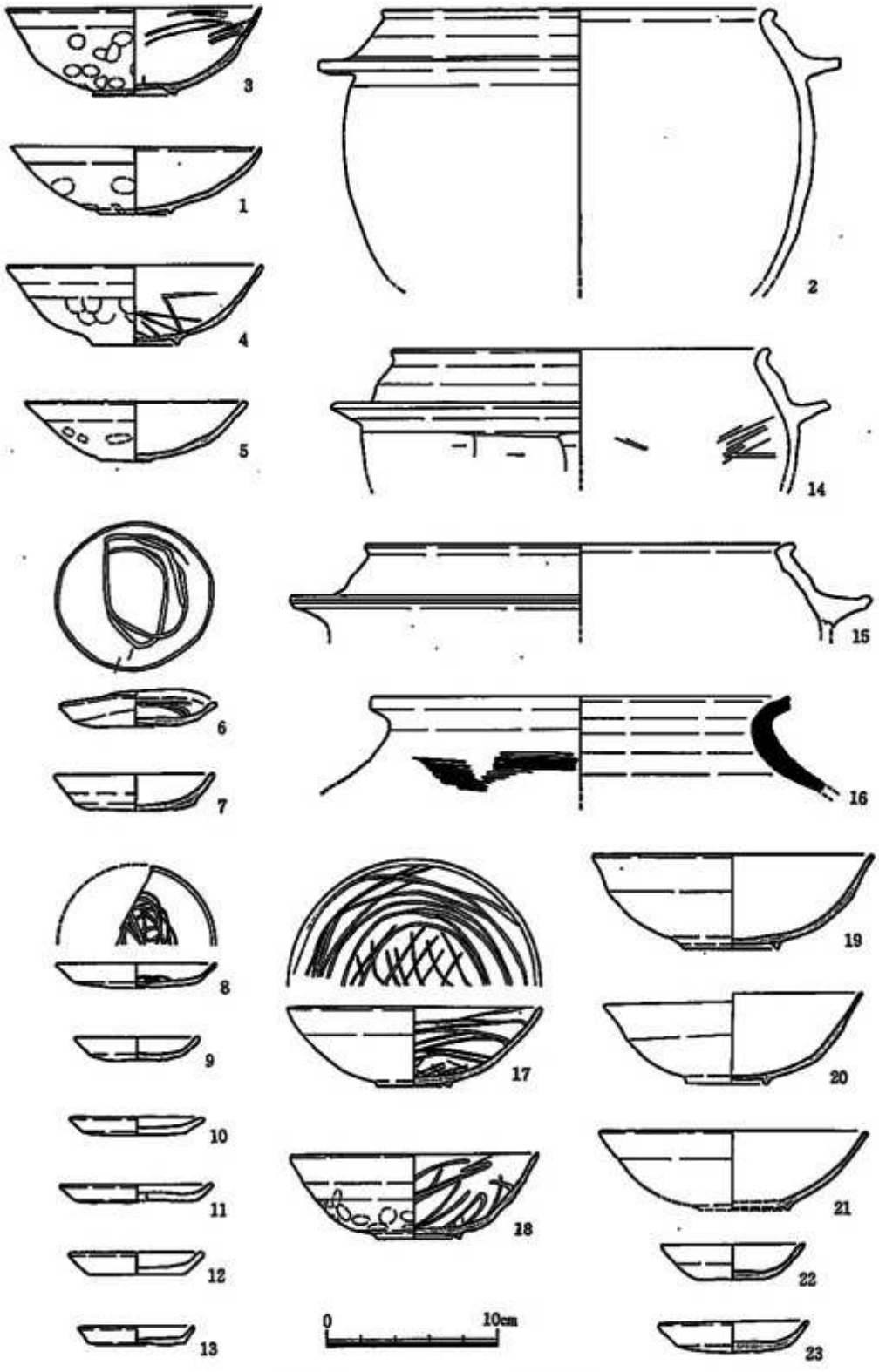
第Ⅲ調査区の土壙墓・土壙・大落ち込みは第175・176図に示した。高台上の大土壙72からは多量の遺物が出土したが、瓦質の甕が３分の２以上復原できた（第175図・図版192－１）。頸部が直立し、菱木下遺跡では最も古いタイプの瓦質甕である。土壙72は14世紀末葉には埋没しているが、この瓦質甕はそれよりややさかのぼるであろう。水滴と思われる須恵質双耳の小壺（第176図12）や、土師質の盤（11）も出土した。ⅢＥ区土壙墓391には完形の瓦器椀（第176図20）が埋納されていた。図示した破片の瓦器椀２点（21・22）はやや新しい要素があり、切り合い関係にあるⅢＥ区東辺を画する溝の遺物の混入かもしれない。



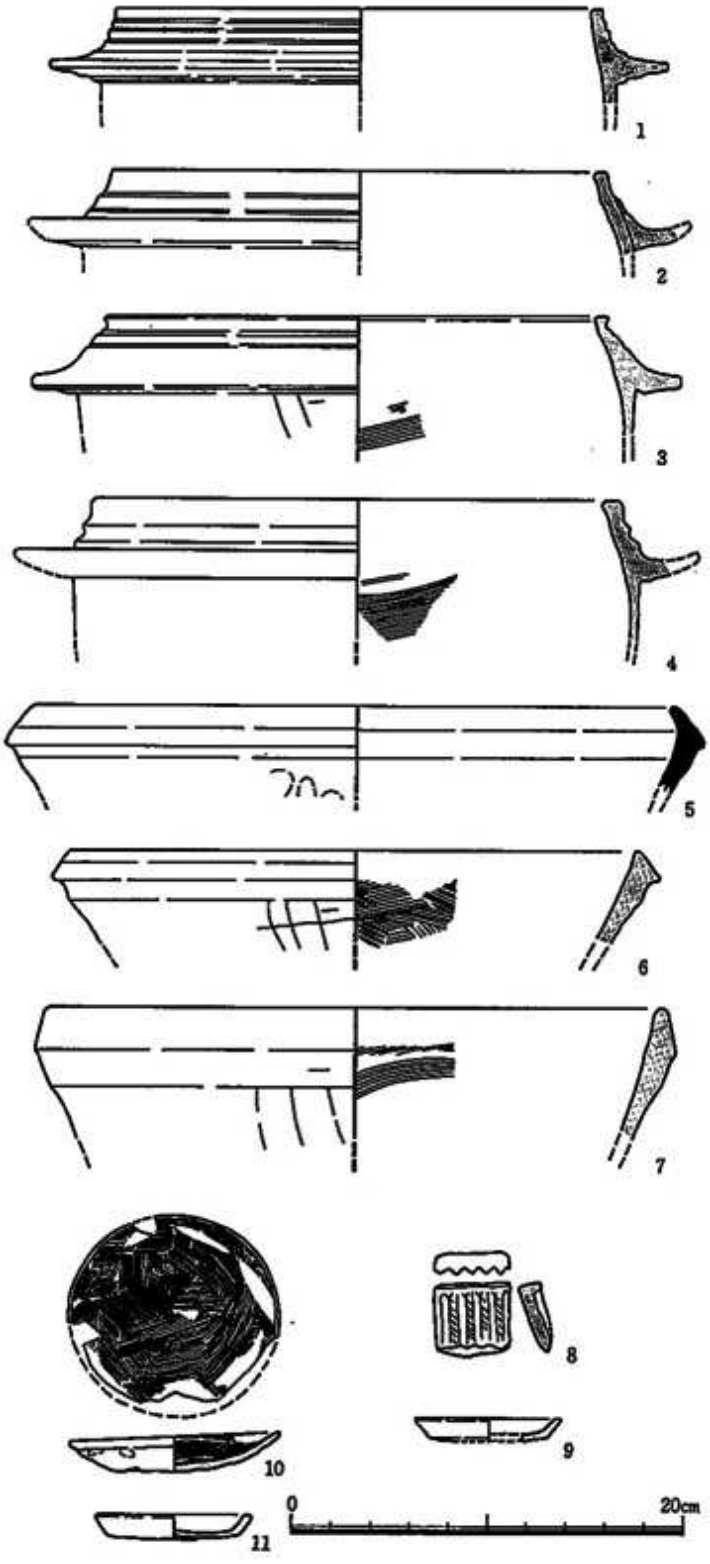
第166図　ＳＥ16・17出土遺物



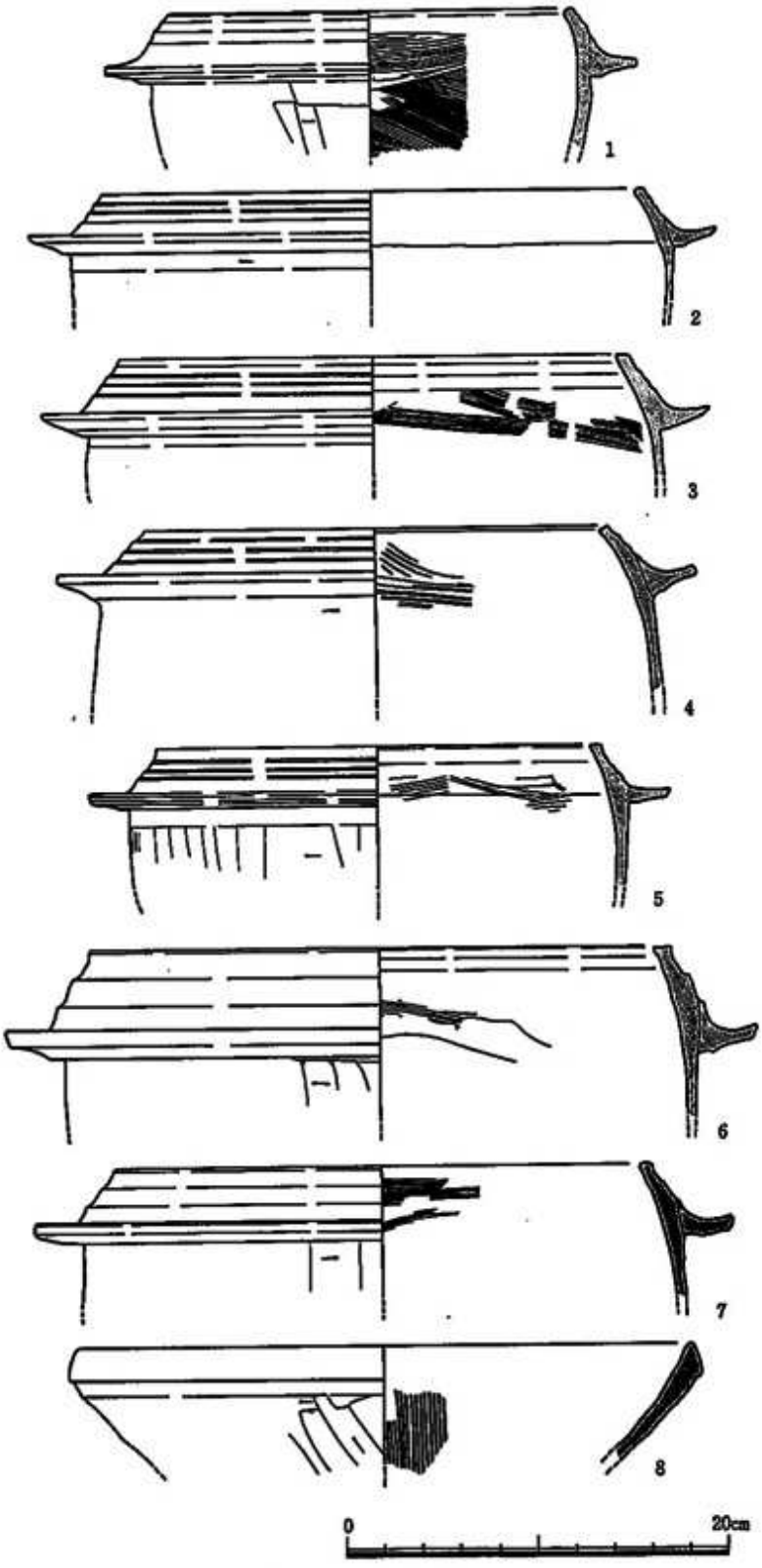
第167図　ＳＥ17出土遺物



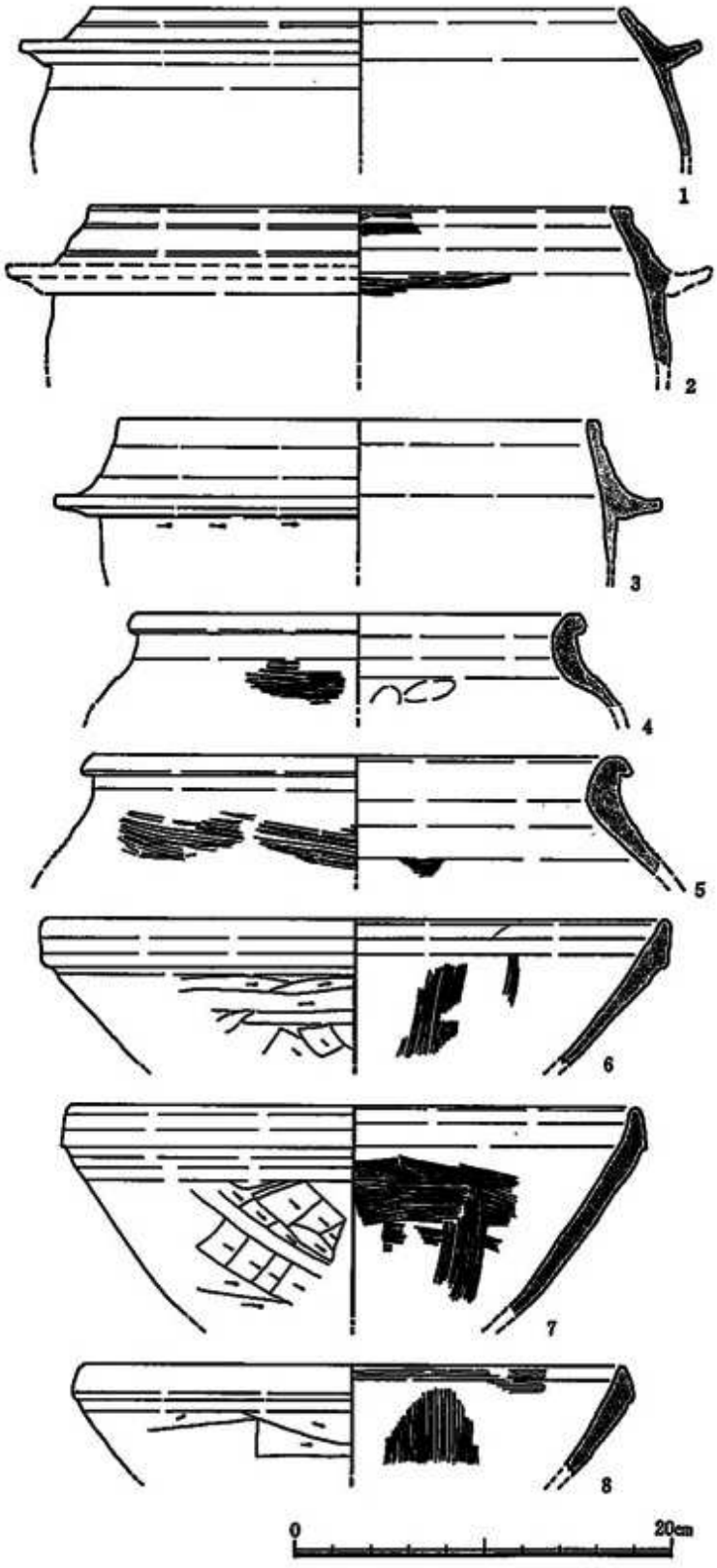
第168図　ＳＤＡ21・25・28出土遺物



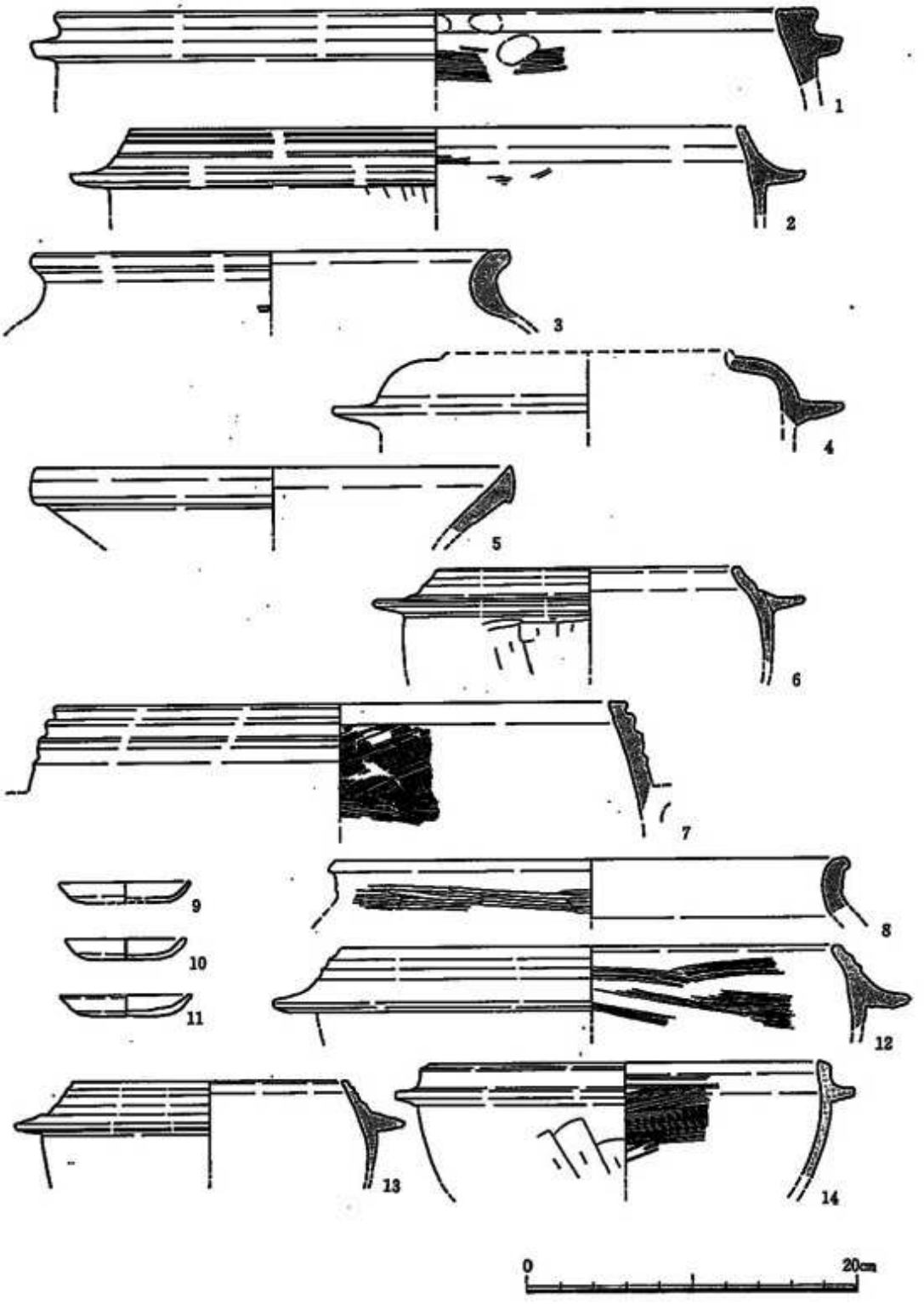
第169図　ＳＤＡ29・30出土遺物



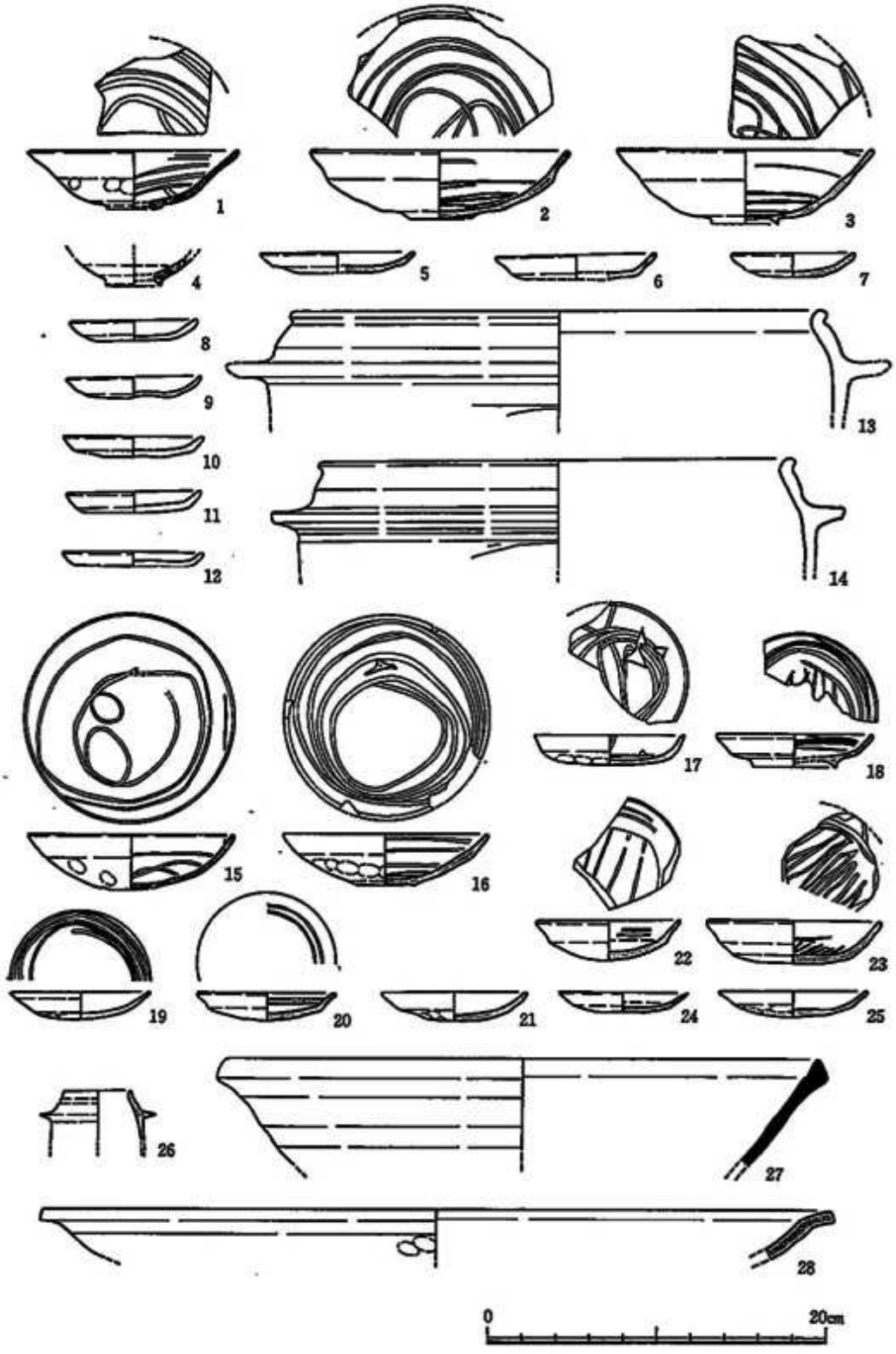
第170図　ＳＤＡ30出土遺物



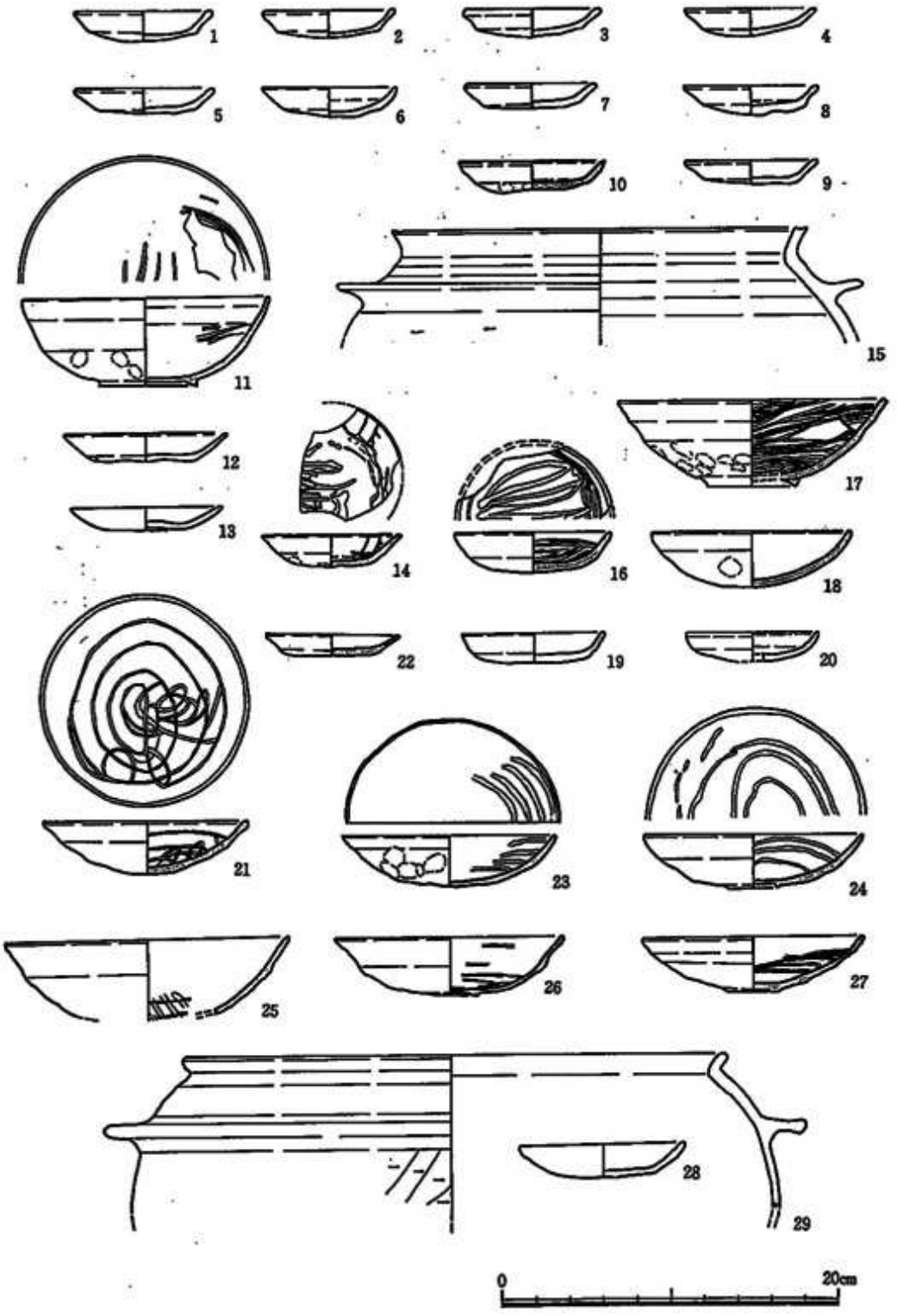
第171図　ＳＤＡ31出土遺物



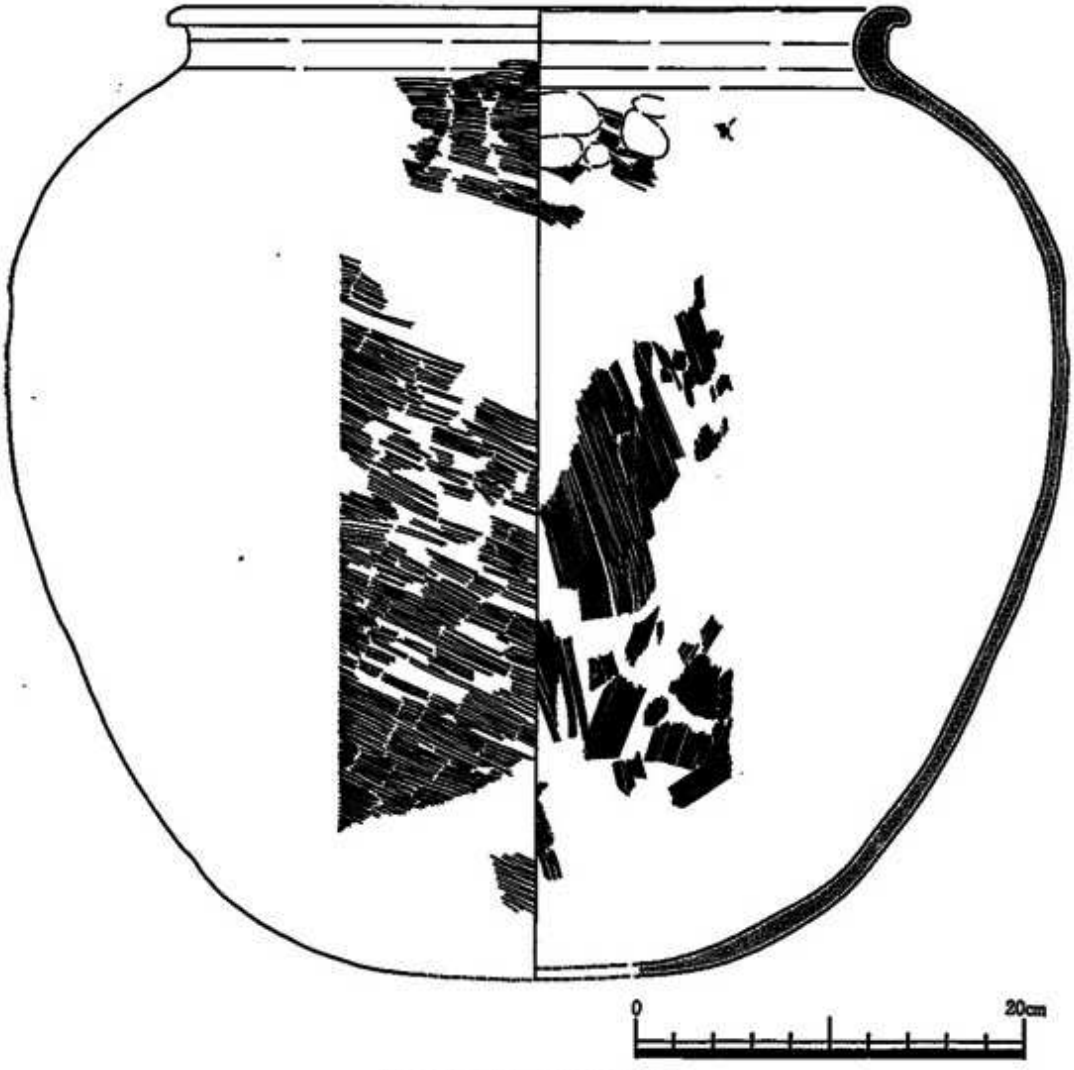
第172図　ＳＤＡ31～34出土遺物



第173図　ＳＤＡ37・38出土遺物



第174図　第Ⅱ調査区溝・土壙出土遺物



第175図　ＳＫＡ72出土瓦質甕

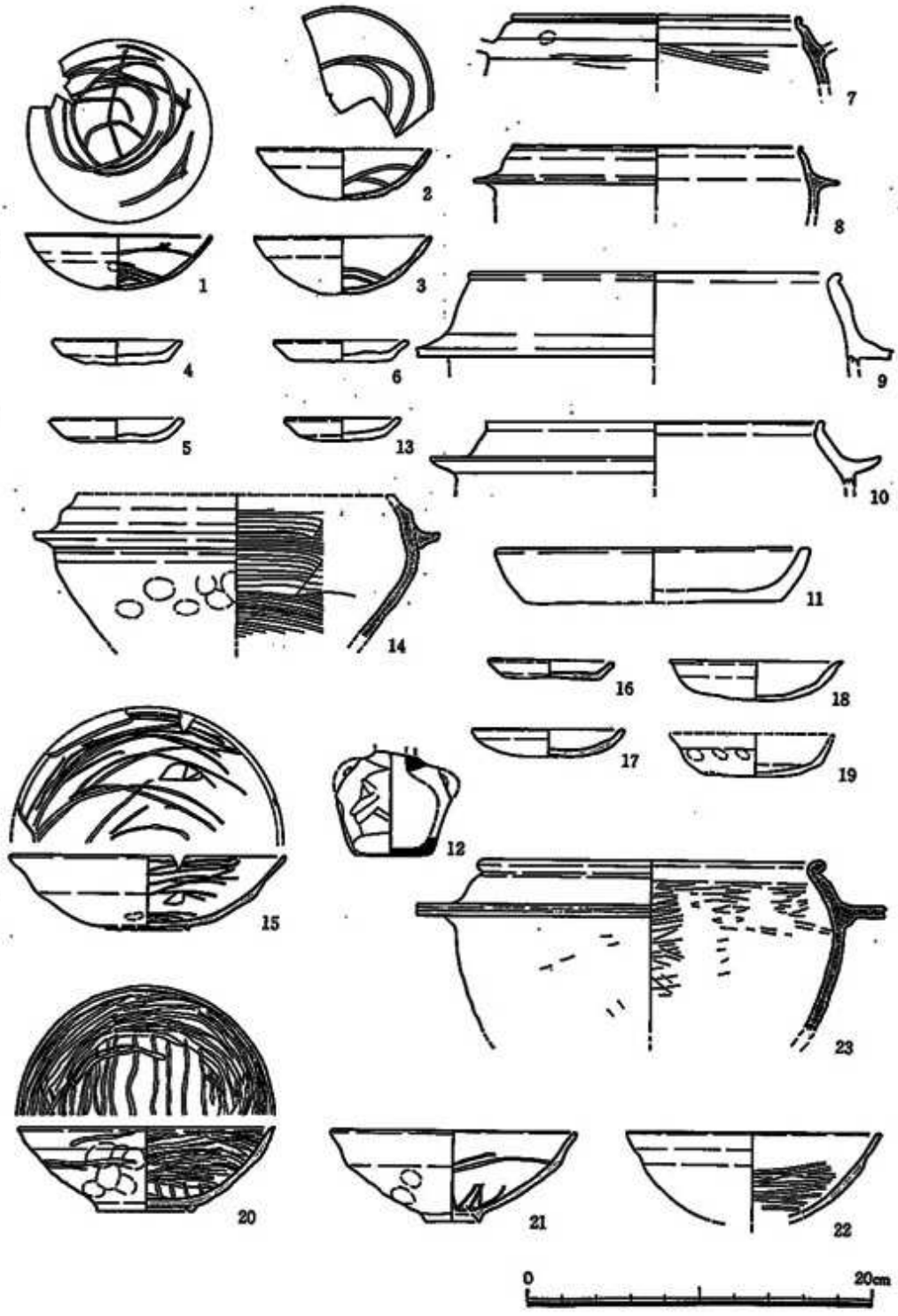
Ｂ　器種別遺物の概要

黒色土器　（第153図１～３；図版184－１～３）

黒色土器はⅡＷ区建物２、ⅡＥ区建物20の柱穴や、ⅡＥ区中央の土壙からやや多く出土したが、全体的には少ない。復原できたものは３点である。２は内黒の黒色土器、１・３は両黒の黒色土器である。堺市内の黒色土器の編年（森村健一「堺市内出土黒色土器について」『堺市文化財調査報告第７集』1981）によれば、２はⅢ期・10世紀代、１・３はⅢ期で瓦器椀の初現となる11世紀初頭から前葉にあてられている。

瓦器・土師器

瓦器椀　最古の瓦器椀はⅡＷ区建物４の柱穴から出土したもの（第153図４）内面口縁直下に沈線が１本めぐる。内面は密にヘラ磨きを施すが、外面は口縁直下が密に、体部はやや密にヘラ磨きがある。太い高台をもち瓦器椀の初現期ないしは、それに近いタイプである。11世紀前半に



第176図　第Ⅱ・第Ⅲ調査区土壙墓・土壙・大落ち込み出土遺物

比定されよう。ついで古いタイプは建物5の柱穴から出土している（第153図5；図版184－4）。内面はやや密に、外面は粗にヘラ磨きが施され、やや細い高台をもつ。11世紀後半から12世紀初頭に比定される。この二つの瓦器椀が古い様相を呈する。

13世紀から14世紀の瓦器椀は高台がしだいに退化し、やがて無高台になる。器高も低くなり、口径も小さくなっていく。外面のヘラ磨きも消失し、内面に圏線状の暗文が施されるのみとなる。菱木下遺跡ではこの時期の瓦器椀が最も多い。

14世紀末葉から15世紀には、瓦器椀というより瓦器椀の系譜をひく瓦器小皿（第169図10）にまで退化する。図示した1個体以外出土していない。内面にハケ目が密に残るのが特徴である。このタイプは堺を中心に分布しており、南河内では別タイプの小皿化したものがある。府下の15世紀の遺跡でもこの種の瓦器椀の系譜をひく瓦器小皿が多量に出土する遺跡はまだ少ない。

なお、菱木下遺跡の瓦器椀を各時代にわたって10数点奈良女子大の三辻利一先生に分析していただいたが、すべて、同系統の胎土という結果がでている（三辻利一「大阪府下の中世遺跡出土瓦器の胎土分析」『巨摩・若江北』（その2）（財）大阪文化財センター・大阪府教育委員会、1984）。

瓦器小皿・土師器小皿　外形は両者とも良く似た変遷を示す。黒色土器を出土したⅡE区土壙102からは器高が高くふところの深い土師器小皿（第176図19）が出土した。黒色土器は破片で時期を特定し難いが、ⅡE区の黒色土器は最も新しいタイプのものが多く、この土師皿も10世紀後葉から11世紀前葉頃のものと思われる。土壙139（同図18；図版188－1）もほぼ同じ頃のタイプである。口縁外面がナデられ、体部は指押えである。この指押えとナデの境の線が時期が下るに従って下方にさがり、丸味のある底部がしだいに平坦になってくると新しくなる。

ⅡE区建物8のピットから出土した瓦器小皿（第153図7）は、上記の土師器小皿と外形が良く似ており、比較的古い段階のものであろう。

ⅡE区井戸3出土の瓦器小皿（第157図9～14；図版187－2～6）は一括して埋納（廃棄）されていたもので、同時に同図5～8の瓦器椀と共伴した。12世紀後葉から13世紀前葉の間に位置するが、瓦器小皿は極めてバラエティーに富んでいる。井戸3ではその上に4個体の完形瓦器椀が埋納されていたが（第157図）、瓦器椀内面見込みの暗文が格子から圏線へ変化し、やや時間差がある。

14世紀後半では、無高台の完形瓦器椀（第174図21）に伴った瓦器小皿（第174図22）がある。ナデと指押えの境の線はずっと下にさがり、器高が低く、底部も平坦に低くなり、口縁も外側へ開く角度が大きくなる。ⅡW区土壙43の一括の土師器小皿（同図1～9；図版187－9～14）は、やや底面に丸味を残すが、やはり14世紀代のものであろう。

15世紀になると小皿の系譜をひく瓦器小皿はなくなると思われるが、土師器小皿の底面は更に平坦になり、第169図11のように指押えの境が側面からは見えなくなってしまうものもある。いったん外側に開いた口縁は、この時期にまた内側へ引きつけられ、口縁部と底部の境が角ばって

くる。この時期の瓦器椀の系譜をひく瓦器小皿が同図10である。

瓦器小皿・土師器小皿ともにまだ多くのバラエティーがあり、更に細分と編年が可能であるが、今後の課題としたい。

土師質土釜　土師質土釜は古代以来、14世紀末頃まで使用された。それ以後は、14世紀に出現した瓦質土釜にとってかわられる。

菱木下遺跡で出土した土師質土釜は、11世紀から14世紀の間のものである。これらをおおまかに7類に分けた。

A類　内傾する体部上半部に、外側へ「く」字状に折れ曲がる口縁部がつく。口縁部は比較的長い（第174図15）。

B類　口縁部は短くなるが、まだ斜め上方へ折れ曲がっている（第157図15）。

C類　口縁部は短く、折れ曲がらずに垂直に伸びている（第161図22）。

D類　口縁部は極めて短くなり、ほぼ水平方向に張り出す（第158図5）。

E類　口縁部と体部上半部との境がなくなり、内傾した上半部に玉縁状の口縁部がつく（第158図8）。

F類　玉縁が小さくなり、わずかに外側に張り出す（第159図17）。

G類　つば部から口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁と体部上半との区別がまったくない（第158図7）。

これらを編年順に並べてみると、A類→B類→D類→E類→F類の順となる。古い段階では内傾する体部上半部に、外側に折れ曲がる長い口縁部がついていた（A類）が、しだいに口縁部が短くなっていく（B類）。「く」字状に斜め上方に伸びていた短い口縁部は、つぎには水平方向へと折れ曲がる（D類）。更に内傾する体部上半部と口縁部との境がなくなり、短い口縁部が玉縁状に変化する（E類）。この玉縁の直下には沈線を入れるものもあり、玉縁の形態からE類は更に細分が可能である。最後に玉縁もしだいに小さくなる（F類）。

C類については、口縁の変化からするとB類のあとに位置づけられるが、垂直になった口縁（C類）から、急に水平化した口縁（D類）になるとは考えられない。よってB類からの形態変化はB類→C類、B類→D類の二通りがあったのではなかろうか。そしてD類への変化が主流となってF類へと変化していったものと考えている。

G類は、A～F類の形態変化の流れの中に位置づけるのはむずかしい。出土量も少なく、図化できたのは1点だけである。摂津方面に多い器形で搬入品の可能性が強い。

A・B類の土師質土釜は古いタイプの瓦器椀を伴う遺構から出土し、E・F類は高台が退化したり、無高台となった新しい瓦器椀を伴う遺構から出土する。よってこうした変化が時代を追って変遷してきたことを知ることができる。

A類は良好な共伴関係にある遺構にめぐまれないが、B類は井戸3の中層下部から一括廃棄された瓦器椀と共に2個体分の土師質土釜の大型片が出土した。和泉国の瓦器椀の絶対年代はまだ

完全に確立したとは言い難いので、このB類もやや幅広く12世紀後葉から13世紀前半のある時期に比定すれば大過なかろう。さすれば、A類の年代は11～12世紀となろう。A類は比較的長い期間続く形態だが、その細部の変化から更に細分が可能である。

E類は最も出土量が多く、ドーナツ状の高台をもつ瓦器椀から無高台の瓦器椀にも共伴する。おおむね14世紀に主流を占める器形と思われる。E類は細部にバラエティーがあり、E類からF類の間は更に細分・編年が可能である。

F類を出土する遺構は、無高台の瓦器椀を伴い、14世紀でも遅い時期に比定されよう。

瓦質土釜　14世紀代に出現するが、この時期の出土量は少なく、14世紀末頃に瓦質土釜がなくなると、出土量が増大する。瓦質土釜は大きく10類に分けた。

A類　土師質土釜E類と同じ形態で、内傾する体部上半部に玉縁状の口縁がつく。玉縁はE類中でも、比較的張り出しの小さなタイプにならっており、口縁下に沈線の入るものはない。ただ土師質土釜と異なって、内面調整はハケ目で、口縁直下だけ横ナデとなる（第176図23）。

B類　土師質土釜F類と同じ形態で、玉縁が小さくなる（第160図19）。

C類　体部上半が内傾するが、玉縁はなく、口縁端部をわずかにつまみあげている（第176図7・8）。

D類　体部上半部の内傾度が強く、口縁端面は単にナデられて平坦になっている（第163図3）。

E類　内傾化した上半部外面に段が付けられる。段はヘラ状工具で押さえてつけられる（第170図4）。

F類　内傾化した上半部は、口縁部のみ上方に立ち上がる。外面にはE類と同じように段がある（第170図5）。

G類　上半部の内傾の度合が弱くなり、垂直に近づいてくる。段と段の間の幅は広い。焼成は不良なものが多く、土師質に近いものもある（第171図3）。

H類　上半部は内傾し、段がつくが、外面を強くナデるため、凹線状の段となる（第169図4）。

I類　上半部は短く垂直に立ち上がる（第172図14）。

J類　上半部が強く内湾する（第172図4）。

これらを編年順に並べてみると、A類→B・C類・D類→E類→F類→G類が考えられる。A類は、土師質土釜のうち、玉縁状の口縁をもつE類と同じ形態をもつが、玉縁の張りが弱い点でやや新しい要素がある。無高台の瓦器椀と共伴し、14世紀のそれほど早くない時期に出現したものと思われる。

B・C・D類は一応形態の変化を追えるが、いずれも出土量が少なく、一時期を画すことができるかどうかわからない。器壁が他の器形に比べてやや薄く、瓦質といっても表面に炭素の吸着が少なく、暗褐色を呈する。

E・F・G類は広瀬和雄氏の労作（『大園遺跡発掘調査概要・Ⅴ』、大阪府教育委員会、1981）で、E類→F類→G類（広瀬編年ではA類→B類→C類）案が示されており、ここでもそれに依

った。

H類は、ヘラを使って明瞭な段をつくるE・F類に対し、指で強くナデて段をつける点で異なるが、その形態はE・F類に近似しており、ほぼ同時に平行して製作されていたものと思われる。E・F類に対して出土量は少ない。

I類・J類ともに出土量は少ない。J類は大和にみられる瓦質土釜に類似しており、搬入品と思われる。

瓦質土釜の年代はE類が堺環濠都市遺跡で応永6（1389）年の焼土層中より出土しており、14世紀末頃には存在したことが知られる。よってそれより後出するF・G類は15世紀に比定することが妥当と思われる。

その他の土器

ミニチュア土器（第153図16、第173図26、第176図12；図版211－1～3）　ミニチュア土器が2点、ミニチュアというより水滴と考えられる小壺が1点出土した。16は瓦器質の鉢のミニチュアで、器壁が薄く、復原口径9㎝。外面にヘラ磨きの線が1本入る。高台礫群1下の整地層より出土。26は瓦器質の土釜のミニチュアで、復原口径4㎝と小さい。Ⅱ E区溝38から14世紀の遺物と共伴。段のある土釜は、和泉では14世紀末葉からみられるが、ミニチュア土釜で有段のものは、それよりやや先行して出土する。12は須恵質の双耳の小壺で、側面は提瓶のように偏平である。残存長 6.1㎝と小型品だが、ヘラ削りの後指ナデで調整し、形のととのった製品である。ミニチュア土器というより、水滴として使用した実用品であろう。高台上の土壙72から出土。

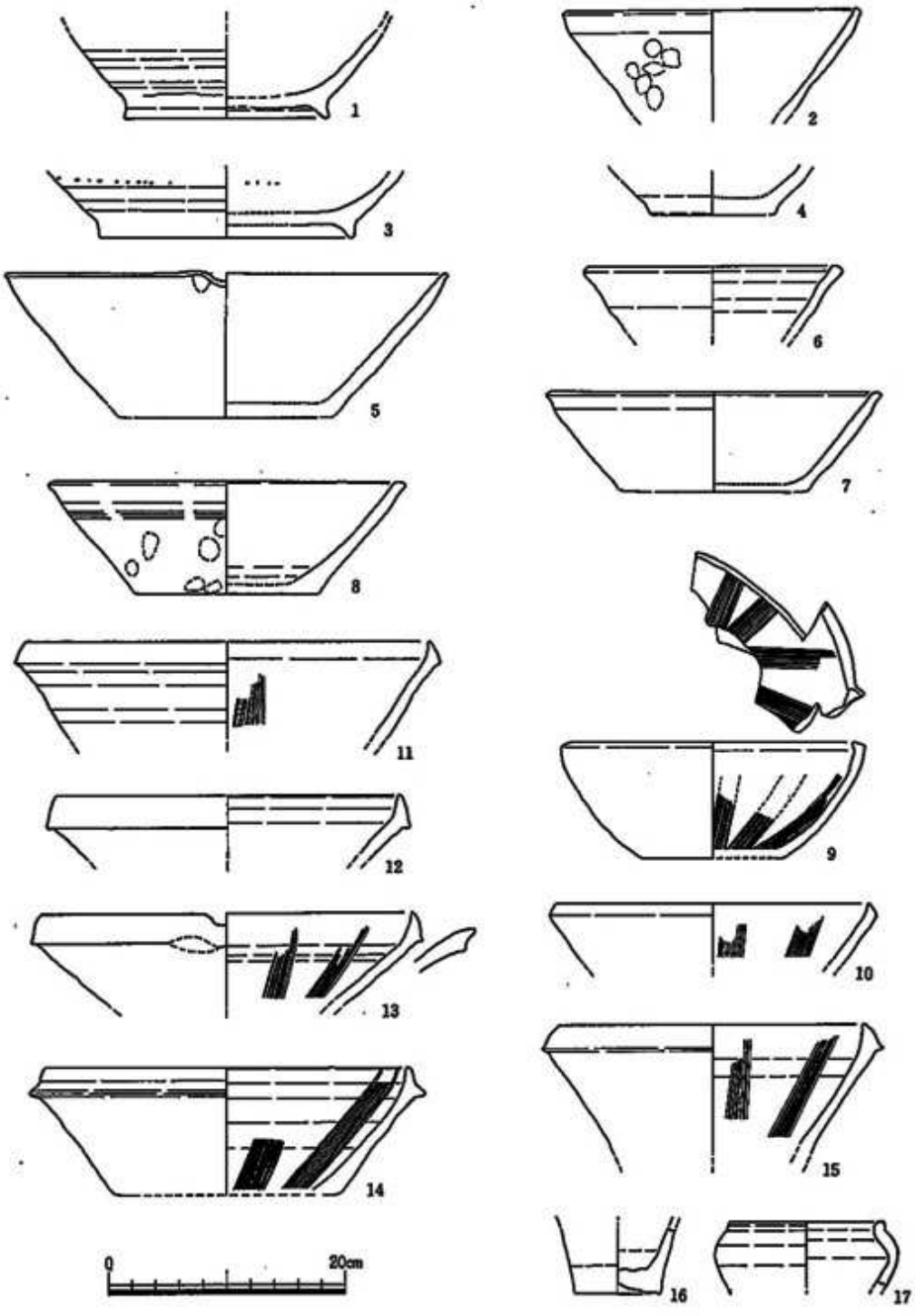
たこ壺（第153図18）　たこ壺は1点のみ出土した。復原口径16.6㎝と大型で、器壁も 2.5㎝と厚い。色調は灰黄色で土師質の焼成である。全体を指で調成し、頸部は縄をかけるため絞られ、この部分には内外面とも指圧痕が多く残る。高台礫群1下の整地層より出土した。15世紀かそれ以前の製品である。和泉ではこの種のたこ壺は海浜部の遺跡でよく出土し、時期・地域によって形状が異なるが編年はまだない。

日本陶器　（第177～179図；図版196・197）

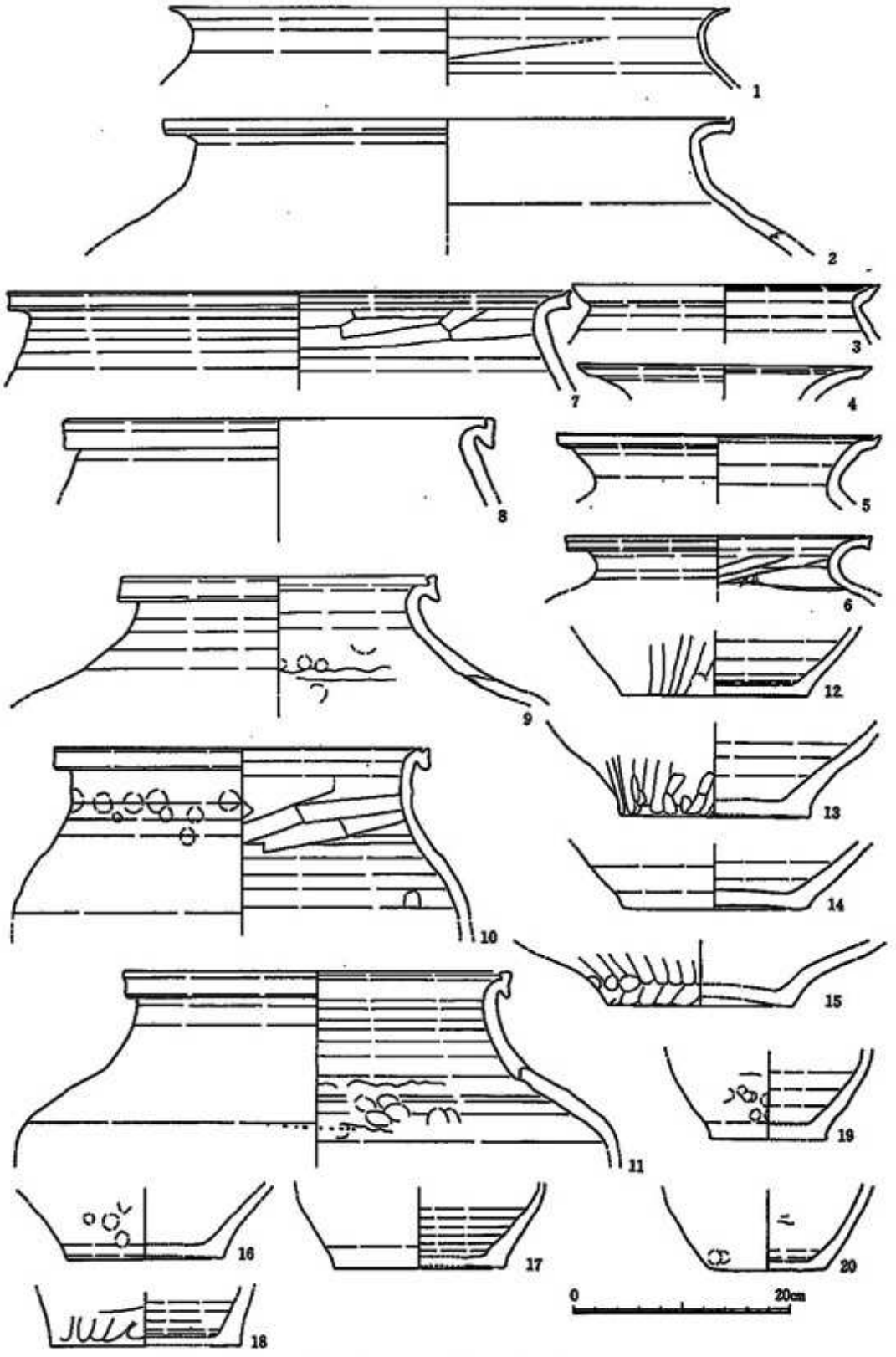
日本製の中世陶器は常滑・備前・瀬戸があり、若干産地同定のできなかったものがある。総数658点出土した。最も多いのは常滑を主とする甕で569点、ついで常滑ねり鉢・備前すり鉢が62点、瀬戸の各種の器種が25点、備前と思われるその他の器種が2点である。中世主要遺構出土遺物に占める日本陶器の比率は1.5%と少ない。

産地別には常滑が多く、甕の大部分とねり鉢の3分の1を占める。常滑は12世紀後葉ないしは13世紀に移入され、東播系の須恵質陶器を除けば、13・14世紀代の日本陶器の主流を占める。14世紀には備前のすり鉢が多入され、15世紀には備前が主流となる。しかし、すり鉢以外の器種は希である。瀬戸は14・15世紀にわたって少量もたらされる。甕の中には常滑以外の破片も少量含まれるが産地を同定するに至っていない。

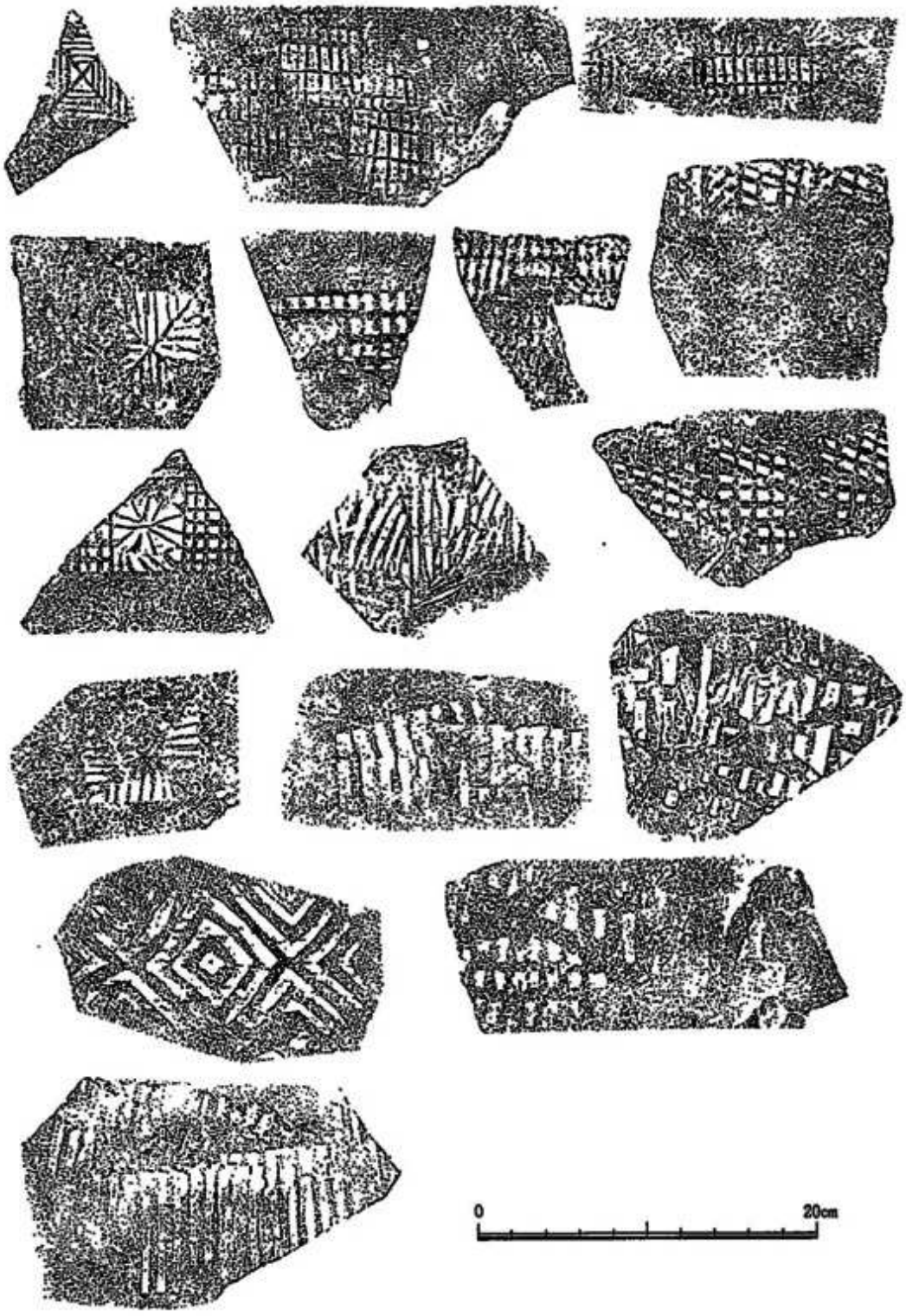
常滑　ねり鉢（第177図）は7個体19片が出土した。実測図は8個体になっているが、同図2



第177図 中 世 陶 器



第178図 中 世 陶 器



第179図 常滑・甕の胴部文様

と4は同一個体と思われる。ねり鉢には高台付と平底がある。高台付（1・3）は2個体あり、やや軟質で色調は黄色を呈す。平底のねり鉢（2・5～8）は口縁端面が水平かやや傾斜するもので、端面外側がまだ大きく発達していない。体部は丸味がなくなり直線的になっている。ほぼ赤羽一郎氏の常滑編年（『世界陶磁全集』3、1977）のⅡ期・Ⅲ期に比定され、12世紀後半から14世紀後葉に比定される。

甕（第178図）は大型と中型があり、3類に分類できる。1類（2・4・5）は口縁端部をつまみあげるもの、2類（6・7）は口縁が帯状に発達し始めるもの、3類（8・9・10）は口縁の帯状の幅が広くなり、帯の下端が下に大きく張り出すものである。1類のあと2類が出現し、更に3類へと変化する。1・2類ともにⅡ期・3類はⅢ期に比定される。

備前　備前はすり鉢（第177図）が主体で、その他に備前と思われる壺底部1点（16）と広口の鉢？（17）が1点出土している。備前に比定できる甕は口縁部で判断する限り見当らない。すり鉢は43片出土したが、口縁部が12個体14点で、常滑よりやや多い。

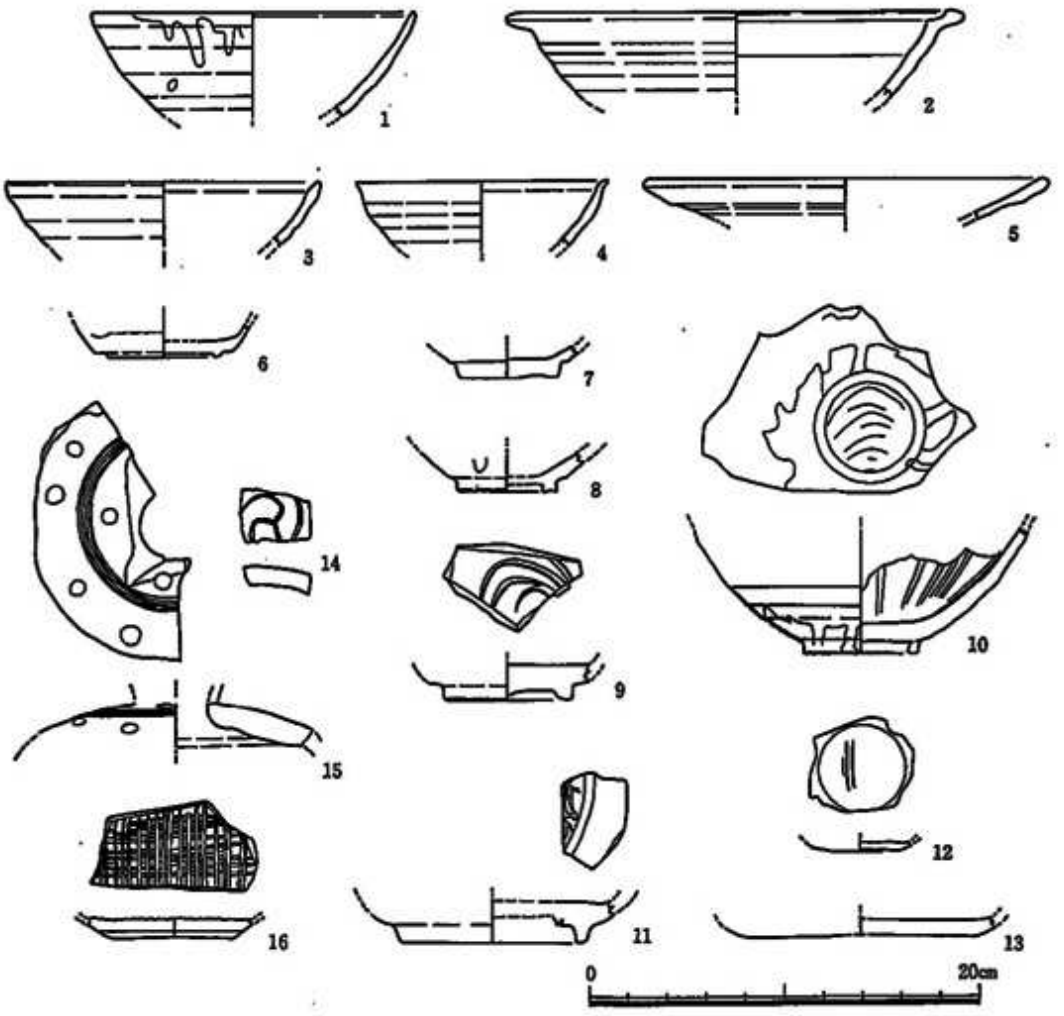
すり鉢（9～15）は5類に分類できる。1類（9）はやや内わんし、口縁端面は狭く、わずかに外傾する。2類（10）は体部が直線的で、口縁端面は狭いが、かなり外傾する。3類（11）は口縁部が肥厚し始め、口縁端面の下端がわずかに外に張り出す。4類（12・13・15）は、口縁端面が発達して口縁直下に帯状の面をなし、下端がかなり張り出す。6類（14）は下端の張り出しが更に発達し、断面「く」字状となる。1類から5類にいくに従って新しくなる。間壁忠彦氏の編年（『世界陶磁器講座』3、1977）によれば1・2類はⅢ期で13世紀後葉から14世紀、3～6類がⅣ期で14世紀末葉から15世紀となる。菱木下遺跡では14・15世紀の土器類と共伴して出土している。Ⅲ期に比定されるものは2点のみで、他の大部分はⅣ期に比定される。

瀬戸（第180図）　瀬戸は透明度のある黄緑色の灰釉が施されたものがほとんどで、碗・鉢・皿・おろし目皿・壺が出土している。14の壺肩部の破片のみ褐釉がかかる。褐釉のかかったものはこれ1片しか出土していない。全体の出土量は少なく、24片である。中世土器類のおよそ0.001％程度である。図示した16点のうち釈尊寺の寺域にあたるⅢW区で10点、ⅢE区で4点、屋敷地のⅡW区で2点出土している。瀬戸は常滑・備前と同様に寺域で多用されていることがわかる。14・15世紀の遺物と伴出している。

中国陶磁器　（第181・182図；図版198～201）

菱木下遺跡の輸入陶磁器はすべて中国陶磁器で158個体182片が出土している。陶磁器片は破片数が少ないので、個体同定が比較的容易であり、ほぼ実際の個体数に近い数字だが、白磁碗・白磁小皿の胴部片で同一個体の同定が困難なものは1片で1個体と数えたので、中には他の個体と同一のものもあろう。これらを除けば、140～150個体が実際の個体数である。図には52個体を示した。また地区別の個体数は第203図に示した。

時期は北宋の末葉から明まで、およそ12世紀から16世紀のものである。器種は碗・皿・盤・壺・小杯の5種で、白磁・青磁・染付がある。

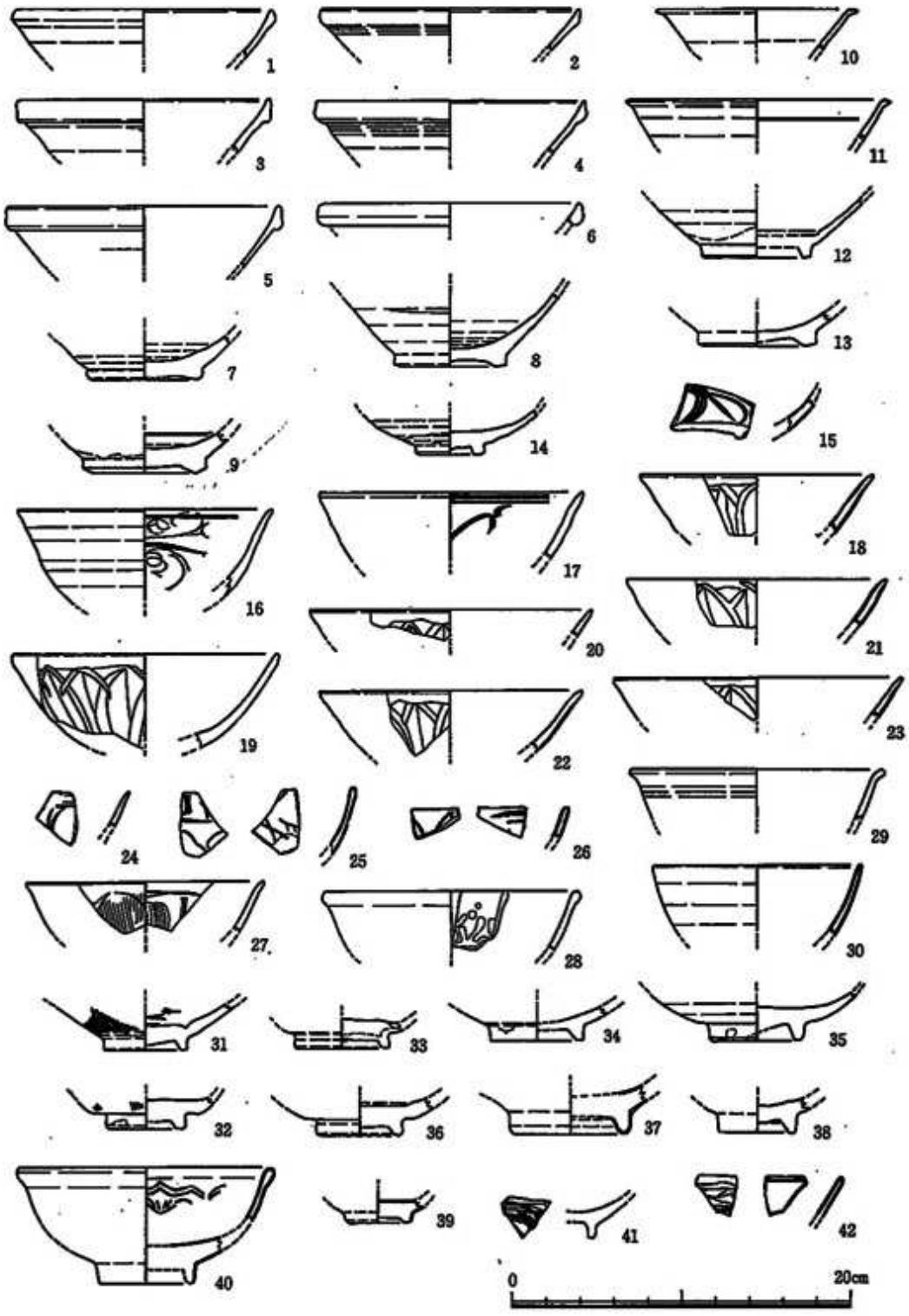


第180図　瀬　　戸

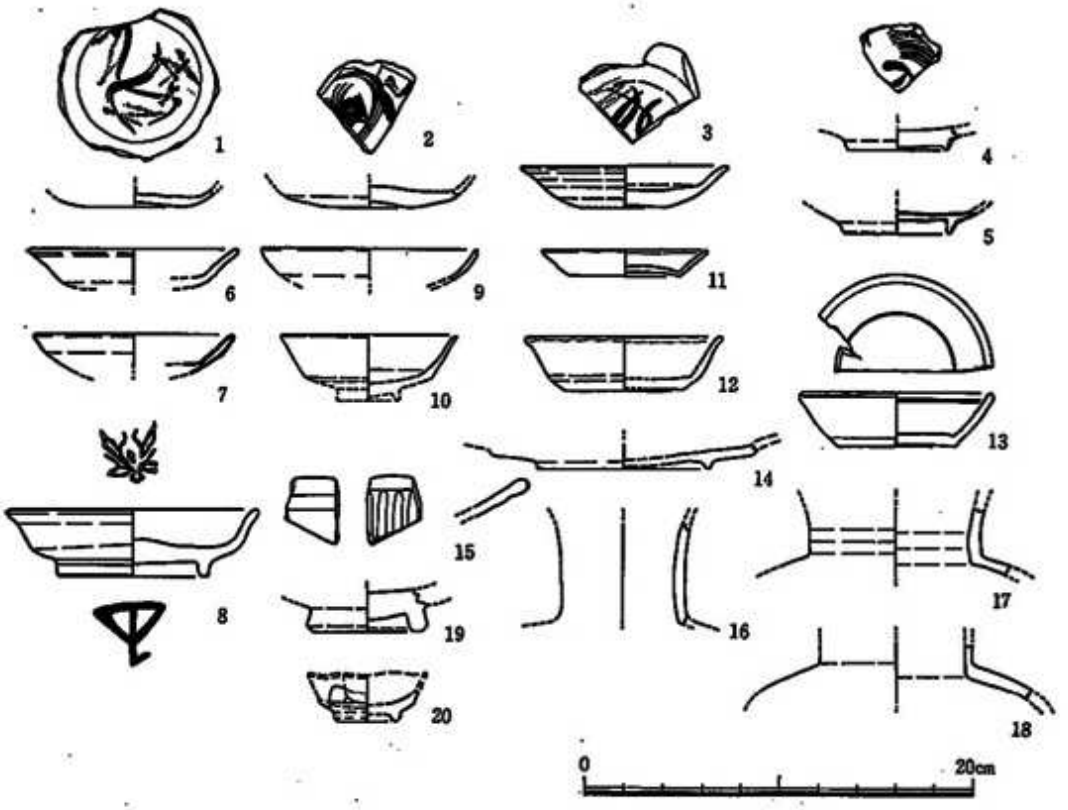
碗（第181図）　碗には白磁・青磁・染付がある。

白磁碗は大きく3類に大別される。1類は口縁が玉縁状になるもので、これには細い玉縁（1・2）と太い玉縁（3～6）がある。1類の底部（7～9・12・13）は畳付きが幅広く、外底面の削り込みが浅く、高台が低い。内側の見込みには、蛇の目状に釉のかきとりのあるもの（7）、一本の沈線が入るもの（9）、段のつくもの（13）がある。2類は口縁端部が細く外側に少し折れて水平に近くなる（10・11）。この類の高台は細く、高くなる。1・2類共灰白色の釉がかかり、外面は体部中央から下部まで施釉する。胎土は硬質で灰白色である。これに反して3類（14）の1点だけが胎土が軟質で黄白色を呈し、高台径が狭く、異質である。太宰府編年（横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978）によれば、1類はⅡ類・Ⅳ類に相当し、2類はⅤ類に相当する。およそ11世紀から出現し始め、13世紀代まで続くとされている。

青磁碗は10類に分かれる。1類は同安窯系（31・32）で外面に櫛描きがあり、内面に画花文が


1
2
10
3
4
11
5
6
12
7
8
13
9
14
15
16
17
18
20
21
19
22
23
24
25
26
29
27
28
30
31
33
34
35
32
36
37
38
40
39
41
42
0
20cm

第181図 中 国 陶 磁 器



第182図 中 国 陶 磁 器

みられる。外面は高台途中まで黄緑色の釉がかかる。2類は竜泉窯系で外面無文、内面画花文である（15～17）。1・2類は太宰府編年で12～13世紀に相当する。3類も竜泉窯系で外面に鎬蓮弁文がある（20～23）。蓮弁が立体的に削り出され、稜線が明瞭である。太宰府編年Ⅰ－5－b類である。13世紀後半から14世紀である。4類は外面口縁下に雷文、内面に文様をもつ。14～15世紀である（24～26）。5類は外面に蓮弁を線刻し、その上から櫛目を縦に入れ、内面にも櫛目が入る（27）。太宰府編年Ⅰ－6類である。6類は外面無文、内面に型押しと思われる浮文がある（28）。7類は外面無文、内面に文様が線状に浮き彫りにされている。その部分だけ釉が薄いので文様が釉の下に浮きあがってみえる（40）、8類は無文の碗である（29・30）。9類は竜泉窯系の内外面無文の小碗である（39）。太宰府編年小碗Ⅲ類で、14世紀。10類は写真だけ（図版200－6）だが、竜泉窯系輪花の小碗Ⅰ－3類である。

染付碗は2点しか出土していない。42は見込みにほら貝の文様の一部があり小野正敏氏により染付碗C群とされ、15世紀後半から16世紀前半とされている（「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』，1972）。

皿（第182図） 皿には白磁・青磁があり3類に分かれる。1類は同安窯系の青磁（1～4）で、内面に、櫛状及びヘラ状の施文具で花文を施す。底面がわずかに上げ底になり、釉がかきとられる。4だけ小さな高台をもつ。同安窯系碗と同様12～13世紀。2類は竜泉窯系の青磁（6・

7）で、体部下半から屈曲する。3類は高台径が広く、底部は薄く、良質の青磁釉がかかる（5）。4類は高台がつき、内面に花文が押印されている（8）。外底面に墨書がある。井戸16から15世紀の遺物と共に出土した。5類は、いわゆる口はげの白磁小皿である（11～13）。13世紀後半から14世紀。6類は体部下半に丸味のある白磁小皿で、おそらく高台がつく（9）。7類は体部下半で屈曲して、高台がつく。6類・7類共に15世紀とされている（森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2）。8類は高台径がかなり広く、低い高台をもつ（14）。体下半部に屈曲をもつようである。16世紀のものであろうか。

盤（第182図15）　1点のみ出土。青磁で外面口縁直下に凹線、内面には中心に向かっていくつもの凹線がある。太宰府編年ではこの型態を杯としている。

壺（第182図16～19）　白磁の壺で、灰白色の釉・灰白色の硬質の胎土などは碗1類に近似している。時期もほぼ同じで、11～13世紀の間におさまるであろう。

小杯（第182図20）　白磁の小杯が1点出土。体部に面取りをしており、八角小杯が復原できる。井戸3から14世紀後半の遺物と共に出土。

瓦類

軒瓦　軒瓦は軒丸瓦と軒平瓦とに分かれる。軒丸瓦は24種83点、軒平瓦は14種60点出土している。軒丸瓦の種類がやや多いのが特徴である。なお点数は個体数である。

軒丸瓦（第183・184図；図版202・203、第40表）　軒丸瓦は24種あるが、その内訳けは蓮華文8種36点、火炎宝珠文1種1点、宝塔文1種1点、三ツ巴文12種28点、不明17点である。以下24類に分けて説明する。

1類　単弁蓮華文　文様の彫り込みが浅く、外縁の高さも、文様と同じ高さである。この個体のみ色調が赤褐色で、文様も古相を帯びる。1点しか出土していない。（第183図1；図版202－1）

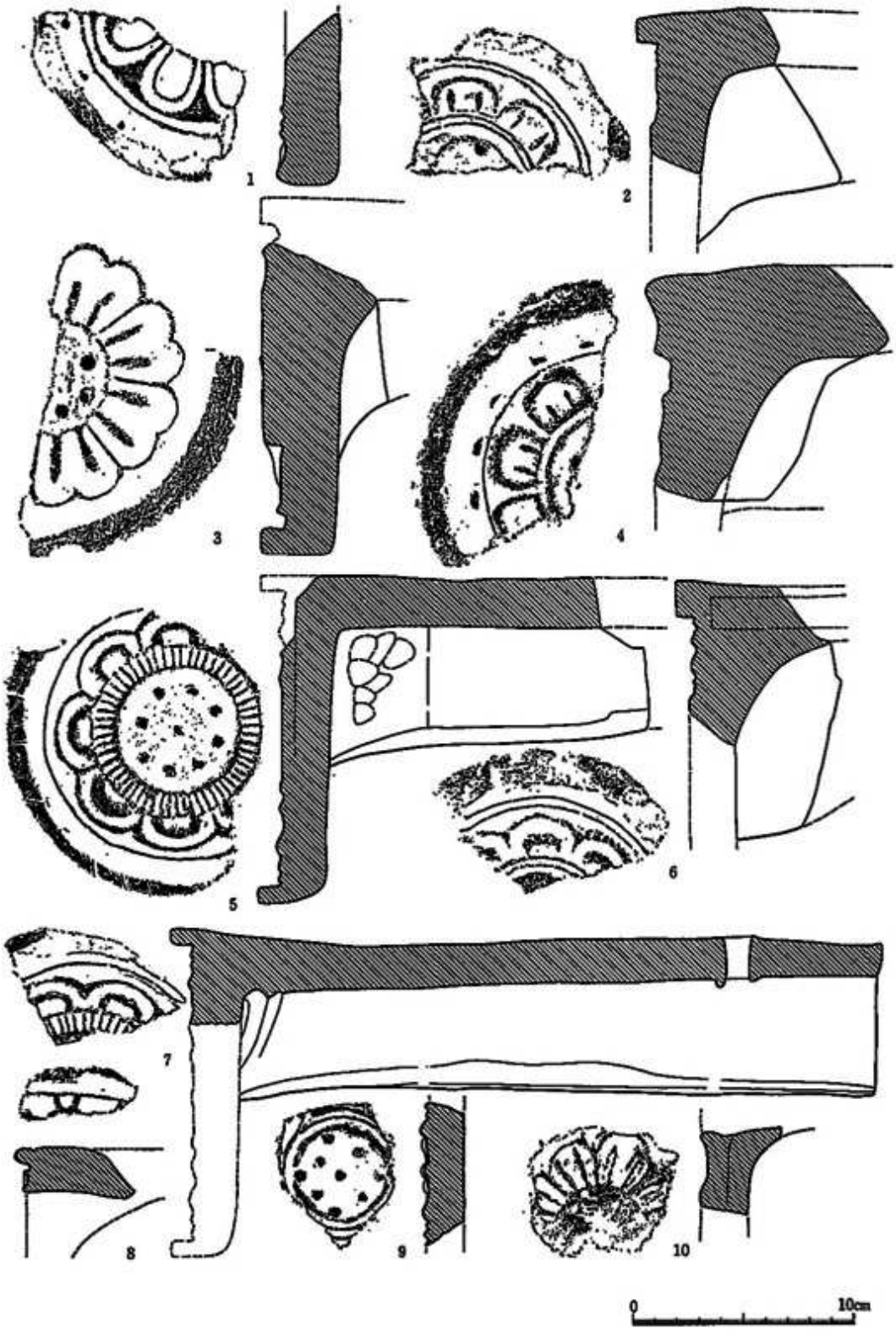
2類　蓮華文　この類から外縁の高さが文様の高さよりやや高くなる。2類と4類はよく似るが、2類は蓮弁の外側に2本の圏線がある。Ⅱ W区R47の三方を囲む溝から計4点出土。（第183図2；図版202－3）

3類　蓮華文　1種類の文様としては出土数が比較的多く、8点出土。蓮弁の外側は無文帯で、他の蓮華文に比べ簡素な文様である。（第183図3；図版202－2）

4類　蓮華文　2類に似るが、蓮弁外側の圏線が1本で、更に連珠がめぐる。3点出土。（第183図4；図版202－4）

5類　蓮華文　最も出土数の多い種類で10点出土。この類のみ全長を残すものがあり、34.4cmを測る。6類と文様が似るが、蓮弁内側に放射状に細い線が入る（第183図5・7；図版202－6・7）。

6類　蓮華文　5類に似るが、蓮弁の内側に2本、外側に2本の圏線が入る。3点出土。（第183図6；図版202－5）。なお第183図9は蓮弁内側に2本の圏線が入り、文様構成は2類、6類



第183図 軒　　丸　　瓦

第40表　軒　丸　瓦　一　覧　表　　復は復原径

図番号	図版番号	種　類	直径 cm	内区径 cm	中房径 cm	蓮子数	外区径 cm	内縁幅 cm	外縁幅 cm	外縁高 cm	備　考
183— 1	202— 1	蓮華文	復15.4	復10.4			2.5	1.2	1.3	0.5	
2	〃— 3	〃	復15.4	復10.8	復 5.8		2.3	0.7	1.6	1.0	
3	〃— 2	〃	復15.6	復11.8	5.3	1＋7	2.4	0.3	2.1	1.2	
4	〃— 4	〃	復16.0	復11.2	復 5.4			1.2		1.0	
5	〃— 6	〃	復15.9	12.3	5.1	1＋8	1.8	0.4	1.4	1.2	
6	〃— 5	〃	復15.8	復10.6	復 4.6		2.6	0.8	1.8	1.1	
7	〃— 7	〃	復15.0	復12.2			1.4	0.4	1.0	1.0	
8		〃	復13.0						0.8	0.6	
9	203— 3	〃			4.7	1＋8					
10	〃— 4	〃		復 8.6	復 4.0						
184— 1	〃— 1	火炎宝珠文	17.0	9.6			3.7	2.2	1.5	1.2	
2	203— 7	三ツ巴文	復12.6	復 7.0			2.8	1.1	1.7	0.8	
3		〃	復14.0	復 8.0			3.0	1.2	1.8	0.9	
4		〃	復13.2	復 6.8			3.2	1.4	1.8	0.9	
5		〃	復11.4	復 5.6			2.9	1.8	1.1	0.8	
6	203— 2	〃	復15.0	9.4			2.8	1.7	1.1	1.2	
7	〃— 5	〃	復12.6	復 5.4			3.6	1.9	1.7	1.2	
8	〃— 8	〃	復13.8	復 7.6			3.1	1.2	1.9	0.8	瓦当面に散砂
9	〃— 9	〃	復14.4	復 7.6			3.4	2.0	1.4	1.0	
10	〃—10	〃	復10.8	5.2			2.8	1.6	1.2	0.8	
11		〃	復13.0	復 7.4			2.8	1.5	1.3	1.0	
12	203— 6	〃	復16.6	復 9.2			3.7	2.0	1.7	0.9	
13		〃	復11.8	復 5.6			3.1	1.7	1.4	1.0	

と似るが、瓦当面の厚さからすると6類に近似する。

7類　蓮華文　内区のみ遺存するが、弁の形が他の類に比べ細長いのが特徴である。1点のみ（第183図10；図版203—4）。

8類　不明（蓮華文？）　外区の一部のみ残り、文様がよくわからないが、外区にある2本の短線につながる弧線が蓮弁の外郭線のようにみえる。ただし、軒平瓦の顎部で唐草文の一部かもしれない（第183図8）。

これらの蓮華文は1類が平安時代でもやや古い時期に入るが、残りの2～8類の7種31点は、平安時代後期の文様である。これらの軒平瓦は、鎌倉時代から室町時代の遺構から出土しており、共伴遺物から瓦の時期を推定することは困難である。1類を除く7種の瓦は2類4点、3類8点、

4類3点、5類12点、6類4点、7・8類は1点ずつに過ぎない。釈尊寺創建時の軒丸瓦は最も出土点数の多い5類を選ぶのが適当かと思われる。5類と近似する2・4・6類は、5類と大きな時期差を感じさせない点で、創建時ないしは近時の補修時に用いられたものと思われる。3類は他の4種と文様構成を異にし、2番目に点数の多い点で、やや大きな葺き替えが行なわれた可能性を示している。

次に2種の、この遺跡ではやや特異な文様の軒丸瓦を示す。

9類　火炎宝珠文　瓦当面だけほぼ完存し、14世紀の井戸15より出土した。中央蓮台に乗る宝珠があり、火炎の光背を持つ。外区は圏線が二重にめぐり、線間に珠文がある。焼成良く、表面が銀黒色で、鎌倉時代のものと思われる。1点のみ出土（第184図1；図版203－1）。

10類　宝塔文　宝塔の背景は正格子で、外区は二重の圏線である。小片なので宝塔の形は不明。1点のみ出土。拓本図は現地説明会資料に載せたが、本報告書には不載。宝塔文は和田川対岸の鶴田池東遺跡で出土している。

次に三ツ巴文軒丸瓦を示す。12種28点が出土。この種のものは遺存部分の大きいものが少なく、文様のみで同笵・異笵を区別し難いものもある。しかしながら瓦当の断面形を比較すると、それぞれ個性があり、上縁4種、下縁8種があって、文様が近似するも形態を異にしているので一応12種に分けることとした。中には同類とすべきものがあるかもしれない。

上縁の4種は、以下のとおりである。

11類　三ツ巴文　左回り。最も外区の珠文が小さくしっかりとしている。この文様に該当する下縁はない。上縁が上にそる（第184図12；図版203－6）。

12類　三ツ巴文　左回り。珠文は中ぐらいだが珠文間隔がややあく。上縁がわずかに上にそる（第184図2；図版203－7）。

13類　三ツ巴文　左回り。珠文は中ぐらいだが珠文間隔がやや狭い。上縁がやや下がる（第184図3）。

14類　三ツ巴文　左回り。珠文は大きく、珠文帯の外側に圏線が1本ある。この部分に圏線をもつのは他に2種あるが、16類とは珠文間隔が異なり、22類は巴が右回りと異なる。上縁はほぼ水平である（第184図5）。

下縁の8種は、以下のとおりである。

15類　三ツ巴文　左回り。最も内区径が大きく9.4cmある（第184図6）。

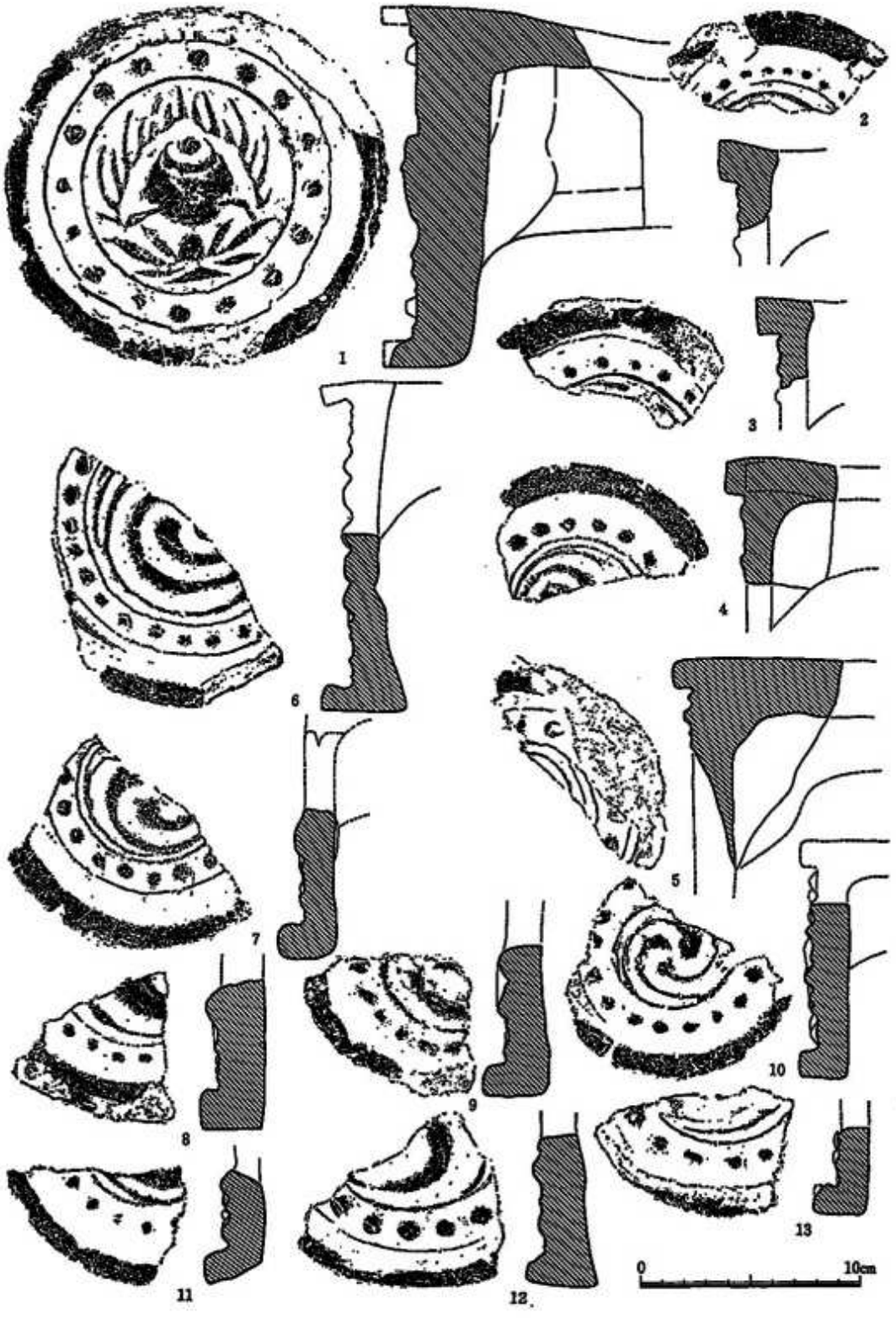
16類　三ツ巴文　左回り。珠文帯の外側に1本の圏線がある（第184図7；図版203－5）。

17類　三ツ巴文　左回り。20類と近似する文様をもつが、17類の下縁はほぼ水平である（第184図8；図版203－8）。

18類　三ツ巴文　左回り。17・20類と近似するが、珠文がやや大きい（第184図9）。

19類　三ツ巴文　左回り。内区径が最も小さく5.2cmである（第184図10；図版203－10）。

20類　三ツ巴文　左回り。17類と近似するが、下縁がかなり下がる（第184図11）。



第184図 軒　　丸　　瓦

21類　三ツ巴文　右回り。右回りは22類とこの類しかない。珠文の外側に1本圏線がある（第184図12；図版203－6）。

22類　三ツ巴文　右回り。珠文の外側に圏線がない（第184図13）。

上縁の12・13類は下縁のいずれかの類に対応するかもしれないが、今のところ不確定である。よって三ツ巴文の12種は、正確には10～12種に分類できるというべきであろう。このように三ツ巴文は蓮華文と異なって主流になる瓦がない点が特徴で、瓦の葺き替えに際し、特に釈尊寺の為に一種の瓦を多量に焼造した痕跡がない。むしろ多種類の瓦を集めて葺き替えを行ったものと思われる。

軒平瓦（第185図；図版204・205、第41表）　軒平瓦は14種あり、唐草文9種34点、鋸歯文1種1点、連珠文4種18点、不明7点である。

1類　均斉唐草文　軒丸瓦1類と同様に、文様の彫り込みが浅く、外縁も低い。顎はなだらかに傾斜し、明瞭な段をもたない。軒平瓦の中では最も古相である。1点のみ出土（第185図1；図版204－2）。

2類　均斉唐草文　唐草文は線状で瓦当面いっぱいに拡がる。顎のつくりは2種あり、顎が広い2a類（第185図2；図版204－3）と顎の狭い2b類（第185図3；図版204－4）の2種に細分され、両者は笵傷により同笵であることが確認できる。色調は大部分が黒色だが2b類には須恵質の瓦が2点ある。合計14点と軒平瓦では最多で、2a類2点、2b類6点、不明6点。

3類　均斉唐草文　唐草文の線が太く、かつ平坦で、押しつぶされた感じをもつ。胎土は灰黄色でやや軟質。顎の残っているのは皆無。2類についで量が多く、11点出土（第185図4・5；図版204－5・6）。

4類　唐草文　凹面に「不」字のヘラ描きがある。文様の全体像は不明。なだらかな顎をもつ。1点出土（第185図6；図版204－1）。

5類　均斉唐草文　有郭の唐草文であるが、唐草の一本一文が分離している。直角に近い顎をもつ点で1～4類よりも新しい傾向を示す1点出土（第185図7；図版204－7）。

6類　均斉唐草文　やや小型のもので、外縁の立ち上がりが高い。唐草文はかなり退化して、波文状にみえる。灰色で須恵質気味の焼成である。1点出土（第185図8；図版204－9）。

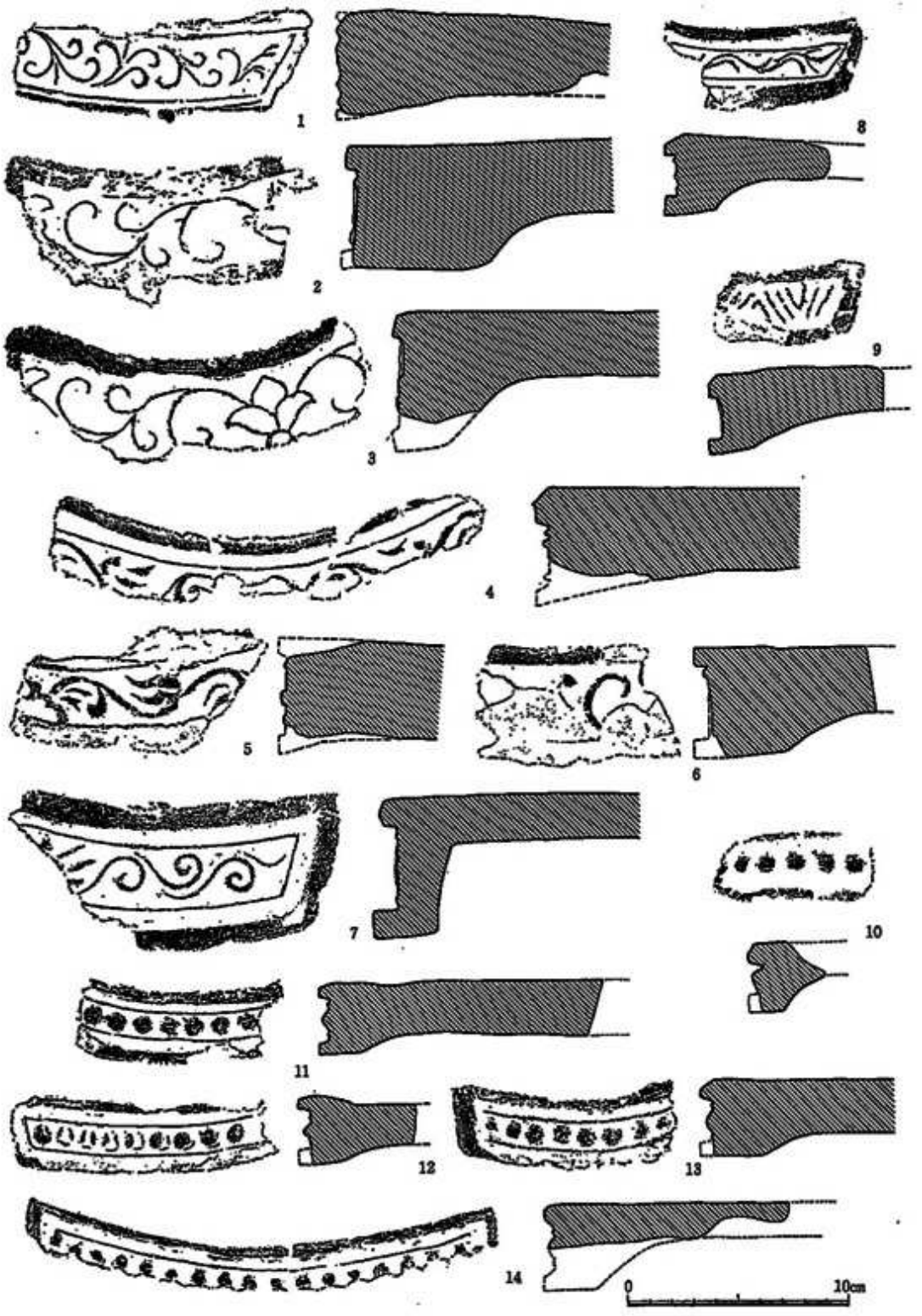
7類　鋸歯文　これもやや小型で、鋸歯状の幾何学文をもつ。外縁の立ち上がりが高い。焼成は白灰色だが、表面は黒色。1点出土（第185図9；図版204－8）。

8類　連珠文　無郭の連珠文（第185図10）。

9類　連珠文　有郭の連珠文（第185図11；図版205－3）。

10類　連珠文　有郭の連珠文。上縁を削り込む点で9類と異なる。笵を2度押し付けた為、連珠の形が崩れている（第185図12；図版205－4）。

11類　連珠文　有郭の連珠文だが、郭縁が上下だけで、左右の側縁を欠く（第185図13・14；図版204－1・2）。



第185図 軒　平　瓦

第41表 軒 平 瓦 一 覧 表

図番号	図版番号	種 類	上弦幅 cm	下弦幅 cm	弧深 cm	厚さ cm	内区 cm	上外区 cm	下外区 cm	脇幅 cm	備 考
185— 1	204— 2	均斉唐草文				4.7	2.8	0.8	1.1	5.4	
2	〃— 3	〃				5.5	3.4	1.1	1.0		笵傷より同笵とわかるが、顎が異なる
3	〃— 4	〃				(4.5)	3.3	1.1			
4	〃— 5	〃				(4.1)	(1.7)	1.7			
5	〃— 6	〃				5.1	2.2	1.7	1.2		
6	〃— 1	唐 草 文									凹面に「木」字をヘラ描き
7	〃— 7	〃									
8	〃— 9	水 波 文				5.9	2.6	1.7	1.6	6.4	
9	〃— 8	鋸 歯 文									
10		連 珠 文									無郭
11	205— 3	〃									有郭
12	〃— 4	〃									〃 左側を二重に押す
13	〃— 2	〃				3.2	1.1	1.2	0.9	3.3	〃
14	〃— 1	〃	21.0		2.2	(2.2)	(0.8)	1.3		(1.9)	〃

連珠文は18点出土しているが類別に点数を示すことが困難である。8類のような無郭のものが9点、9～11類のような有郭のものが9点出土している。なお、唐草文は9種のうち6種のみ掲載。

丸瓦（第186図；図版206・207、第42表） 丸瓦は大きく5類に分けた。形の大小、整形の細部の違いに注目するとさらに細分されるが、ここでは大別を記すことにした。

1類 凸面に縄目叩きを残す。軽くナデ消しているが、中央部を中心にかなり広い範囲に縄目をみることができる（第186図1・2；図版206—1・2）。

2類 凸面を円周にそって削って調整したのち、凸面下半をタテ方向に削って再調整している（第186図3；図版206—3）。

3類 凸面を円周にそって削ったままで、凸面下半の再調整を省略している（第186図4・5；図版206—4、207—1）。

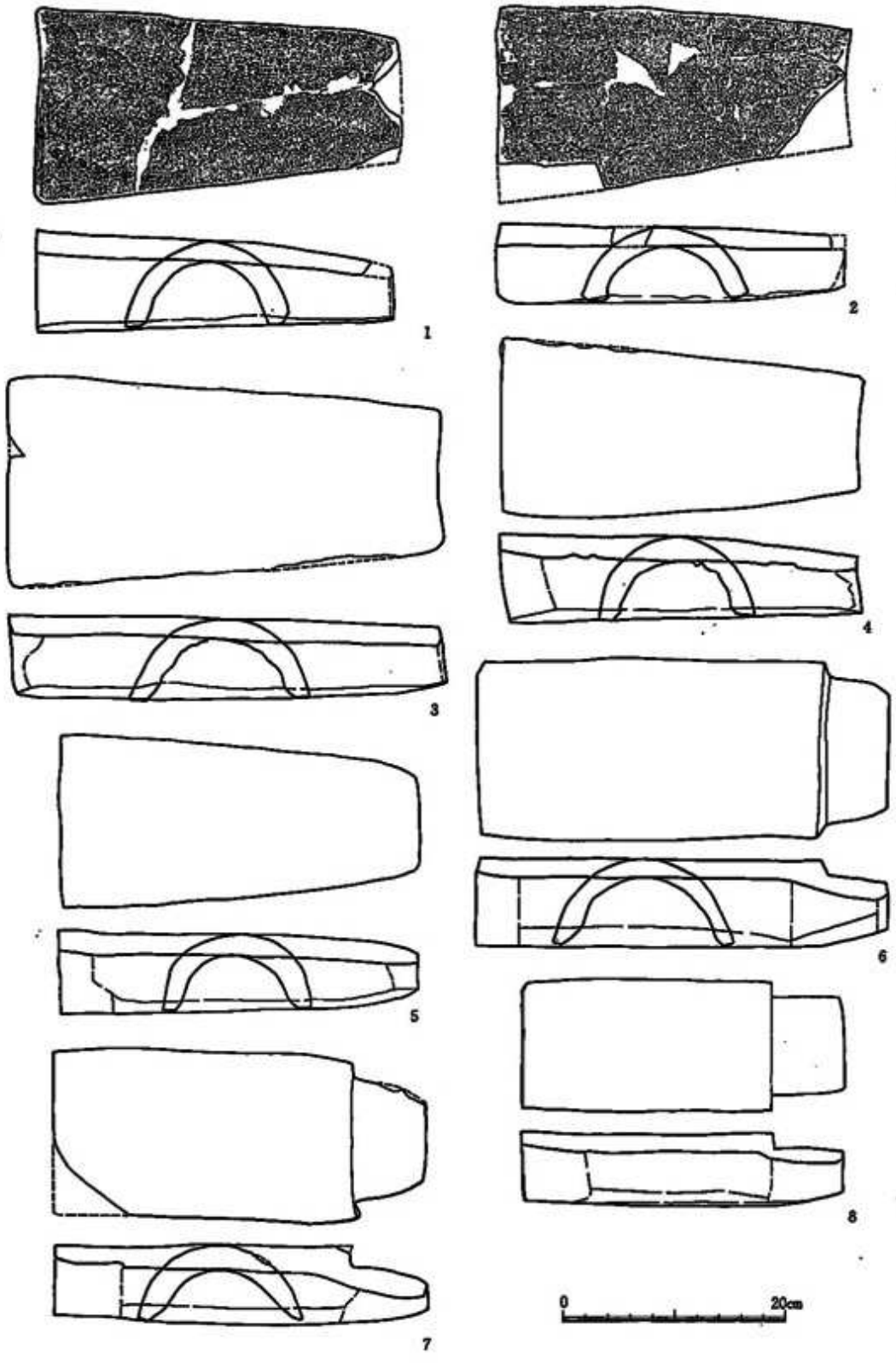
4類 1～3類が重ね合わせ部に段がないのに対し、4類は段をある（第186図6・7；図版207—2・3）。

5類 重ね合わせ部が有段で小型のもの（第186図8；図版207—4）。

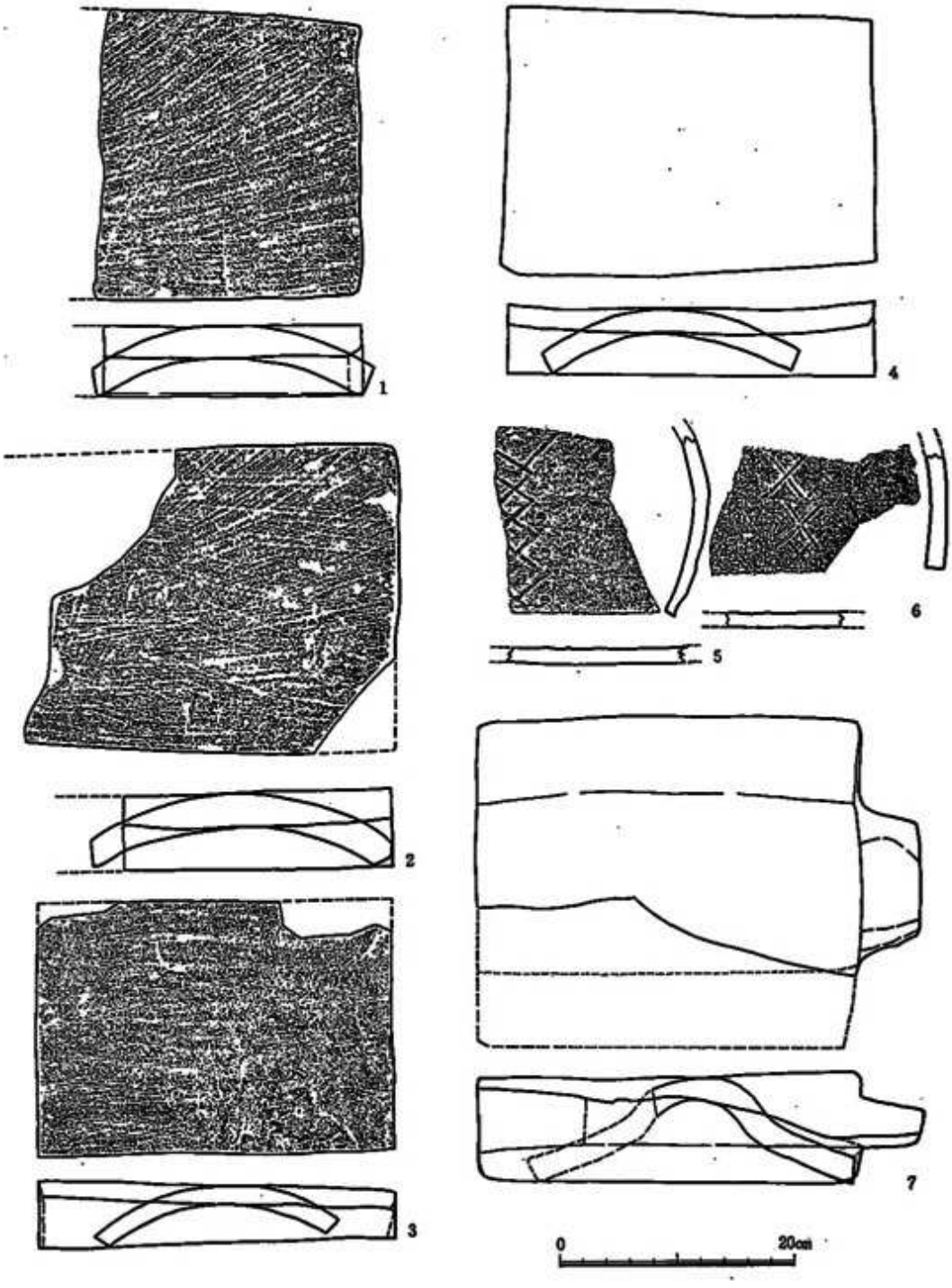
平瓦（第187図；図版208、第42表） 平瓦は4類に大別した。

1類 凸面に粗い縄叩きがある。叩き目は斜め方向にあり、時には格子状になる。粗い離れ砂が付着する。凹面は布目（第187図1・2；図版208—1・2）。

2類 凸面にやや細かい縄叩きがある。叩き目は長軸方向にあり、1類に比べてかなり整ってい



第186図　丸　　瓦



第187図 平　　瓦

第42表　丸瓦・平瓦一覧表

図地号	図版番号	種類	地区	遺構	前幅 cm	後幅 cm	全長 cm	高さ cm	厚さ cm	備考
186—1	206—1	丸瓦	ⅢW	井戸8	17.3	復11.1	33.0	7.9	1.9	
2	〃—2	〃	〃	〃	復17.4	復10.3	31.1	7.8	1.8	
3	〃—3	〃	〃	井戸9	18.1	11.4	38.7	7.3	1.8	
4	〃—4	〃	〃	井戸12	15.4	10.3	32.4	7.4	2.2	井戸枠材として使用
5	207—1	〃	〃	〃	15.3	8.2	32.2	6.9	1.9	〃
6	〃—2	〃	〃	井戸6	15.7	9.9	37.1	7.8	1.8	
7	〃—3	〃	〃	井戸13	復14.5	復 7.1	33.4	7.1	2.3	
8	〃—4	〃	〃	井戸7	11.4	8.3	29.0	6.6	1.6	
187—1	208—1	平瓦	〃	井戸9		22.4	(22.8)	6.0	2.8	粗い離れ砂、凸面縄叩き、凹面布目
2	〃—2	〃	〃	井戸6		復26.0	(29.4)	6.5	1.9	〃、〃、〃
3	〃—3	〃	〃	井戸10	復21.1	復21.5	30.5	5.0	1.6	やや粗い離れ砂、〃、〃
4	〃—4	〃	〃	〃	21.9	20.2	31.3	5.9	2.3	細かい離れ砂、凹面布目なし
5	〃—6	〃	ⅡW	井戸1	幅(15.4)		(12.8)	1.4	1.4	細かい離れ砂、凸面に格子に点の浮文あり
6	〃—5	〃	〃	〃	〃(10.0)		(16.4)		1.4	
7	209—9	棟瓦	ⅢW	井戸13	復26.6	復27.0	37.6	9.6	2.3	細かい離れ砂、凹面布目なし

る。離れ砂が付着するが、1類よりやや細かい。離面は布目（第187図3；図版208—3）。

3類　1・2類よりやや小さく、薄い。両面ともナデられており、表裏に細かい離れ砂が付着する。胎土は灰黄色でやや軟質（第187図4；図版208—4）。

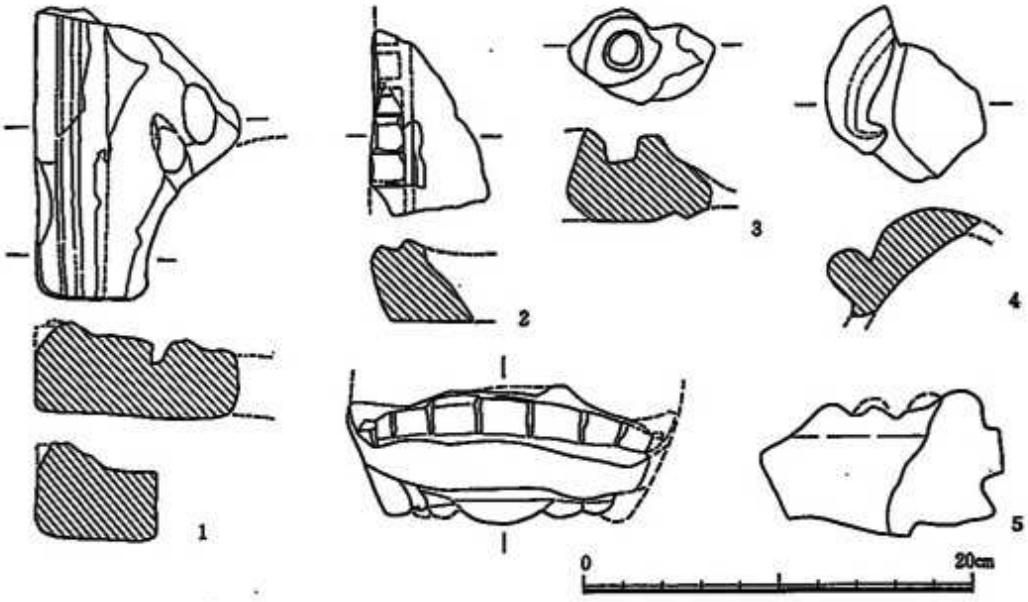
4類　完形品はない。凸面に格子に点が浮き出す叩き目を施す。厚さ14mmとかなり薄い。離面はナデ、表裏ともに細かい離れ砂が付着する。4類はⅡW区井戸1からのみ出土し、点数も少ない。1～3類が広範囲に多量に出土する点で、菱木下遺跡では特異な存在である（第187図5・6；図版187—5・6）。

平瓦の1・2類は、細部を比較すると更に細別できる可能性があるが、3・4類はかなり均質の平瓦である。1・2類が平安後期の軒平瓦群と成形・調整が対応するのに対し、3群は鎌倉時代の連珠文軒平瓦に対応させることができる。4類も、叩き目を除けば、ナデや離れ砂の使い方が近似しており、同時代のものと思われる。

道具瓦（第188図；図版209、第43表）　鬼瓦は5点を図示したが、他に小片のものが少量ある。すべて釈尊寺址内のⅢW区から出土。第188図1・2は鬼瓦の外縁である。3・4は顔の部分、6は下顎である。いずれも15世紀に埋没した遺構や高台の整地層中から出土している。その他に鴟尾とおもわれる破片（図版209—6・7）や棟瓦（第187図7；図版209—9）が出土した。棟瓦は両面ともに細かい離れ砂が付着し、内面に布目はない。平瓦3類と成形・調整が似ており、同時期に製作されたものと判断される。

第43表 鬼 瓦 一 覧 表

図番号	図版番号	種類	器種	地区	遺構	残存高 cm	残存幅 cm	備考
188—1	209—4	鬼瓦	左下すみ部分	ⅢW	礫群1下整地層	5.0	14.9	
2	〃—1	〃	側縁	〃	井戸17	4.2	9.5	
3	〃—2	〃	鼻	〃	溝33	4.8	7.4	
4	〃—3	〃	ひげ	〃	溝30最上層	5.5	8.9	
5	〃—5	〃	下顎	〃	溝33	7.1	15.4	



第188図 鬼 瓦

軒瓦の年代

菱木下遺跡の軒瓦は、おおよそ11世紀から13ないしは14世紀のものと考えている。大阪府におけるこの時期の軒瓦の年代については未だ不明確な点が多く、その編年は未だ確立していない。当遺跡の軒瓦も、13～15世紀代の遺構から出土しており、共伴遺物から軒瓦の年代を推定することが困難である。

幸い上原真人氏の労作「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14、1978）に11・12世紀の軒瓦の詳細な研究がなされており、ここでは大阪府の瓦がとりあげられていないとはいえ、大いに参考にすることができる。

上原氏の労作では、中央官衙系の軒平瓦をⅠ～Ⅴ期に分け、11世紀前半・後半、12世紀前葉・中葉・後葉と年代を与えている。菱木下遺跡出土の軒平瓦も、この年代観を援用するものとする。

当遺跡で量的に多く出土している軒平瓦は、２類と３類の均斉唐草文軒平瓦で、ついでそれより後出する連珠文軒平瓦の一群である。

２類は顎幅の広い２ａ類とやや狭い２ｂ類の２種がある。両者は笵傷より同笵と確認できる。

顎部に幅をもち、顎部を斜めに整形する点で、上原氏の中央官衙系軒平瓦Ⅱ期・11世紀後半に比定できる。今のところ、この瓦を釈尊寺創建時の瓦と考えている。3類はすべて顎がはずれている。これは平瓦の凸面に別粘土をあてて顎部をつくり、瓦当面としたものである。この技法は上原氏のⅢ期・12世紀前葉の技法である。

8～11類の連珠文軒平瓦については、未だ年代を確定できない。連珠文軒平瓦は最古のものは12世紀代には出現しているが、菱木下遺跡の連珠文軒平瓦の初現については確定することができない。これらの軒平瓦は14・15世紀の遺構より出土しているので、その製作はそれよりややさかのぼる。

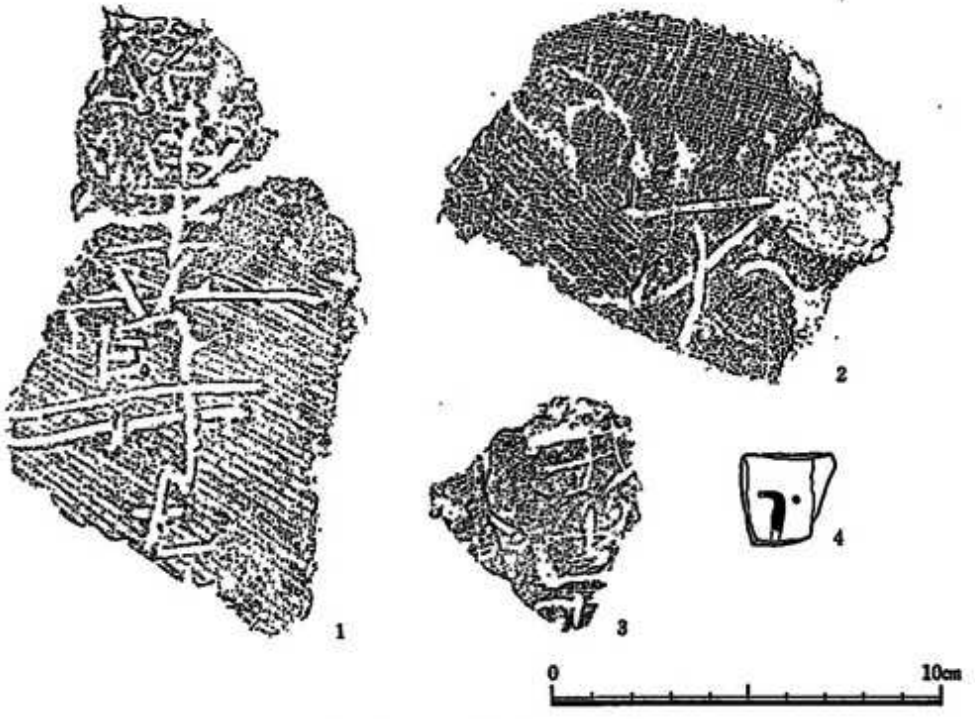
軒丸瓦の年代については、軒平瓦より更に不明な点が多い。蓮華文軒丸瓦は、1類1点のみが古相だが、2類から8類までは平安後期に各地でみられるタイプである。量的には3類8点、5類10点であり、どちらかが創建時の軒丸瓦であろう。

9類の火炎宝珠文軒丸瓦は瓦当面がほぼ完存するが、14世紀後半に埋没した井戸15より1点出土したのみで時期不明。10類の宝塔文軒丸瓦は平安後期である。

これらの軒丸瓦群につづいて11～22類に分けた三ツ巴文軒丸瓦が出現する。三ツ巴文は種類が多く、ひとつの類で数量が多いものがない。三ツ巴文軒丸瓦は連珠文軒平瓦と組み合わせになると考えられるが、その初現と終末に関しては確定できない。

文字瓦と墨書土器　（第189図；図版210）

ヘラ描きの文字瓦が3点、墨書土器1点、墨書磁器1点が出土した。



第189図　ヘラ描き瓦・墨書土器

第189図1は凹面に「釋尊寺」と読める。Ⅱ W区R48第3層より出土。第Ⅱ調査区から万崎池遺跡第Ⅰ調査区にかけて「釈尊寺」の小字名が残っていることから、同名の寺がこの地にあったことを示す遺物である。「釋」の字の上端に面取りがあるが三方が欠ける。

2は凹面に「不」の1字がある。第185図6の軒平瓦の凹面に記す。「不」字の上端が瓦当面である。三方が欠け、「不」字の第一画の左側に別字の一画にみえる直線があるが、字であるかどうか不明。Ⅱ W区高台の上面礫群1下の整地層より出土。

3は凸面に「我寺」と読める（水野正好氏御教示）。更に左側に字画が2つあるが、字の表面がナデられていて読めない。「我」字の上方に面取りがあり、三方が欠ける。3の文字は、1・2の文字より小さい。ヘラ描き瓦に時々みられる願文であろう。大落ち込み8出土。

4は土師質の皿の外底面に墨書したもので、四方が欠けていて判読できない。墨書土器はこの1点だけである。Ⅱ W区井戸7下層より出土。

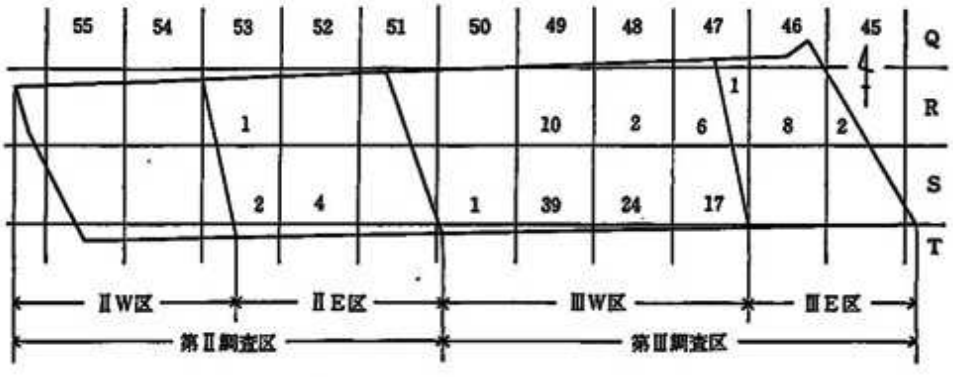
墨書磁器は中国製青磁皿（第182図8）の高台内に記号「ム」が書かれている。Ⅱ W区井戸16の中層より出土。

塼（第190図、第44表）　多量の瓦と共に瓦質の塼も 117点出土した。すべて破片で全体を知ることのできるものはなかった。

塼の出土地区の分布（第190図）をみると、Ⅱ W区なし、Ⅱ E区7点、Ⅱ W区99点、Ⅱ E区11点と、圧倒的にⅡ W区に多く、ついでⅡ E区に多い。遺構の項で述べたように、地区別の瓦の出土量と、塼の出土量は良く似た状況を示し、第Ⅱ調査区が寺域であったことを示している。

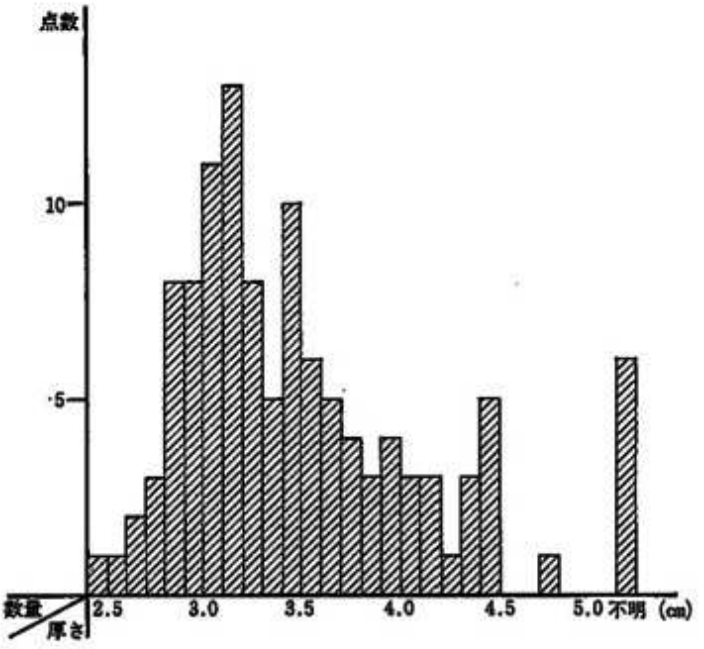
それでは塼使用の建物が第Ⅱ調査区内であったであろうか。答は否である。丸瓦・平瓦の出土数11,406点に比べて、塼の出土量 117点とはるかに少ない。塼の四隅の数（四隅がひとつ残っている塼は1、ふたつ残っている塼は2と数える）は合計33であり、これらの破片を床に敷いても8～9枚分程度が覆われるにすぎない。よって第Ⅱ調査区外（おそらく南方）に塼使用の建物が想定できる。

また塼は厚さにバラエティーがある。塼の厚さ別数量を第44表に示した。厚さは最肥厚部を計測したが、2.4cmから5.2cmと、最も薄いものと最も厚いものとでは2倍以上の開きがある。よっ



第190図　塼　分　布　図

第44表　塼の厚さ別数量図

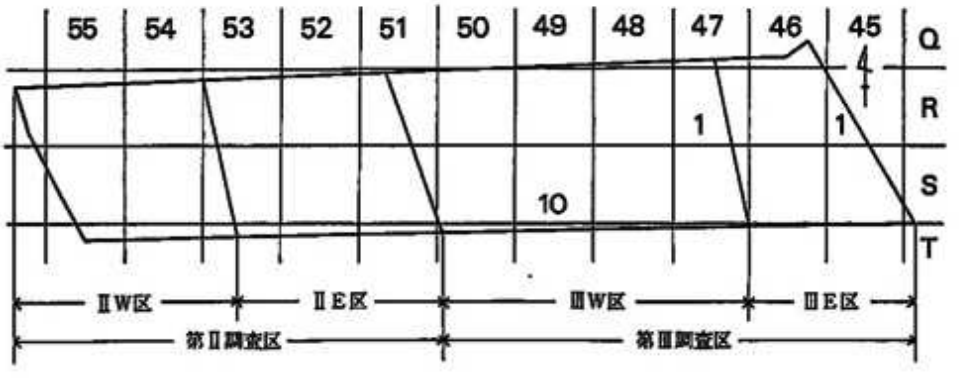


て塼は、時期或は建物によって異なる塼が使用されたと判断される。

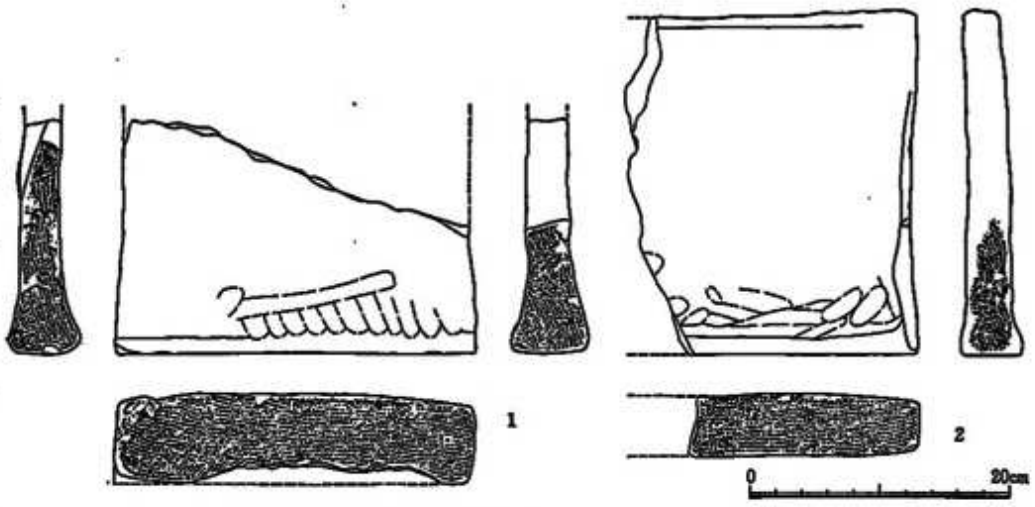
土製品

板状土製品（第191・192図；図版205）　方形で塼の形をしているが、一方の端が肥厚しているので板状土製品とした。表面は指ナデ調整をしており、特に肥厚部の表裏ともに指ナデの痕跡が明瞭に残る。側面は三方に細い格子叩きを施す。肥厚部と反対側の側面のみ叩き目がない。

全部で12点出土しているが、うち11点はⅢW区高台に集中し（第191図）、12～15世紀の瓦・塼・土器類と共に出土している。この遺物が出土する遺構で最も古いのは井戸11で、第192図に示した2点である。井戸11は14世紀に埋没しているので、それ以前に製作されたものと考えられる。その形状は塼に類似し、また高台からは瓦塼が多量に出土している（第190図）ことから、この板状土製品も塼の一種かと思われるが、今のところ用途を確定できない。



第191図　板状土製品分布図



第192図 板 状 土 製 品

1は肥厚部幅27.6cm、中央幅26.6cm、肥厚部厚7cm、中央厚3cm、2は長さ26.2cm、肥厚部厚4.7cm、中央厚3.1cmである。完形品がなく、1と2も多少寸法が異なるが、全体として長さ・幅が26～27cmのほぼ正方形であったと思われる。

五輪塔 （第193図；図版210）

ⅡW区井戸2より五輪塔の頭部が1点出土した。空輪と風輪を共彫りにしたもので、下端に火輪に差し込む枘が造り出されている。空輪と風輪の境は溝状に彫り込んで区別し、空輪の頂部には突起がある。灰黄色をした流紋岩質溶結凝灰岩（奥田尚氏御教示）でややもろい。一部破損しているが、文字はない。空輪最大径17cm、風輪最大径18cm、高さ27cmである。

なお調査区域内では、他に石塔と思われるものは出土していない。

第193図 五 輪 塔

金属製品 （第195図；図版211、第45・46表）

中世の金属製品は貨幣を除けば51点出土した。鉄釘が最も多く25点出土したほか、鉄片7、銹化して鉄塊になったもの14、小柄1、小刀1、針1、鉄ノミ1、有段方柱状の鉄器1である。

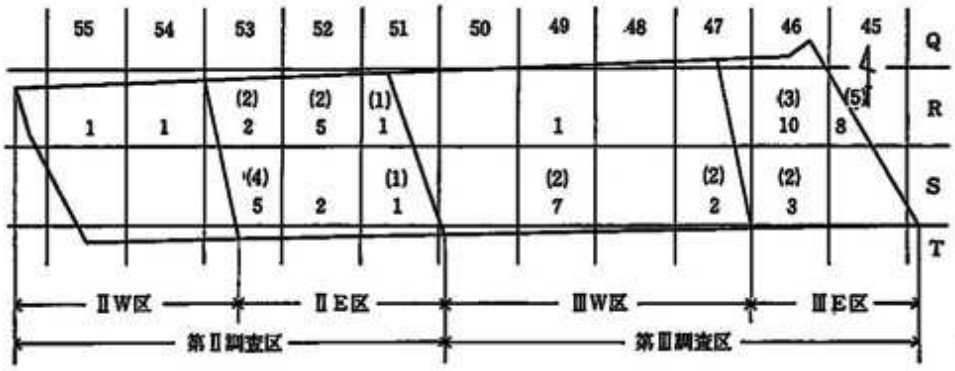
第195図1は先端が身部よりやや幅広く、側面からみると刃先が鋭利なのでノミとした。断面方形である。2～10は鉄釘で長さ・太さに大小がある。いずれも断面方形で、基部の一端を折り曲げて頭部を作り出している。2は頭部が折損しているものと思われる。11は釘のように断面方形をなすが、両側面に段がある点で釘と異なっている。12は銅鞘の中に入ったまま折損した小柄

第45表　金属器出土の遺構・包含層一覧表

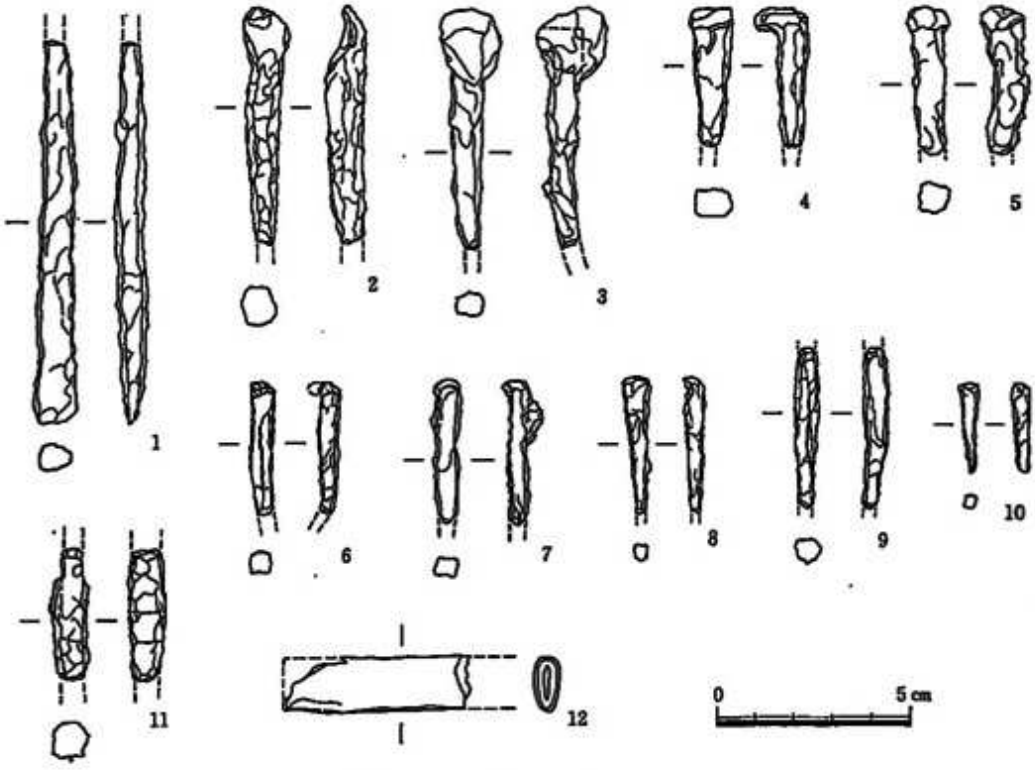
遺構名	地区名		釘	鉄片	鉄塊	その他	遺構名	地区名		釘	鉄片	鉄塊	その他
井戸 39	ⅡW	S53	1				Pit 42	ⅡE	R53	2			
〃 3	ⅡE	R52	1				〃 195	〃	S53	1			
〃 7	ⅢW	R49		1			〃 267	〃	R52	1			
溝 22	ⅡE	S53	1				〃 205	ⅢE	S46	1			
〃 25	〃			1	1		うね跡	〃	S46	1			
〃 37	ⅢE	R46			2	有段方柱状1	包含層5層	ⅡW	R55		1		
大落ち込み7	〃	〃			4		3層	〃	R54		1		
溝 38	〃	R45		1			〃	ⅡE	R52			1	
土壙 57	ⅡE	S53	1				3層	〃	R51	1			
現代攪乱	〃	R52				針1	4層	〃	S51				鉄ノミ1
土壙 72	ⅢW	R49	1				3・4層	ⅢW	R51	1			銅鞘付小柄1
大落ち込み6	ⅡE	S52			1		3層	ⅢE	S47	1			
〃 8	ⅢE	R45	3				3層中層	〃	〃	1			
〃	〃	R46	1		1		3層下層	〃	R46		1		
〃	〃	R47	1				〃	〃	S46	3			
礫群1 上	ⅢW	S49			1	小刀1	〃	〃	R45	1		1	
〃 下		〃	1	1	2		合計			25	7	14	5

第46表　金属器一覧表

図番号	図版番号	種類	出土地点		遺構名	層位	長さcm	最大幅cm	重さg	備考
195—1	211下—1	鉄ノミ	ⅡE	S51	包含層	4層	(9.80)	1.10	(14.2)	厚さ0.81cm
2	〃 —7	鉄釘	ⅢE	R46	〃	3層	(6.10)	1.20	(10.5)	
3		〃	〃	R45	大落ち込み8	下層	(5.60)	1.10		
4	211下—8	〃	ⅡE	R51	包含層	3層	(3.54)	0.96	(6.0)	
5	〃 —9	〃	ⅢE	R46	〃	3層下層	(3.80)	0.88	(4.0)	
6	〃 —4	〃	〃	S46	〃	〃	(3.40)	0.62	(3.0)	
7	〃 —10	〃	〃	R45	大落ち込み8	上層	(3.70)	0.70	(2.5)	
8	〃 —3	〃	〃	〃	包含層	3層下層	(3.49)	0.65	(1.5)	
9	〃 —5	〃	〃	S47	〃	3層	(4.12)	0.69	(3.5)	
10	〃 —2		〃	S46	Pit 205		2.28	0.50		
11	〃 —6	不明	〃	R46	溝		(3.38)	0.98	(4.2)	途中に段あり
12	211上—4	銅鞘付き小柄	ⅢW	R51	包含層	4層	(4.90)	1.40	(11.2)	厚さ0.68cm



第194図 鉄 製 品 分 布 図　　（ ）は釘出土量

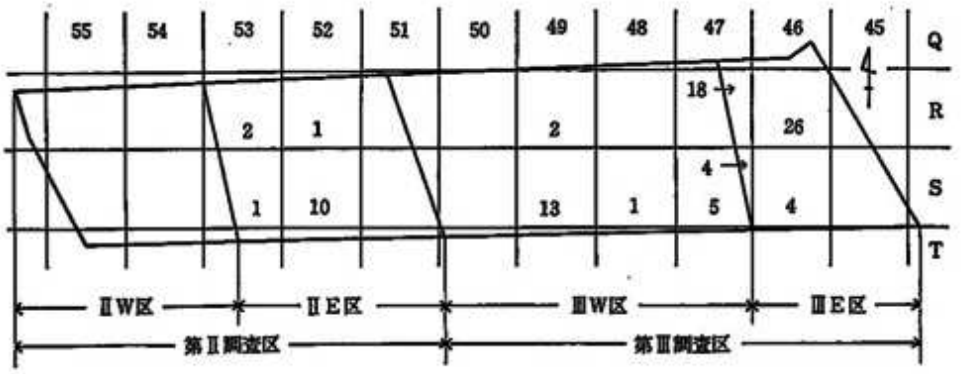


第195図 中 世 金 属 製 品

で、時期はやや下るが同タイプの小柄が姫路市御着城址より木鞘の外側に装着された状態で出土している。図示しなかったが針は残存長5.31cm、断面方形で幅2.2～2.7mmの小型のものである。用途の判明している鉄製品はいずれも鍛造品である。

鉄滓と窯壁　（第196図、第47表）

鉄滓は85点出土した。総重量5518.5gである。最大のものは長径12.96cm、短径10.35cm、厚さ7.64cmで重量 793.6gある。鉄滓は生成固化した当初の状態を完全に保っているものはないが、底面が浅い塊状で平面形が円形を呈する塊形の鉄滓が19点出土している。



第196図 鉄 滓 分 布 図

精錬ないしは鍛冶に使用した炉跡は発見されていないが、窯壁の小片がⅢW区溝35、窯壁と思われる焼土塊がⅢE区の大落ち込み8より多数出土している。これらの窯壁がすぐ精錬・鍛冶炉のものとは断定できないが、鞴の羽口も1点出土しており、遺跡内のいずれかで精錬ないしは鍛冶を行っていたことは確実である。

鉄滓の生成には年代差がある。ⅡE区の出土遺構は井戸5・溝22・25など14世紀後半に埋没しており、ⅢW区は井戸11が14世紀の他は礫群1の上・下より出土している。礫群の伴出遺物は15世紀のものが多い。ⅢE区では大落ち込み7・8から38点と多量に出土している。大落ち込み7は15世紀末から16世紀前半、大落ち込み8は16世紀に掘られるが上層には江戸時代の遺物も含ま

第47表 鉄滓出土の遺構・包含層一覧表

遺構名	地区名		鉄滓数	備考	遺構名	地区名		鉄滓数	備考
井戸 5	ⅡE	S52	2	椀形 1	大落ち込み 8	〃	R47	3	椀形 3
〃 11	ⅢW	S49	1	〃 1	〃 〃	〃	R46	7 } 12	〃 2
〃 18	ⅢE	S47	1		〃 8 壁溝	〃	R47	2	
溝 22	ⅡE	R53	1		礫群 1	ⅢW	S49	10	椀形 7
〃 25	〃	S52	6		礫群1下整地層	〃	〃	1	椀形 1
〃 35	ⅢW	S47	2		Pit 302	ⅡE	R53	1	
〃	ⅢE	R47	1		〃 129	〃	S53	1	椀形 1
〃	〃	S47	2		〃 12	ⅢW	S49	1	
〃	〃	〃	1		うね跡 2	ⅢE	R46	2	
〃 37	〃	R46	1		池 3	ⅢW	R49	1	椀形 1
土壙 68	ⅡE	R53	1		包含層 1層	〃	〃	1	
〃 61	〃	R52	1		〃 3層	〃	S48	1	椀形 1
大落ち込み 7	〃	S52	2		〃 3層	ⅢE	R46 〃	1 1	
〃 〃	ⅢE	R47	12 } 26		〃 2層	〃	S46	4	椀形 1
〃 〃	〃	R46	14		合計			85	19

れる。二つの大落ち込みからはやはり14・15世紀の遺物が多量に出土する。今回の調査では明確に13世紀以前とされる遺構からは出土していない。よってこれらの鉄滓の年代は13世紀以前のものもあると思われるが、多くはⅡE区のものが14世紀、ⅢW・ⅢE区のものが14～15世紀のものと判断される。

羽口・土錘・柱状土製品　（第197図）

鞴の羽口が数点、土錘が１点、柱状土製品が１点出土した。

２は羽口で基部を欠損し、残存長10cm、最大径4.1cm、孔径2.4cm。全体に面取りを７面行っているが、幅は一定せず、稜線もにぶい。先端は熱変化をほとんど受けていない。高台礫群２上から出土。羽口はその他細片が数点出土しており、鉄滓（鍛冶滓）も出土していることから、周辺で小鍛冶を行っていたことは確実である。

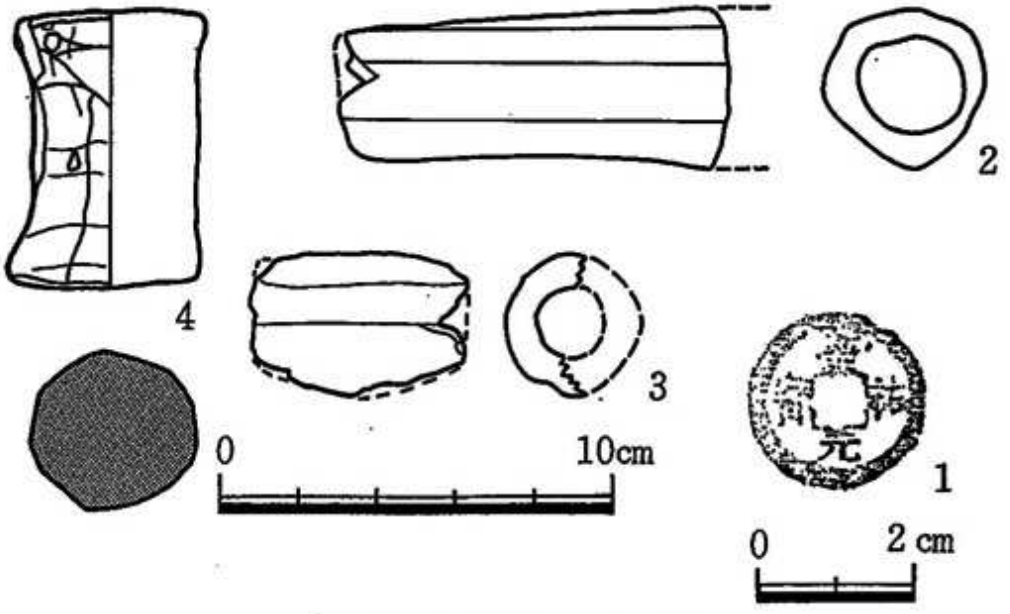
３は土錘で半分に割れている。長さ5.5cm、径3.7cm、孔径１cmで、ⅢW区小丘より出土した。菱木下遺跡では土錘は少なく、中世遺物で確認できたのは１点にすぎない。

４は柱状の土製品で、完形品である。長さ７cm、最大径５cmで円柱状をなす。全体を手づくねで成形し、両端は叩いて平坦面をつくる。色調は半分灰色・半分黄褐色で焼成は良好。高台上の16世紀の包含層より出土。用途は不明だが、中世でも後半の遺跡で時々出土する。

貨銭　（第197図１）

中国北宋の嘉祐元寶が中世の屋敷地内にあるⅡE区土壙52から１点出土した。嘉祐元寶の初鋳は嘉祐元（1056）年である。「嘉」字が磨滅し、表側にやや曲がり、外縁に傷が１ヶ所ある。かなり使用期間の長かったことを示す。直径2.36cm、内径0.6cm、厚さ1.8mm。

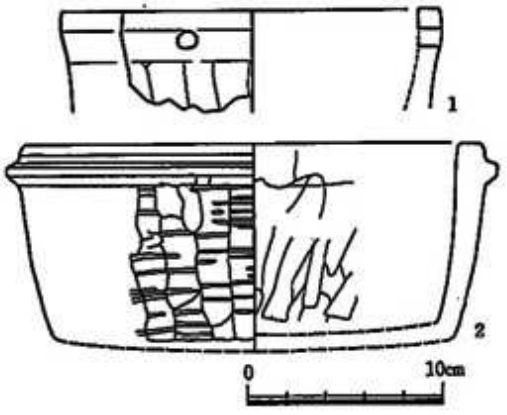
滑石製石鍋と転用品　（第198図；図版212、第48表）



第197図　貨銭・鞴羽口・土錘・柱状土製品

第48表 滑 石 製 品 一 覧 表

図番号	図版番号	器 種	調査区		遺 構	法 量 cm	成 形 ・ 調 整
198—2	212—2	石 鍋	ⅢW	R47	包含層3層	口径23.2、最大径24.9、残存高10	口縁横ケズリ、鍔つき、胴縦ケズリ
1	〃 —3	石鍋転用品	〃	R49	小 丘	長5.6、幅5.1、復原口径19.6	長方形、口縁部と2辺を磨る
		〃	〃	〃	〃	長5.5、幅5.5	不整方形、2辺を磨る
		〃	ⅡW	S54	包含層3層	長9.3、幅3	菱形、両面と1辺を磨る



第198図 滑 石 製 石 鍋

滑石製石鍋片は合計4点出土。全形のわかるものは1点だけである。第198図2は上部に鍔部を削り出し、内外面共縦方向のケズリ痕が明瞭に残る。その後、外面は横方向の調整をしており、短い沈線が多数残る。内面は若干ヨコミガキを加える。底部は体部からわずかに屈曲する部分しかないが平底になると思われる。

他の3点は石鍋片を再加工したものである。2は口縁部の破片で、両側の破断面が平滑になっている。中央に1孔あくが、この孔が当初からのものか、再加工後のものかわからない。石鍋の当初の器形は口縁がやや外側にふくらみ、横ケズリである。鍔はなく、孔の下から縦ケズリ痕が明瞭に残る。

図示しなかった他の2片は、ひとつが直交する2辺が平滑で、他の2辺に打ちかかれた不整方形。平滑面のひとつは、石鍋片に切り込みを入れて磨り切ったもので、途中まで切り込みを入れたあと、折り取っている。もうひとつは菱形で、表裏を平坦に磨り、1辺がかなり磨り込まれている。この破片だけは砥石への転用と思われる。方形に磨り切っている前述の2片は用途不明。

石鍋自体は中世のものだが、出土遺構・包含層は江戸時代以降なので、加工時期の正確な判定はできない。

石製品

砥石（第199図） 中世の砥石は14点出土。ⅡE区3点、ⅢW区7点、ⅢE区4点で、ⅡW区からは出土していない。特にⅢW区の49列に多く、R49・S49の二区画から5点出土した。砥石はいずれも破損品で、ほぼ完形に近いもの（第199図7）も片面3分の1ほどが剝離している。

形は直方体が7点と最も多く、小片の2点も材質から直方体と考えると9点になる。偏平なものが3点あり、1点は直方形（3）、他の2点は不整形な河原石を利用したものである。残りのひとつは断面五角形で、一面だけ幅広く船底形をしている。

磨耗面は、直方体では表裏と両側面の4面使用が5点、表裏2面使用が1点、表の1面使用が1点、全体が不明3点である。良く磨耗しているものが多いが、直方体は6面あるうちの端部の

第49表 中世砥石一覧表

図番号	調査区		遺構	長さcm	幅cm	高さcm	重量g	備考
199—3	ⅢW	R49	小丘	(10.0)	3.2	1.7	104.7	長方形の半分ほど残存、表裏使用
4	ⅡE	S52	溝 25	(5.8)	5.1	2.6	107.4	長方形の片端、表裏と両側面使用
5	ⅢW	R49	井戸 7	5.9	(5.5)	3.4	106.7	長方形の片端、表裏と両側面使用
6	〃	S49	溝30最上層	(3.9)	(3.9)	(1.6)	33.5	小片、片面使用
7	〃	〃	包含層2層	16.4	4.7	4.0	495.0	ほぼ完形か、表裏を使用
	ⅡE	S52	井戸 5	(8.4)	(6.2)	2.8	205.5	幅広の偏平な方形の一隅、表裏使用
	ⅢW	R49	井戸 8	(7.5)	3.9	3.2	138.7	長方形の片端、表裏と両側面使用
	〃	S49	溝 30	(6.9)	5.0	2.1	80.6	船底形で断面五角形の片端、3面使用
	〃	S48	溝 31	(9.8)	(7.8)	1.5	149.8	幅広の偏平形、両面使用
	ⅢE	R45	溝 38	(5.5)	5.9	2.3	79.2	長方形の中央、表裏と両側面使用
	ⅢE	R47	大落ち込み8	(3.2)	(2.6)	(0.7)	9.8	小片、側面使用
	ⅡE	S53	包含層3層	(6.2)	3.3	(0.8)	24.0	長方形、中央、片面剝離、片面使用
	ⅢE	R46	〃 〃	(6.3)	4.8	4.2	166.7	長方形の中央、表裏と両側面使用
	〃	〃	〃 〃	(3.9)	(3.4)	3.0	29.9	長方形の一隅、表のみ使用

2面は使用していない。偏平形の砥石は表裏の2面だけ、五角形の砥石は三面使用である。

出土した遺構の時期は13～15世紀で、11・12世紀の遺構のあるⅡW区からは砥石が出土していない。そうした点からみると、ほぼ13～15世紀の遺物と考えてよいだろう。

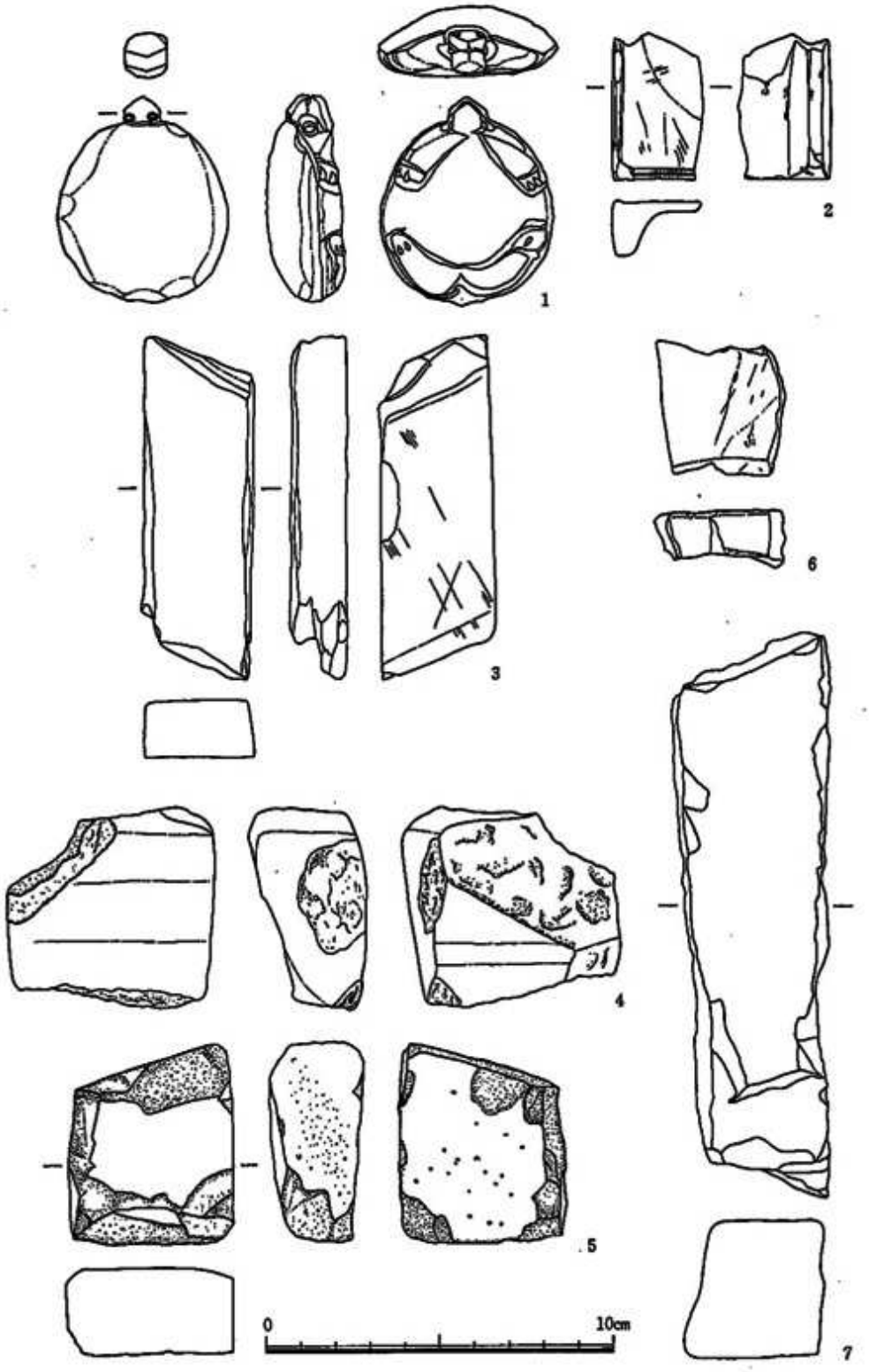
硯（第199図2；図版212—4） 1点だけⅢE区R46の3層より出土した。左下隅の破片で、現存長4.3cm、現存幅2.6cm、器高は1.6cmで、小型品である。上面の縁は1mmと極めて低く、裏側長側面に逆台形の脚がある。上縁の短辺には沈線が入り、これに直交して短い刻み目状の沈線が11本入る。この刻み目は文様というよりは傷痕と思える。残存部右下方に墨を磨った凹みが認められる。

亀形石製品（第199図1；図版212—1） 亀の形態をリアルに彫り出した滑石製品で、完形品である。長さ5.9cm、幅4.8cm、高さ2cm、首を突き出し、両眼と口を線刻する。首には上方の二方向から孔をあけており、紐通しと思われる。甲羅は丸く削り出す。底面は平坦で安定がよく、四肢と短い尾を線刻している。

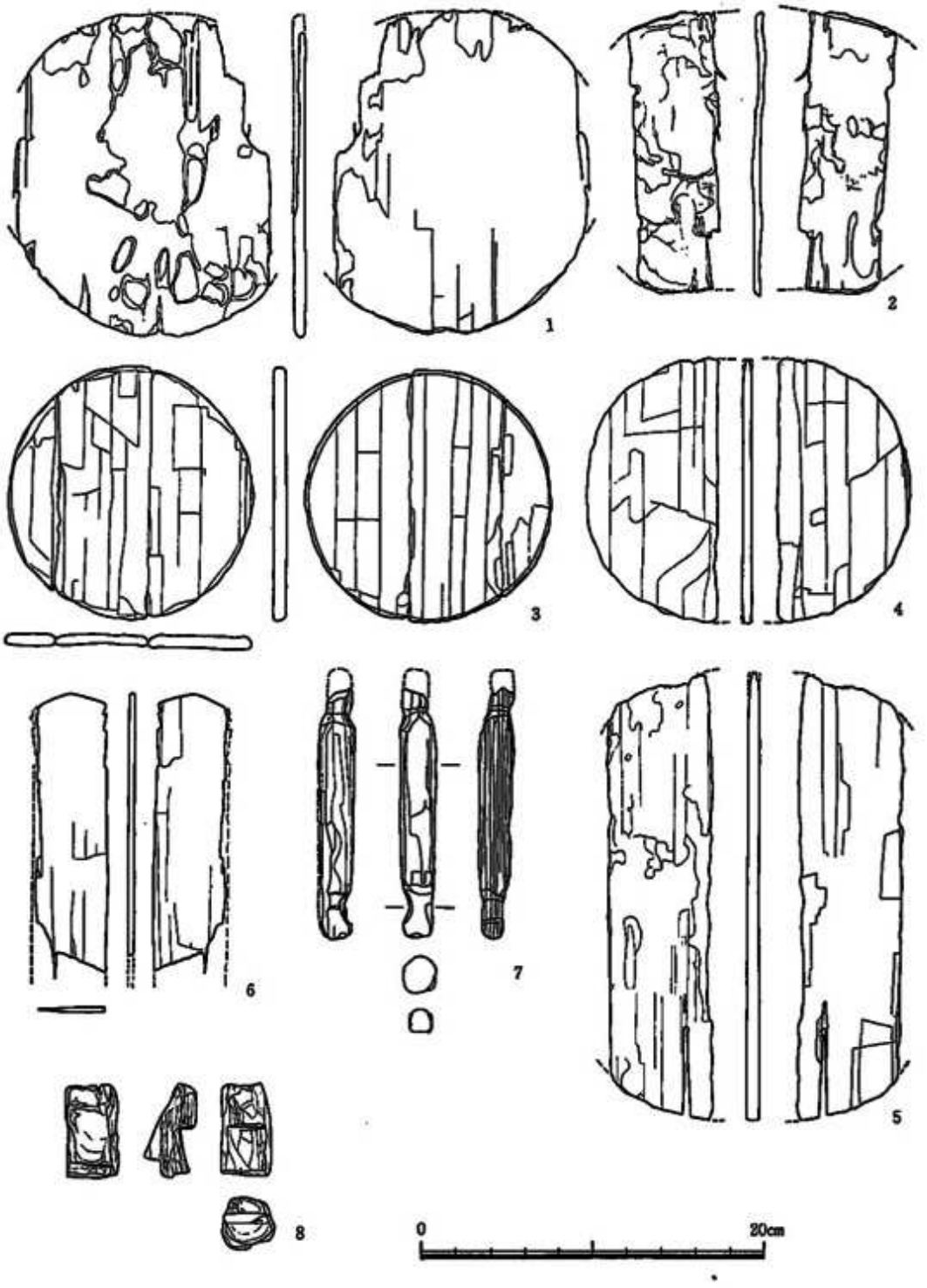
ⅡE区の北家敷地を区画する溝37の下層より出土し、14世紀代の遺物と共伴する。首に孔が貫通し、平坦面に置くと安定がよいことから、文鎮と考えている。

木製品 （第200図；図版213）

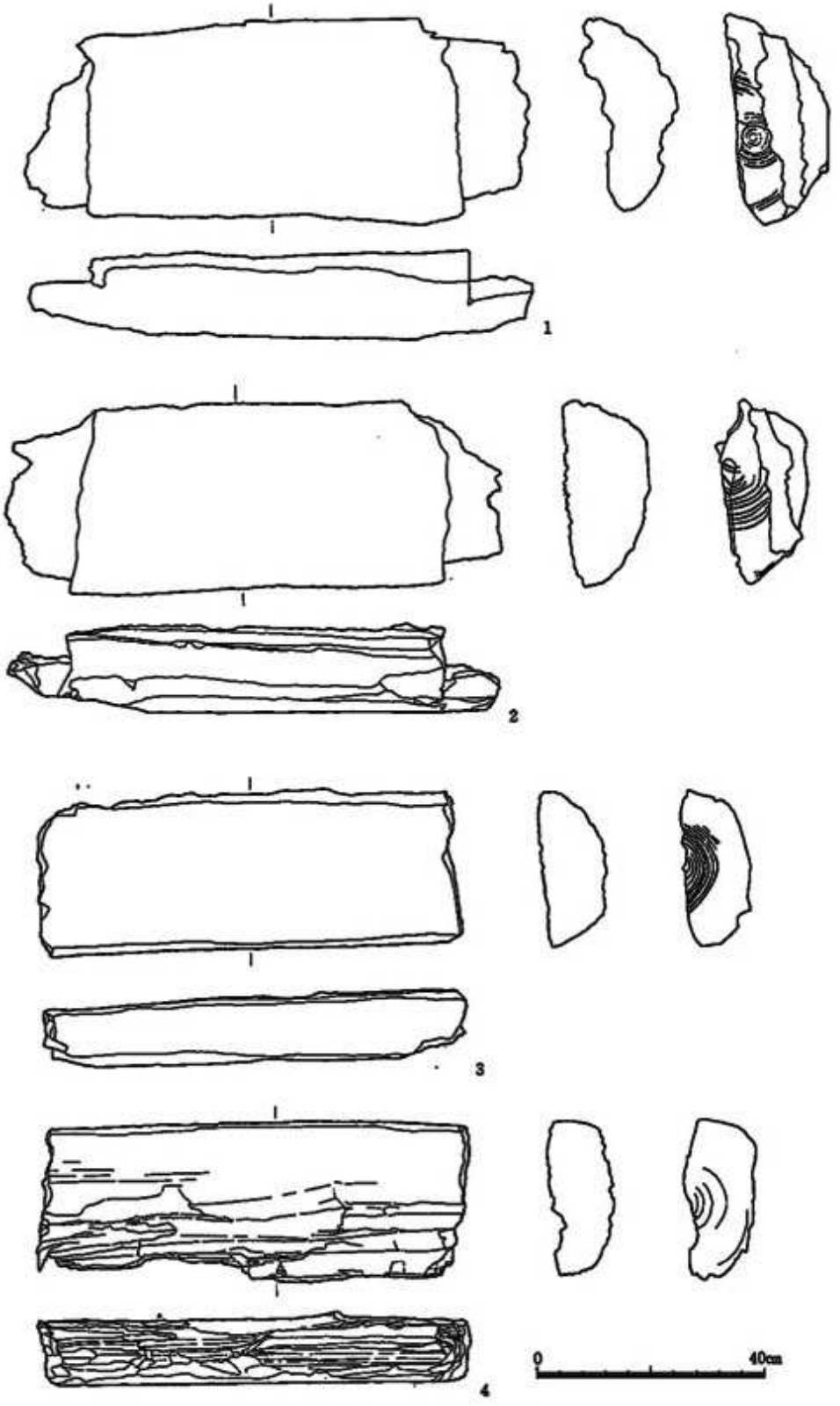
中世の木製品は、井戸が多くあった割には遺存しているものが少ない。曲物の底が比較的多く、大小5点が出土している（第200図1～5）。6は斉串で頭部を三角にし、側面に切り込みを3ヶ所入れている。井戸1の下層より出土している。斉串は祭祀に使用されるもので、井戸底より



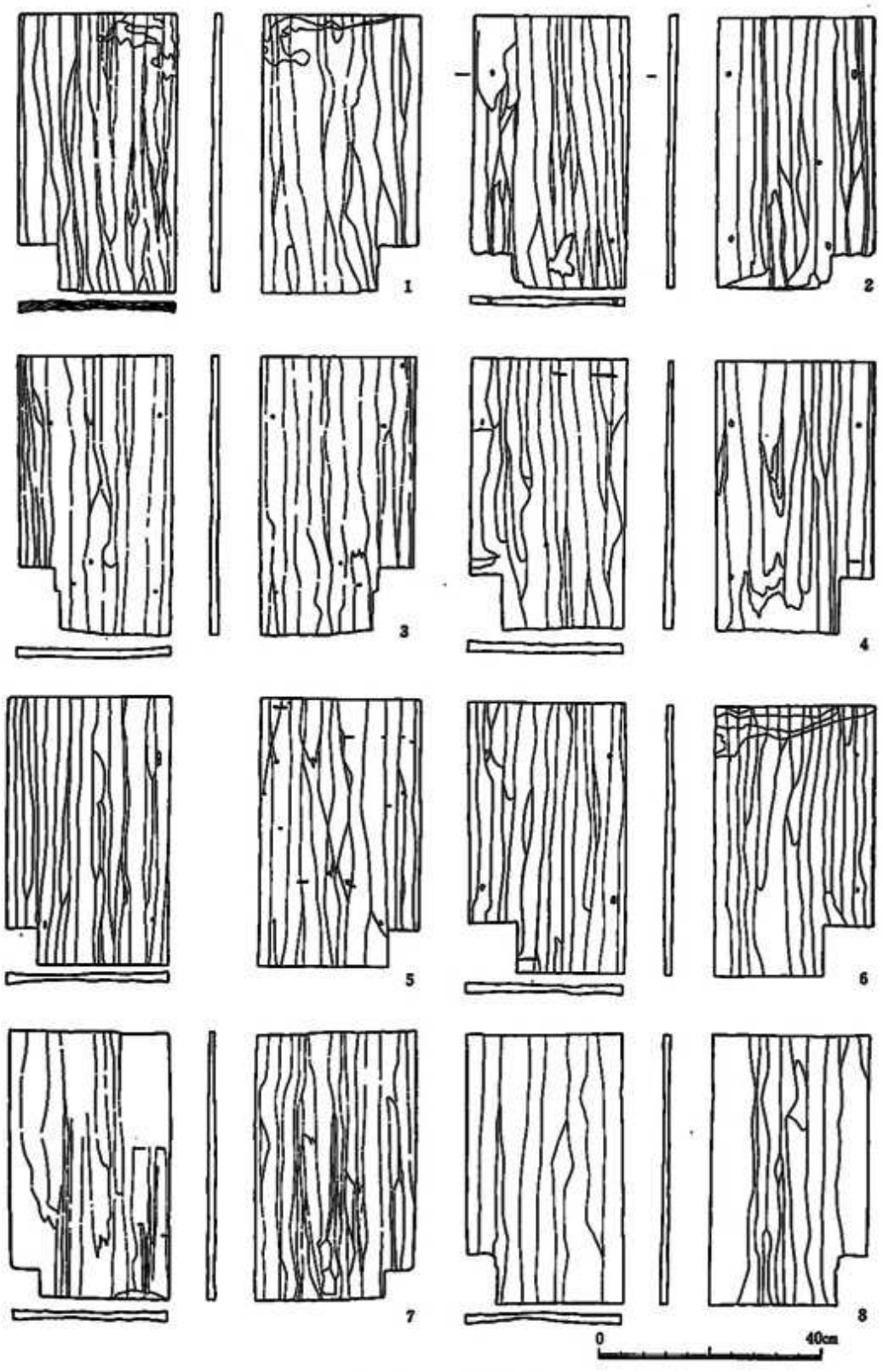
第199図 中 世 石 製 品



第200図 中 世 木 製 品



第201図　ＳＥ６井戸枠材



第202図　ＳＥ13井戸枠材

出土する例が時々あり、井戸を埋める際の祭祀等に使用されたと考えられているが、本遺跡の中世井戸18基のうち、斉串の出土したのはこの1例だけである。7は一端が少し欠損するが、ほぼ全形がわかる。断面方形の両端にくびれ部を削り出す。用途不明。8は完形品で全体を丁寧に削り出している。側面からみると、図の左側を斜めに切り落として、更に下方を削って段を作り、右側は中央部を削り込んで段を作っている。他の器具に嵌め込んで使用したと考えられるが、用途不明である。

この他に漆器椀が井戸11から1点出土している。高台部の細片で、内外面とも黒漆。

井戸枠材（第201・202図；図版214）　井戸の構造物に木材が使用されていた中世の井戸は8例である。井戸6は自然木を半截して、組み合わせ、井戸7と10は桶側を使用、井戸11・12・13は四柱に横桟をわたし、板材で囲い、井戸14は半截した丸太や厚い板材で四角く囲い、井戸18は四柱に横桟をわたし、周囲を細い竹で密に囲っている。

すべての井戸枠材を実測する余裕はなかったので、ここでは比較的全体の残りのよかった井戸6と13の2例の井戸枠材について説明する。

井戸6（第201図；図版214）は自然木を中心軸よりやや片側にずらして半截し、断面半円形の2つの側材としている。大きい側材は両端に鋸で切れ目を入れ、ノミでそぎ落として段をつけている。小さい側材は更に端を切り落として、井戸枠が正方形になるように長さを調節したものと思われる。外側はわずかに削って厚みをへらしているが、枠組時に下側になる部分は樹皮が残っていた。残存最大幅は36cmあり、上側が多少加工ないしは破損しているので、もとの樹木の直径はそれをやや上まわる。かなりの大木である。材質は未鑑定だが、4つの側材とも同材質である。

井戸13（第202図；図版214）は下に8枚、上に12枚の側板が残っていたが、図示したのは下側板である。平均して縦48cm、横28cm、厚さ 2.8cmの長方形の薄い板材である。下方の一隅はL字形に切り落とし井戸底に打ち込み易いようになっている。板の表裏ともに手斧ないしは鑿で削った跡が明瞭に残る。側板は他の構造物からの転用材で、所々に鋸で引いた細長く浅い溝と鉄銹の付着した方孔がある。方孔は釘孔で材の上下に比較的規則的にある。板塀か壁板からの転用かと思われる。

C　まとめにかえて――在地の土器・日本陶器・中国陶磁器の役割

器種別出土量　（第50表1・2）

第50表は中世容器の主要遺構器種別出土量で、第52表は主要遺構の時期別出土量を破片数で示した表である。13・14世紀は破片数の60%前後を瓦器椀が占め、瓦器小皿・土師器小皿がそれぞれ6～7%を占める。即ち土器の飲食具が70%強を占めている。ついで煮沸具である土師質土釜が20%を占める。その他の在地の土器を含めると95%強になる。残りの5%弱を東播系の須恵質陶器、常滑・備前・瀬戸の陶器、そして中国陶磁器となる。即ち日常容器は95%強が在地の製品で、5%弱が日本国内の移入品と中国からの輸入品で補われる。

13・14世紀には、調理具としての在地の鉢はあまりなく、東播系の須恵質ねり鉢が主体となる。国内からは常滑のねり鉢がもたらされ、備前もやや遅れて入ってくる。貯蔵具としての甕も東播系がもたらされるが量は少ない。常滑の甕は更に少ない。14世紀に瓦質甕が生産され始めると、やっと甕の量が増加してくる。

14世紀後葉から15世紀になると、様相は一変する。第50表(2)に15世紀の主要遺構器種別出土量を示した。瓦器椀・瓦器小皿・土師質土釜・東播系の須恵質ねり鉢・甕はほとんど14世紀以前の製品であり、前代の遺物の混入と、15世紀に損壊・廃棄されたものである。それゆえこの比率が実際に使用されていた容器の比率を示すものではない。土師質土釜は瓦質土釜にとってかわられる。瓦質のすり鉢・甕は在地で生産されているため、急速に消費量が伸び、出土率が高まっている。

中国陶磁器の占める量　（第51表）

菱木下遺跡で中国陶磁器が占める量は、0.46%である。『第４回貿易陶磁研究集会発表資料』（1983）によれば、貿易陶磁器の占める割合は、兵庫県福田天神遺跡ＳＤＯ１で（12・13世紀）で2.65%、高槻市上枚遺跡（12世紀）で 1.4%、同市宮田遺跡（12世紀）ではａ区 2.3%、ｄ区 2.9%、３区1.2%である。大阪府下の中世遺跡では例外なく中国陶磁器が出土するが、その比率１～２%代が多く知られている。それらの遺跡に比べて菱木下遺跡は0.46%とより低い点が特徴である。同じ畿村遺跡でも上枚・宮田遺跡は淀川や山陽道沿いにあって、京都への物資の搬入路が近傍を通る。一方菱木下遺跡は大阪湾沿岸を通る熊野街道から石津川を溯行した内陸部にある。こうした物資の流通路との関わりが、商品の流通量を規定するひとつの要因になっているのかもしれない。

集落・寺域における中国陶磁器・日本陶器の出土量の相違　（第 203 ～ 205 図、第51表）

菱木下遺跡は、第Ⅱ調査区が集落、第Ⅲ調査区が釈尊寺の寺域であることは遺構の項で述べた。第Ⅱ調査区が3820.5㎡、第Ⅲ調査区が4691.8㎡である。中国陶磁器の主要遺構出土遺物に占める割合は0.46%、日本陶器の割合が1.5%である。

そこでまず中国陶磁器がどのような出土分布をするかをまとめたのが第 203 図である。第51表にみるように第Ⅱ調査区でも倉庫群のみのⅡＷ区は５点と少なく、屋敷地であるⅡＥ区は86点で47.25%と高い比率を占める。寺域内ではⅢＷ区・ⅢＥ区合計して91点で50%である。ⅢＷ・ⅢＥ区の合計はⅡＥ区だけの出土量とそれほどかわらない。逆にⅡＥ区の面積がより狭いので、面積に対する割合はⅡＥ区の方が高いといえる。このことは、中国陶磁器の所有量が、菱木下遺跡では集落・寺域でそれほど差がなく、むしろ屋敷地の方が多かった可能性を示す。

それでは、常滑・備前・瀬戸など、東播系の須恵質陶器を除く日本陶器の出土分布はどうであろうか。ねり鉢・すり鉢の分布を示したのが第 204 図で、甕の分布を示したのが第 205 図である。地区別出土量は第51表に示した。

鉢類は、ⅢＷ区Ｓ49高台とその周辺に集中的に分布し、第Ⅲ調査区全体で49点出土した。第Ⅱ調査区は12点出土しているが、うち７点は２個体分の破片であり、（第 177 図２・４・７、２と

第50表 主要遺構器種別出土量(1)

遺構	地区	埋没時期	瓦器 埦	瓦器 小皿	土師器 小皿	瓦器 鉢	土師質 土釜	須恵質 ねり鉢	須恵質 甕	瓦質 土釜	瓦質 すり鉢	瓦質 かめ	瓦質 火鉢	その他 不明	陶器ねり・すり鉢	陶器 甕	陶器 その他	中国 碗	中国 皿	中国 その他	計
井戸3	ⅡE	13C	179	9	25	—	79	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	294
合計	〃	〃	179 (60.9)	9 (3.05)	25 (8.5)	—	79 (26.85)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2 (0.7)	—	294 (100.00)
井戸2	ⅡW	14C	4	—	—	—	24	3	—	1	5	—	—	—	—	—	—	2	—	—	39
井戸4	ⅡE	〃	254	22	11	2	141	13	—	—	—	—	—	Ⓚ2	1	3	—	6	—	1	456
井戸5	〃	〃	120	16	23	5	207	19	1	—	—	42	—	Ⓚ1Ⓐ4	5	2	—	3	2	—	450
溝24	〃	〃	21	—	8	—	26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	55
溝25	〃	〃	223	27	64	8	235	12	1	12	—	2	—	Ⓚ5	1	1	1	4	—	3	599
大落ち込み6	〃	〃	870	86	99	1	644	19	3	7	1	25	—	Ⓚ14	1	1	—	13	5	—	1789
小計	Ⅱ区	〃	1492 (44.035)	205 (4.445)	151 (6.045)	16 (0.47)	1277 (37.685)	66 (1.95)	5 (0.15)	20 (0.59)	6 (0.18)	69 (2.04)	— —	Ⓚ22Ⓐ4 (0.77)	8 (0.24)	7 (0.21)	1 (0.03)	28 (0.83)	7 (0.21)	4 (0.12)	3388 (100.00)
井戸6	ⅢW	〃	237	28	8	3	32	15	1	—	—	4	—	Ⓚ1	—	15	—	—	—	—	344
井戸7	〃	〃	30	9	5	—	6	1	—	—	—	26	—	—	—	—	—	—	—	—	77
井戸10	〃	〃	410	32	31	2	48	11	2	—	—	4	—	Ⓚ1	7	—	—	—	—	—	548
井戸11	〃	〃	375	31	30	19	102	10	7	11	—	22	—	Ⓐ1	24	1	1	—	1	1	636
井戸14	〃	〃	201	11	8	—	46	14	—	—	—	4	—	—	16	1	—	—	1	—	302
小計	ⅢW区	〃	1253 (65.71)	111 (5.82)	82 (4.30)	24 (1.26)	234 (12.27)	51 (2.675)	10 (0.52)	11 (0.58)	— —	60 (3.15)	— —	Ⓚ2Ⓐ1 (0.16)	47 (2.465)	17 (0.89)	1 (0.05)	— —	2 (0.10)	1 (0.05)	1907 (100.00)
溝37	ⅢE	〃	1247	149	264	7	334	24	56	7	—	19	—	Ⓚ25	2	—	—	1	—	—	2135
溝38	〃	〃	1349	134	111	18	63	8	20	1	—	5	—	Ⓚ2	—	—	—	—	—	—	1711
小計	ⅢE区	〃	2596 (67.5)	283 (7.36)	375 (9.75)	25 (0.65)	397 (10.3)	32 (0.83)	76 (2.0)	8 (0.21)	—	24 (0.62)	—	Ⓚ27 (0.7)	2 (0.05)	—	—	1 (0.03)	—	—	3846 (100.00)
合計		〃	5341 (58.43)	545 (5.96)	662 (7.24)	65 (0.71)	1908 (20.87)	149 (1.63)	91 (0.995)	39 (0.43)	6 (0.07)	153 (1.675)	— —	Ⓚ51Ⓐ5 (0.61)	57 (0.625)	24 (0.265)	2 (0.02)	29 (0.32)	9 (0.10)	5 (0.05)	9141 (100.00)

須恵質製品は東播系，Ⓚは瓦質、Ⓐは土師質

第50表 主要遺構器種別出土量(2)

遺構名	地区	埋没時期	瓦器 埦	瓦器 小皿	土師器 小皿	瓦器 鉢	土師質 土釜	須恵質 ねり鉢	須恵質 甕	瓦質 土釜	瓦質 すり鉢	瓦質 甕	瓦質 火鉢	その他 不明	陶器 ねり・すり鉢	陶器 甕	陶器 その他	中国 碗	中国 皿	中国 その他	計
井戸 8	◆	15C	168	42	29	4	22	—	—	9	2	—	—	⊗5	1	3	—	—	—	—	285
井戸 12	◆	◆	42	2	2	3	12	2	1	6	—	5	—	—	—	2	—	—	—	—	77
井戸 13	◆	◆	214	15	62	34	51	28	13	23	6	38	9	—	4	24	1	1	—	—	523
井戸 16	◆	◆	1	1	—	—	11	3	—	7	2	4	—	—	3	1	—	—	2	—	35
井戸 17	◆	◆	—	—	1	—	4	—	—	67	48	31	—	⊗1	—	5	—	1	—	—	158
溝 35	◆	◆	30	1	14	8	38	15	8	115	39	48	—	⊗3 ⊜1	—	12	2	1	—	—	335
溝 33	◆	◆	23	—	8	8	8	15	1	104	28	51	—	⊗1	2	4	2	3	—	—	258
溝 31	◆	◆	12	2	7	4	24	13	6	196	88	57	1	⊗4 ⊜1	10	35	1	4	—	—	465
溝30上礫溝	◆	◆	18	1	17	5	65	13	4	169	82	94	—	—	1	3	1	—	—	—	473
溝 30	◆	◆	2	—	5	—	11	1	4	16	8	6	—	—	—	4	—	—	—	—	57
溝 29	◆	◆	74	3	36	22	25	1	9	133	44	54	—	⊗1 ⊜1	1	14	3	1	—	2	424
高台礫群1下	◆	◆	728	42	265	52	451	125	131	187	58	234	—	⊗28	—	—	—	5	2	1	2,309
ⅢW15C合計	／	◆	1,312 (24.3)	109 (2.02)	446 (8.26)	140 (2.59)	722 (13.4)	216 (4.00)	177 (3.29)	1,032 (19.1)	405 (7.5)	622 (11.5)	10 (0.19)	⊗43 ⊜3 (0.85)	22 (0.40)	107 (1.98)	10 (0.19)	16 (0.30)	4 (0.07)	3 (0.06)	5,399 (100.0)

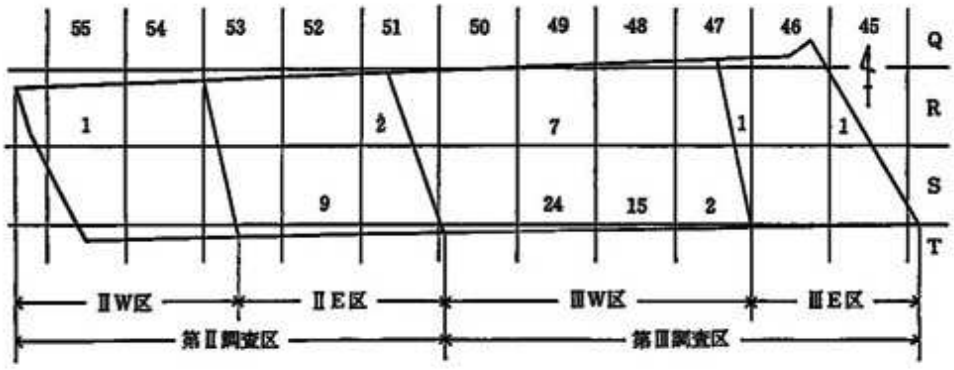
第51表 地区別陶磁器出土量

種類		ⅡW	ⅡE	ⅢW	ⅢE	合計
中国陶磁器	破片数	5	86	55	36	182
	比率	2.75	47.25	30.22	19.78	100.0
瀬戸	破片数	—	3	16	6	25
	比率	—	12.0	64.0	24.0	100.0
鉢	破片数	1	11	48	2	62
	比率	1.61	17.74	77.42	3.23	100.0
甕	破片数	15	30	500	24	569
	比率	2.64	5.27	87.87	4.22	100.0
その他	破片数	—	—	2	—	2

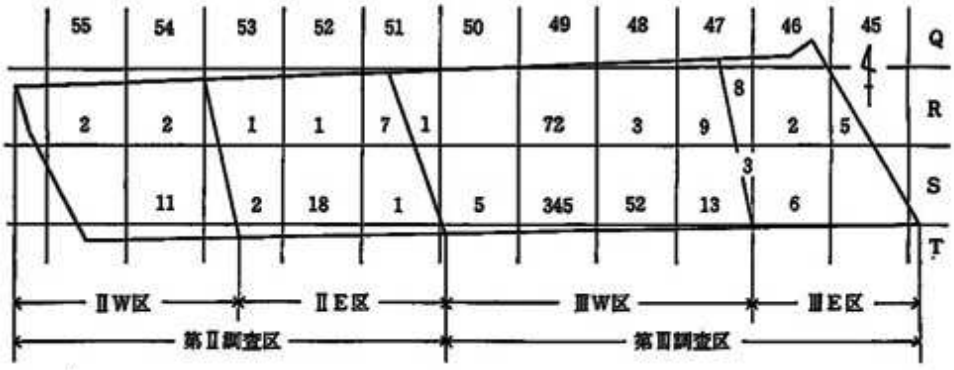
第52表 主要遺構時期別出土量

		瓦器・瓦質	土師	須恵質	日本陶器	中国陶磁器	合計
13世紀	破片数	188	104	—	—	2	294
	比率	63.95	35.37	—	—	0.68	100.00
14世紀	破片数	6,200	2,575	240	83	43	9,141
	比率	67.82	28.17	2.63	0.91	0.47	100.00
15世紀	破片数	3,673	1,171	393	139	23	5,399
	比率	68.03	21.69	7.28	2.57	0.43	100.00
合計	破片数	10,061	3,850	633	222	68	14,834
	比率	67.82	25.95	4.27	1.50	0.46	100.00

第203図　中国陶磁器分布図



第204図　日本陶器ねり鉢・すり鉢分布図



第205図　日本陶器甕分布図

4は同一個体）、1点はⅢW区のねり鉢と接合できた。それゆえ、常滑・備前のねり鉢・すり鉢は集落では少なく、寺域内でより多く所有していたものと判断される。

常滑を主とする甕も同様な分布を示す。総数569点のうち、高台から345片と60%が20m四方の狭い範囲に集中し、ⅢW区全体で500点、87.87%を占める。ⅢE区を含めると524点、92%以上が寺域内から出土している。一方集落ではⅡW・ⅡE区を合計しても45点とかなりの差がある。このことは、おそらく貯蔵用として使用された常滑等の甕は、寺が大部分を所有しており、集落

ではあまり所有されていなかったことを示している。

このように中国陶磁器は、集落・寺域でその出土量に大差がないにもかかわらず、日本陶器のねり鉢・すり鉢と甕は圧倒的に寺域にあることが判明した。しかし寺域内でも、ⅢW区高台とその周辺に集中して出土し、同じ寺域内でもⅢE区では少ない。これは寺域内の限られた場所（建物）で使用されていた可能性を示す。そしてこれらの器種が貯蔵と調理用の器種であることから、主として寺域内の厨房のような場所で使用されていたことを示唆しているのではなかろうか。

5　近世から近代の遺物

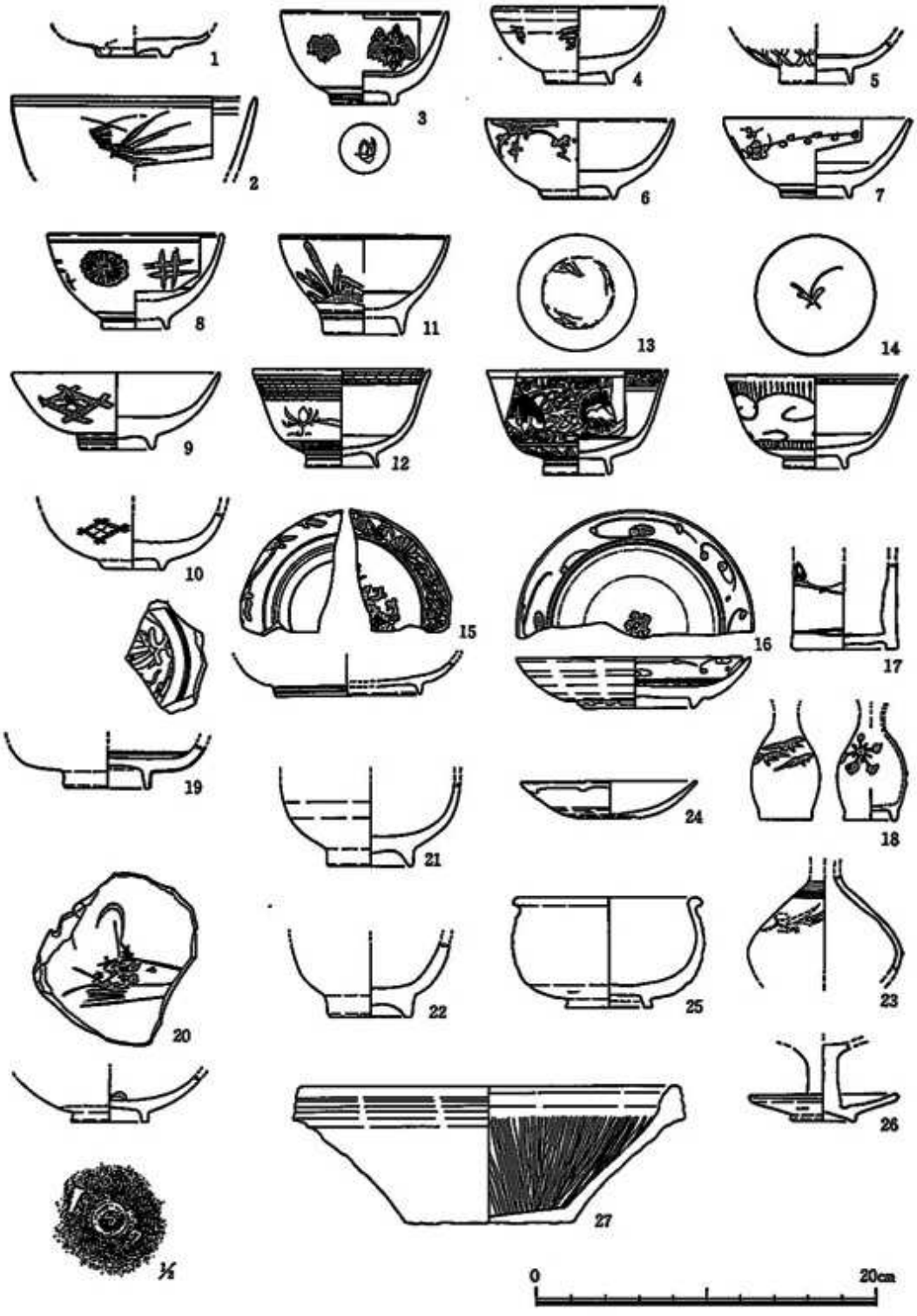
近世陶磁器　（第206図；図版215）

日本製の近世陶磁器は近世～現代までの遺構・包含層からかなりの量がコンテナ3杯出土しているが、ひとつひとつの遺構の出土量はそれほど多くない。井戸・溝・池などに少量投棄されたり流入したりしたものである。調査区は近世を通じて水田と畑であり、家屋が建てられた痕跡がないので、持ち運ばれ投棄された遺物も長い年月の割には少なかったものであろう。またここで出土する近世陶磁器は、大阪の一般の農村で使用されていたものであり、上手の遺物は極めて少ない。近世陶磁器はどこの遺跡でも例外なく出土するが、遺跡出土の近世陶磁器の研究は著しく遅れており、未だに産地の同定や時期の決定のできない遺物が少なくない。

第206図1は唐津焼の小皿である。三個の砂目積の痕が内面に残っており、16世紀末から17世紀前半のものである。この種の唐津焼はより古い共目積の痕を残すものを含めて城址・奉行所跡・堺環濠都市などの遺跡からはかなり多量に出土しているが、一般の農村から出土する量はいずれも少量で、未だ多量に出土した報告を見ない。この種の唐津焼はこの遺跡でもこれ1点だけである。

2～10、15～18は伊万里焼の染付である。2は鳳凰文で比較的上質の鉢である。羽がしっかりとかかれており、17世紀後半に比定される（大橋康二「伊万里染付見込荒磯文碗・鉢に関する若干の考察」『白水』9）。3～10はいわゆるくらわんか手の碗である。他の時期に比べ底部が肉厚なところが特徴で18世紀のものである。図には大阪で一般的に見られる文様のものをあげた。3・8・9・10はコンニャク印判手とよばれ、3が蔦と五三の桐、8は菊と井の字、9・10は井桁文である。4～7は筆描きで、4・6・7は梅、5は二重の網文である。16は見込の釉を蛇の目状にぬぐい、中央にコンニャク印判の五弁花文がある。府下でかなり多く見られ、18世紀のものである。15の皿、17の瓶子、18の仏花器は18～19世紀のものである。

11～14は染付碗で19世紀のものである。19世紀になると染付が兵庫・和歌山・愛知等の近隣の県でも焼造しており、産地を特定することは現段階では困難である。全体に18世紀のくらわんか手碗に比べ底部が薄くなってきている。13は細い線で絵付をする。見込みは松竹梅の文様が簡略化されたものである。瀬戸のかみた第2号窯に類似品がある。14は白磁部分の青味がなく、かなり白くなっており、濃い呉須で絵付をしている。こうした傾向は明治以降の染付に見られるところから、19世紀でもかなり新しいものと思われる。兵庫県東山窯の採集品（姫路市教育委員会保


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
½
0
20cm

第206図 近 世 陶 磁 器

管）に類似品があり、この窯は明治10年代廃窯という。

19は青磁染付で、外側が青磁、見込に染付がある。伊万里焼である。

20は京焼。見込みに荒磯文が描かれ、内底面に「清水」の銘が草書体で押捺されている。同形・同文様の京焼が伊万里でも製造されており、清水の印を押捺するものもある。それゆえ京都産か伊万里産か判別することが現在のところかなりむずかしい。京焼では他に「森」銘のものが1点出土している。

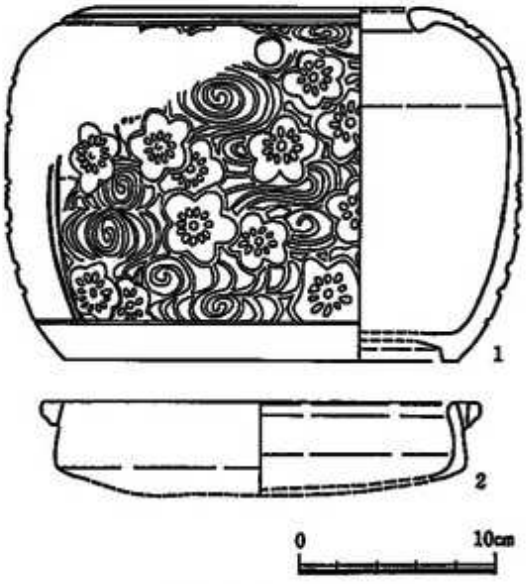
21・22は薄黄色の胎土に黄色の釉を外底面も含めて、全体に施釉する。肥前系である。

23は赤絵の壺、24は灰釉陶器の皿、25は褐釉の台付鉢、26は灰釉陶器の燭台である。いずれも産地が特定できない。27は備前のすり鉢である。

なお近世陶磁器については九州陶磁文化館の大橋康二氏に多大の御教示をえた。

近世土器　（第207図；図版217）

近世土器の出土数は極めて少ない。第207図1の火鉢は、土器といっても瓦質風の焼成で、暗黄橙色を呈す。炭素の吸着はない。口縁は内傾し、孔がひとつある。全体の孔数は不明。上げ底である。口縁直下に2本、底部近くに1本の沈線を施す。その間に縦に2本の沈線を垂下させて、胴部を3～4に区画する。区画内は梅花を散りばめ、渦文を充填している（図版217－1）。2は土師質炮烙である。三日月形の双耳があり、それぞれに孔が貫通する。小破片の為、口径・器高は堺環濠都市遺跡で出土しているものを参考にした。



第207図　近世土器

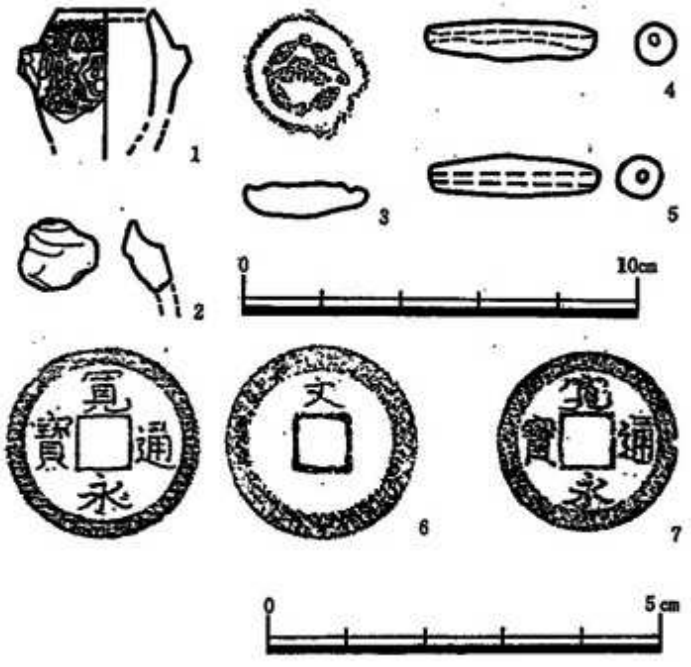
他に図示していないが淡焼大甕底部（底径43.8cm）がある他、全形を復原できる遺物はない。近世土器の正確な個体数は算出していないが、おそらく10個体もないであろう。

土製品　（第208図；図版216、第53表）

近世の土製品はミニチュア土器2点、円形土製品1点、土錘2点が出土した。ミニチュア土器

第53表　近世土製品一覧表

図番号	図版番号	種類	器種	調査区		遺構	法量 cm	成形・調整
208—1	216—3	土師質	ミニチュア土器	ⅢE	S47	近世溝上層	口径2.4、残存高2.9	鉄釜形の型作り、内面ナデ、黄橙色
2		〃	〃	ⅢW	R49	高台3層	残存片2×1.2	型作り、口縁部のみ小片、器形不明
3	216—4	〃	泥面子	ⅢE	R47	包含層2層	径3.2、厚0.8	型作り、花文、橙色
4	〃—1	〃	土錘	ⅢW	R49	小丘	長4.1、径1.2、孔径0.4	手づくね、灰褐色一部橙色
5	〃—2	〃	〃	ⅢE	R46	試掘坑	長4.4、径1.1、孔径0.3	手づくね、橙色一部赤褐色



第208図　近世土製品・貨銭

の1点（第208図1）は型作りの土師質製品である。両側に把手がつき、全体に粒々がある。茶の湯の鉄釜を模したものか。口縁部の残りが悪い為、断面の傾斜角は検討の余地がある。Ⅱ E区の近世道路東側溝より出土。もう一点のミニチュア土器（2）は口縁の細片で器形は不明。円形土製品（3）はいわゆる「泥メンコ」と呼ばれるもので、中央に花文が型押しされている。土錘は土師質の紡錘形のものが2点出土（4・5）。

貨銭　（第208図）

寛永通宝がⅢW区R49の小丘より2点出土した。第208図6は径25.2㎜、孔径6㎜、厚さ 1.2㎜、裏に「文」字がある。7は径23.4㎜、孔径6㎜、厚さ1.1㎜、裏は無文字。

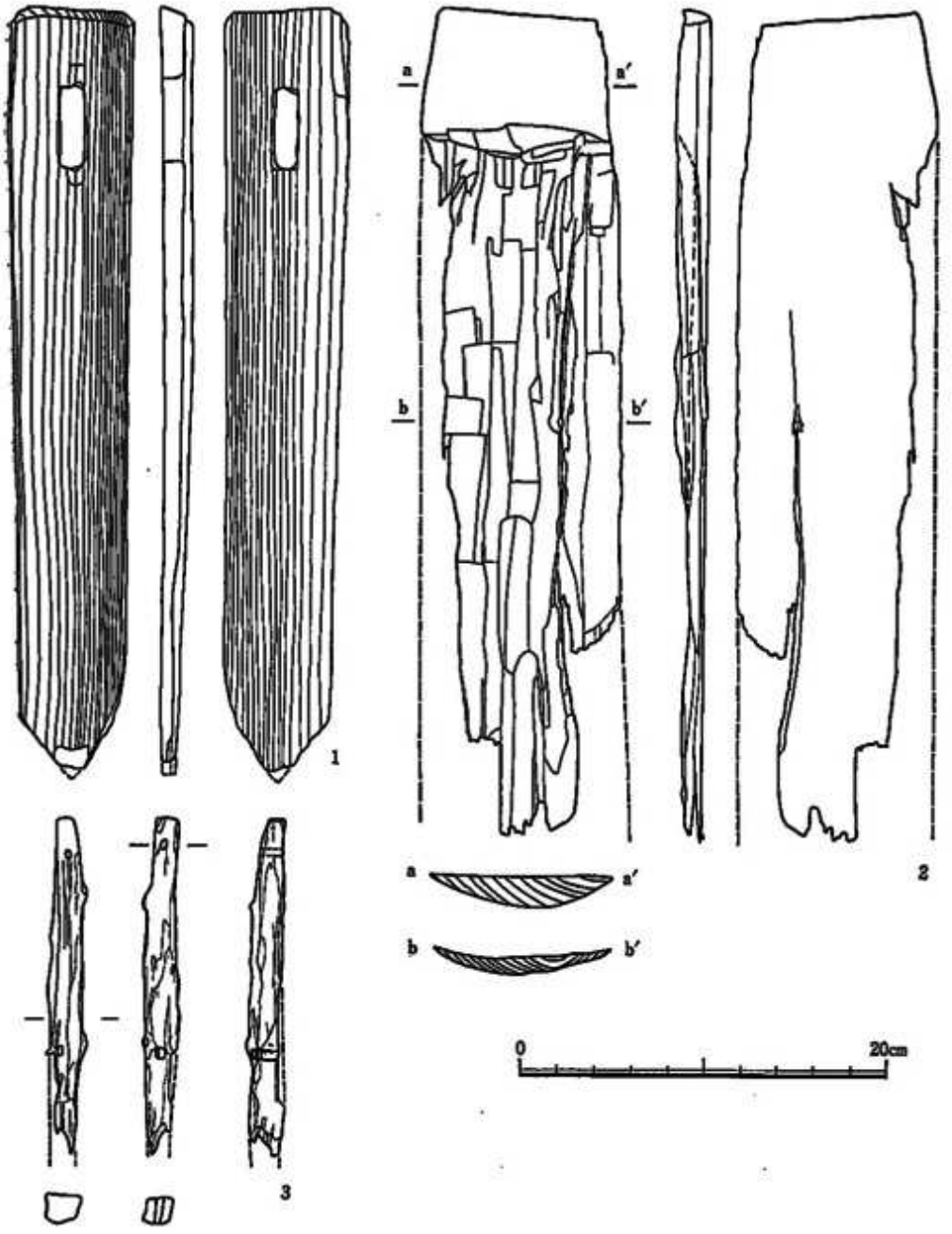
木製品　（第209図；図版216）

近世の木製品は、井戸材を除けば3点出土している。すべて近世の井戸の出土品である。第209図1は桶側のように湾曲しており、上部に長方形の孔がある。水汲み桶の把手と思われる。ただ先端が削られて三角形に尖っており、杭か何かに再利用されている。2は外側を船底状に丸く削り、内側も一端を平坦にして中をくり抜いている。用途不明。1と2は重なって出土した。3は一端を欠損しているが、断面方形の細長い木製品で上部と中部の2ヶ所に孔が貫通する。

井戸枠瓦　（第210図；図版217、第54表）

幕末の井戸43の井戸枠として使用された瓦である。1段6枚で2段めぐっており、上段の1枚が欠けていたので11枚遺存していた。凸面に矢がすり状の叩き目がある。凸面は直接井戸の外周の土と接っするので、叩き目は土の喰い込みを良くし、固定させる為のものと底われる。全体に平滑で、色調は黒色だが焼きむらがかなりあり、部分的に灰白色や黄橙色を呈する。焼成は良好である。寸法はほぼ同一規格で、前幅（叩き目の先が丸くなる方）と後幅の幅も屋根瓦のように一方が狭くなることはない。

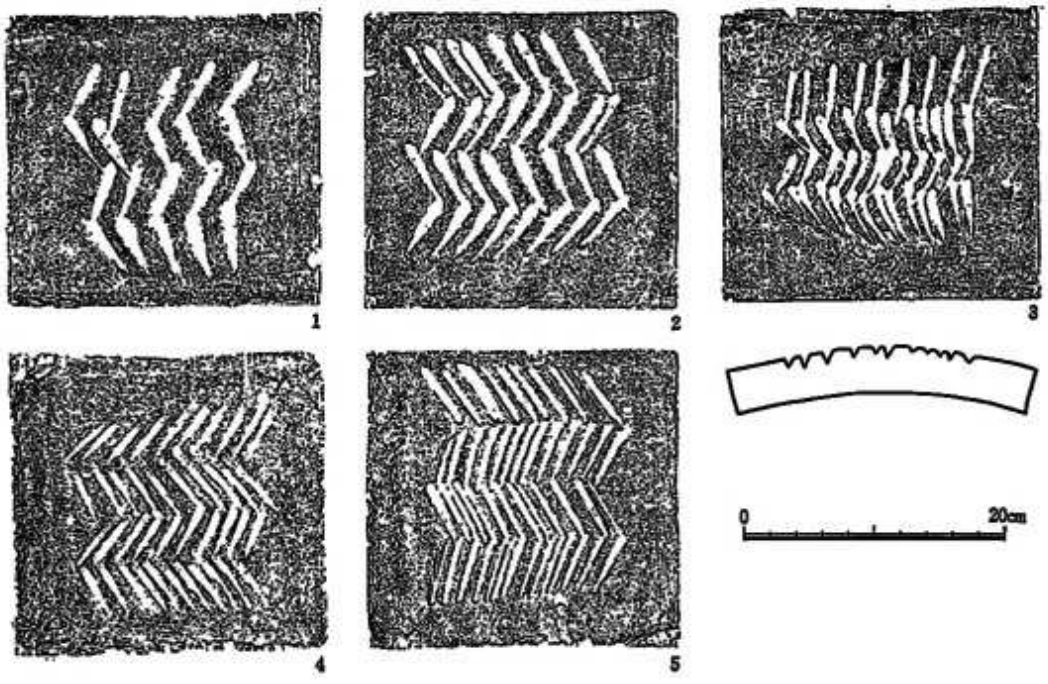
叩き目は、棒ないし板状のものを打ち込んで、ひとつひとつの跡を付けている。その為一端が丸く深く、一端が狭く浅くなっている。叩き目は4段に矢がすり状に施文するが、工具の太さは叩く回数によって第210図1～5のように疎密がある。1枚1枚の瓦は叩き方が少しずつ異なっているが、3のタイプが最も多い。



第209図 近 世 木 製 品

第54表　ＳＥ43の井戸枠瓦一覧表

図番号	図版番号	全　長cm	前　幅cm	後　幅cm	器　高cm	厚　さcm
210 － 1	217 － 2	23.8	22.6	22.7	5.4	3.2
2	〃 － 3	24.0	22.6	22.5	5.2	3.6
3	〃 － 4	24.0	22.3	22.5	5.3	3.6
4	〃 － 5	24.0	22.5	22.5	5.5	3.7
5	〃 － 6	23.8	22.7	22.3	5.7	3.5



第210図　ＳＥ43井戸枠瓦

この種の井戸枠瓦は、近年大阪府下で多数検出されており、この井戸のように現在まで開口したままの井戸もある。

第５節　花粉分析からみた植生の歴史

花粉分析は32地点60サンプル行ったが、第55表では花粉検出量の極めて少ないものは省略し、同一時期で同一傾向を示すものも一部省略した。よって表には15地点32サンプルを載せた。また全時代を通して花粉が1.0%未満の微量なものはその他で一括した（第211図、第55表）。

1　地山

地山の土層は地点によりかなり凹凸があり、最下層に砂礫土層があるが、その上には砂層・砂質土・粘質土がかなり複雑に堆積している。よって表に示した花粉分析結果の時代も、弥生時代以前ではあるが、いつの時期と特定できない。試料１は中世包含層直下の灰色粗砂層のものでス

ギ属が56%と多い。試料２も中世包含層直下の灰黄褐色土でシダが89%と多い。省略した他地点の地山でも一般にシダ類がかなりの比率を占めている。マツ属は試料１では12%と多いが、これだけ多いのは特殊で、試料２（１%）のように少い方が一般的である。

２　弥生時代から古墳時代

縄文時代の遺構・遺物包含層はない。弥生時代はⅡE区溝９の分析を行ったが、花粉が４点しか検出できず、古植生の復原ができなかった。

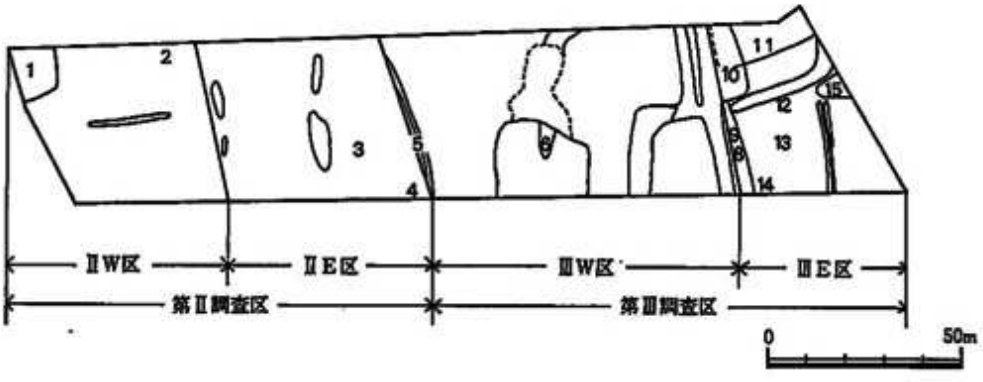
古墳時代から奈良時代にかけては土壙墓３基の分析を行ったが、良好に検出できたのは、土壙墓111の１基だけで（試料３）、古墳時代の土壙墓がつくり始められた頃の植生を示す。広葉樹が26%と多く、コナラ亜属が14.8%と特に多い。また草本植物もやや多くなり、38%あるが、特にヨモギ属が18%と多い。よって墓地周辺の古環境を復原すると、コナラ亜属を中心とする広葉樹林に針樹林（17.2%）が混じり、墓地内は樹木がかなり伐開されてヨモギ属等の下草が生えていたものと思われる。また弥生時代の木棺の材としてよく利用されるコウヤマキ属が、全時代を通じて最高の８%を占めている。

３　平安時代

平安時代後期は土壙２基の分析を行ったが、１基は花粉検出数が少なく、ここではⅡE区土壙118を表示した。11世紀のこの時期には、古墳時代から奈良時代までの墓地が廃絶し、再び掘立柱建物が建てられ、居住地として活用され始める。またゴミ穴等の土壙が掘られている。この地点では樹木花粉が針葉樹・広葉樹ともに少なく合計９%で、かわってイネ科の花粉が30%とかなり高率になる。イネ科が即食用に供するイネとは限らないが、この時期に周辺の稲作が活発化したことを示唆している。またこの時期以後にソバ属が少量ずつみられるようになる。またシダ数が65%と多いのも特徴である。

４　鎌倉時代から室町時代（13～15世紀）

釈尊寺が平安時代後期に建立され、周辺が屋敷地になった時期である。マツ属が試料11を除けば、10%前後を占めるようになる。マツ属は原生林が伐開された後に生じる二次林を構成するもので、前代に比べて周辺の樹林が伐開され、次第に開発が進んできた状況を示す。調査区域は当



第211図　花粉分析試料採集地点

第55表　菱木下遺跡花粉分析結果(1)

試料番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
地点番号		4	14	3	13	14	4	5	5	12	6	6	7	7	8	8	8
地区名		ⅡE	ⅢE	ⅡE	ⅢE	ⅢE	ⅡE	ⅢW	ⅢW	ⅢE	ⅢW	ⅢW	ⅢW	ⅢW	ⅢE	ⅢW	ⅢW
遺構名		南壁	南壁	土坑111	土坑118	南壁	南壁	溝27	溝27	溝37	高台	高台	溝33	溝33	溝36	土坑77	土坑77
層位		地山	地山			4層	4層	下層	上層				下層	上層	下層	下層	上層
時期				6C末	11C	14C～15C	14C～15C	14C～15C	14C～15C	14C	15C	15C	15C	15C	15C	16C	16C
針葉樹花粉	ツガ			4.0			1.0				0.8	0.4		0.5			
	コメツガ			2.0					1.5				0.5	0.5			
	マツ属	12.0	1.0	0.8	3.0	2.0	14.0	7.0	12.0	1.6	17.2		13.0	9.0	11.5		2.0
	コウヤマキ属			8.0	1.0	6.0	1.0			0.4	+	1.6					
	スギ科							1.5					1.0	4.0	4.5		0.5
	スギ属	56.0	4.0	1.2	4.0	8.0	2.0	0.5		0.4	+					1.2	
	その他			1.2						0.4							
	小計	68.0	5.0	17.2	8.0	16.0	18.0	9.0	13.5	2.8	18.0	2.0	14.5	14.0	16.0	1.2	
広葉樹花粉	ハンノキ属	3.0	2.0	0.8				30.5	1.5		+	1.6	1.0	4.5	1.5		0.5
	クマシデ属	1.0		2.8			1.0				0.4	0.4	0.5	0.5			
	ハシバミ属			1.2		1.0	1.0			0.4	+	0.8	0.5				
	クリカシ属				1.0				0.5	0.4	+			0.5			
	ブナ属			0.8					0.5			+		1.5			
	コナラ亜属	2.0	1.0	14.8			12.0	1.0	3.0		1.6	1.2	2.0	3.0	0.5		
	アカガシ亜属			1.2			2.0		0.5	0.8	0.8		+	0.5			
	エノキ属・ムクノキ属			0.4		1.0				1.2	+	0.8	2.0				
	ケヤキ属			1.6			2.0				+			0.5			
	アカメガシワ属																
	モチノキ属							0.5			+		2.0			0.4	
	サルスベリ属									0.8							
	ツツジ科										0.4	+	+				
	その他	2.0		2.4			1.0		1.0	1.2	0.8	2.0	2.5	0.5		0.4	0.5
	小計	8.0	3.0	26.0	1.0	2.0	19.0	32.0	4.8	4.8	4.0	6.8	8.5	11.5	2.0	1.6	1.0
草本花粉	ソバ属				2.0	1.0		1.5	4.5	3.6	16.8	24.4	4.5	7.0	1.0	11.6	4.5
	サナエタデ節	1.0		1.6					1.0		0.8	7.2	0.5	6.0			
	ナデシコ科	1.0		0.4			1.0	1.0	1.0	1.6	2.8	0.8	+	1.0	0.5		0.5
	アカザ科	1.0		1.2				0.5	0.5	1.2	3.6	0.4	4.5	0.5	2.0	0.8	1.0
	キンポウゲ科			1.6					0.5			1.6					
	アブラナ科			0.4			1.0	4.0	8.0	1.6	6.8		4.0	2.5	4.0		4.5
	トウダイクサ科											2.4					
	キカシグサ属						1.0				+						
	アリノトウグサ属							0.5	0.5		2.8	0.8	6.0	1.5	0.5	0.4	
	セリ科							0.5	1.0		0.8		0.5	1.5		0.4	0.5
	ヨモギ属			18.0			3.0	4.0	0.5	0.8	1.6	0.4	2.5	4.0	5.0	2.8	1.0
	キク亜科			4.4				0.5	2.5	2.0	0.8	21.2	2.0	3.0	1.5	0.4	0.5
	タンポポ亜科							0.5	3.0	0.4	0.4		0.5	1.5	7.0	0.8	0.5
	イネ科	19.0	3.0	9.2	30.0	12.0	51.0	34.0	51.0	22.8	31.2	10.8	46.0	29.0	28.0	28.4	10.0
	カヤツリグサ科			0.8					1.0	1.2	2.4	1.2	1.0	5.5	0.5		
	キキョウ科												1.0				
	その他			0.4					0.5		0.8	0.4	0.5	0.5	1.0	0.4	0.5
	小計	22.0	3.0	38.0	32.0	13.0	57.0	47.0	75.5	35.2	71.6	71.6	73.5	63.5	51.0	46.0	23.5
形態分類花粉				9.2	1.0	4.0	3.0	1.0	2.5	0.8	1.2	2.0	3.0	4.0	4.0	4.8	0.5
シダ類		2.0	89.0	9.6	58.0	65.0	3.0	11.5	1.5	56.4	5.2	17.6	0.5	7.0	27.0	46.4	72.5
検体数		100	100	250	100	100	100	200	200	250	250	250	200	200	200	250	200
淡水生藻類(個数)			5		156	2		37	1	1		3			1	6	10

第55表　菱木下遺跡花粉分析結果(2)

試料番号		17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
地点番号		10	11	11	15	9	2	14	6	14	1	1	5	14	8	1	14
地区名		ⅢE	ⅢE	ⅢE	ⅢE	ⅢE	ⅡW	ⅢE	ⅢW	ⅢE	ⅡW	ⅡW	ⅢW	ⅢE	ⅢW	ⅡW	ⅢE
遺構名		大溝ち込み7	大溝ち込み8	大溝ち込み8	池3	井戸1	北壁	南壁	高台整地層	南壁	大溝ち込み9	大溝ち込み9	西壁	南壁	西壁	大溝ち込み9	南壁
層位			下層	中層上部	下層	下層	3層	3層	3層	3層	下層	中層	2層	2層	1層	上層	1層
時期		15C～16C	16C	16C	16C	16C	16C	16C	15C～16C	16C	江戸	江戸	江戸	江戸	現代	現代	現代
針葉樹花粉	ツガ	0.3	0.7	+		0.8	1.5	0.8			+	+		0.6		0.4	+
	コメツガ								0.4	0.8		+	0.5	0.2	0.5		0.4
	マツ属	5.0	8.4	10.0	66.4	27.2	5.5	6.4	7.6	9.6	0.5	18.8	16.0	18.4	22.0	14.4	28.8
	コウヤマキ属	0.7		2.0			6.0		1.2	1.6	+	+		0.8	+		
	スギ科												4.0		4.5		
	スギ属	+	0.7			+	3.0	13.6	6.8	4.8	7.0	2.0	+	3.2	1.0	4.0	6.0
	その他	0.7	0.5	0.4			1.0	0.8						0.2	1.0	0.4	
	小計	6.7	10.3	12.4	66.4	28.0	17.0	21.6	16.0	16.8	7.5	20.8	20.5	23.4	28.0	19.2	32.5
広葉樹花粉	ハンノキ属	0.3	4.7	0.4	0.4	0.8		1.6			+	0.4	0.5	0.6	1.5	0.4	0.8
	クマシデ属	2.3	1.3			0.8	1.5	0.8	1.6			+		0.2		+	0.8
	ハシバミ属		1.3				0.5		0.8		+			0.4	+		+
	クリカシ属	3.3			0.4			0.8	0.4								
	ブナ属	+	0.7		+				0.8				+	0.2		+	+
	コナラ亜属	0.6	5.0	0.8	0.8	1.6	12.0	4.0	3.2	6.4	+	1.6	1.5	6.0	1.5	0.8	2.0
	アカガシ亜属	7.4	5.6	14.4	0.4	1.6	+	1.6		0.8				0.8	0.5		+
	エノキ属・ムクノキ属	2.0	1.3	+		0.8			1.2		+		0.5	0.4		+	
	ケヤキ属		0.7	0.4	0.8					0.8	+	+	0.5			0.4	
	アカメガシワ属							1.6	0.4				+		+		
	モチノキ属	1.3	1.3	+									0.5	0.8			
	サルスベリ属		1.7		0.4	0.4											
	ツツジ科	1.0	0.3	2.8			0.5			0.8				0.2		0.4	
	その他	1.7	2.1	0.4	0.4	0.8			0.4	0.8	1.0	1.2	1.0	2.0			0.4
	小計	25.3	26.0	19.2	3.6	6.8	14.5	10.4	8.8	9.6	1.0	3.2	4.5	11.6	3.5	2.0	4.0
草本花粉	ソバ属	7.0	2.7	12.0	0.8	4.0	1.5	2.4	6.8	4.0		0.4	3.5	6.2	0.5		+
	サナエタデ節	0.3	0.7	+					0.4				+		+		0.4
	ナデシコ科	2.7	0.3			0.4		2.4	1.2		+	0.8	1.5		2.0	+	0.8
	アカザ科	2.7	1.0	+	0.4	1.2	0.5	0.8	0.8	0.8	0.5	0.8	1.5	1.6	1.0	0.8	0.4
	キンポウゲ科																0.4
	アブラナ科	5.0	3.0	+	1.6	0.4		4.0	+		58.5	38.0	18.0	0.4	22.0	25.2	6.8
	トウダイクサ科		1.0		0.4				+					0.2			
	キカシグサ属	2.3	+		+		0.5	2.4				0.4		0.4		+	+
	アリトウグサ属	0.7	0.3				0.5					+	+	0.2			
	セリ科	+					0.5				+		0.5	0.2	0.5		
	ヨモギ属	1.2	0.7	0.4	0.4	1.2	1.5	0.8	+	0.8	2.5	0.4	1.0	1.8	1.0	1.2	0.4
	キク亜科	2.0	2.7	0.4	0.8	2.0	2.0	0.8	1.2		+	0.4	0.5	0.6	1.0	0.8	+
	タンポポ亜科	2.0				2.4		0.8			2.5	0.4	0.5	0.2	1.0	0.8	+
	イネ科	32.0	37.7	15.2	24.0	48.0	6.0	20.8	26.0	12.8	16.0	29.2	33.5	34.4	32.5	46.8	48.0
	カヤツリグサ科	+	1.3	0.4	0.4	4.8	1.0		0.4	1.6	1.5	3.2	11.0		2.5		
	キキョウ科																
	その他	0.1	0.3		0.4		1.5				1.0	0.8	1.0	0.2		0.4	0.4
	小計	58.0	57.1	28.1	29.0	64.4	15.5	35.2	36.8	20.2	82.5	74.8	72.5	46.4	64.0	77.6	58.0
形態分類花粉		0.7	3.3			0.4	4.0	2.4	2.8	3.2		0.4	1.5	1.6	1.5	0.4	0.8
シダ類		9.3	8.7	40.0	0.8	0.4	49.0	30.4	35.6	50.4	9.0	0.8	1.0	17.0	3.0	0.8	2.0
検体数		300	300	250	250	250	200	125	250	125	200	250	200	500	200	250	250
淡水生藻類(個数)		152	7				1	1						19		1	4

時寺域や屋敷地であったにもかかわらず、イネ科の花粉が多い。絶えず建物が建て替えられた高台の試料11を除けば、22～51%の高率を示す。畑作物としてはソバ属に加えて、アブラナ科が1～8%と増加してきている。また分析表ではその他で一括したが、試料10でキュウリ属 0.4%、試料11でソラマメ属0.4%が出土している。

興味あるのは、第Ⅱ調査区と第Ⅲ調査区の境にある溝27である。寺域と屋敷地を区画する溝であるが、淡水性藻類が37個も出土しており、この溝が滞水ないしは湿地であったことを示している。溝27の上部には近世から現代に至る水路があり、この溝27も当時水路の役割をもっていたことを推測させる。

5　室町時代後葉から安土桃山時代（16世紀）

釈尊寺が廃絶し、屋敷地もこの地点からはなくなり、調査区全体が耕地化した時代である。ⅢE区では北側を掘り下げて段々畑或は水田とし（大落ち込み7・8）、東側には池1を掘っている。この池1のほとりにはマツが群生していたようで、池の覆土からマツボックリやマツの樹皮が多量に出土した。花粉分析でもマツ属が66.4%と高率を示し、このことを裏付けている。全体としてはイネ科が優勢で、前代に引き続き水稲耕作が盛んに行なわれていた。試料19の大落ち込み8中層上部ではソバ属が12%と目立っている。土壙77は水路の溝36の底面にあったもので、シダ類が多く、湿潤であったことがわかる。またワタ属が1%未満だがこの時期に表われる。

6　江戸時代

前代に引き続き、全体が田や畑となっている。広葉樹の花粉が 1.6%以下と減少する。針葉樹の花粉もマツ属が16～18%を占める以外、それほど多くない。かわって草本植物の花粉が大勢を占めるようになり、試料29の46.4%が最低で、他は70～80%を占める。シダ類は水路脇の試料29の17%を除けば少なくなる。

地点1はⅢW区北西隅を1段落としてつくった畑（大落ち込み9）である。ここではアブラナ科が多く、下層（試料26）で58.5%、中層（試料27）で38%と非常に多い。この畑ないしは近傍でダイコンを栽培していたものと思われる。

7　現代

現代の試料は、実際に視認できる植生と、花粉分析の結果から推察できる植生を比較する為に出してみた。現在は大部分が水田で、一部に畑と宅地があった。道路予定地になった後は雑草が繁っていた。現代といっても何十年かの間耕作され各種の花粉が混じり合っている。それゆえ、現況と花粉分析の結果は必ずしも一致しない。特にマツ属は調査区の近傍では少ないにもかかわらず14～28%と高率で、広葉樹は近傍の宅地内にみられるが2～4%と低率である。イネ科は32～43%と高率で現況とよく一致する。また全体に草本植物が多く、シダ類が 0.8～3%と低率なのも一致している。

第６節　菱木氏と菱木下遺跡

古代においては、日本書紀仁賢天皇６（493）年の条に、菱城邑鹿父の記述があり、菱木邑は堺市菱木に比定されている。説話の当否は別としても、かなり古くから菱木の地に集落が存在していたことが窺える。

菱木は和泉国大鳥郡草部郷に属し、鎌倉時代には、和泉国御家人として草部氏・菱木氏などの武士が知られている。正嘉２（1258）年、後嵯峨上皇高野山御幸に際し、政所御所宿直者としての御家人着到注文があり（和田文書・『鎌倉遺文』8201）、菱木左衛門尉を含めて30人の名が記されている。彼等は「和泉国地頭御家人」と記され、その多くは和泉国の地名を名のる氏族である。それゆえこの菱木氏が堺市菱木を本貫とする御家人であったことは確実であろう。

また文永９（1272）年、洛中警固の大番役を勤める和泉国御家人19人の中に菱木左衛門尉がいる（和田文書・『鎌倉遺文』11115）。大番役兵士は土地２町５反につき１人を出すことになっている。菱木左衛門尉は８町６反を有し、兵士６人を出していることから、和泉国では比較的中規模の御家人であることを知ることができる。

一般に畿内の御家人は東国の数百・数千町歩を有する有力御家人と比べてその規模が小さく、洛中警護の大番役を勤める和泉国最有力御家人向佐波入道でさえ、46町５反、兵士18人を出すにすぎない。

菱木下遺跡は平安時代後期に倉庫群や釈尊寺が建立されており、鎌倉時代には寺を中心としてかなりの集落が成立している。おそらくこうした寺や集落は菱木氏と何らかの関係を持っていたと思われるのである。

南北朝時代になると和泉国の御家人も南朝方・北朝方に分かれ、戦乱の巷に巻き込まれる。延元元（1336）年10月８日、南朝方に属した岸和田治氏は菱木とその南接地和田とを焼き払っている（延元２年３月岸和田治氏軍忠状案・和田文書二『和泉市史』第一巻）。しかし菱木下遺跡では現在のところ焼土層は検出されておらず、焼払われた痕跡はない。

室町時代になると菱木氏はかなりの勢力を持つようになり、河内国守護代遊佐氏の支配下にあって郡支配を代行する地位を得ている。応永12（1405）年、遊佐河内守長護より菱木掃部助（盛阿）に宛て交野郡に関わる遵行状が出され（『言継卿記』同年６月18日の条）、応永14（1407）年９月２日、同じ遊佐長護より菱木掃部助宛て、錦部郡に関わる遵行状が出されている（『観心寺文書』大日本古文書132）。応永24（1417）年８月12日には遊佐左衛門尉国盛より菱木掃部助宛て錦部郡の遵行状が出され、この文書を受けて同年８月27日、菱木掃部助より南条入道宛て、同郡の遵行状が出されている（『観心寺文書』大日本古文書137・138）。これは菱木掃部助が守護代遊佐氏の下にあって、数郡を管轄する後の小守護代的地位にあり、南条入道が一郡を管轄する郡代的地位にあったことを示している。更に永享10（1428）年11月16日、遊佐徳盛（国盛を改称）より菱木七郎右衛門入道宛て、錦部郡に関わる二通の遵行状が出されている（『観心寺文

書』大日本古文書181・184）。

これらの文書は所収文書名に見るように観心寺（現河内長野市所在）領に関するものである。菱木氏は錦部郡の支配と共に観心寺と深い関係を持っている。年は不詳だが、先の応永24年の二通の文書と関連して、菱木七郎左衛門尉慶盛から観心寺衆徒に書状が出されている（『観心寺文書』大日本古文書133）。さらに永享9（1429）年8月15日付、菱木三郎衛門盛勝の観心寺への仏舎利寄進記があり（『観心寺文書』大日本古文書121）、年不詳だが観心寺年預弘尊・尊海連署算用状から、「菱木殿」、「三郎衛門殿」、「三郎五郎殿」がたびたび入山していたことが知られる（『観心寺文書』大日本古文書357）。

菱木氏は仏舎利寄進記で藤原盛勝とも記しており、その出自は藤原氏と称していた。鎌倉時代には草部郷菱木に居を構えた和泉の中規模御家人であった。釈尊寺の建立・経営にも関ったであろう。南北朝時代の動乱を生きぬき、室町時代には河内へ勢力を張って、小守護代・郡代的地位を得るまでに発展した。しかしそれは文書で見る限り1405年から1428年の20年足らずの短い期間であり、嘉吉元（1441）年以降、錦部郡を管轄する小守護代・郡代ともに他氏に替られている。その後の菱木氏の盛衰はよくわかっていない。

今のところ菱木氏と菱木下遺跡を直接結びつける証拠は見出されていない。しかしながら、菱木下遺跡が釈尊寺を擁し、菱木地内の中心的集落の様相を呈していることから、何らかの関連をもっていたと推測しうる。この遺跡も14世紀末には集落が衰え始め、15世紀には釈尊寺も消失していく。地元の伝承（旧地主談）では、菱木下遺跡の地から現在の菱木の集落へと村が移ったと伝えられている。菱木下遺跡は全域を発掘していないので断定できないが、遺物の出土状況から、集落部分は14世紀末に、釈尊寺は15世紀末頃になくなり、以後耕地となっていく。この言い伝えは意外とそうした時代の記憶を反映しているのかもしれない。

あとには、集落部分にソノ（園）村の字名と、寺域部分に釈尊寺の字名が残った。

付、菱木下遺跡第Ⅱ、第Ⅲ調査区出土遺物観察表

凡 例

1．法量については、( )内残存値、推：推定値、復：復原値、高：器高、残存：破片の残存値を示し、口、胴、底などは径を示す。

2．胎土には長石、石英、チャート、くさり礫砂粒を主に含むが、それ以外の特徴的な砂粒を記入した。砂粒は大きさにより、大＞5㎜、2㎜＜中≦5㎜、0.5＜細≦2㎜、微≦0.5㎜とした。

弥生式土器

図番号	図版番号	器種	工区	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・その他)
127-1		壺	Ⅱ E区	SKA27 土手 S46	高(2.6)	(外)ナデ。(内)剥離、ヘラ描き沈線文。	砂粒(中)、にぶい橙色
2		壺	Ⅱ E区	SDA 9 f・f' 土手 S46 下層上部	高(2.7)	(外・内)剥離。貼付凸帯上に刻み目。	砂粒(細)、淡黄橙色
3		壺	Ⅱ E区	SDA 9 a区 R47	高(8.6)	(外・内)剥離。ヘラ描き沈線文多宜?櫛描き直線文の可能性もあり。	砂粒(大)、にぶい黄橙色
4		壺	Ⅱ E区	SDA 9 a区北側溝 R47 黒褐色土	高(4.9)	(外)剥離。(内)指オサエ、ナデ?、櫛描き直線文。	砂粒(細)、灰白色
5		壺	Ⅱ E区	SDA 9 a区 R47	高(4.5)	(外)ミガキ。(内)剥離。波状文。	砂粒(細)、(外)橙色・(内)灰白色
6		壺	Ⅱ E区	SDA 9 a区 R47	高(5.2)	(外)ハケメ。ナデ? (内)ナデ。櫛描き直線文、波状文。	砂粒(中)、灰白色・(外)黒褐色
7		不明底	Ⅱ E区	SDA 9 e区 下層	底5.4、高(1.8)	(外・内)ナデ。(外底)木の葉の圧痕あり。	砂粒(細)、明赤褐色
128-1		壺	Ⅱ W区	S49、図高台Ⅱ層 明茶色土	□24.0、高(4.1)	(外)ハケ目。(内)削りのちナデ? (口)横ナデ。	結晶片岩・砂粒(中)、にぶい橙色
2		土製円板	Ⅱ W区	SDA 1 上面	径3.3×3.4 厚0.9	(内)ナデ。櫛描き直線文。	砂粒(中)、淡黄橙色、壺胴部片を加工
129-1	170-3	甕	Ⅱ W区	SKA 3	□5.2、胴7.6、高 10.1	(外・内)指オサエ、ナデ。(口)横ナデ。	砂粒(細)、褐色
2		鉢	Ⅱ W区	SDA 1	□13.2、高(3.0)	(外・内)剥離の為不明。	砂粒(細)、(外)淡黄橙色・(内)橙色
3		壺	Ⅱ E区	SD 5	□16.2、高(6.5)	(外・内)剥離がひどい。	砂粒(細)、淡黄橙色・橙色
4		壺	Ⅱ E区	SD 5	□34.6、高(3.1)	(内)ハケメ? (口)横ナデ。	砂粒(中)、(外)橙色・(内)淡橙色
5		壺	Ⅱ E区	SD 5	□37.2、高(1.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、淡橙色
6		壺	Ⅱ E区	SD 5	□46.2、高(4.9)	(外)ハケメ? (外・内)剥離の為不明。	砂粒(大)、橙色・淡橙色
7		壺	Ⅱ E区	SD 6	□30.8、高(4.8)	(外)胴部ナデ。他剥離の為不明。	結晶片岩・砂粒(中)、にぶい褐色
8		壺蓋	Ⅱ E区	SKA19 S52	□18.6、高(5.3)	(外・内)剥離の為不明。	砂粒(大)、赤褐色
9		底部	Ⅱ E区	SKA19 S52	底6.0、高(6.0)	(外・内)剥離の為不明。(外底)ナデ。	砂粒(中)、にぶい黄橙色
10		壺	Ⅱ E区	SKA11	□23.4 高(3.2)	(外・内)剥離の為不明。	結晶片岩・砂粒(中)、褐橙色
11		壺	Ⅱ E区	SKA11	□16.4、高(2.9)	(外・内)剥離の為不明。	砂粒(中)、褐橙色
12		鉢	Ⅱ E区	SKA16 S53	□17.6、高(5.4)	(外)ヘラミガキ。(内)剥離。	砂粒(細)、赤褐色・(外)一部黒褐色
13	171-5	壺	Ⅱ E区	SKA16 S53	底8.0、高(15.0)	(外・内)剥離の為不明。	砂粒(大)、褐灰色
14		甕	Ⅱ E区	STK156 S52	底5.4、高(2.8)	(外・内)剥離の為不明。(底)焼成後に内外面より回転穿孔。	角閃石・金雲母・砂粒(大)、褐灰色
15	170-2	甕	Ⅱ E区	STK156 S52	底6.6、高(3.0)	(外・内)剥離の為不明。(底)焼成後に内外面より回転穿孔。	砂粒(大)、暗灰色・灰色
130-1		壺	Ⅱ W区	SD 7	□26.9、高(19.5)	(外・内)剥離。(外口一部)ナデの痕跡。	砂粒(中)、灰白色
2		壺	Ⅱ E区	SKA28 S46	□18.4、高(7.4)	(外・内)剥離の為不明。	砂粒(中)、褐橙色
3		底部	Ⅱ E区	SKA28 S46	底9.4、高(5.2)	(外・内)剥離の為不明。	砂粒(大)、褐橙色・(内)一部灰褐色
4		壺	Ⅱ E区	SKA28 S46	□21.0、高(5.8)	(外・内)剥離の為不明。	結晶片岩・砂粒(中)、(外)橙色・(内)褐灰色
5		壺	Ⅱ E区	SKA28 S46	□22.2、高(6.9)	(外・内)剥離の為不明。	砂粒(中)、褐橙色
6	171-6	壺	Ⅱ E区	SKA28 S46	□21.8、底3.2、推高 24.9	(外・内)剥離。(外)一部削りの痕跡。	結晶片岩・砂粒(中)、明褐灰色・(内底)黒色
7	170-4	鉢	Ⅱ E区	SKA30 S46	□40.4、底15.7、高(15.7)	(外・内)剥離。(口・体)波状文の痕跡。	砂粒(細)、褐橙色・(口)黒褐色
8		壺	Ⅱ W区	SKA21 S48	推□45.4、高(13.3)	(外・内)ナデ?	砂粒(中)、灰白色
9		底部	Ⅱ W区	SKA21 S48	底4.6、高(2.0)	(外底)ナデ。(他)剥離の為不明。	結晶片岩・砂粒(中)、(外)黄灰色・(内)灰色
131-1		壺	Ⅱ E区	SKA26 b区 S45 フタ土上層	□23.2、高(1.9)	(外・内)ナデ。(口下端)刻み目。	角閃石・金雲母・砂粒(大)、明赤褐色
2		壺	Ⅱ E区	SKA26 b区 S45 フタ土上層	□26.5、高(5.5)	(外・内)剥離。	結晶片岩・砂粒(中)、淡黄橙色
3		壺	Ⅱ E区	SKA27 S45	□50.4、胴50.6、高(44.6)	(外・内)ナデ? 表面の剥離著しい。	砂粒(大)、黄灰色
4		底部	Ⅱ E区	SKA27 S45	底9.6、高(8.4)	(外)上端から底近くまでが縦ナデ、一部ハケ、それより下と底部はナデ。(内)ナデ。	結晶片岩・砂粒(大)、(外)にぶい橙色・(内)黒褐色
5		底部	Ⅱ E区	SKA27 S45	底8.4、高(4.2)	(外底)ナデ。(他)剥離の為不明。	結晶片岩・砂粒(中)、(外)橙色・(内)灰白色・褐灰色
6		底部	Ⅱ E区	SKA27 S45	底8.6、高(7.8)	(外底)ナデ。(外胴)削り? (内)ナデ?	結晶片岩・砂粒(大)、(外)橙色・(内)淡黄橙色
132-1		壺?	Ⅱ E区	SBK 1 d区 pit S46	□16.8、高(2.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、灰黄褐色
2		底部	Ⅱ E区	SBK 1 c区 S46 床面	底4.0、高(5.0)	(外・内)剥離の為不明。	砂粒(中)、淡黄橙色
3		無頸壺	Ⅱ E区	SDA 9 e区南 S46 フタ土下部	□11.4、高(3.5)	(外・内)剥離。波状文の痕跡留める。	砂粒(細)、橙色
4		無頸壺	Ⅱ E区	SDA 9 e区 下層	□11.0、高(3.2)	(外胴)ハケ目。(他)ナデ。穿孔1対。	砂粒(細)、橙色
5		水差し	Ⅱ E区	SDA 9 e区 S47 フタ土上層、下層	推□12.4 高(10.0)	(外・内)ナデ。(文様帯間)ミガキ。波状文、列点文。	砂粒(細)、橙色
6		壺	Ⅱ E区	SDA 9 土手 h-h' S46 下層上	□16.6、高(7.2)	(外・内)剥離の為不明。	砂粒(中)、淡黄橙色
7		壺	Ⅱ E区	SDA 9 北側溝 a区 R47 黒褐色土	□41.4、高(3.8)	(外・内)剥離の為不明。	砂粒(中)、淡黄色
8		壺	Ⅱ E区	SDA 9 a区 R47	□16.3、高(2.9)	(外)ナデ。(内)剥離の為不明。(内・口)列点文。	砂粒(中)、淡橙色・褐橙色
9		壺	Ⅱ E区	SDA 9 f区南 S46 最下層	□26.6、高(5.9)	(外・内)一部ナデが残存するが剥離が著しい。	砂粒(細)、赤色・(一部)橙色・黒褐色

図番号	図版番号	器種	工区	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・その他)
132-10	171-2	壺	Ⅲ E区	SDA 9　h区　S46　フク土下層、下層上	口21.4、胴28.8、高(20.9)	(外)ナデ、ミガキ。(内)ハケ目、ナデ。(内・口)列点文。(外・口)刻線文。(胴・肩)波状文、櫛描き直線文。	砂粒(細)、褐橙色・淡橙色
11	3	壺	Ⅲ E区	SDA 9　h区　S46　フク土下層、下層上	口16.2、胴17.8、底7.2、高25.7	(外・内)一部ナデが残存するが表面は剥離が著しい。(外・口)擬状文、円形浮文。(胴)擬状文。	砂粒(細)、褐橙色・(一部)橙色
12	4	壺	Ⅲ E区	SDA 9　h区　S46　下層上	口13.6、高(5.3)	(外・内)ナデ。櫛描直線文。	砂粒(細)、にぶい黄橙色・(一部)黒色
13	170-1	壺	Ⅲ E区	SDA 9　g・g'　S46　下層上	口18.4、高(7.8)	(外)ハケメ。(内)剥離の為不明。	砂粒(細)、淡黄橙色
133-1		細頸壺	Ⅲ E区	SDA 9　f区南　S46　最下層	口8.4、最大部径16.8	(外・内)一部ハケメが残存するが剥離が著しい。	角閃石・金雲母・砂粒(中)、赤褐色
2		壺	Ⅲ E区	SDA 9　a区　R47	口15.8、高(5.4)	(外・内)ナデであるがほとんど剥離。	砂粒(細)、橙色
3		壺	Ⅲ E区	SDA 9　S46　フク土下部	口23.6、高(5.1)	(外・内)ナデ。(口下端)刻み目。(胴)櫛描直線文	角閃石・金雲母・砂粒(中)、明褐色
4		壺	Ⅲ E区	SDA 9　e区南　フク土下部	口40.0、高(2.2)	(外・内)ナデ。(口下端)刻み目。(外口端)斜格子文。	角閃石・金雲母・砂粒(中)、明褐色
5		壺	Ⅲ E区	SDA 9　e区　最下層	口29.6　高(3.7)	(内)一部ナデ残存。(口下部)刻み目。(外口端)擬状文。	角閃石・金雲母・砂粒(中)、明褐色
6		壺	Ⅲ E区	SDA 9　h区　S46　フク土最下層	口18.0、高(9.5)	(外・内)剥離。(外口端)擬状文、波状文。	砂粒(中)、褐橙色・淡橙色、鉄分付着
7	171-1	壺	Ⅲ E区	SDA 9	口31.2、高(10.9)	(外)ナデ。(内)ハケメ、ナデ。(外口端)擬状文、波状文。(胴)櫛描直線文。	砂粒(中)、橙色・淡黄橙色
8		鉢	Ⅲ E区	SDA 9　g区　S46　フク土下層	口24.9、高(6.1)	(外・内)剥離。(外)一部ミガキ残存。	角閃石・金雲母・砂粒(中)、明褐色
9		鉢	Ⅲ E区	SDA 9　e区南　フク土下部	口27.2、高(9.1)	(外・内)剥離。(外口直下)波状文。	砂粒(中)、橙色
10		鉢	Ⅲ E区	SDA 9　f区南　フク土下層	口13.2、高(5.4)	(外・内)剥離。(内)一部ナデ残存。回線文。	砂粒(細)、橙色
11		台付鉢脚部	Ⅲ E区	SDA 9　f区南　フク土下層	高(5.3)	(外)ミガキ。(内)削り。円板充填法。刺突文(竹管状)。	砂粒(中)、橙色
12	170-7	台付鉢脚部	Ⅲ E区	SDA 9　S46　フク土下部	底8.8、高(6.8)	(外底下)削り、ミガキ。(脚)ハケ目。(内)ハケメ。円板充填法。	砂粒(中)橙色
13		台付鉢脚部	Ⅲ E区	SDA 9　f区南　S46　フク土下層	底7.8、高(4.8)	(外)ミガキ？　ナデ。(内)削り。円板充填法。	砂粒(細)、黒色
14	170-5	高坏	Ⅲ E区	SDA 9　g・h区　フク土下層上、下層	口19.1、底14.8、推高 19.3	(外・内)剥離。(外)ミガキ？　(内)ナデ？円板充填法。	砂粒(中)、褐橙色・(一部)黒色
15		高坏脚部	Ⅲ E区	SDA 9　e区　フク土上層、下層上、下層	底10.8、高(9.6)	(外)剥離。(内)削り。円板充填法。	砂粒(細)、橙色
16	170-6	高坏脚部	Ⅲ E区	SDA 9　f区　S46　フク土上部、下層上	底15.4、高(8.5)	(外・内)ナデ。	砂粒(大)、淡黄橙色・(底)褐灰色
134-1		甕	Ⅲ E区	SDA 9　a区　R47	口37.0、高(5.9)	(外・内)剥離の為不明。	砂粒(中)、黒橙色・褐橙色
2		甕	Ⅲ E区	SDA 9　g・h区　S46　フク土下層上、下層、最下層	口32.6、高(8.2)	(外・内)剥離の為不明。	砂粒(細)、橙色
3		甕	Ⅲ E区	SDA 9　f区南　S46　フク土上部、下層	口32.4、高(5.4)	(外・内)一部ナデ残存。(他)剥離。	砂粒(細)、(外)橙色・(内)淡黄橙色
4		甕	Ⅲ E区	SDA 9　f区北・土手　S46　フク土下層上、最下層	口34.8、高(3.7)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、褐橙色
5		甕	Ⅲ E区	SDA 9　f地区北　S45　フク土上部、下層上	口22.6、高(6.3)	(外底・内胴)ハケメ。(口)ナデ。	砂粒(細)、(外)明赤褐色・(内)淡橙色
6		甕	Ⅲ E区	SDA 9　S46	口28.8、高(2.5)	(外・内)剥離の為不明。	砂粒(細)；淡橙色
7		壺底	Ⅲ E区	SDA 9　a区　R47	口15.6、高(4.8)	(外・内)剥離の為不明。	砂粒(中)、橙色・(内)一部赤褐色
8		甕	Ⅲ E区	SDA 9　a区　R47	口14.4、高(4.4)	(外・内)剥離の為不明。	砂粒(中)、(外)淡橙色・(内)黒灰色
9		甕	Ⅲ E区	SDA 9　h区　S46　下層上	口15.2、高(3.1)	(外)一部ナデ残存。(他)剥離。	砂粒(細)、褐橙色
10		甕	Ⅲ E区	SDA 9　g区　フク土下層	口12.2、高(2.2)	(外)ナデ。(内)剥離。	砂粒(細)、橙色・褐橙色
11		甕	Ⅲ E区	SDA 9　e区　下層	口14.2、高(9.9)	(外)ハケメのちミガキ。(内)ハケメ？(外口端)回線文。	砂粒(細)、褐橙色
12		底部	Ⅲ E区	SDA 9　e区南	底5.0、高(2.2)	(外)ミガキ。(内)ハケメ。	砂粒(細)、淡橙色
13		底部	Ⅲ E区	SDA 9　e区　下層	底7.6、高(2.4)	(外底)ナデ。(他)剥離の為不明。	砂粒(中)、褐橙色
14		底部	Ⅲ E区	SDA 9　e区南、S45　下層上	底5.8、高(3.3)	(外・内)剥離の為不明。	結晶片岩・砂粒(中)、(外)橙色・(内)灰黄褐色
15		底部	Ⅲ E区	SDA 9　h区北　フク土下層	底7.2、高(5.5)	(外)ミガキ。(内)剥離の為不明。	砂粒(細)、(外)橙色・(内)淡黄橙色
16		底部	Ⅲ E区	SDA 9　g区　S46　フク土下層上、最下層	底10.8、高(12.0)	(外)剥離の為不明。(内)ハケメ	砂粒(細)、橙色・(一部)黒橙色
17	171-7	底部	Ⅲ E区	SDA 9　e区　S46　下層、最下層	底8.4、高(15.9)	(外)ミガキ。(内)ハケメ。	砂粒(細)、にぶい赤褐色
18		底部	Ⅲ E区	SDA 9　h区北　フク土下層	底8.4、高(5.6)	(外)削りのちミガキ。(内)ハケ目？	砂粒(中)、橙色・(外)黒斑

古墳時代の遺物

図番号	図版番号	種類	器種	地区	遺構	法量(cm)	備考
141-1	176-3	須恵器	壺	Ⅱ W	土坑32	復口28.6、高(5.2)	(口縁)横ナデ
2		須恵器	壺	Ⅱ W	土坑32	復口21.0、高(8.6)	(外体)平行叩き、(内)同心円
3	176-2	須恵器	壺	Ⅱ W	土坑32	復口27.2、高(5.5)	(口縁)横ナデ
4	1	須恵器	壺	Ⅱ W	土坑32	復口23.8、高(5.7)	(口縁)横ナデ
5		須恵器	壺	Ⅱ W	土坑32	復口26.0、高(6.9)	(外体)平行叩き
6		須恵器	壺	Ⅱ W	土坑32	復口20.0、高(4.9)	(胴)カキメ11本
7		須恵器	壺	Ⅱ W	土坑32	復口19.6、高(3.1)	(口縁)横ナデ
8		須恵器	壺	Ⅱ W	土坑32	復口16.2、高(10.1)	(口縁)横ナデ
9	176-5	須恵器	壺	Ⅱ W	土坑32	復口23.5、高(5.6)	(外体)平行叩き

図番号	図版番号	種類	器種	地区	遺構	法量(cm)	備考
141-10		須恵器	器台 高坏	ⅡW	土坑32	口23.6、高(7.1)	
11		須恵器	坏蓋	ⅡW	土坑32	口13.2、高 4.4	(外天井)ヘラ削りの他ナデ
12		須恵器	坏蓋	ⅡW	土坑32	口15.0、高(3.6)	(外天井)ヘラ削りの他ナデ
13	176-4	須恵器	坏蓋	ⅡW	土坑32	口12.8、高(3.8)	(外天井)ヘラ削りの他ナデ
14		須恵器	坏蓋	ⅡW	土坑32	復口14.4、高(3.8)	(外天井)ヘラ削りの他ナデ
15		須恵器	坏蓋	ⅡW	土坑32	復口14.4、高(3.8)	(外天井)ヘラ削りの他ナデ
16		須恵器	坏身	ⅡW	土坑32	復口13.3、高(4.6)	(外底)ヘラ削りの他ナデ
17	176-7	須恵器	坏身	ⅡW	土坑32	復口12.8、高 4.1	(外底)ヘラ削りの他ナデ
18		須恵器	坏身	ⅡW	土坑32	口13.1、高 4.3	(外底)ヘラ削りの他ナデ
19	176-6	須恵器	坏身	ⅡW	土坑32	口12.8、高 4.2	(外底)ヘラ削りの他ナデ
20		須恵器	坏身	ⅡW	土坑32	復口14.0、高(4.5)	(外底)ヘラ削りの他ナデ
21	176-8	須恵器	坏身	ⅡW	土坑32	口11.8、高 4.5	(外底)ヘラ削りの他ナデ
22	9	須恵器	坏身	ⅡW	土坑32	復口12.1、高 4.0	(外底)ヘラ削りの他ナデ
23		須恵器	坏身	ⅡW	土坑32	復口11.6、高(3.8)	(外底)ヘラ削りの他ナデ
24		須恵器	無蓋 高坏	ⅡW	土坑32	底11.8、高(3.0)	菱形すかし孔あり
142-1		須恵器	坏身	ⅡW	土坑位置不明	口13.6、高(3.6)	(外底)ヘラ削りの他ナデ
2		須恵器	有蓋 高坏	ⅡW	大塚も込み1	復口13.2、高(5.2)	(坏部)下半ヘラ削り
3		須恵器	長頸壺	ⅡW	溝11	復底15.2、高(4.35)	高台に小穿孔あり
4		須恵器	長頸壺	ⅡW	大塚も込み2	復底13.0、高(4.2)	(外・内)横ナデ
5		須恵器	坏蓋	ⅡW	大塚も込み2	口10.2、高 3.0	(外天井)ヘラ削りの他ナデ
6		須恵器	坏蓋	ⅡW	大塚も込み2	高(2.6)	(外天井)ヘラ削り痕あり
7		須恵器	坏身	ⅡW	大塚も込み2	復口10.9、復底7.9、高 3.5	(外・内)横ナデ
8		須恵器	無蓋 高坏	ⅡW	大塚も込み2	復底10.4、高(4.1)	菱形すかし孔あり
9		須恵器	提瓶	ⅡW	大塚も込み2	復口8.9、高(6.4)	(外・内)横ナデ
10		須恵器	蛾壺	ⅡE	中世溝25	高(5.7)	指オサエとナデ
11		須恵器	坏身	ⅡW	現代井戸30	口19.4、底13.2、高 7.0	(外・内)横ナデ
12	177-9	須恵器	台付鉢	ⅡW	大塚も込み2	復口33.8、復底16.7、高 12.0	(外体)下半ヘラ削りの他横ナデ
13		須恵器	鉢	ⅡW	大塚も込み2	口29.4、高 8.8	(外)下半にカキメ、(内底)不整方向のナデ
14		須恵器	横瓶	ⅡW	大塚も込み3	高(23.25)	(体)一端を粘土でふさぐ
15	177-8	須恵器	器台 高坏	ⅡW	包含層4層	口23.4、高(9.7)	(外体)下半カキメ、(内)同心円叩キ
16		須恵器	鉢	ⅡE	中世土坑	復口17.3、高(9.5)	(外体)下半ヘラ削りの他ナデ
143-1	178-2	須恵器	坏蓋	ⅡE	土坑111	口11.9、高 4.6	副葬品、完形
2	7	須恵器	坏身	ⅡE	土坑111	口11.8、高 2.7	副葬品、完形
3	5	須恵器	坏身	ⅡE	土坑111	口11.5、高 4.2	副葬品、完形
4	9	須恵器	椀	ⅡE	土坑111	口8.2、高 4.1	(外底)ヘラ削り、一部残存
5		須恵器	坏身	ⅡE	土坑111	口11.7、高 4.1	副葬品、完形
6	6	須恵器	坏身	ⅡE	土坑111	口11.8、高 3.5	副葬品、完形
7	3	須恵器	有蓋 短頸壺	ⅡE	土坑111	口8.4、高 13.7	副葬品、(肩)穿孔
8	4	須恵器	無蓋 高坏	ⅡE	土坑111	口13.3、底9.2、高 7.2	副葬品、完形
9		須恵器	坏蓋	ⅡE	土坑7、14	復口9.6、高 3.4	接合点②
10		須恵器	坏蓋	ⅡE	土坑16	復口11.9、高(3.7)	
11		須恵器	坏身	ⅡE	土坑11、16	復口12.8、高 3.9	接合点③
12	177-6	須恵器	坏身	ⅡE	土坑16	復口12.9、高 3.9	
13		須恵器	坏身	ⅡE	土坑24	復口12.2、高(2.9)	
14		須恵器	坏身	ⅡE	土坑39、47	復口11.8、高 3.6	十欠損、接合点①
15	177-5	須恵器	坏身	ⅡE	土坑74	復口12.4、高(4.2)	
16		須恵器	坏身	ⅡE	土坑74	復口15.0、高(3.1)	
17		須恵器	坏身	ⅡE	土坑231	復口12.5、高(3.1)	
18		須恵器	坏身	ⅡE	土坑44	復口10.5、高 4.5	

図版番号	図版番号	種類	器種	地区	遺構	法量(cm)	備考
143-19	177-1	須恵器	坏蓋	ⅡE	土坑76	復口11.8、高 3.8	
20		須恵器	坏蓋	ⅡE	土坑51	復口13.2、高(3.0)	
21		須恵器	坏蓋	ⅡE	土坑51	復口11.4、高(3.7)	
22		須恵器	坏蓋	ⅡE	土坑51	復口11.3、高(2.2)	
23		須恵器	椀	ⅡE	土坑51	口16.6、高(3.8)	
24		須恵器	坏身	ⅡE	土坑80	口10.4、高(3.2)	
25	177-3	須恵器	坏身	ⅡE	土坑91	復口11.0、高(3.5)	
26		須恵器	坏身	ⅡE	土坑240	口11.4、高(2.6)	
27	177-2	須恵器	無蓋高坏	ⅡE	土坑154	底8.0、高(6.6)	副葬品、完形
28		須恵器	有蓋高坏	ⅡE	土坑242	復底12.5	
29	177-4	須恵器	有蓋高坏	ⅡE	土坑160	復口12.5、高(8.5)	副葬品、脚端部欠損
30		須恵器	坏身	ⅡE	土坑203	復口11.8、高(3.6)	
31		須恵器	坏身	ⅡE	土坑243、249	口11.2、受13.1、高 3.8	接合により完形、接合表⑨、どちらかの土坑の副葬品
144-1		須恵器	器台高坏	ⅡE	土坑103	復口24.1、高(5.4)	
2	179-1	須恵器	有蓋短頸壺	ⅡE	土坑45	口9.8、高 11.4	副葬品、ほぼ完形
3	6	須恵器	有蓋短頸壺	ⅡE	土坑69、75	復口11.6、高(12.3)	接合表⑥、底部土坑75にあり
4	3	須恵器	小型壺	ⅡE	土坑254	体12.6、底7.2、高(8.4)	副葬品
5	4	須恵器	小型壺	ⅡE	土坑287	復口5.7、高 6.0	副葬品
6		須恵器	有蓋短頸壺	ⅡE	土坑102	底13.0、高(8.2)	副葬品、底部のみ遺存
7	179-2	須恵器	小型壺	ⅡE	土坑215	口7.0、高 5.2	副葬品、完形
8		須恵器	横瓶	ⅡE	土坑239	高(9.5)	
9		須恵器	横瓶	ⅡE	土坑259	高(40.0)	副葬品
10	179-5	須恵器	瓶	ⅡE	土坑101	高(10.4)	副葬品
145-1		須恵器	鉢	ⅡE	中世溝25	復底12.8、高(14.4)	
2	180-4	須恵器	把手付鉢	ⅡE	包含層5層	復口17.7、高(12.2)	土坑263西わきより出土
3	3	須恵器	鉢	ⅡE	土坑265	復口24.8、高 13.4	副葬品？
4	2	須恵器	把手付鉢	ⅡE	土坑25	復口16.6、底8.3、高 18.9	被覆物
5	5	須恵器	壺	ⅡE	土坑2	底15.9、高(26.3)	被覆物
6		須恵器	甕	ⅡE	土坑77	復口21.8、高(5.1)	
7	180-6	須恵器	横瓶壺	ⅡE	土坑109	口8.6、高 7.2	副葬品、欠損品
8	7	須恵器	長頸壺	ⅡE	土坑109	高 12.3	副葬品、欠損品
9		須恵器	長頸壺	ⅡE	土坑109	高(4.6)	長頸壺の底にあてがう
146-1		土師器	甕	ⅡE	土坑255	復口21.1、高(5.8)	
2		須恵器	甕	ⅡE	土坑103	復口32.8、高(8.3)	
3		須恵器	甕	ⅡE	土坑14、10	復口20.2、高(4.2)	
4		須恵器	甕	ⅡE	土坑174、191	復口20.0、高(6.1)	
5	181-1	須恵器	甕	ⅡE	土坑73	口15.6、高 22.8	副葬品、縦半分遺存
6		須恵器	甕	ⅡE	土坑83	口14.0、高 25.4	被覆物、縦半分遺存
7	180-1	須恵器	甕	ⅡE	土坑150、152、154、156、177	復口24.5、高(28.5)	被覆物、接合表⑦、同一破片は他の土坑にもある。
147-1	181-2	須恵器	有蓋短頸壺	ⅢW	土坑352	口8.0、底6.2、高 10.1	副葬品、完形、ヒビ入る
2		須恵器	坏身	ⅢW	土坑298	復口11.4、高(3.2)	
3	181-7	須恵器	坏身	ⅢW	pit103	口17.8、高台12.1、高 4.9	埋納品、完形
4	8	須恵器	坏身	ⅢW	土坑347	口19.9、高台12.8、高 6.9	副葬品、完形
5		須恵器	壺	ⅢW	土坑333	高(10.3)	副葬品？
6	181-5	須恵器	広口壺	ⅢW	土坑356	高(16.2)	副葬品、口頸部削平
7		須恵器	甕	ⅢW	土坑333、352、365	復口20.8、高(18.3)	接合表⑧、土坑365は被覆物か
8		須恵器	甕	ⅢW	土坑365	復口16.1、高(16.9)	
9		須恵器	甕	ⅢW	土坑366	復口20.6、高(7.5)	
10		須恵器	甕	ⅢW	土坑366	復口18.5、高(10.7)	被覆物

図番号	図版番号	種類	器種	地区	遺構	法量(cm)	備考
148-1		須恵器	壺	Ⅲ W	土坑363	復口17.5、高(9.9)	被覆物
2		須恵器	壺	Ⅲ W	土坑326	復口16.4、高(10.2)	
3	181-4	須恵器	壺	Ⅲ W	土坑363	復口11.5、高(7.9)	
4	3	須恵器	徳利	Ⅲ W	土坑200	口7.1、底5.1、高 17.8	
5	6	須恵器	壺	Ⅲ W	土坑326、321、343	復口15.8、高(33.8)	被覆物、接合痕③

中世遺物・井戸出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	地区	遺構	法量(cm)	備考
153-1	184-2	黒色土器	椀	Ⅱ W	遺物2 pit	口16.3、高台6.5、高 6.4	
2	1	黒色土器	椀	Ⅱ W	西南隅	口13.5、底6.0、高 5.5	
3	3	黒色土器	椀	Ⅲ E	包含層3層	復口15.6、復高台6.9、高6.6	
4		瓦器	椀	Ⅱ W	遺物4 pit	復口14.6、復高台5.8、高 5.9	
5	184-4	瓦器	椀	Ⅱ W	遺物5 pit	口15.0、高台5.4、高5.7	
6		瓦器	椀	Ⅱ E	pit250	口15.2、高台4.4、高 4.9	
7		瓦器	小皿	Ⅱ W	pit25	口9.9、底3.9、高 2.4	
8		瓦器	小皿	Ⅱ E	pit248	復口8.8、復底7.3、高 1.2	
9		土師器	小皿	Ⅲ W	礫群1下	口7.3、底6.5、高 1.4	
10		瓦器	小皿	Ⅲ W	高台3層	口8.6、底7.2、高 1.7	
11		土師器	小皿	Ⅲ W	礫群1下	口7.2、底5.8、高 1.4	
12	188-9	土師器	小皿	Ⅲ W	高台礫群1	口7.3、底5.9、高 1.2	
13		土師器	小皿	Ⅲ W	高台3層	口8.4、底 7.2、高 1.4	
14		瓦質	土釜	Ⅲ W	高台3層	口29.4、高(8.2)	
15		須恵質	壺	Ⅲ W	礫群1上	口36.0、高(12.2)	口縁端部をつまみあげる、(外)羽状の平行叩き
16	211-3	瓦器	ミニチュア鉢	Ⅲ W	高台礫群1下盤地層	復口9.1、高(3.0)	(外)ヘラミガキの線1本あり
17	195-3	須恵質	ねり鉢	Ⅲ W	高台礫群2上層	口28.8、底10.5、高 11.1	手以上現存
18		土師質	紡錘	Ⅲ W	高台礫群1下盤地層	復口16.6、高(9.5)	(頸・内外)を指オサエ
154-1	186-7	瓦器	椀	Ⅱ W	井戸1	口14.2、高台3.0、高 3.5	
2	8	瓦器	椀	Ⅱ W	井戸1	口14.0、高台3.3、高 3.3	
3		瓦器	椀	Ⅱ W	井戸1	口14.8、高台3.2、高 3.5	
4		瓦器	椀	Ⅱ W	井戸1	口13.0、高台3.2、高 3.45	
5		瓦器	椀	Ⅱ W	井戸1	口13.5、高 3.8	
6		瓦器	椀	Ⅱ W	井戸1	復口14.2、復高台3.0、高(3.3)	
7		瓦器	椀	Ⅱ W	井戸1	復口12.0、高(3.0)	
8	194-1	瓦質	鉢	Ⅱ W	井戸1	復口23.8、高(9.1)	
9	189-2	土師質	土釜	Ⅱ W	井戸1	口19.9、高(15.1)	
10	1	土師質	土釜	Ⅱ W	井戸1	口18.5、高(17.0)	
11	3	土師質	土釜	Ⅱ W	井戸1	口27.0、高 26.5	
155-1	190-4	土師質	土釜	Ⅱ W	井戸1	復口30.0、高(5.4)	
2		土師質	土釜	Ⅱ W	井戸1	復口29.2、高(5.6)	
3		土師質	土釜	Ⅱ W	井戸1	復口30.0、高(6.3)	
4		土師質	土釜	Ⅱ W	井戸1	復口22.0、高(8.6)	
5		土師質	土釜	Ⅱ W	井戸1	復口29.4、高(8.3)	
6	189-8	土師質	土釜	Ⅱ W	井戸1	口34.2、高(7.2)	
7	7	土師質	土釜	Ⅱ W	井戸1	口33.1、高(8.1)	
8		瓦質	壺	Ⅱ W	井戸1	復口12.1、高(17.7)	
156-1		土師質	土釜	Ⅱ W	井戸1	復口26.6、高(8.3)	
2	190-2	土師質	土釜	Ⅱ W	井戸1	口33.8、高(8.6)	
3		土師質	土釜	Ⅱ W	井戸1	復口31.0、高(5.4)	
4		土師質	土釜	Ⅱ W	井戸1	口28.8、高(6.2)	
5		土師質	土釜	Ⅱ W	井戸2	復口21.5、高(5.5)	

図版番号	図版番号	種　類	器　種	地　区	遺　構	法　　量(cm)	備　　考
156-6		土師質	土釜	Ⅱ W	井戸2	復口26.0、高(5.9)	
7		瓦質	すり鉢	Ⅱ W	井戸2	復口37.4、高(5.1)	

中世井戸出土遺物

図版番号	図版番号	種　類	器　種	地　区	遺　構	法　　量(cm)	備　　考
156-8		瓦質	すり鉢	Ⅱ W	井戸2	高(3.8)	
157-1	185-5	瓦器	椀	Ⅱ E	井戸3	口14.5、高台4.5、高4.7	埋納品、ほぼ完形
2	6	瓦器	椀	Ⅱ E	井戸3	口15.6、高台4.4、高5.1	埋納品、完形
3	3	瓦器	椀	Ⅱ E	井戸3	口15.4、高台4.9、高5.1	埋納品、完形
4	4	瓦器	椀	Ⅱ E	井戸3	口14.9、高台4.1、高4.8	埋納品、完形
5	2	瓦器	椀	Ⅱ E	井戸3	口14.9、高台5.1、高5.4	埋納品、完形
6		瓦器	椀	Ⅱ E	井戸3	復口14.4、復高台5.15、高 4.7	埋納品、完形
7	185-1	瓦器	椀	Ⅱ E	井戸3	口15.4、高台5.2、高4.8	埋納品、完形
8		瓦器	椀	Ⅱ E	井戸3	復口14.9、高台4.4、高 4.8	埋納品、完形
9	187-6	瓦器	小皿	Ⅱ E	井戸3	口8.7、底6.6、高 1.8	埋納品、ほぼ完形
10	5	瓦器	小皿	Ⅱ E	井戸3	口8.6、底5.0、高 1.8	埋納品、ほぼ完形
11	3	瓦器	小皿	Ⅱ E	井戸3	口9.0、底6.8、高 1.7	埋納品、完形
12		瓦器	小皿	Ⅱ E	井戸3	口9.0、底7.0、高 1.8	埋納品、ほぼ完形
13	187-2	瓦器	小皿	Ⅱ E	井戸3	口9.0、底7.5、高 1.8	埋納品、完形
14	4	瓦器	小皿	Ⅱ E	井戸3	口9.3、底6.6、高 1.9	埋納品、完形
15	189-5	土師質	土釜	Ⅱ E	井戸3	口26.4、高(17.6)	火形片
16		土師質	土釜	Ⅱ E	井戸3	口26.3、高(17.3)	火形片
158-1	186-3	瓦器	椀	Ⅱ E	井戸4	復口12.4、復高台2.6、高(3.3)	
2		瓦器	小皿	Ⅱ E	井戸4	口8.4、底6.8、高 1.7	
3		瓦器	椀	Ⅱ E	井戸4	口12.4、高台2.7、高 3.1	
4		瓦器	小皿	Ⅱ E	井戸4	復口8.2、復底6.8、高 1.4	
5		土師質	小釜	Ⅱ E	井戸4	復口24.7、高(5.4)	
6		土師質	土釜	Ⅱ E	井戸4	復口24.1、高(5.3)	
7		土師質	土釜	Ⅱ E	井戸4	復口24.5、高(4.1)	
8	190-6	土師質	土釜	Ⅱ E	井戸5	口31.2、高(14.1)	
9	192-5	瓦質	鍋	Ⅱ E	井戸5	復口37.2、高(6.9)	
10	6	瓦質	鍋	Ⅱ E	井戸5	復口28.4、高(10.3)	
11	195-4	須恵質	すり鉢	Ⅱ E	井戸5	口32.5、高(6.6)	東播系
159-1		瓦器	椀	Ⅱ E	井戸5	口12.0、高台2.4、高 3.05	
2		瓦器	椀	Ⅱ E	井戸5	口11.8、高 2.9	
3		瓦器	椀	Ⅱ E	井戸5	口13.6、高(3.7)	
4		瓦器	小皿	Ⅱ E	井戸5	口8.4、底6.3、高 1.4	
5		瓦器	小皿	Ⅱ E	井戸5	口7.1、底5.7、高 1.6	
6		瓦器	小皿	Ⅱ E	井戸5	復口32.1、高(5.1)	
7		土師器	小皿	Ⅱ E	井戸5	復口7.8、復底4.0、高(1.3)	
8		土師質	土釜	Ⅱ E	井戸5	復口29.1、高(6.0)	
9		土師質	土釜	Ⅱ E	井戸5	口29.9、高(7.5)	
10		土師質	土釜	Ⅱ E	井戸5	復口22.0、高 5.1	
11		土師質	土釜	Ⅱ E	井戸5	口22.7、高(8.2)	
12		土師質	土釜	Ⅱ E	井戸5	復口22.4、高(7.6)	
13		土師質	土釜	Ⅱ E	井戸5	復口15.8、高(5.3)	
14		土師質	土釜	Ⅱ E	井戸5	復口15.6、高(3.4)	
15		土師質	土釜	Ⅱ E	井戸5	復口21.2、高(6.6)	
16		土師質	土釜	Ⅱ E	井戸5	復口20.4、高(11.8)	
17		土師質	土釜	Ⅱ E	井戸5	復口20.4、高(4.6)	

図版号	図版番号	種類	器種	地区	遺構	法量(cm)	備考
160-1	186-4	瓦器	椀	Ⅲ W	井戸6	口11.4、高 2.8	見込み輪花状暗文
2		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸6	口10.3、高(2.2)	
3		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸6	口8.6、底6.8、高 1.6	
4		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸6	口9.2、高(1.6)	
5		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸6	口9.4、底7.2、高(1.7)	
6		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸6	口9.0、底7.7、高 1.8	
7		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸6	口8.0、底6.6、高 1.8	
8		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸6	口8.0、底6.1、高 1.9	
9		土師質	土釜	Ⅲ W	井戸6	口28.8、高(5.9)	
10		瓦質	鉢	Ⅲ W	井戸6	口23.8、高(4.0)	
11	194-4	土師質	鉢	Ⅲ W	井戸6	口25.5、高(5.7)	
12	5	土師質	鉢	Ⅲ W	井戸6	口34.2、高(4.7)	
13	3	土師質	鉢	Ⅲ W	井戸6	口38.5、高(7.6)	
14		瓦器	椀	Ⅲ W	井戸8	口10.6、高 3.1	
15		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸8	口8.6、底(5.6)、高2.2	
16		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸8	口9.6、高 1.8	
17	188-8	土師器	小皿	Ⅲ W	井戸8	口7.0、底5.8、高 1.3	
18	7	土師器	小皿	Ⅲ W	井戸8	口6.8、底5.2、高 1.6	
19		瓦質	土釜	Ⅲ W	井戸8	口23.4、高(9.1)	
20		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸7	復口9.8、復底8.5、高(1.15)	
21		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸7	復口8.3、復底7.4、高 1.6	
161-1		瓦器	椀	Ⅲ W	井戸10	口12.6、高(3.2)	
2	185-8	瓦器	椀	Ⅲ W	井戸10	口13.4、高 3.5	
3	7	瓦器	椀	Ⅲ W	井戸10	口14.5、高 4.05	
4		瓦器	椀	Ⅲ W	井戸10	口12.6、高(2.9)	
5		瓦器	椀	Ⅲ W	井戸10	口13.1、高 3.2	
6		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸10	口9.5、底7.9、高 1.8	
7		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸10	口9.1、底7.4、高 1.4	
8		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸10	口9.2、底5.0、高 1.7	
9		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸10	口7.9、底6.4、高 1.45	
10		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸10	口9.2、底7.0、高 1.3	
11		土師器	小皿	Ⅲ W	井戸10	口8.8、底7.7、高 1.4	
12		土師器	小皿	Ⅲ W	井戸10	口7.6、底6.6、高 1.4	
13	188-3	土師器	小皿	Ⅲ W	井戸10	口8.0、底6.5、高 1.5	
14		土師器	小皿	Ⅲ W	井戸10	口8.0、底6.6、高 1.2	
15		土師器	小皿	Ⅲ W	井戸10	口8.4、底6.0、高 1.4	
16		土師器	小皿	Ⅲ W	井戸10	口8.0、底6.5、高 1.3	
17		土師器	小皿	Ⅲ W	井戸10	口7.2、底5.4、高 1.1	
18		土師器	小皿	Ⅲ W	井戸10	口8.7、底7.4、高 1.0	
19		須恵質	ねり鉢	Ⅲ W	井戸10	口29.2、高(5.0)	東播系
20		土師質	土釜	Ⅲ W	井戸10	口20.6、高(5.9)	
21	190-1	土師質	土釜	Ⅲ W	井戸10	口31.1、高(12.2)	
22		土師質	土釜	Ⅲ W	井戸10	口35.0、高(6.6)	
162-1	185-10	瓦器	椀	Ⅲ W	井戸9	口15.2、高台4.4、高 4.6	
2		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸9	口9.6、底7.4、高 2.1	
3		瓦器	小皿	Ⅲ W	井戸9	復口10.2、復底6.7、高(1.9)	
4		土師質	土釜	Ⅲ W	井戸9	復口22.5、高(6.2)	
5	186-10	瓦器	椀	Ⅲ W	井戸11	口13.8、底4.1、高3.7	
6	188-4	土師器	小皿	Ⅲ W	井戸11	口7.6、底5.1、高 1.5	

図番号	図版番号	種類	器種	地区	遺構	法量(cm)	備考
162-7		須恵質	ねり鉢	第W	井戸11	□25.0、高(4.3)	東播系
8		須恵質	壺	第W	井戸11	復□30.1、高(7.9)	(胴外)幅広の櫛子印キ、(内)同心円文印キ
9		須恵質	壺	第W	井戸11	復□28.5、高(6.7)	(胴外)平行印キ、(内)ナデ、東播系
10		瓦質	鉢	第W	井戸11	底12.8、高(5.9)	(外)指オサエの上をナデ、(内)ナデだがヘラ削り残る
11		瓦器	椀	第W	井戸12	□11.9、高 2.7	
12		土師器	小皿	第W	井戸12	□8.8、底6.4、高 1.6	
13		土師器	小皿	第W	井戸12	□7.3、底6.3、高 1.5	
14		土師質	土釜	第W	井戸12	□28.8、高(5.7)	
15		瓦質	土釜	第W	井戸12	□33.5、高(5.1)	
16		瓦質	土釜	第W	井戸12	□20.9、高(4.7)	
17		瓦質	土釜	第W	井戸12	□20.5、高(3.3)	
18	194-2	瓦質	鉢	第W	井戸12	□29.6、高(6.7)	(口外)ヨコナデ、体部ヘラ削り、(内)ナデ
163-1		瓦質	土釜	第W	井戸13	復□15.4、高(5.1)	
2		瓦質	土釜	第W	井戸13	□18.4、高(5.2)	
3	191-2	瓦質	土釜	第W	井戸13	復□20.5、高(10.4)	
4	188-6	土師器	小皿	第W	井戸13	□7.3、底5.8、高 5.7	
5		土師器	小皿	第W	井戸13	復□7.7、高 1.35	
6	188-10	土師器	小皿	第W	井戸13	復□7.6、高 1.25	
7		土師器	小皿	第W	井戸13	復□7.7、高 1.4	
8	192-4	瓦質	壺	第W	井戸13	復□37.0、高(7.5)	
9		瓦質	壺	第W	井戸13	復□35.0、高(6.9)	
10		瓦質	壺	第W	井戸13	復□31.6、高(6.8)	
11	194-6	瓦質	火鉢	第W	井戸13	□45.6、高(6.3)	
164-1		瓦器	椀	第W	井戸14	復□14.2、復高台4.1、高(4.7)	
2		瓦器	椀	第W	井戸14	□13.2、高 4.3	
3		瓦器	椀	第W	井戸14	□13.9、高 4.5	
4		瓦器	椀	第W	井戸14	□14.1、高 4.8	
5	186-2	瓦器	椀	第W	井戸14	□15.3、高 3.7	
6		瓦器	小皿	第W	井戸14	□8.9、底7.3、高 1.7	
7		瓦器	小皿	第W	井戸14	□8.7、底5.5、高 2.0	
8		瓦器	小皿	第W	井戸14	□8.8、底6.1、高 1.5	
9		瓦器	小皿	第W	井戸14	□8.7、底7.4、高 1.5	
10		土師器	小皿	第W	井戸14	□8.4、底6.6、高 1.4	
11		土師器	小皿	第W	井戸14	□8.2、底4.6、高 1.4	
12		土師質	土釜	第W	井戸14	□27.7、高(5.3)	
13	190-7	土師質	土釜	第W	井戸14	□23.6、高(4.4)	
14		土師質	土釜	第W	井戸14	□32.9、高(9.2)	
15		土師質	土釜	第W	井戸14	□41.1、高(6.1)	
16	195-5	須恵質	ねり鉢	第W	井戸14	□34.5、底13.8、高 12.95	東播系
17		瓦器	椀	第W	井戸15	□10.5、高 2.5	
18		土師器	小皿	第W	井戸15	□7.6、底5.4、高 1.7	
19		土師器	小皿	第W	井戸15	□7.3、底6.2、高 1.5	
166-1		瓦質	小皿	第W	井戸16	□9.5、底8.3、高 1.5	
2		瓦質	すり鉢	第W	井戸16	□25.4、高(5.0)	
3		瓦質	土釜	第W	井戸16	復□21.6、高(6.0)	
4		瓦質	壺	第W	井戸16	□17.6、高(8.5)	
5		瓦質	壺	第W	井戸16	□39.4、高(8.0)	
6		瓦質	土釜	第W	井戸17	□20.8、高(5.5)	
7		瓦質	土釜	第W	井戸17	□26.0、高(3.0)	

図番号	図版番号	種 類	器 種	地 区	遺 構	法 量(cm)	備 考
166-8	191-5	瓦質	土釜	ⅡW	井戸17	□24.0、高(4.0)	
9		瓦質	土釜	ⅡW	井戸17	□26.2、高(5.0)	
10		瓦質	土釜	ⅡW	井戸17	□19.6、高(5.0)	
11		瓦質	土釜	ⅡW	井戸17	□24.2、高(4.5)	
12		瓦質	土釜	ⅡW	井戸17	□26.6、高(5.5)	
167-1	191-7	瓦質	土釜	ⅡW	井戸17	□23.4、高(5.5)	
2		瓦質	土釜	ⅡW	井戸17	□24.5、高(4.5)	
3		瓦質	土釜	ⅡW	井戸17	□20.4、高(6.6)	
4	191-9	瓦質	土釜	ⅡW	井戸17	□28.8、高(10.0)	
5	192-2	瓦質	壺	ⅡW	井戸17	□23.4、高(4.5)	
6	8	瓦質	壺	ⅡW	井戸17	□26.2、高(5.5)	
7	6	瓦質	すり鉢	ⅡW	井戸17	□31.0、高(4.5)	
8	5	瓦質	すり鉢	ⅡW	井戸17	□33.0、高(7.0)	
9		瓦質	すり鉢	ⅡW	井戸17	底17.4、高(4.0)	

中世溝・土坑・大落ち込み出土遺物

図番号	図版番号	種 類	器 種	地 区	遺 構	法 量(cm)	備 考
168-1	185-9	瓦器	椀	ⅡW	溝21	□14.6、高台4.0、高 3.6	
2	189-4	土師質	土釜	ⅡE	溝24	□23.2、底23.0高(15.7)	
3		瓦器	椀	ⅡE	溝25	□14.9、高台4.9、高 5.1	
4		瓦器	椀	ⅡE	溝25	□15.0、高台5.0、高 4.7	
5		瓦器	椀	ⅡE	溝25	□12.8、高台2.6、高 3.4	
6		瓦器	小皿	ⅡE	溝25	□8.9、底7.2、高 1.9	
7		瓦器	小皿	ⅡE	溝25	復□9.4、復底7.2、高(2.1)	
8		瓦器	小皿	ⅡE	溝25	復□9.3、復底7.6、高(1.5)	
9		瓦器	小皿	ⅡE	溝25	□7.4、底5.4、高 1.4	
10		土師質	小皿	ⅡE	溝25	□7.8、底6.2、高 1.1	
11		土師質	小皿	ⅡE	溝25	復□9.0、復底7.0、高(1.6)	
12		土師質	小皿	ⅡE	溝25	□7.4、底5.6、高 1.2	
13		土師質	小皿	ⅡE	溝25	□6.8、底5.6、高 1.1	
14		土師質	土釜	ⅡE	溝25	復□22.2、高(7.1)	
15		土師質	土釜	ⅡW	溝25	□25.0、高(4.9)	
16		須恵質	壺	ⅡW	溝25	復□24.4、高(5.7)	東播系、(内)口縁部積ナデ、胴部ハケメ
17	184-9	瓦器	椀	ⅡW	溝28	□14.7、高台4.2、高 4.7	
18		瓦器	椀	ⅡW	溝28	□14.3、高台4.9、高 5.0	
19	184-10	瓦器	椀	ⅡW	溝28	復□16.5、復高台5.7、高(5.5)	
20		瓦器	椀	ⅡW	溝28	□10.0、高台4.8、高 5.5	
21		瓦器	椀	ⅡW	溝28	復□7.8、復高台5.4、高(4.6)	
22		瓦器	小皿	ⅡW	溝28	復□8.3、復底3.9、高(2.1)	
23		瓦器	小皿	ⅡW	溝28	□8.8、底6.9、高 1.9	
169-1		瓦質	土釜	ⅡW	溝29	復□24.8、高(4.7)	
2		瓦質	土釜	ⅡW	溝29	復□25.2、高(4.2)	
3		瓦質	土釜	ⅡW	溝29	□25.6、高(5.0)	
4		瓦質	土釜	ⅡW	溝29	復□26.4、高(7.1)	
5		須恵質	すり鉢	ⅡW	溝29	復□33.0、高(4.4)	東播系、口縁部が内湾する
6		瓦質	すり鉢	ⅡW	溝29	□29.0、高(4.6)	口縁部の内湾がない
7		瓦質	すり鉢	ⅡW	溝29	□31.3、高(8.7)	口縁外側の張り出しが縁線だけとなる
8		瓦質	火鉢	ⅡW	溝29	高(3.6)	口縁直下に格子状に削りを入れる
9		土師器	小皿	ⅡW	溝29	復□7.4、復底5.7、高 1.2	
10		瓦器	椀	ⅡW	溝30	□10.8、高 1.8	扁形になった15世紀の瓦器椀、(内)ハケメ

図番号	図版番号	種類	器種	地区	遺構	法量(cm)	備考
169-11		土師器	小皿	Ⅲ W	溝30	復口7.7、復底6.8、高 1.2	
170-1		瓦質	土釜	Ⅲ W	溝30	口20.8、高(7.4)	
2	191-4	瓦質	土釜	Ⅲ W	溝30	口28.4、高(5.9)	
3	6	瓦質	土釜	Ⅲ W	溝30	復口26.6、高(6.4)	
4		瓦質	土釜	Ⅲ W	溝30	口24.2、高(8.4)	
5		瓦質	土釜	Ⅲ W	溝30	復口23.2、高(7.4)	
6	191-8	瓦質	土釜	Ⅲ W	溝30	口30.3、高(9.0)	
7		瓦質	土釜	Ⅲ W	溝30	口27.2、高(7.0)	
8		瓦質	すり鉢	Ⅲ W	溝30	口32.2、高(6.1)	
171-1		瓦質	土釜	Ⅲ W	溝31	復口28.2、高(7.7)	
2		瓦質	土釜	Ⅲ W	溝31	復口28.4、高(8.3)	
3		瓦質	土釜	Ⅲ W	溝31	復口25.2、高(7.5)	
4		瓦質	甕	Ⅲ W	溝31	復口23.4、高(4.9)	
5		瓦質	甕	Ⅲ W	溝31	復口27.6、高(6.2)	
6	193-2	瓦質	すり鉢	Ⅲ W	溝31	復口32.6、高(7.6)	
7	4	瓦質	すり鉢	Ⅲ W	溝31	復口29.7、高(11.1)	
8	3	瓦質	すり鉢	Ⅲ W	溝31	復口28.4、高(5.7)	
172-1	191-10	瓦質	土釜？	Ⅲ W	溝31	復口45.4、高(4.6)	或は小型の弁当か
2		瓦質	土釜	Ⅲ W	溝32	復口36.8、高(5.1)	
3		瓦質	甕	Ⅲ W	溝32	復口28.4、高(4.2)	
4		瓦質	土釜	Ⅲ W	溝32	高(4.2)	溝33との合流部出土、火和型
5		瓦質	すり鉢	Ⅲ W	溝32	復口28.4、高(4.0)	
6		瓦質	土釜	Ⅲ W	溝33	口17.6、高(6.0)	
7		瓦質	土釜	Ⅲ W	溝33	復口34.3、高(7.0)	
8		瓦質	甕	Ⅲ W	溝33	口30.2、高(3.5)	
9		土師器	小皿	Ⅲ W	溝34	口7.8、底4.7、高(1.2)	
10		土師器	小皿	Ⅲ W	溝34	口7.2、底6.0、高 1.2	
11		土師器	小皿	Ⅲ W	溝34	口7.8、底6.2、高 1.3	
12		瓦質	土釜	Ⅲ W	溝34	復口29.6、高(5.1)	
13		瓦質	土釜	Ⅲ W	溝34	口16.4、高(5.5)	
14		瓦質	土釜	Ⅲ W	溝34	復口23.3、高(7.0)	
173-1		瓦器	椀	Ⅲ E	溝37	口12.4、高台2.3、高 3.5	
2		瓦器	椀	Ⅲ E	溝37	復口15.2、復高台3.6、高 4.1	
3		瓦器	椀	Ⅲ E	溝37	口15.1、高台4.0、高 4.4	
4		瓦器	小型椀	Ⅲ E	溝37	高台3.3、高(1.6)	
5		瓦器	小皿	Ⅲ E	溝37	口9.0、底7.7、高 1.2	
6		瓦器	小皿	Ⅲ E	溝37	口9.4、底7.7、高 1.4	
7		瓦器	小皿	Ⅲ E	溝37	口7.2、底5.4、高 1.4	
8		土師器	小皿	Ⅲ E	溝37	復口7.5、復底6.0、高 1.2	
9		土師器	小皿	Ⅲ E	溝37	口8.1、底4.4、高 1.3	
10		土師器	小皿	Ⅲ E	溝37	口8.2、底7.1、高 1.2	
11		土師器	小皿	Ⅲ E	溝37	復口8.0、復底6.7、高 1.2	
12		土師器	小皿	Ⅲ E	溝37	復口8.2、復底6.8、高 0.9	
13		土師質	土釜	Ⅲ E	溝37	口30.6、高(6.1)	
14		土師質	土釜	Ⅲ E	溝37	口27.3、高(5.2)	
15	186-11	瓦器	椀	Ⅲ E	溝38	口12.2、高台2.4、高 3.3	
16	12	瓦器	椀	Ⅲ E	溝38	口12.0、高台3.2、高 3.0	
17		瓦器	小皿	Ⅲ E	溝38	復口8.8、復底7.9、高 1.8	
18		瓦器	高台付小皿	Ⅲ E	溝38	復口9.2、復高台4.8、高 2.0	

図番号	図版番号	種 類	器 種	地 区	遺 構	法 量(cm)	備 考
173-19		瓦器	小皿	ⅡE	溝38	□8.2、底5.0、高 1.6	
20		瓦器	小皿	ⅡE	溝38	復□8.2、復底6.7、高 1.6	
21		瓦器	小皿	ⅡE	溝38	□8.4、底6.4、高 1.7	
22		瓦器	小皿	ⅡE	溝38	復□8.4、復底7.0、高 2.3	
23		瓦器	小皿	ⅡE	溝37	□10.3、底7.3、高 2.5	
24		瓦器	小皿	ⅡE	溝38	復□7.6、復底5.6、高 1.2	
25		瓦器	小皿	ⅡE	溝38	□8.8、底6.9、高 1.5	
26	211-2	瓦質	ミニチュア土師	ⅡE	溝38	復□4.0、高(3.0)	ミニチュア製品、胎土は瓦器同様粗い
27		須恵質	ねり鉢	ⅡE	溝38	□34.7、高(6.3)	東播系
28		瓦質	鉢	ⅡE	溝38	復□46.0、高(2.9)	焼きは検討の余地あり
174-1	187-13	土師器	小皿	ⅡW	土坑43	□7.8、底6.3、高 1.8	土坑一括品、完形
2		土師器	小皿	ⅡW	土坑43	□7.4、底6.1、高 1.6	土坑一括品、完形
3	187-12	土師器	小皿	ⅡW	土坑43	□7.7、底6.2、高 1.7	土坑一括品、完形
4	11	土師器	小皿	ⅡW	土坑43	□7.7、底5.8、高 1.6	土坑一括品、完形
5	14	土師器	小皿	ⅡW	土坑43	□7.9、底5.8、高 1.6	土坑一括品、完形
6	9	土師器	小皿	ⅡW	土坑43	□8.0、底5.5、高 1.75	土坑一括品、完形
7		土師器	小皿	ⅡW	土坑43	□7.5、底5.8、高 1.5	土坑一括品、完形
8		土師器	小皿	ⅡW	土坑43	□8.0、底6.0、高 1.8	土坑一括品、完形
9	187-10	土師器	小皿	ⅡW	土坑43	□7.8、底5.8、高 1.4	土坑一括品、完形
10		瓦器	小皿	ⅡW	土坑45	□8.6、底3.9、高 1.9	
11	184-5	瓦器	椀	ⅡE	土坑61	□14.8、高台6.0、高 5.3	
12		土師器	小皿	ⅡE	土坑61	復□9.0、復底6.0、高 1.7	
13		土師器	小皿	ⅡE	土坑61	□9.0、底4.6、高 1.4	
14		瓦器	小皿	ⅡE	土坑61	復□8.0、復底2.4、高 1.9	
15	189-6	土師質	土鍋	ⅡE	土坑61	復□34.8、高(9.5)	
16		瓦器	小皿	ⅡE	土坑56	□9.0、底7.5、高 2.4	
17	184-6	瓦器	椀	ⅡE	土坑52	□15.7、高台5.2、高 5.1	
18		瓦器	椀	ⅡE	土坑52	□11.6、高 3.3	
19		土師器	小皿	ⅡE	土坑52	復□8.4、復底6.9、高 1.8	
20		土師器	小皿	ⅡE	土坑52	□8.0、底6.8、高 1.8	
21	186-9	瓦器	椀	ⅡE	土坑59	□12.1、高 3.1	
22		土師器	小皿	ⅡE	土坑59	□7.7、底5.8、高 1.3	
23		瓦器	椀	ⅡE	溝23	□12.5、高 3.1	
24	186-6	瓦器	椀	ⅡE	土坑47	□13.0、高台2.9、高 3.2	
25		瓦器	椀	ⅡE	土坑47	復□16.6、高(4.5)	
26	186-5	瓦器	椀	ⅡE	土坑47	□13.5、高 3.5	
27		瓦器	椀	ⅡE	土坑47	復□13.2、高 3.2	
28	188-2	土師器	小皿	ⅡE	土坑47	□9.8、底6.8、高 2.0	
29	190-3	土師質	土鍋	ⅡE	土坑47	□32.2、高(9.2)	
175-1	192-1	瓦質	壺	ⅢW	土坑72	□37.9、高 24.8	
176-1		瓦器	椀	ⅢW	土坑72	□10.8、高 3.2	
2		瓦器	椀	ⅢW	土坑72	復□10.0、高 2.7	
3		瓦器	椀	ⅢW	土坑72	復□10.2、高 3.3	
4		土師器	小皿	ⅢW	土坑72	□7.3、底6.3、高 1.7	
5		土師器	小皿	ⅢW	土坑72	復□7.3、復底4.2、高 1.35	
6		土師器	小皿	ⅢW	土坑72	復□7.4、復底5.5、高 1.2	
7		瓦質	土鍋	ⅢW	土坑72	復□16.8、高(3.9)	
8		瓦質	土鍋	ⅢW	土坑72	□16.8、高(3.8)	
9		土師質	土鍋	ⅢW	土坑72	□21.2、高(5.2)	

図番号	図版番号	種類	器種	地区	遺構	法量(cm)	備考
176-10		土師質	土釜	ⅢW	土坑72	復口19.4、高(3.5)	
11		土師器	鍋	ⅢW	土坑72	復口17.7、底15.0、高 3.1	
12	211-1	須恵器	双耳壺	ⅢW	土坑72	底4.4、高(6.0)	偏平なミニチュアの双耳壺、水滴か
13		土師器	小皿	ⅢW	土坑73	口6.6、底5.0、高1.2	
14	191-3	瓦質	土釜	ⅢW	土坑73	高 13.0	
15		瓦器	椀	ⅢW	土坑80	口15.7、高台4.7、高 4.2	
16		瓦器	小皿	ⅢW	土坑74	口6.8、底5.3、高 1.1	
17		瓦器	小皿	ⅢW	土坑71	口8.6、底2.9、高 1.6	
18	188-1	土師器	小皿	ⅡE	土坑139	口9.9、底7.3、高 2.2	
19		土師器	小皿	ⅡE	土坑102	底5.3、高 1.9	
20	184-7	瓦器	椀	ⅡE	土坑第381	口14.6、高台5.6、高 4.8	別掲品、完形
21		瓦器	椀	ⅡE	土坑第381	口14.2、高台3.2、高 5.2	
22		瓦器	椀	ⅡE	土坑第381	復口14.9、高(4.9)	
23	191-1	瓦質	土釜	ⅡE	大溝も込み6	復口19.4、高(9.8)	図形は土師質土釜に同じだが、内面にハケメがある点で異る

中世日本陶器

図番号	図版番号	種類	器種	地区	遺構	法量(cm)	備考
177-1	196-2	陶器	ねり鉢	ⅡW	井戸9	高台17.2、高(7.5)	常滑
2		陶器	ねり鉢	ⅡE	井戸5	復口24.4、高(8.7)	常滑
3	196-1	陶器	ねり鉢	ⅢW	井戸9・井戸14	高台21.4、高(5.0)	常滑
4		陶器	ねり鉢	ⅡE	井戸5	復底10.6、高(3.7)	常滑
5	195-3	陶器	ねり鉢	ⅢW	土坑79・井戸13	口37.0、高(11.1)	常滑
6		陶器	ねり鉢	ⅢW	井戸7	復口20.8、高(5.6)	常滑
7	196-4	陶器	ねり鉢	ⅡE	井戸5	復口27.5、底15.9、高 8.5	常滑
8		陶器	ねり鉢	ⅡE	井戸22	復口29.0、底15.8、高 9.5	常滑
9		陶器	すり鉢	ⅢW	柵群1上・下	復口24.0、底12.0、高 9.8	備前
10		陶器	すり鉢	ⅢW	高台3層	復口26.4、高(5.2)	備前
11		陶器	すり鉢	ⅢW	小丘・溝30最上層	復口34.0、高(8.2)	備前
12		陶器	すり鉢	ⅢW	溝33	復口29.0、高(5.5)	備前
13		陶器	すり鉢	ⅢW	小丘	復口31.4、高(7.8)	備前
14	196-6	陶器	すり鉢	ⅢW	小丘	復口30.8、底18.6、高 10.7	備前
15	5	陶器	すり鉢	ⅢW	井戸16	復口25.8、高(11.0)	備前
16	7	陶器	壺	ⅢW	土坑71	底7.1、高(5.7)	備前？
17	8	陶器	鉢	ⅢW	井戸13	復口13.0、高(5.5)	備前？
178-1		陶器	壺	ⅢW	溝30最上層	口51.0、高(6.5)	
2	197-7	陶器	壺	ⅢW	井戸6・溝28	口51.8、高(10.4)	常滑
3		陶器	壺	ⅢW	井戸42	口28.0、高(4.7)	
4	197-1	陶器	壺	ⅢW	柵群1下	口27.0、高(2.5)	
5		陶器	壺	ⅢW	柵群1下	口29.6、高(5.7)	常滑
6	197-4	陶器	壺	ⅢW	井戸6	口28.0、高(5.6)	常滑
7	3	陶器	壺	ⅢW	高台3層	口49.4、高(8.2)	常滑
8	5	陶器	壺	ⅢW	高台3層	口38.1、高(6.4)	常滑
9	2	陶器	壺	ⅢW	柵群1下	口28.4、高(11.6)	常滑
10	6	陶器	壺	ⅢW	井戸11・柵群1下	口34.2、高(15.5)	常滑
11	8	陶器	壺	ⅢW	柵群1下	口35.4、高(16.3)	常滑
12		陶器	鉢	ⅢW	井戸13・柵群1下・小丘	底17.2、高(5.6)	常滑
13		陶器	鉢	ⅢW	井戸14、11	底8.7、高(8.0)	常滑
14		陶器	鉢	ⅢW	井戸17	底14.5、高(5.8)	常滑
15		陶器	鉢	ⅢW	井戸11	底17.0、高(5.7)	常滑
16		陶器	壺	ⅢW	井戸10	底14.0、高(6.2)	常滑

図番号	図版番号	種類	器種	地区	遺構	法量(cm)	備考
178-17		陶器	壺		溝30最上層・暗部1下・高台3層	底15.6、高(6.7)	常滑
18		陶器	壺	ⅢW	3層	底17.4、高(4.5)	常滑
19		陶器	壺	ⅢW	暗部1下	底 9.6、高(7.4)	常滑
20		陶器	壺	ⅢW	小穴	底11.0、高(7.2)	常滑
180-1		陶器	碗	ⅢW	溝35	□16.6、高(5.4)	瀬戸
2		陶器	鉢	ⅢW	3層	□23.4、高(4.5)	瀬戸
3		陶器	碗	ⅢW	溝30最上層	復□15.8、高(3.3)	瀬戸
4		陶器	碗	ⅢE	大部も込み8上層	□12.8、高(3.4)	瀬戸
5		陶器	鉢	ⅢW	溝30最上層	□20.1、高(2.1)	瀬戸
6		陶器	碗	ⅢW	溝31	高台 6.1、高(1.8)	瀬戸
7		陶器	碗	ⅢW	溝32・33	高台 5.0、高(1.6)	瀬戸
8		陶器	碗	ⅢW	1層	高台 4.8、高(2.1)	瀬戸
9		陶器	碗	ⅢW	土坑72	高台 6.6、高(1.8)	瀬戸
10		陶器	鉢	ⅢW	溝29	高台 5.9、高(6.4)	瀬戸
11		陶器	鉢	ⅢW	溝30	高台 9.2、高(2.1)	瀬戸、(外底)おろし目
12		陶器	小皿	ⅡE	1層	底 3.5、高(0.6)	瀬戸
13		陶器	皿	ⅡE	3層	底12.2、高(1.1)	瀬戸
14		陶器	壺	ⅢE	3層上層	肩部小片	瀬戸、褐釉、三ツ巴の押印
15		陶器	壺	ⅢW	溝33	高(2.3)	瀬戸
16		陶器	おろし皿	ⅢW	池3	底 5.4、高(1.0)	瀬戸、(内)格子状のおろし目

中世中国陶磁器

図番号	図版番号	種類	器種	地区	遺構	法量(cm)	備考
181-1	199-1	白磁	碗	ⅡE	大部も込み6	□15.0、高(3.0)	□緑玉縁
2	2	白磁	碗	ⅢW	4層	復□15.1、高(2.5)	□緑玉縁
3	6	白磁	碗	ⅡE	大部も込み6	復□14.7、高(3.2)	□緑玉縁
4	3	白磁	碗	ⅢE	溝38	復□15.6、高(3.2)	□緑玉縁
5	5	白磁	碗	ⅡE	2層	復□15.8、高(3.7)	□緑玉縁
6	4	白磁	碗	ⅢE	3層下層	復□15.0、高(1.4)	□緑玉縁
7	10	白磁	碗	ⅡE	P14 54	高台 6.8、高(2.6)	□緑玉縁となる碗の底部
8		白磁	碗	ⅡE	井戸4	高台 6.6、高(4.4)	□緑玉縁となる碗の底部
9	199-12	白磁	碗	ⅢE	3層下層	高台 4.1、高(2.7)	□緑玉縁となる碗の底部
10	7	白磁	碗	ⅢW	3層上部	復□11.8、高(2.5)	□緑端折れ
11	8	白磁	碗	ⅡE	土坑54	復□15.0、高(3.0)	□緑端折れ
12	11	白磁	碗	ⅡE	井戸4	高台 6.3、高(3.7)	□緑玉縁となる碗の底部
13		白磁	碗	ⅡE	井戸4	高台 6.9、高(2.0)	□緑玉縁となる碗の底部
14	199-13	白磁	碗	ⅢW	溝31	高台 4.1、高(2.7)	胎土黄白色で軟質
15		青磁	碗	ⅢE	3層下層	胴部小片	(内)櫛花文
16	201-1	青磁	碗	ⅡE	土坑52	□14.8、高(5.5)	(内)櫛花文
17	2	青磁	碗	ⅡE	土坑56	□15.4、高(4.1)	(外)鎬蓮弁文
18		青磁	碗	ⅡE	土坑13	□13.6、高(3.6)	(外)鎬蓮弁文
19	199-2	青磁	碗	ⅡW	井戸2	□15.4、高(5.6)	(外)鎬蓮弁文
20		青磁	碗	ⅢW	3層下層上面	□16.5、高(1.7)	(外)鎬蓮弁文
21		青磁	碗	ⅡE	井戸5	□15.2、高(2.8)	(外)鎬蓮弁文
22		青磁	碗	ⅢW	土坑78	□15.2、高(3.7)	(外)鎬蓮弁文
23		青磁	碗	ⅢW	3層	□16.9、高(2.5)	(外)鎬蓮弁文
24		青磁	碗	ⅢE	3層上層下部	□縁部小片	(外)無文、(内)蓮弁文
25	201-5	青磁	碗	ⅢE	池1下層	□縁部小片	(外)雲文、(内)櫛花文?
26	9	青磁	碗	ⅢE	池1下層	□縁部小片	(外)雲文、(内)蓮弁文
27	4	青磁	碗	ⅡE	3層下層	□14.0、高(2.1)	(外)蓮弁文に掻落し、(内)掻落し

図番号	図版番号	種類	器種	地区	遺構	法量(cm)	備考
181-28	200-8	青磁	碗	ⅢW	1層	口14.9、高(3.7)	(内)型押しの花文？
29	201-6	青磁	碗	ⅢW	小丘	口14.8、高(3.0)	(外・内)無文
30	3	青磁	碗	ⅢW	小丘	口12.1、高(4.2)	(外・内)無文
31	13	青磁	碗	ⅡW	4層	高台 4.9、高(2.7)	(外)櫛描き、(内)蓮花文
32	8	青磁	碗	ⅢW	小丘	復高台 4.4、高(1.9)	(外)櫛描き、(内)不明
33	12	青磁	碗	ⅡE	井戸5	復高台 5.3、高(1.8)	
34	14	青磁	碗	ⅢE	3層下層	復高台 5.4、高(2.0)	
35		青磁	碗	ⅢW	溝30最上層	復高台 5.2、高(2.9)	
36	201-11	青磁	碗	ⅡE	3層	復高台 4.8、高(2.2)	
37		青磁	碗	ⅢE	1層	復高台 6.4、高(3.0)	
38	201-7	青磁	碗	ⅡE	井戸28	復高台 4.6、高(2.1)	
39	10	青磁	小碗	ⅢW	3層	復高台 3.5、高(1.4)	
40		青磁	碗	ⅢW	井戸17、溝42	復口 4.8、復高台 5.5、高 7.0	(外)無文、(内)浮文
41	200-4	染付	碗	ⅢE	井戸18	高(2.2)	見込みにはら見文
42	3	染付	碗	ⅢE	溝1	高(2.4)	(外)染付、(内)口縁下に線
182-1	198-5	白磁	碗	ⅡE	大部も込み6	復口15.0、高(3.0)	
2	200-10	青磁	皿	ⅡE	3層	復底 4.6、高(1.1)	
3	9	青磁	皿	ⅡE	大部も込み6	復口10.3、復底 4.3、高 2.2	
4	11	青磁	皿	ⅢE	3層下層	復高台 5.2、高(1.2)	
5	12	青磁	皿	ⅡE	井戸5	復高台 5.3、高(1.2)	
6	5	青磁	皿	ⅢE	3層上層	復口10.7、高(2.1)	
7	1	青磁	皿	ⅡE	3層	復口10.2、高(2.1)	
8	199-6	青磁	皿	ⅢW	井戸16	口12.4、高台 7.6、高 3.4	見込みにスタンプの花文、(外底)回春
9	199-17	白磁	皿	ⅢW	溝31	復口11.1、高(1.6)	
10	14	白磁	胴部小皿	ⅢW	溝30	復口 8.9、高(2.5)	
11	198-14	白磁	口禿げ小皿	ⅡE	3層	復口11.8、底 7.4、高 2.4	
12	199-21	白磁	口禿げ小皿	ⅢW	井戸11	復口10.1、復 5.8、高 2.8	
13	198-3	白磁	碗	ⅡE	大部も込み6	復口14.7、高(3.2)	
14	199-23	白磁	皿	ⅢW	土坑51	復高台 8.5、高(1.3)	削り痕が連続に残る
15	200-7	青磁	皿	ⅢW	高台Pit 1	口縁部小片	(外)圏線、(内)内へ向かって圏線
16	199-18	白磁	瓶	ⅢW	溝30	高(5.4)	玉縁白磁碗と同時期
17	22	白磁	瓶	ⅢW	礫群1	高(3.7)	玉縁白磁碗と同時期
18	26	白磁	瓶	ⅢW	井戸11	高(3.9)	玉縁白磁碗と同時期
19	25	青磁	碗	ⅢW	1層	復口14.9、高(3.7)	
20		白磁	八角小坏	ⅡW	井戸3	復高台 3.1、高(1.8)	(体外)面取り

近世日本陶磁器

図番号	図版番号	種類	器種	地区	遺構	法量(cm)	備考
206-1		陶器	皿	ⅢW	礫群1下	復高台 4.2、高(1.4)	唐津、見込みに砂目土、胎土色の釉
2		染付	鉢	ⅡE	井戸29	口14.3、高(4.0)	伊万里、蓮弁文
3	215-1	染付	碗	ⅡE	井戸25	復口 9.6、復高台 3.6、高 5.4	伊万里、鳳と雲文、コンニャク印刷手
4		染付	碗	ⅢW	溝3	復口 9.8、復高台 3.9、高 4.5	伊万里
5		染付	碗	ⅢW	溝3	復高台 4.4、高(2.6)	伊万里、二重網文
6	215-4	染付	碗	ⅢW	溝3	口11.0、高台 4.4、高 4.6	伊万里、梅文
7	3	染付	碗	ⅢW	小丘	復口11.0、復高台 4.2、高 4.7	伊万里、梅文
8	5	染付	碗	ⅢW	溝3	口10.2、復高台 4.0、高 5.7	伊万里、井桁と雲文、コンニャク印刷手
9	2	染付	碗	ⅡE	2層	口12.0、高台 4.4、高 4.5	伊万里、井桁内花文、コンニャク印刷手
10		染付	碗	ⅢW	小丘	高台 3.7、高(3.4)	伊万里、井桁文、コンニャク印刷手
11		染付	碗	ⅢW	溝3	復口 9.8、復高台 4.5、高 5.8	草文、高高台
12	215-7	染付	碗	ⅢW	小丘	復口10.5、復高台 4.2、高 5.8	平行線に草花文

図番号	図版番号	種類	器種	地区	遺構	法量(cm)	備考
206-13	215-6	染付	碗	ⅢW	池3	復口10.4、復高台 3.8、高 6.1	胴部の等し、見込み松竹梅の時器
14	8	染付	碗	ⅢW	池3	口10.6、高台 3.6、高 5.5	(外)上下に雷紋文、中央に草花文
15		染付	碗	ⅢW	2層	復高台 8.4、高(1.9)	(外)唐草文、(内)草花文、上質
16		染付	碗	ⅢW	池3	復口13.8、復高台 6.5、高 3.1	見込み五弁花コンニャク印刷手
17		染付	鉢子	ⅢW	小丘	復高台 5.8、高(5.1)	文様不明
18		染付	小皿	ⅢW	池3	高台 3.0、高(6.4)	伊万里、(外)桜と柳文
19		青磁染付	碗	ⅡE	井戸24	復高台 4.8、高(2.6)	伊万里、(外)青磁、(内)染付
20		陶器	皿	ⅢW	3層	高台 4.4、高(2.6)	京焼、見込みに山水文、(外底)「清水」の草書印
21		陶器	碗	ⅢW	小丘	復高台 5.0、高(5.0)	肥前系、橙黄色の釉、胎土軟質
22		陶器	碗	ⅢW	1層	復高台 4.6、高(4.7)	肥前系、橙黄色の釉、胎土軟質
23		赤絵	壺	ⅢW	小丘	高(5.8)	頸部に圏線、体部文不明
24		陶器	皿	ⅢW	池3	復口10.3、復底 3.5、高 2.2	灰釉、緑灰色の釉、(外)下半露胎
25		陶器	鉢	ⅢW	池3	復口10.6、復高台 5.0、高 6.5	褐釉、(外)下方露胎
26		陶器	灯明皿	ⅢW	池3	復高台 3.8、高(4.6)	灰釉、緑灰色の釉
27		陶器	すり鉢	ⅢW	池3	口22.1、底 9.9、高 8.0	備前
207-1	217-1	瓦質	火鉢	ⅡW	井戸2	復口16.4、復底20.2、高 18.0	桜花に鳳凰を陰刻、瓦質だが暗黄色
2		土師質	鉢形	ⅢE	2層	復口20.1、高(4.0)	小片なので類例より復原

V 万崎池遺跡

V 万崎池遺跡

第1章 第Ⅰ調査区

第1節 はじめに

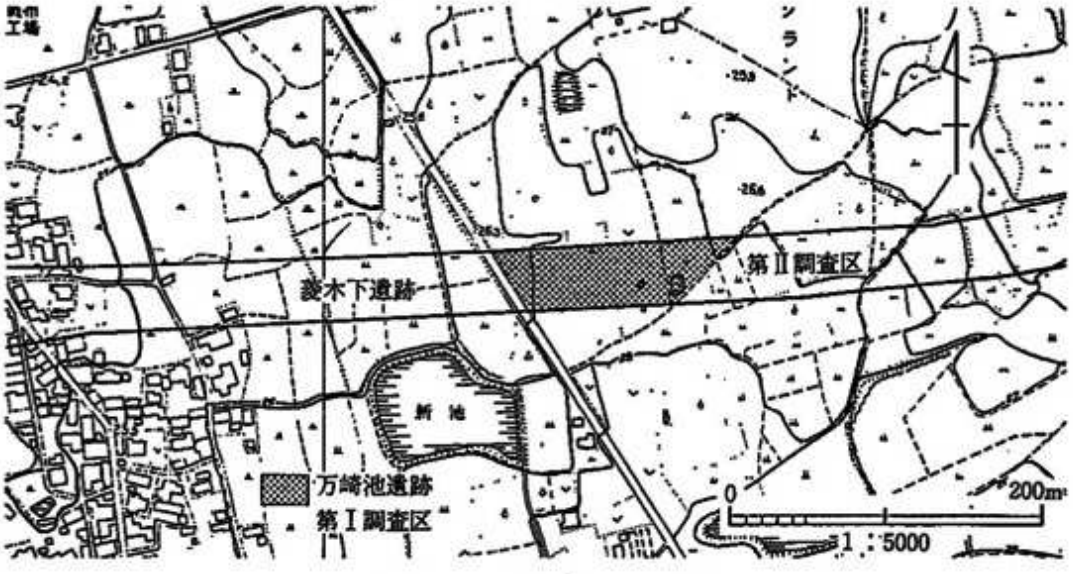
当調査区は、堺市菱木に所在し、万崎池遺跡の西端に位置する。西は、南北に走る府道別所草部線を境にして菱木下遺跡と、東は南西から北東方向にのびる谷を隔てて万崎池遺跡第Ⅱ調査区と接している。

調査は、東西約155m、南北約40m、面積4833㎡を昭和55年7月26日から昭和56年8月12日までの約12.5ケ月間実施した。

調査の方法としては、残土置場確保の為に、調査区を南北に2分し南半より先に着手し、南半終了後北半部分に取りかかった。調査区内の割り付け[1)]は、国土座標を用い、北は全て座標北である。尚、座標の数値は遺構全体図1/200（付図）に記したとおりである。

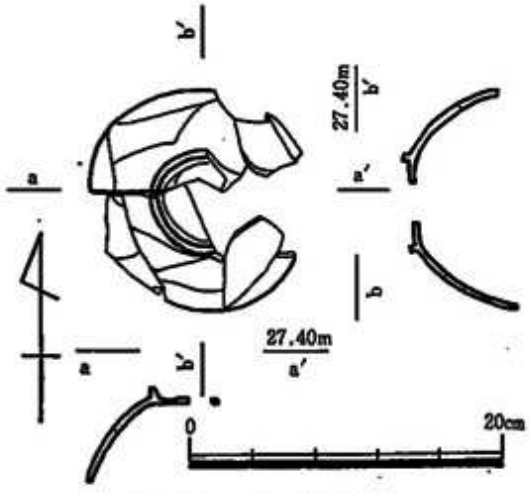
第2節 微地形と層序

万崎池遺跡は、泉北丘陵内のいわゆる栂丘陵の北端に広がる洪積段丘中位面に立地する。当調査区の微地形としては、調査区西端に西へ落ちる明瞭な段（比高差 0.7m）がある。現在は、盛土され段差を解消しているが、盛土を除去すると旧耕土が見られた。おそらく、府道別所草部線



第1図 調査区位置図

設置の際に整地されたものと思われる。段の上場から東へは、第Ⅱ調査区との境をなす谷まで平坦面が続く。地形は、調査区北西端が最も低く、地山面でT.P.+26.4mを測り、南東に向かって徐々に上昇し、調査区南東端の地山面でT.P.+27m前後を測る。ただ、調査区西部の約⅔が、旧工場の基礎等によってはげしく攪乱されており、平坦面を残している部分を削平されているものと思われる。



第２図　黒色土器出土状態

基本的な層序は、調査区北部では黄灰色粘土層からなる地山の上に暗黄灰色粘質土層（厚さ20～30cm）があり、その上部に床土・表土（耕作土）又は盛土が見られる。しかし、先にも述べた様に西側は旧工場による攪乱・削平がはげしく、黄灰色粘土層の上部には盛土しか認められない。南部を見ると北部とは地山の様相が異なる。暗茶褐色砂礫土層である。その上部に暗褐色粘質土層（厚さ20～30cm）が堆積しており、この層より黒色土器塊（第２図）が１個体出土した。暗褐色粘質土層の上部は、床土・表土（耕作土）である。

第３節　遺　　構（付図８；図版75～80）

今回の調査で検出された遺構は、溝・土壙・井戸・不定形な落ち込み・ピット等である。遺構の分布は、調査区西北部が攪乱・削平がはげしい為に南西部と東部に限られる。

各遺構の時期としては、溝（ＳＤＡ１）が古墳時代中期の可能性を持つ。井戸（ＳＥ１・２）は、共に近世から近代にかけての遺物を出土した。しかし、その他の遺構については、出土遺物がほとんど認められず時期は不明である。

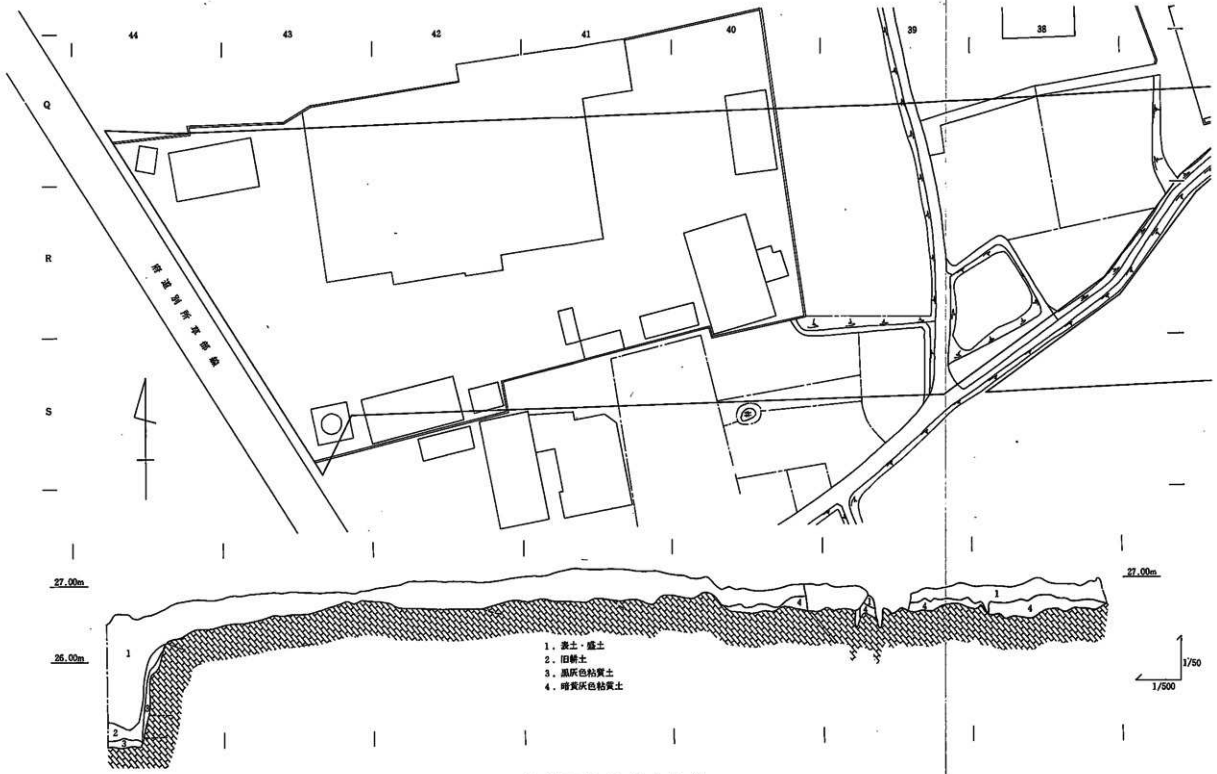
以下、主要遺構についての説明を行なう。

溝（ＳＤＡ１・２）

ＳＤＡ１　R41区東部に検出された溝である。南北に弧状を描くもので、東側の肩は削平されており、西肩のみ検出された。検出幅は、広い所で約４ｍ、狭い所で約１ｍである。埋土は、上下２層に分かれ、上層は淡褐色土層、下層は明褐色土層である。上下層共に埴輪片を多量に含んでいるが、上層には瓦器等の中世遺物も若干含んでいる。

ＳＤＡ２　Q40～S40にかけて南から北にのびる溝である。R40区内で削平によりとぎれているが、幅員約１～２ｍ、深さ10～30cmである。埋土は、南部では灰褐色粘質土層、北部では淡灰褐色粘性砂質土層である。出土遺物は無く、時期は不明である。

土壙（ＳＫＡ１～６）


44
43
42
41
40
39
38
Q
R
S
27.00m
26.00m
27.00m
1．表土・盛土
2．旧耕土
3．黒灰色粘質土
4．暗黄灰色粘質土
1/50
1/500

第3図 現況及び土層図

これらの土壙は、全て調査区東部のQ38・39、R38・40区にかけて検出されたものである。SKA1・6は、深さ5cm程度の浅いもので地山の凹凸の可能性もある。又、6基の土壙からは、遺物が検出されなかった為に時期は不明である。

SKA2　隅丸方形の土壙である。南北1.0m、東西1.2m、深さ12cm。埋土は、暗黄灰茶色粘質土層である。

SKA3　SKA2の東にあるもので、隅丸方形土壙である。南北0.94m、東西 1.2m、深さ5cm程度。埋土は、暗黄灰茶色粘質土層である。

SKA4　形状は、楕円形に近い。長径（南北）0.86m、短径（東西）0.75m、深さ23cmと他に比べて小さいものである。埋土は、上下2層に分かれ、上層は暗黄褐色粘質土層、下層は暗黄灰色粘質土層である。

SKA5　R38区の北東にある。隅丸長方形の土壙である。東西 1.4m、南北0.91m、深さ35cmである。埋土は、上下2層に分かれ、上層は淡灰黄色粘性砂質土層、下層は淡灰茶色粘性砂質土層である。

井戸（SE1～6）

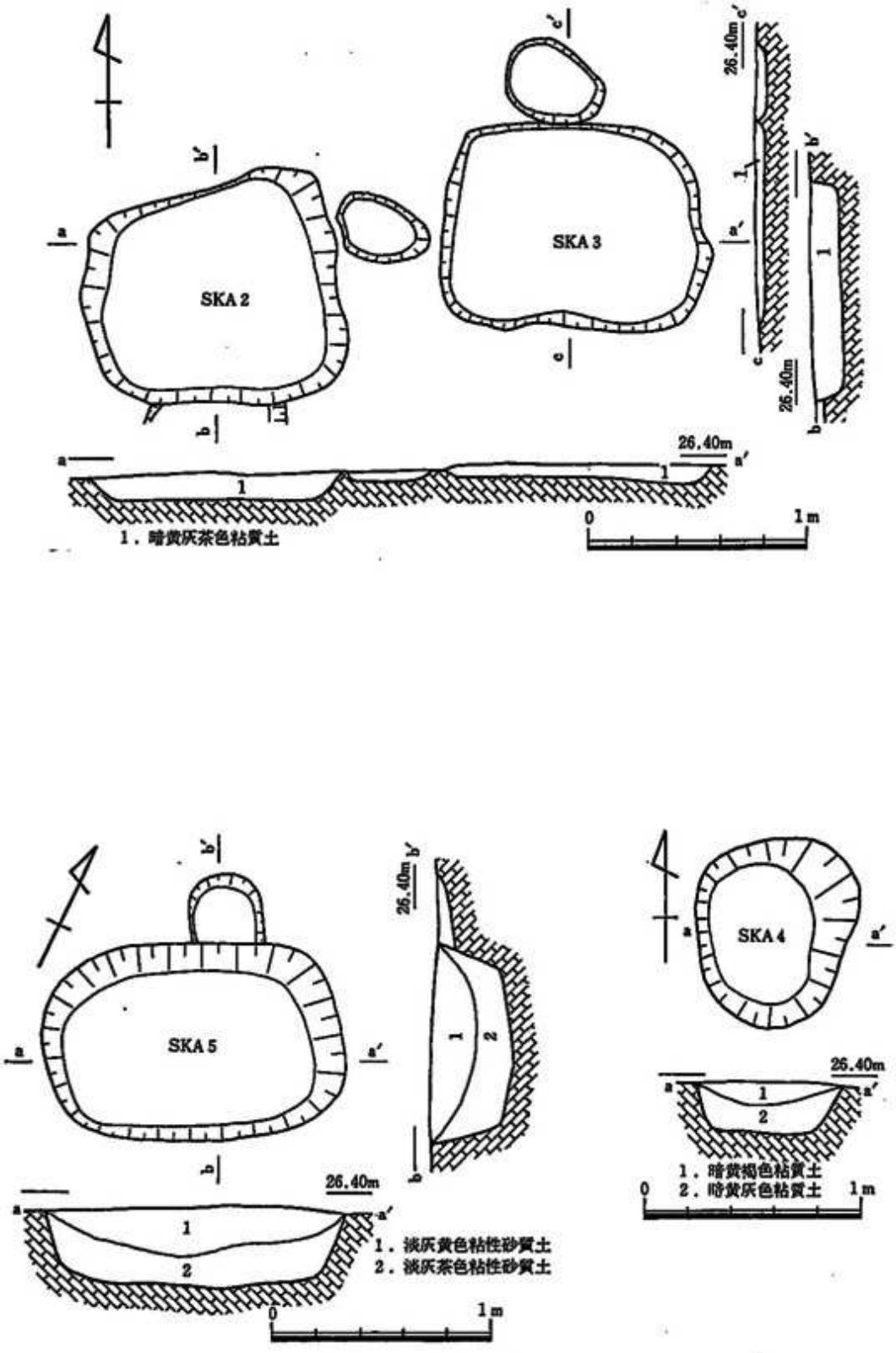
6基検出された。全て平面は円形を呈した素掘りの井戸である。各井戸の直径は、SE1が約3m、SE2が約 3.5m、SE3が約6m、SE4が約2.5m、SE5が約4.5m、SE6が約1mである。深さは、全て2m以上に至るために完掘していない。ただ2m掘下げた後長さ1mのボーリングステッキによって底の高さを確認しようとしたが、底に達するものはなかった。時期としては、出土遺物から近世末から近代に至る時期のものと考えられる。

ピット群

調査区南西端S42区と北東端Q38・39区の2ケ所に集中的にピットが検出された。これらのピットは、全て地山面より検出されたものである。S42区のものは、全て円形を呈し、深さ10～20cmである。埋土は、暗褐色粘質土・黒灰色粘質土・灰褐色粘質土と様々で必ずしも同時期のものとは言えない。遺物は全く出土しておらず、建物・柵列等として認め得るものもない。Q38・39区のものは、円形と方形のものがあり、方形ピットは東部に集中している。深さは、5～10cmと比較的浅い。埋土は、暗黄色粘質土で一様である。出土遺物は無く、建物・柵列等として認められるものも無い。

第4節　遺　　物（第5・6図；図版218～220）

今回の調査で出土した遺物は、総量で整理用コンテナ5箱程度である。その内訳は、土器・瓦・埴輪等である。土器は、出土遺物の大半を占め、古墳時代から江戸時代に至るもので、須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・陶器・磁器等である。しかし、ほとんど細片であり図示し得るものは少なかった。又、遺構に伴って出土した遺物は、非常に少なく、SDA1から出土した埴輪を除くと、近世末から近代にかけての井戸から若干出土したものの、大半は調査区西北端に見ら


SKA 2
SKA 3
SKA 4
SKA 5
26.40m
1．暗黄灰茶色粘質土
1．淡灰黄色粘性砂質土
2．淡灰茶色粘性砂質土
1．暗黄褐色粘質土
2．暗黄灰色粘質土
0
1m

第4図　SKA2・3・4・5

れた落ち込みの整地層から検出されたものである。

よって、調査区西北端落ち込みの整地層出土の土器とＳＤＡ１出土の埴輪を中心に説明する事にする。

又、各遺物の法量、調整・成形技法等については観察表に記したとおりである。

須恵器　（第６図１；図版219－５；図版218－６・７）

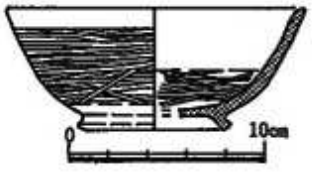
１は、甕の口縁部である。１は、口縁部外面を肥厚させる事によって玉縁状を呈している。内外面共に自然釉が付着している。６（図版218）は、口縁部を若干外反させ、さらに外面を肥厚させている。肥厚部分下方に一条の沈線をめぐらす。端部は、内上方につまみ出し丸くおさめている。肥厚部分直下には、波状文が２段認められる。７（図版218）は、器台である。内面に約３cm置きに粘土の継目痕が認められる。透しは、長方形を呈していると思われる。

土師器　（第６図２～６・23；図版第218・219）

２～５は、羽釜の口縁部である。口縁部を「く」の字状に外上方へ屈曲させるものである。23は、おそらく火舎の一種と思われる。底部よりほぼ垂直に立ち上がり口縁部に達する。外面には、ススが付着している。

黒色土器　（第５図；図版第218－４）

暗褐色粘質土層から出土したものである。底部に外側にふんばった高台を付す。体部はやや内彎気味に外上方へ立ち上がり口縁端部に達する。口縁部内面に一条の沈線が所々認められるがあまりしっかりしたものではない。内外面共に黒色を呈している。



第５図　黒色土器

瓦器　（第６図７～19；図版第218・219）

７～13は、皿である。７～10には、底部内面に粗雑な暗文がみられ、12には、ヘラ先端で施した様な５条の平行線がみられる。11・13は風化がはげしく不明である。14～19は、椀である。16がややしっかりした高台を付しているが、その他は高台径も小さく、低いものである。

陶器　（第６図21、22、27；図版第218）

21は、形態についてはよくわからないが、内面から口縁端部に至るまでススが付着している。22は、甕の底部である。常滑焼の可能性がある。27は、擂鉢の口縁部である。内面に施された条線に単位は認められない。備前焼であろう。

磁器　（第６図24～26；図版第218）

24～26は、染付の椀である。

埴輪　（第６図28～31、図版第219）

全てＳＤＡ１から出土したものである。整理用コンテナに約半分出土したが、いずれも細片である。そのうち朝顔形埴輪（第６図―28）が数点見られるが、その他は円筒埴輪であり、形象埴輪はみられない。風化がはげしく、調整を観察できるものはきわめて少ないが、内外面共に横方向のハケ調整が認められる。ただし30だけは、タガより下部に縦方向のハケ調整が施されている。

おそらく円筒埴輪の最下段の破片であろう。黒斑が見受けられるものがいくつかある。タガの形状は、断面台形を呈しており、体部との接合の際に強いナデによってタガ先端部に凹みが生じているものもある。全体的に時期差は認められないと考えられる。

第5節　ま　と　め

当調査区は、北西部分を旧工場によって大きく攪乱・削平（調査区の約⅓）されながらも、いくつかの新知見を得る事ができた。

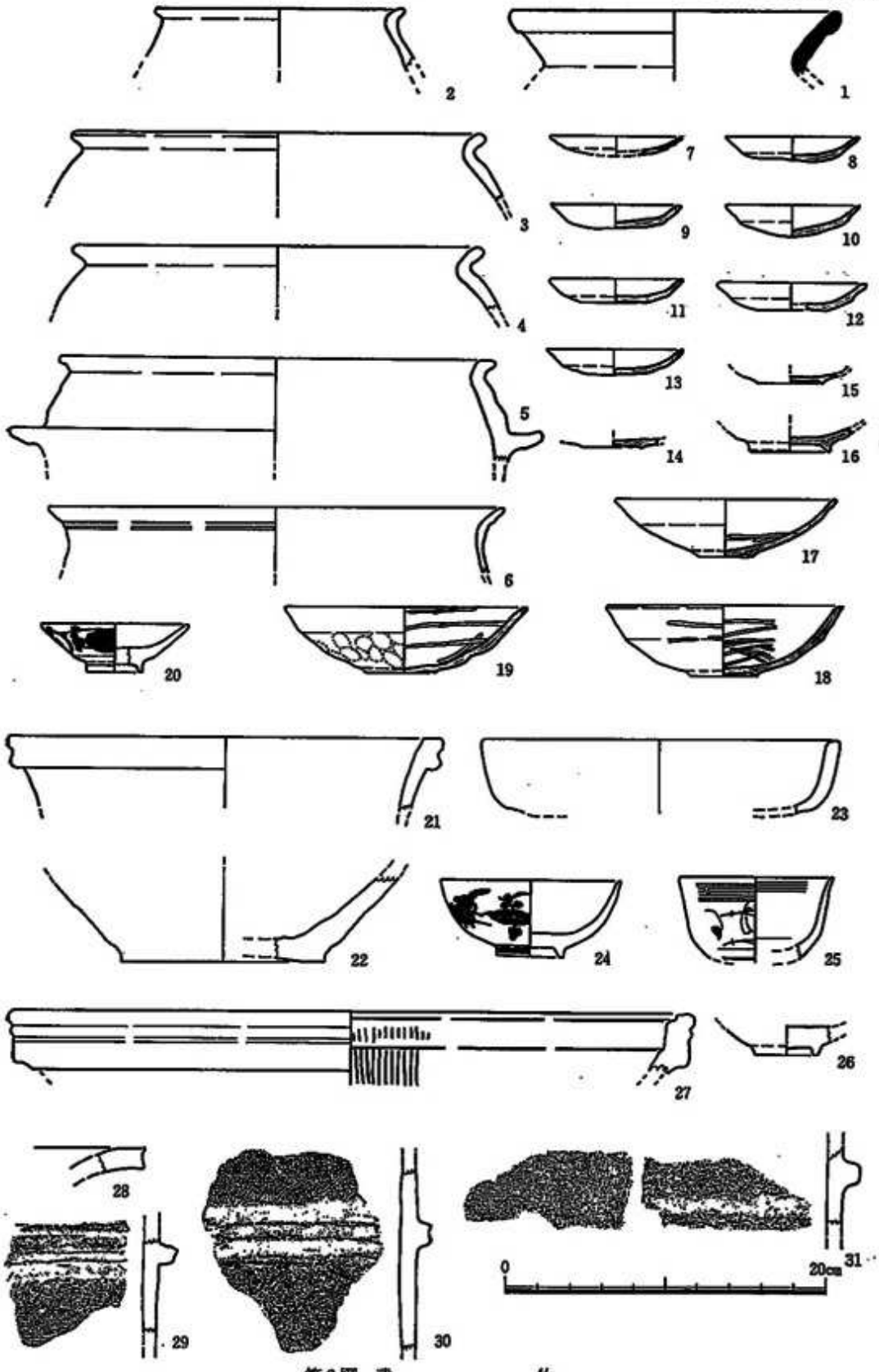
まず第1に、R41区東部に検出された溝（SDA1）である。埋土内に多量の埴輪を包含し、しかも溝の形状が弧を描く事から古墳の一部の可能性がある。埴輪から時期を決定するならば、黒斑の認められる破片がある事、タガが断面台形を呈するものが大半を示す事、外面調整に横ハケが施されている事（外面調査の横ハケは、細片の為に連続しているのか、断続的に施されているのかは確認できない）、内面調整にナデ・ハケが認められる事等から川西編年の第Ⅲ期（5世紀前葉）と考えられる。しかし、出土した埴輪が量が多いものの細片であり、風化がはげしく、SDA1の上層には瓦器が若干混入している点等、古墳とするには否定的な要素も決して無い訳では無い。ただSDA1を古墳の一部と断定できないとしても、5世紀前葉の古墳が付近に存在した事は誤り無いと思われる。泉北丘陵が、須恵器生産地（陶邑）となる直前の様相を知る重要な資料と言える。又、万崎池遺跡第Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ調査区に多数検出された古墳時代後期の土壙墓群、未調査ではあるが第Ⅱ調査区の「ネコ塚」と呼称される墳丘状の高まり、西に接する菱木下遺跡第Ⅲ調査区に検出された土壙群及び多量に出土した陶棺片との関連も大いに注目されるところである。

次に、調査区西端の段差の整地層から比較的多数の遺物が出土した。先に遺物の項でも述べた様に、今回の調査で出土した遺物の大半が集中している。6世紀後半の須恵器から18世紀の伊万里焼に至るまで様々な時期のものが含まれていた。中でも13世紀中葉の瓦器は、椀・皿共に出土量が多く、残存状態も良い。特に、第6図9・11・13・19は完形品である。これは、近くにこの時期の遺構が存在した事を裏付ける資料と言える。

最後に調査区北東部に検出された6基の土壙について若干触れると、出土遺物が全くみられない為に時期及び機能を確定する事はむずかしいが、万崎池遺跡第4調査区に検出された土壙に形状は似ている。第4調査区のものは、当調査区の土壙より一回り大きく、骨を出土している事から中世墓とされている。

註

1）　国土座標軸に合わせて20mメッシュの地区割をした。第3図に示したとおりである。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
0
20cm

第6図　遺　　物

付、万崎池遺跡第Ⅰ調査区出土遺物観察表

凡 例

1．法量については、(　)内残存値、推：推定値、復：復原値、高：器高、残存：破片の残存値を示し、口、胴、底などは径を示す。

2．胎土には長石、石英、チャート、くさり礫砂粒を主に含むが、それ以外の特徴的な砂粒を記入した。砂粒は大きさにより、大＞5㎜、2㎜＜中≦5㎜、0.5＜細≦2㎜、微≦0.5㎜とした。

図部分	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・施釉・その他)
5－1	221－4	黒色土器	椀	暗褐色粘質土	復口15.2、高6.4	(外・内)横ナデ。(外底)ヘラ削り？	精良、黒灰色・(断)暗茶灰色、良好
6－1	222－5	須恵器	甕	SKN 1　R44-b 4	復口20.2、高(4.0)	(外・内)回転ナデ。	精良、淡灰色・灰色、良好
2	1	土師器	羽釜	SKN 1　R45-a 1	復口15.4、高(3.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、淡黄灰色、普通
3		土師器	羽釜	SKN 1	復口24.8、高(4.3)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、淡黄灰色、普通
4	222－2	土師器	羽釜	SKN 1	復口24.8、高(4.0)	(外)ナデ。(内口)ナデ。(内体)板状工具によるナデ。	雲母・砂粒(含)、淡黄灰色、普通
5	4	土師器	甕	SKN 1	復口28.4、高(4.1)	(外)ナデ。(内)ハケ後ナデ。	雲母・砂粒(含)、淡赤褐色、普通
6	3	土師器	羽釜	SKN 1	復口27.0、高(5.5)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、淡赤褐色、普通
7	7	瓦器	小皿	SKN 1　R45-a 3	復口 8.2、高(1.1)	(外・内口)ナデ。(外底)指オサエ。	精良、(外)淡灰色・(内)淡黄灰色・(断)淡灰白色、普通
8	221－1	瓦器	小皿	SKN 1　R44-b 1	口 8.2、高 1.6	(外口・内)ナデ。(外底)指オサエ。	精良、暗灰色、普通
9	2	瓦器	小皿	SKN 1　R44-b 1	口 8.1、高 1.6	(外口・内)ナデ。(外底)指オサエ。	精良、黄灰色・(断)淡灰白色、普通
10	222－8	瓦器	小皿	SKN 1　R45-a 3	口 8.2、高 2.0	(外口・内)ナデ。(外底)指オサエ。	精良、淡黄灰色・(断)淡灰色、普通
11	6	瓦器	小皿	SKN 1　R45-a 3	口 8.2、高 1.6	(外口・内)ナデ。(外底)指オサエ。	精良、黄灰色・(断)淡灰色、普通
12	12	瓦器	小皿	SKN 1　R45-a 3	復口 8.8、高 1.8	(外口・内)ナデ。(外底)指オサエ。	精良、(外・断)淡灰色・(内)淡黄灰色、普通
13		瓦器	小皿	SKN 1　R44-b 1	口 8.5、高 1.6	(外口・内)ナデ。(外底)指オサエ。	精良、淡黄灰色、普通
14		瓦器	椀	SKN 1	底 3.6、高(0.5)	(外高台接合部・内)ナデ。(外底)オサエ。	精良、黄灰色・(断)淡灰色、普通
15		瓦器	椀	SKN 1　R45-a 1	底 4.1、高(0.7)	(外高台接合部・内)ナデ。(外底)オサエ。	精良、淡灰色、普通
16	222－11	瓦器	椀	SKN 1　R44-b 4	底 4.8、高(1.6)	(外高台接合部・内)ナデ。(外底)オサエ。	精良、淡黄灰色・(断)淡灰色、普通
17	9	瓦器	椀	SKN 1　R44-b 1	口13.6、底 3.2、高 3.6	(外口・内)横ナデ。(外体・底)指オサエ。	精良、(外)淡灰色・(内)淡黄灰色・(断)淡灰白色、普通
18	10	瓦器	椀	SKN 1　R45-a 3	復口14.7、底 4.2、高 4.5	(外口・内)横ナデ。(外体・底)指オサエ。	精良、(外)淡灰色・(内・断)淡灰白色、普通
19	221－5	瓦器	椀	SKN 1　R44-b 1	復口15.0、底 4.3、高 4.1	(外口・内)横ナデ。(外体・底)指オサエ。	精良、淡灰色・(断)淡灰白色、普通
20	222－13	染付	碗	SKN 1　R45-a 3	復口 9.1、復底 3.4、高 3.0	(外・内)横ナデ。	極めて精良、淡灰白色、普通
21	221－9	陶器	不明	R39-b 4　黄褐色土上層	復口26.8、高(4.6)	(外・内)横ナデ。	精良、茶褐色・(断)赤褐色、良好
22	13	瓦器	甕	SKN 1	復底12.7、高(5.3)	(外・内)回転ナデ。(外底)ナデ。	精良、(外)茶褐色・(内)淡茶黄色・(断)淡灰色、普通
23	10	土師器	施釜	SE 3　暗灰色粘土	復口22.0、高(4.6)	(外・内)横ナデ。	精良、淡灰褐色、普通
24	3	染付	碗	SE 3　暗灰色粘土	口11.2、底 4.2、高 4.8	(外・内)横ナデ。(内底面)輪状に砂付着、その部分に釉なし。	極めて精良、(外)淡灰色・(内)淡灰白色・(断)白灰色、普通
25	12	染付	碗	SKN 1	復口 9.5、高(5.0)	(外・内)横ナデ。	極めて精良、淡灰白色、普通
26		磁器？	碗	SE 3　暗灰色粘土	底 3.6、高(1.9)	(外・内)横ナデ。(内底面)輪状に砂付着。その部分に釉なし。	極めて精良、淡灰色・(断)淡灰色、普通
27	221－11	陶器	鉢	SKN 1	復口21.0、高(4.5)	(外・内)横ナデ。	灰白、赤褐色、普通
28	223－11	円筒	埴輪	SDA 1　赤褐色土	高(1.5)	(外・内)横ハケのちナデ。	金雲母(少)・砂粒(少)、暗褐色、良好
29	13	円筒	埴輪	SDA 1　赤褐色土	高(5.9)	(外)横ハケ。(内)横ハケのちナデ。	金雲母(多)・砂粒(少)、暗褐色、良好
30	16	円筒	埴輪	SDA 1　赤褐色土	高(11.4)	(外)横ハケ。(内)指オサエ、ナデ？	金雲母(多)・砂粒(少)、暗褐色、良好
31	1	円筒	埴輪	SDA 1　赤褐色土	高(4.3)	(外)剥離のため不明。(内)横ハケ。	金雲母(含)、淡黄灰色・淡黄褐色、良好

第２章　第Ⅱ調査区

第１節　はじめに

西に和田川、東に石津川の谷に挟まれた、北へ延びる丘陵の中央に、更に、北に開口する谷の西側に位置し、谷の東側の台地には、５世紀前半の住居跡が多数検出された。万崎池遺跡第Ⅱ調査区となる。当調査区の西側には、万崎池遺跡第Ⅰ調査区・菱木下遺跡へと続く。

第２節　微地形と層序

当調査区の基本的な層序は、耕土・床土・古墳時代から中世までの包含層・黄褐色粘土の地山となる。当調査区の東側は、谷に向っての傾斜面となり、包含層は、やや厚くなっている。西側においては、耕土・床土の下層は、東側で検出された黄褐色粘土の地山は検出されず、礫層となっている地点と、包含層（埋土）の存在する地点がある。

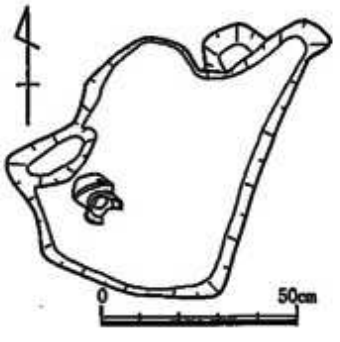
第３節　遺　　構（付図９；図版81）

当調査区の西半は、近世・近代において、粘土が採土され、礫層が耕土・床土を除去すると露出している。粘土を採土した跡である帯状の掘り込みの埋土内より、瓦・染付陶磁が少量出土した。

当調査区の遺構の全ては、東側の谷の縁辺部に位置していた。

当調査区において、検出された遺構は、大型の土壙と小型の土壙の２種に大別できる。大型の土壙の埋土内には、須恵器・陶磁の小片が少量検出され、この大型土壙は、西側の帯状の掘り込みと同様に粘土を採掘した跡と考えられる。検出した土壙の総数は、134基を数える。この中には、本来、ピットと呼ばれる直径20cm前後のものまで含まれている。

土壙は、土壙番号（１）～（80）を含む84基のＡグループと土壙番号（81）～（130）までの50基のＢグループの２グループに大別できる。Ａ・Ｂ両グループは、土壙内に埋っていた土の色調の違いにより分けることができる。Ｂグループの特徴は、その多くが直径20cm前後の土壙で、本来、ピットと呼ばれているものである。そして、これらの土壙内に遺物もなく、また、土壙間での切り合い関係もない。土壙検出面の上面を覆っている包含層は、８世紀の須恵器・土師器等の遺物を包含しているので、Ｂグループの土壙は、８世紀を下らないものと考えられる。（土壙106・130を除く）



第７図　ＳＫＴ45平面図

Ａグループの土壙の多くは、不定形であり、大は 155cm×75

cm、小は38cm×28cmを測る。Aグループの土壙は、Bグループと比較すると大きく、また、残存する掘方も深い。

土壙45は、長軸88cm、短軸70cm、深さ15cmを測る不定形土壙であり、土壙底部を掘り窪めて瑳を埋納していた。埋納されていた瑳は、口縁部の一部を意図的に打ち欠いており、打ち欠いた部分を下にして置かれており、土壙上面が後世に削平された時に欠けたものでないことが知られる。

土壙59は、長軸 155cm、短軸75cm、深さ13cmを測る不定形土壙である。土壙内には、歪な高坏が埋納されていた。

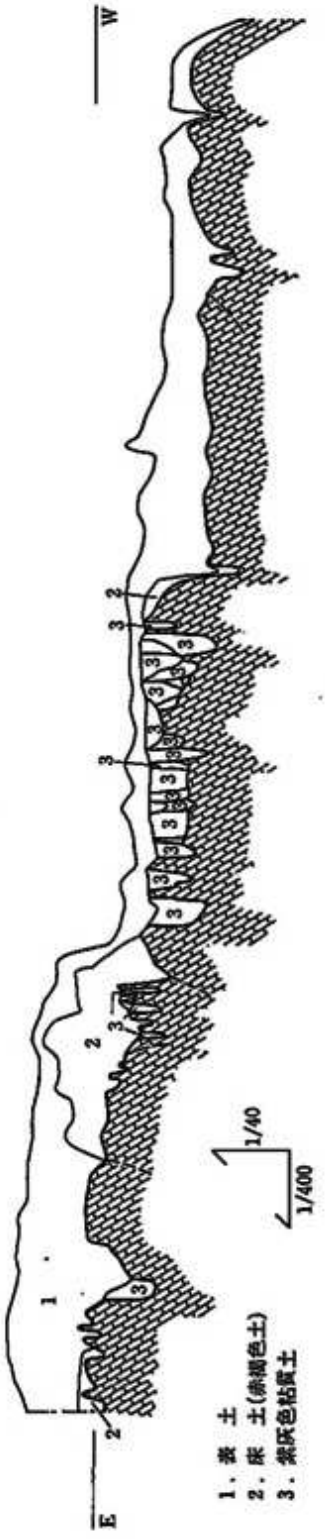
土壙63は、長軸95cm、短軸43cm、深さ17cmを測る不定形土壙である。土壙内には、土壙45の瑳と同様に、口縁部を打ち欠いた高坏が埋納されていた。

土壙45・59・63の瑳・高坏は、いずれも6世紀初頭に位置付けられる須恵器である。Aグループの他の土壙から遺物は出土していない。そして、遺物を出土した3基の土壙と他のAグループの土壙の埋土が同一の色調を有していることから、同時代の土壙であると考えられる。しかしながら、Aグループの土壙間で、7個所において切り合い関係が確認でき、土壙14・15・16においては、土壙15が土壙14・16を切る。また、土壙67・68・69においては、土壙67・土壙68・土壙69の順に作られたことが切り合い関係で確認することができた。他の5個所の切り合い関係にある土壙においては、精査したが、土壙掘削時の前後関係を確認することができなかった。前述したように、Aグループの土壙埋土が、同様の色調を呈していることから考えて、土壙が切り合った時間的な関係は、そう長くはないものと推察される。

小結

Aグループの不定形土壙は、谷の縁辺部に東西25m、南北22mに亘って検出された。南北へは、調査範囲の外へも広がる様相であるので、谷の西岸に帯状に分布するであろうと考えられる。

これらの不定形土壙の性格を推察するには、土壙内の遺物が少なく困難ではあるが、土壙45・59・63により推し量るならば、それらの土壙に埋納されている遺物が完形品ではない須恵器であることに注目される。土壙45と土壙59のように完形の須恵器を意識的に口縁部を打ち欠いて埋納していることである。これは、日常



第8図　南壁断面図

第1表 土 壙 一 覧 表 (1)

番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
1	150	110	21		31	57	42	5	
2	52	48	10		32	93	60	12	
3	46	28	20		33	66	56	5	
4	100	46	24	坏蓋	34	47	40	13	
5	94	86	14		35	35	25	12	
6	65	40	9		36	90	41	10	
7	62	40	10		37	44	28	11	
8	130	68	10		38	82	65	20	39と切り合う
9	70	58	12		39	70	47	14	38と切り合う
10	118	75	10		40	43	37	10	
11	120	70	28	12と切り合う	41	40	35	10	
12	66	48	22	11と切り合う	42	84	60	10	
13	82	50	24		43	87	28	11	
14	118	47	30	15に切られる	44	68	30	6	
15	65	66	27	14・16を切る	45	88	70	15	聰
16	56	33	14	15に切られる	46	50	32	12	
17	70	45	8		47	40	26	11	48と切り合う
18	95	65	8		48	54	26	13	47と切り合う
19	50	46	12		49	38	28	7	
20	115	94	12		50	46	35	9	
21	112	63	11		51	85	40	4	
22	94	66	11		52	100	78	12	
23	80	36	13		53	113	87	15	
23′	60	35	12		54	68	63	18	
24	72	60	20		55	75	64	15	
25	66	46	16	25Aと切り合う	56	70	49	22	
25A	70	48	14	25と切り合う	57	80	50	13	
25′	100	42	15		58	97	82	10	
26	57	39	20		59	155	75	13	高坏
27	117	82	15		60	77	56	8	
28	128	65	10		61	172	76	18	
29	115	85	17		62	64	52	12	
30	74	50	15		63	95	48	17	聰

第1表 土 壙 一 覧 表 (2)

番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
64	45	43	9	65と切り合う
65	74	45	7	64と切り合う
66	87	72	20	
67	95	80	16	68を切る
68	85	95	13	67に切られ、69を切る
69	80	56	8	68に切られる
70	85	53	13	
71	77	60	11	埋土の中に8世紀初頭の須恵器片が落ち込んでいた。
72	60	56	17	
73	55	45	10	
74	47	43	10	
75	46	36	9	
76	47	43	8	
77	52	46	9	
78	85	80	25	土壙墓ではない。
79	70	50	24	
80	105	55	32	
81	56	50	9	
82	25	20	6	
83	23	15	9	
84	25	16	7	
85	25	23	4	
86	60	35	7	
87	15	12	7	
88	40	32	15	
89	30	18	16	
90	36	36	20	
91	32	28	10	
92	25	22	7	
93	22	20	5	
94	30	13	4	
95	40	28	14	
96	33	23	3	
97	18	18	5	
98	28	20	6	
99	28	24	10	
100	18	15	6	
101	30	20	9	
102	53	46	14	
103	25	23	10	
104	25	12	5	
105	30	23	8	
106	210	170	22	粘土採掘壙
107	36	25	9	
108	20	15	5	
109	40	24	7	
110	32	17	7	
111	26	23	9	
112	26	16	5	
113	18	12	5	
114	112	51	3	
115	82	54	2	
116	27	18	9	
117	20	14	6	
118	55	35	11	
119	35	25	12	
120	53	31	9	
121	20	17	5	
122	57	42	14	
123	35	23	5	
124	43	35	12	
125	30	23	6	
126	72	36	7	
127	47	40	11	
128	36	25	5	
129	50	40	7	
130	400	345	40	粘土採掘壙

の生活において使用していたであろう瑞や高坏の一部を打ち欠いて、日常の使用に用いられないようにしていることである。このような意識を持って埋納されたことにより推察できるのは、瑞や高坏を明器化とすることであろう。このように考えられるならば、明器化した須恵器を埋納した土壙は、墓と考えられる。

Aグループの不定形土壙（以後、土壙墓と呼ぶ）は、掘方の大小はあるが、人間が一人どうにか入ることができる大きさであり、全ての土壙墓において、木棺などの痕跡などは見られなかった。また、検出した土壙墓において、その中で、他と画するような規模や施設を持つ物はなく、わずか3基に副葬品があったにすぎない。

和田川と土壙墓群の東に位置する谷の間には、菱木下遺跡においても同様の土壙墓群が検出されたが、その時期は当土壙墓群より、少し新しい時期である。当調査区の土壙墓群を形成した人々の集落は、万崎池遺跡・菱木下遺跡においても検出することができなかった。土壙墓群（墓域）を集落の縁辺部に形成すると考えるならば、今回の調査区の南側にその地を求めることが可能であろう。

土壙墓群の所在する丘陵上の南へ2Kmの所においては、高塚山古墳（全長約50mの前方後円墳）をはじめとする牛石古墳群があり、時期的には半世紀の隔たりがあるとはいえ、同一丘陵上において、連なる墓制が見られ、土壙墓に埋葬された集団の中より、半世紀後に古墳に埋葬される他より卓越した集団が生れてくるかどうかは、今後の調査に待ちたい。

Bグループの不定形土壙は、前述したように、本来、ピットと呼んだ方が良いものが多くある。しかし、ピットとしても、その性格が不明であるため、ここでは、一括して不定形土壙と呼んでいる。これらの不定形土壙の中には、長軸が50cmを越える土壙81・86・102・114・115・118・122・126・129がある。とりわけ、土壙114は長軸112cm、短軸51cm、深さ3cmを測り、土壙墓と呼んでも差支えないものも形態的には存在する。全ての土壙において、土壙に伴う遺物が出土していないので、Bグループの不定形土壙の性格を明らかにすることはできなかった。

第4節　遺　　物（第9～11図；図版221）

土壙45の瑞は、口径11.8cm、器高11.6cmを測る。口縁部は体部より外反し上方に伸び、さらに段を作って外反している。口縁部下段には、20条の細かい波状文を施し、稜より上段は、稜のすぐ上に沈線を施し、その上方に8条の細かい波状文を施している。体部は球形に作り、体部最大径の所に10条の列点文を施し、さらに、列点文の上下に沈線を施している。体部最大径の所に直径1.5cmの注口を斜上方に穿っている。口縁端部の一部を打ち欠いている。

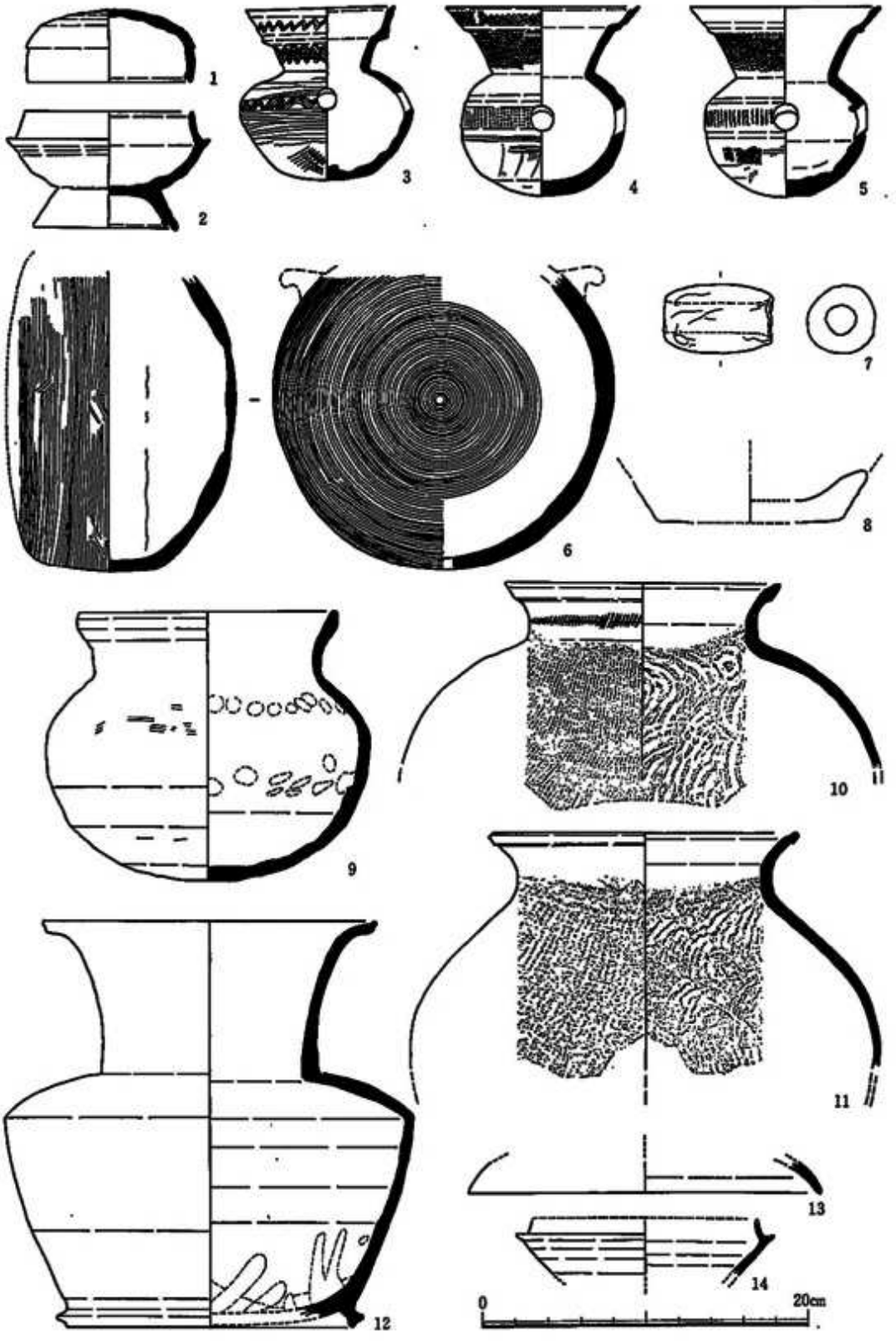
土壙4の坏蓋は、口縁部径約10.3cm、器高4.4cmを測る。天井部外面は、荒い右廻りのヘラ削りを施している。内面は外面と同様、右廻りのナデを施し、最後に横ナデで仕上げている。天井部と口縁部の境に鋭い陵を作っている。口縁部内外面ともナデで仕上げている。焼け歪が大きい。

土壙59の高坏は、口径10.2cm、器高7.2cm、脚底部径8.9cm、脚部高2.6cmを測る。脚部は短か

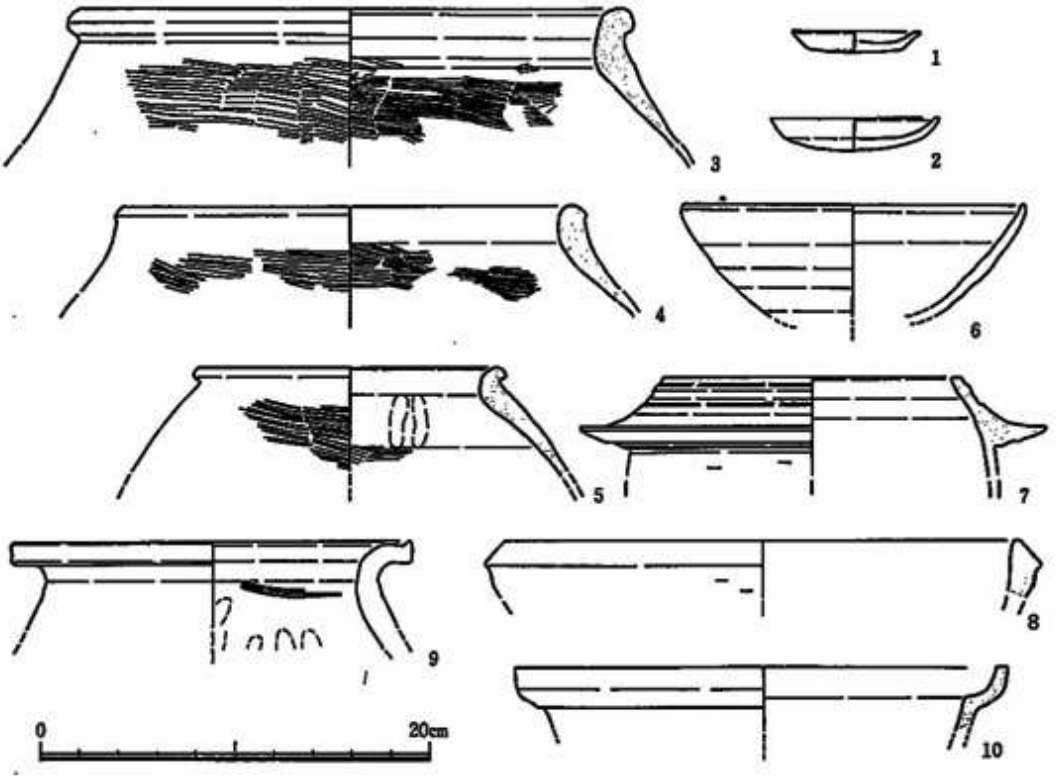
く台形を呈し、透し穴は穿たれていない。坏部は、内外面ともナデを施し、内面は最後に横ナデで仕上げている。

土壙63の瑞は、口縁部が大きく焼き歪んでおり、また一部打ち欠いているため、口縁部径を測ることができない。器高は約11.5cmを測る。口縁部は体部より外反し上方に伸び、さらに、段を作って外反する。口縁部下段には12条の波状文を施し、上段には５条の波状文を施している。体部は扁平な球形に作り、底部には形成時に施したタタキ目が残り、体部最大径まではカキ目で成形している。体部最大径より口縁部までは、ナデで仕上げている。体部最大径上に12条の波状文を施し、その上下に浅い沈線を１条づつ施している。体部最大径上に直径 1.2cmの注口を斜上方で穿っている。

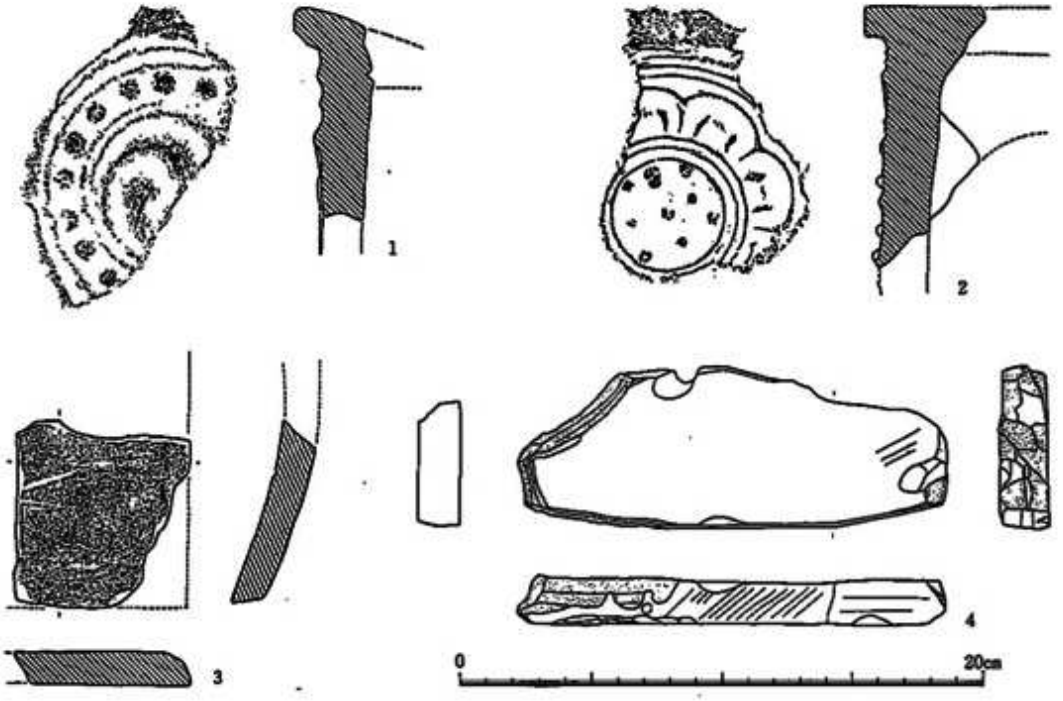
遺物包含層より、多時期に渡っての遺物が出土している。大きく別けて、帯状の粘土採掘溝より、東側において、奈良時代と古墳時代の遺物が多く出土している。粘土採掘溝内よりは、古墳時代から近世までの遺物が出土しているが、中近世の遺物が多く、旧床土内から出土した遺物は、近世の遺物が多かった。



第9図　弥生・古墳・奈良時代土器



第10図 中 世 土 器



第11図 瓦 ・ 砥 石

付、万崎池遺跡第Ⅱ調査区出土遺物観察表

凡　例

1．法量については、(　)内残存値、推：推定値、復：復原値、高：器高、残存：破片の残存値を示し、口、胴、底などは径を示す。

2．胎土には長石、石英、チャート、くさり礫砂粒を主に含むが、それ以外の特徴的な砂粒を記入した。砂粒は大きさにより、大＞5mm、2mm＜中≦5mm、0.5＜細≦2mm、微≦0.5mmとした。

図番号	図版番号	機　能	器　種	遺構・地区・層位	法　量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
9－1	221－1	須恵器	坏蓋	STK4	口10.0、径10.3、高 4.4	削り右。(内)一定方向1回ナデ。	砂粒(大)、灰色、良好、(外)僅かに黒斑
2	2	須恵器	高坏	STK59	口10.2、受12.4、底 8.6、高 7.2	削り左。(内)一定方向1回ナデ。	砂粒(中)、青灰色、良好、(外)黒斑
3	5	須恵器	甕	STK63	口不明、胴10.5、高 11.6	(外底)叩キ。(外胴)カキメ。(内)ナデ、波状文5条1帯、12条2帯。	砂粒(細)、灰色・(断)黒灰色、良好、(内口・内底・肩)黒斑、(外底)ヘラ記号V
4	4	須恵器	甕	STK45	口11.8、胴 9.9、高 11.6	(外底 叩キ後削り後ナデ。(外胴)カキメ、他横ナデ、波状文8条1帯、20条1帯？、列点文10条1帯。	砂粒(細)、灰色・(断)灰赤色、良好、(内口・肩)黒斑
5	3	須恵器	甕	R33　褐色粘質土	口11.6、胴10.1、高 11.6	(外底)叩キ後削り後ナデ、他横ナデ、波状文20条1帯、列点文8条1帯。	砂粒(細)、青灰色・(断)黄褐色、良好、(内口・内底・肩)黒斑
6		須恵器	提瓶	STK8	胴30.6、高(18.0)	(外)カキメ。(内)横ナデ、粘土板薄張6.6cm。	砂粒(中)、青灰色、良好、内底寄りに2～3cm間隔の紙痕残る。
7		弥生式土器？	土錘	R33　褐色粘質土	長4.6、外径4.3、内径2.3×2.5	棒に粘土を巻きつけ成形したものか。(外)ナデ？。(内)ナデ。	砂粒(中)、(外)にぶい橙色・(内)橙色、良好
8		弥生式土器	不明底	R33　褐色粘質土	底11.2、高(3.12)	(外)ナデ。(内)不明。	砂粒(大)、(外)浅黄橙色、(内)にぶい黄色、良好
9	221－6	須恵器	壺	R33　褐色粘質土	口 7.5、胴19.9、高 16.45	(外底)削り左、胴叩キ後ナデ。(内)指オサエ、ナデ、口縁部横ナデ。	砂粒(大)、灰白色、不良、軟質
10	7	須恵器	壺	R34　褐色粘質土	口16.6、高(11.2)	(外)胴部までタタキ叩キの後カキメ。(内)叩キ、口縁部横ナデ。	砂粒(細)、灰色、良好、(内口)ヘラ記号V
11		須恵器	壺	STK6	口19.2、胴28.9、高(14.4)	(外)叩キ後カキメ。(内)叩キ、口縁部横ナデ。	砂粒(細)、褐色・黄褐色、不良、軟質
12	221－8	須恵器	壺	R32	口29.9、胴34.9、高 24.9	(外底)削り左、高台ハリツケ、他横ナデ。	砂粒(細)、灰色、良好
13		須恵器	坏蓋	R33　褐色粘質土	口21.0、高(1.9)	(外・内)ナデ。	砂粒(微)、青灰色、良好、(外)重ね焼き痕
14		須恵器	坏身	R33　褐色粘質土	口 ―、受15.1、高(3.2)	(外底)削り左、他横ナデ。	砂粒(細)、灰白色、良好
10－1		土師器	甕	R34　褐色粘質土	口 6.6、高 1.1	(外底)不調整、口縁部横ナデ。	砂粒(中)、(外)橙色・(内)浅黄橙色、良好
2		瓦器	小皿	R34　褐色粘質土	口 8.6、高 1.6	(外底)ナデ、口縁部横ナデ。(内)暗文。	密、灰色・(断)灰白色、良好
3		瓦質	壺	R36　赤褐色土	口26.8、高(7.6)	(外)叩キ。(内)ハケメ、口縁部横ナデ。	砂粒(中)、(外)灰色・(内)黄灰色・(断)浅黄色、良好
4		瓦質	壺	R37　表土	口22.4、高(4.9)	(外)叩キ。(内)ハケメ、口縁部横ナデ。	砂粒(中)、(外)暗灰色・(内)灰白色・(断)浅黄色、良好
5		瓦質	壺	R37　表土	口25.0、高(5.6)	(外)叩キ。(内)指オサエ、ハケメ、口縁部横ナデ。	砂粒(大)、(外)灰褐色・(内)にぶい黄橙色・(断)にぶい橙色、良好
6		瀬戸	碗	R36　赤褐色土	口17.2、高(5.7)	(外)下部左回りの削り、他横ナデ。	砂粒(細)、浅黄色・(断)浅黄橙色、良好、(釉)黄入
7		瓦質	羽釜	R37　表土	口14.4、高(5.1)	(外)鍔部より下方右回りの削り、他横ナデ。	砂粒(大)、褐灰色・(断)灰黄色、良好
8		瓦質	擂鉢	R37　表土	口27.6、高(3.0)	(外)体部右回りの削り。(内)ハケメ、口縁部横ナデ。	砂粒(中)、灰色・(断)灰白色、良好
9		常滑	壺	R36　赤褐色土	口20.2、高(5.4)	(内)頸部オサエ、一部ハケ、他横ナデ。	砂粒(中)暗赤褐色・(断)にぶい黄橙色、良好、自然釉
10		瓦質	鍋	R36　赤褐色土	口24.4、高(3.3)	(外)体部右回りの削り？、他横ナデ。	金雲母(微)・砂粒(細)、褐色・(断)橙色、良好、(外)煤付着
11－1		瓦質	軒丸瓦	R34　褐色粘質土	径15.9、長(3.1)	(瓦当面)砂付着、巴文。	砂粒(中)、黄褐色・(一部)灰色、やや不良、軟質
2		瓦質	軒丸瓦	R36　赤褐色土	径15.0、長(4.6)	瓦当部に2枚の粘土を貼り合わせた後、丸瓦と瓦当部の接合。(丸瓦部外面)ヘラナデ。珠弁唐草文。	砂粒(細)、灰色・(断)灰白色、良好
3		瓦質	平瓦	R37　表土	幅(6.8)、長(7.3)	(凸面)叩キ。(凹面)砂付着。(側面)削り。	砂粒(中)、灰色、良好、(凹面)ヘラで刻書？
4		石器	砥石	R36　赤褐色土	幅(6.3)、厚1.8、長(16.5)	砥痕面に沿って割れた板状となる。(側面一部)自然面、剥離面。(他)研磨面。	(砥面の側面中央)両面から穿孔？、砥痕面に交叉する方向に使用痕。

第３章　第Ⅲ・第Ⅳ調査区

第１節　はじめに

万崎池遺跡第Ⅲ・第Ⅳ調査区では、弥生時代中期から江戸時代にかけての遺構が検出された。遺構の密集度は全域において一様でなく、第Ⅲ調査区の西側段丘面、第Ⅳ調査区の段丘面の西半は散漫である。

第２節　微地形と層序

１　微地形

第Ⅲ調査区　菱木所在の離道から万崎池につらなる谷にかけての約7000㎡を第Ⅲ調査区とした。地形的には、西側半分が段丘面、東側半分が開析谷となる。標高は西側約24m前後、東側は22m前後を測った。又、調査区北側には、万崎池から連なる谷の１支谷の縁辺が顔を出している。

段丘面では、遺構は非常に少なく、僅かに弥生時代中期の土壙、溝、中世の盛土を検出しえただけである。開析谷部分は現況でも小川が流れ、その周囲は湿地的様相を呈しており、埋没しているとはいえ、谷の様子をうかがわせる景観であった。調査の結果、１本の谷と思われていたものは、２本の平行する谷であることがわかった。谷の埋積土からは、多量の弥生式土器、布留式土器が発見されているが、いずれも平安時代と考えられる埋積土中に包含されていた。遺構としては、西側の谷において、堤防を確認している。平安時代に属すると思われ、調査中には残念ながら気付かず、土層断面精査の際、発見したものである。

第Ⅳ調査区　谷の東側段丘面から市道別所・草部線までの約9000㎡を第Ⅳ調査区とした。標高は24m前後を測り地形は西から、段丘面―埋積谷―段丘面となる。西側の段丘面には、顕著な遺構は見あたらず、江戸時代の埋甕が見つかっているだけである。埋積谷と両側段丘面の縁辺には、古墳時代中期の集落址を検出できた。竪穴住居址が14棟、掘立柱建物、井戸状遺構、溝等によって構成されており、集落全域の80％は調査しえたと考えている。泉北丘陵における５世紀前半の集落は、初めての発見と思われ、須恵器生産との関わりからも貴重な資料である。調査区の東端における段丘面上では、第Ⅴ調査区に続く、古墳時代後期の土壙墓群や平安時代の掘立柱建物、室町時代と考えられる土壙墓、灌漑用池が見られた。

又、遺構は確認できなかったが、後期旧石器時代の切出型ナイフ形石器、翼状剥片等が出土した。

２　層序

第Ⅲ・第Ⅳ調査区共に後世の削平が著しく、良好な包含層が残っているのはごく一部であった。

第Ⅲ調査区　段丘面では表土、旧耕土を取り除くと直下に地山である黄褐色シルト層があらわれた。又、西端の段丘崖に沿って、僅かに中世の盛土層が認められた。開析谷の埋土は比較的良好で、基本的に３層に分割できた。第１層の暗赤灰色粘質土は、室町時代から江戸時代の堆積と考えられ、厚さは、ほぼ30cmを測った。第２層は青灰色の粘質土で平安時代末から鎌倉時代にかけての堆積と考えられ、下へ行くにつれ砂粒の包含が目にとまった。第３層は暗黒色の粘土で、植物遺体等が多く含まれていた。さらに、下層には無遺物の砂礫層が続いており、流失した段丘礫層の二次堆積のようであった。

第Ⅳ調査区　段丘面は、第Ⅲ調査区と同様に表土、旧耕土を除去するとすぐ地山があらわれている。集落の立地する中央部の開析谷と、土壙墓群の立地する東端の開析谷に向う緩斜面は比較的包含層が良好に残っていた。中央部では表土、耕土下に鎌倉～室町時代の黄灰白色土があり、その下に古墳時代後期から奈良時代にかけての明褐色土が存在した。住居址検出面は、住居址とほぼ同時期の暗褐色土層でおおわれていた。上記３層は谷口に向って孤字状に堆積しており、集落廃絶後、すぐに埋積していった事がうかがえる。

東端の開析谷に向う緩斜面には、平安時代、鎌倉、室町時代の包含層が残っていた。表土、耕土、床土を除去すると黄灰色土層の堆積となる。時期は鎌倉、室町時代で、厚さ20cmの堆積である。その下に灰色粘質土層が厚さ20cm程堆積している。黒色土器Ａ・Ｂ類を含み、平安時代に相当するものと考えられる。

第３節　遺　　構（付図10～12；図版82～102）

１　第Ⅲ調査区

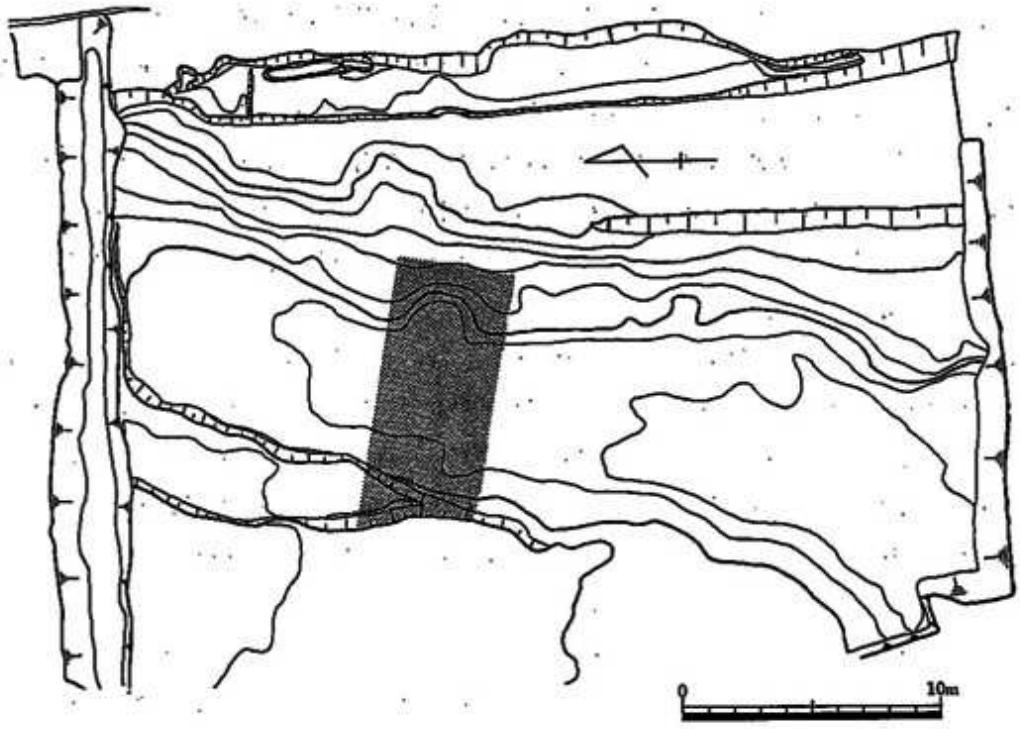
第Ⅲ調査区は東側に傾斜する段丘面と、それに続く開析谷に分けられる。段丘面上の遺構は散漫で弥生時代中期の土壙を除いて、鮮明なもの、時代のわかるものは無い。谷は南北方向に平行して走る２本の谷からなる。平安時代の堤が西側の谷から検出されている。

調査区西側の段丘面から弥生時代中期の土壙・溝が確認された。後世の削平が著しいためか、残存状態は非常に悪かった。土壙は１基、溝は数本検出されているが、総て浅く、掘り肩が不鮮明であった。遺物を主に出土したのはＳＫＡ１だけで、溝からはサヌカイトのチップが見られただけである。

ＳＫＡ１　円型の土壙で壁はほぼ垂直に落ち、深さ約50cmを測った。土壙の中からは甕・壺の破片が出土している。埋土は１層で灰白色の粘土層であった。直径約40cm、深さ50cmを測る。時期は出土している土器から弥生期後半（Ⅲ新・Ⅳ様式）にあたるものと思われる。

この他に落ち込みが幾つか認められるが、いづれも土器は出土しておらず、サヌカイトのチップが散漫に見られる程度であった。

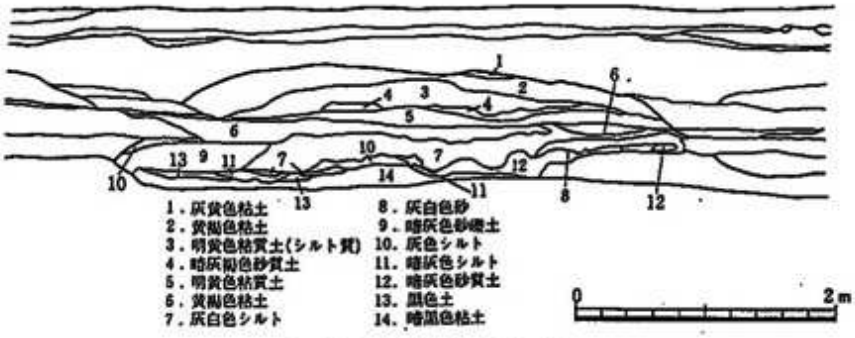
開析谷　第Ⅲ調査区の東側半分は開析谷である（第12図）。南側から進入する２本の谷（西：谷Ａ、東：谷Ｂ）が調査区の中で平行しながら、北側で合流している。そして、さらに北流し、



第12図 西側谷堤推定位置図

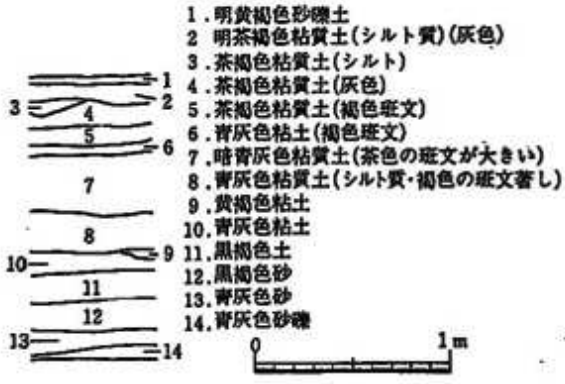
現在の溜池である万崎池に到る。谷の幅は西側では15m前後、東側では35m前後、深さは2～3mを測る。谷底は一様に平坦で、ゆるやかな凹凸が所々に見られる。堆積状態は東西共に余り変化は無く、下層から青灰色砂礫層、青灰色・黒褐色の砂層、暗黒色粘質土層、青灰色粘土層、黄褐色粘土層、青灰色粘質土層、暗青灰色粘質土層、青灰色粘質土層、茶褐色粘質土層、茶褐色シルト層、明茶褐色粘質土層の順に堆積している。青灰色砂礫層は段丘礫層の2次堆積層と考えられ、谷の上流から開析作用の結果流入、堆積したものであろう。直上2層の青灰色砂層、黒褐色砂層も同一のものと考えられる。上記3層は無遺物層である。暗黒色粘土層は有機物の堆積からなり、自然遺物等の堆積も著しかった。この暗黒色粘土層は滞水作用によって堆積したものである。その原因となるのは西側の谷に設けられていた堤によって水が堰止められたことによるものと思われる。本層には弥生時代から平安時代に至る多量の遺物が包含されていた。特に多いのは弥生式土器、布留式土器である。他に初期須恵器、黒色土器等が出土している。暗黒色粘土層の堆積時期は、平安時代中頃と考えられ、弥生式土器や布留式土器は後世の撹乱や段丘部からの投棄によるものと思われる。10青灰色粘土層から6青灰色粘質土層までの堆積は鎌倉～室町時代のものである。粘土とシルトの堆積はその後も滞水と緩やかな流水が行われていたことを示唆する。本層からも弥生式土器、布留式土器等が相当量出土している。5茶褐色粘質土から上層は江戸時代から現代に到る堆積層である。東側谷の東斜面には江戸時代の土器を多量に包含する黄褐色土層が堆積していた。

堤（第13・14図） 西側の谷では堤防状の遺構が、土層観察の結果認められた。幅は5m前後、



第13図　西側谷堤土層断面図

長さは推定45m、高さは1m前後を測る。堤の基底部は掘り込みになっており、20cm～30cmの掘削の後、堤が築かれている。堤築造に際して部分的に版築が施されている様で、固くしまった薄い層がある。13黒色土層、11暗灰色シルト層、10灰色シルト層、7灰白色シルト層、6灰褐色粘土層は版築層と思われ、かたくしまっていた。版築と盛土を繰り返しながら構築されている。堤のベースは段丘礫層の再堆積層で、築堤された後暗黒色粘質土が堆積している。これは堤の北側も、南側も同様に堆積しており、両側に滞水していた事が考えられる。この事は、谷筋の、更に北側に別の堤が築かれている事が考えられ、調査で発見された堤は高さや、推定される長さから見て、谷の最も奥に築かれた小規模な溜池を造るもので、さほど貯水量もなかったと考えられる。さらには樋の存在も確認できなかった事からも、渇水期等の非常事態に備えて造られた補助的な役割を担っていたもので、通常使用される溜池は調査区の北側に造られていたものと考えられる。築堤された時期は平安時代中頃（10世紀中葉）と思われる。



第14図　谷標準土層図

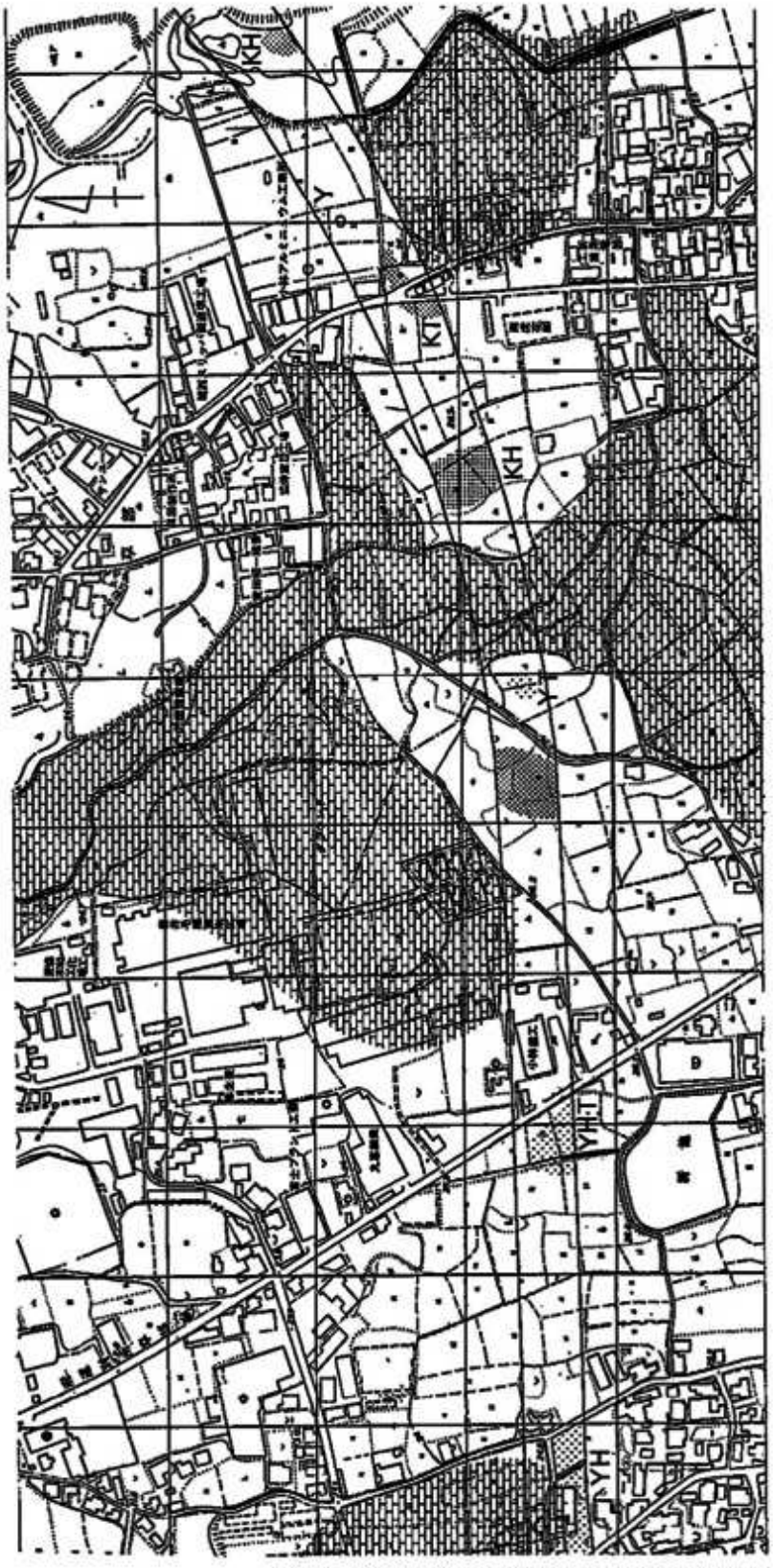
その後、堤は鎌倉、室町時代に機能を失い、埋没していく様である。調査の結果、水田等に利用された痕跡は認められず、流水、滞水を繰り返していたものと思われる。

2　第Ⅱ調査区

第Ⅱ調査区は東側谷から上昇した段丘面から始まる。古墳時代（5世紀前半）から江戸時代に到る遺構が検出されている。

A　古墳時代　（第15図、第2表）

調査区の西半部において古墳時代の集落址を検出している。遺構の分布している面積は東西約70m、南北は調査区の幅40mにわたっている。周囲3方は開析谷に囲まれており、集落自体も東西に入る埋積浅谷上、及びその縁辺に位置する。東・西方向の段丘面に登るにつれ、遺構は無くなる。



Y：弥生、K：古墳
H：住居址、T：墓
ドット：遺構の分布
（粗：弥生、密：古墳）
レンガ：開析谷

第15図　周辺開析谷、古墳時代・弥生時代遺跡位置図

第2表 竪穴住居址一覧表

番号	長軸	短軸	長軸方位	柱穴数	主柱間平均	掘方平均	柱根巾平均	柱根深度平均	壁溝	貯蔵穴	炉
SBK1	4	3.5	N−51°−W	4	1.56	33.5	14.25	19	○	○	
SBK2	4	3.5	N−32°−W	7	2.61	43	18.75	25	○		○
SBK3	5.1	4.9	N−51°−W	4	2.45	46.5	19.5	15.75	○	○	
SBK4	2.9	2.7	N−34°−W	4	1.13	30.5	12	11	○		
SBK5	4.0		N−51°−W	4	2.29	41.5	23.5	16	○	○	
SBK6	(4.0)		N−63°−W		(1.9)	(31.3)	(15.5)	(10)			
SBK7	3.8		N−63°−W		—	(30)	(10)	(10)			
SBK8	(3.3)		N−49°−W		—	—	—	—	○		
SBK9	(3.8)		N−62°−W		(2.75)	(26)	(10)	(12)	○		
SBK10	(2.5)		N−58°−W		(1.9)	(26)	(15)	(12)			
SBK11	4.6	4.5	N−33°−W	4	2.2	33.5	24	13.5			○
SBK12	3.2	2.2	N−18°−W	4	1.6	35	18.5	14.5			
SBK13	3.2	2.7	N−50°−E	3	(1.85)	(35.6)	16.3	12.3	○		

竪穴住居址、掘立柱建物、溝、土壙、井戸状遺構を確認している。遺構別の分布状況は、竪穴住居址が埋積谷の縁辺のやや高位な場所に最も多く、谷底部付近に立地するのは僅か2棟である。又、掘立柱建物も同様に谷縁辺に立地している。谷底部の最下位の部分には無数の柱穴が検出されているが、建物を構成しないようである。土壙は谷底部に1基（SKA2）、縁辺に2基（SKA3・4）認められる。

竪穴住居址　（第16〜18・19図）

分布　西側にSBK1、SBK3、SBK4、SBK5、SBK6、SBK7、SBK8、SBK9、SBK10の9棟、埋積浅谷上にSBK12、SBK13の2棟、東側にSBK2、SBK11の2棟である。埋積浅谷を囲むようにU字状に展開している。埋積谷の南西部分は住居址相互の切り合いが著しい。

規模　住居址の規模は1辺約3mから5mを測るものまである。規模によって分類するとほぼ3つに分けられる。1−1辺約3m前後を測るもの、2−1辺約4m前後を測るもの、3−1辺5m前後を測るものである。1に属するものはSBK4・8・10・12・14、2に属すものはSBK1・2・5・9、3に属すものはSBK3・11である。

構造　平面形状は方形で、主柱穴は4本が一般的であるが、柱穴が3本しか確認できなかったもの（SBK12）もある。柱穴の深さは、検出面から10cm〜20cmがもっとも多いが、中には30cm近い深さを測るものもあり、同一住居址と言えども画一性が窺えないものもある。又、床面が遺存していた住居址は無く、全て削平を受けており、本来の深さは窺えない。四柱はおおむね台形に配置されており、方形になるものは無い。又、柱間は竪穴の1辺と比較してやや長いものがあ

る。つまり、竪穴の四隅に近く柱穴を配置しているものと、中心よりに配置しているものがある。柱根径は15cm～20cmを測り、貧弱な感を与える。周壁溝については竪穴を全周するもの（ＳＢＫ１、ＳＢＫ２）、部分的に認められるもの（ＳＢＫ３、ＳＢＫ４、ＳＢＫ５、ＳＢＫ８、ＳＢＫ９、ＳＢＫ13）、認められなかったもの（ＳＢＫ６、ＳＢＫ7、ＳＢＫ10、ＳＢＫ12、ＳＢＫ11）がある。炉の存在も各住居址によって異なる。ＳＢＫ２・26には浅くではあるが焼土を含む落ち込みが検出できた事から、炉の存在が認められる。又、西側縁辺のＳＢＫ１の北方約２ｍの所に焼土を含む土壙が確認されている。最も近くにあるＳＢＫ１・３に炉が検出されていないことから屋外炉の可能性がある。次に貯蔵穴の有無であるが、ＳＢＫ１・３・５に土壙が認められた。規模、配置から見て貯蔵穴であろう。ＳＢＫ12・13にも屋内に土壙の存在が認められるが、その規模が床面積の約３分の１を占める事から、単なる貯蔵穴とは考え難い。建物自体に特殊な機能（作業場等）を持つものと考えられる。[1)]

掘立柱建物　（20図）

埋積谷東側縁辺に１棟検出されている。構造は２間×２間で束柱を有する。規模は桁行4.2m、梁行2.8～３ｍ、柱間は桁行2.0～2.28m、梁行1.4～1.5mを測る。柱穴の形状は円形で、径30cm前後、柱根径10～15cmである。主軸方位はＮ－40°－Ｗ、面積は11.76㎡を測る。束柱を持つことから倉と思われる。ＳＤＡ３に切られている。

井戸　（第21図）

ＳＸ１と呼称される谷に続く大きな土壙で井戸の役割をはたしていたものと思われる。規模は東西8.4m、南北7.7m、底面で東西６ｍ、南北２ｍ、深さは最深部で1.2mを測る。 埋土は青灰色シルト層、暗灰色シルト層、青灰色土層、暗灰色土層、淡灰色土層、淡灰色シルト層、淡黄灰色砂層、黄緑砂礫層、灰色土層、灰色シルト層、黄灰色シルト層、淡黒灰色シルト層、青灰色砂層、濁黄色土層、黒灰色粘土層、暗茶褐色粘土層からなる。黒灰色粘土層から土師器、須恵器が出土しており、淡黒灰色シルト層では破砕された土器と共に管玉が４本出土している。壁面は南・北に急で、東に向かって緩やかな斜面を作る。東側は通路として使用されていたのであろう。底面は砂層まで掘削されており、湧水を溜めていたと考えられる。

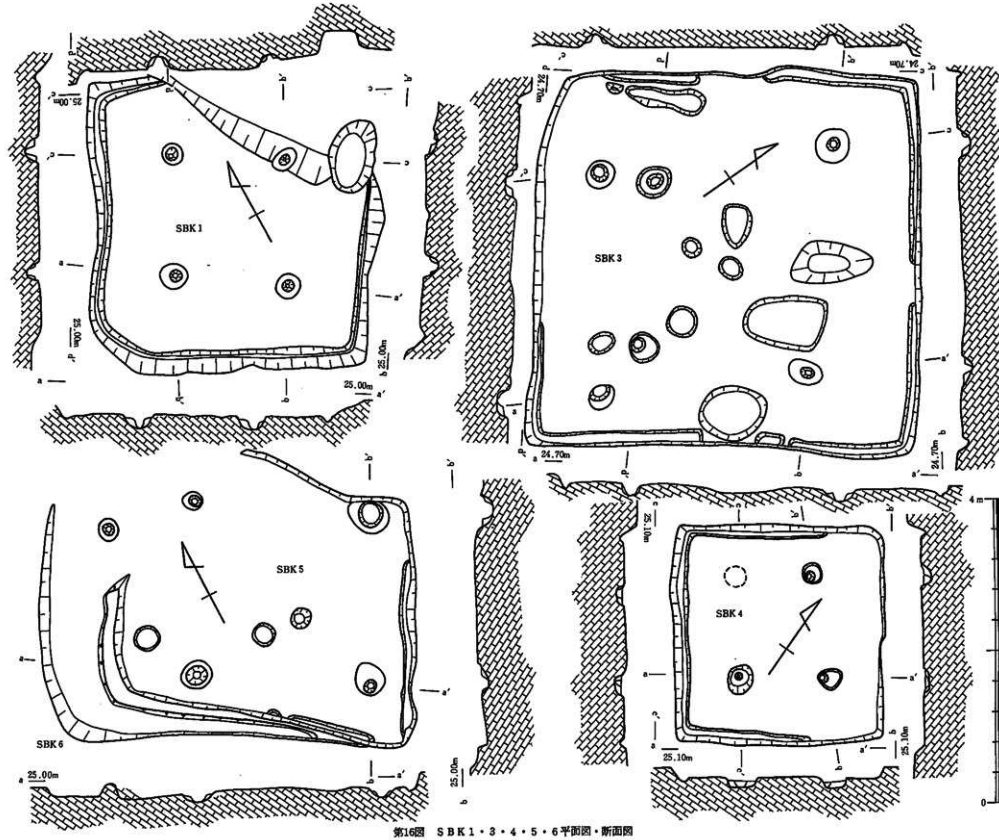
溝

ＳＤＡ１・２・３の３本の溝が検出された。相互の切り合いから３本の溝が共存していた事は考え難く、切り合いから見ると１→２→３の順番で掘削されている。

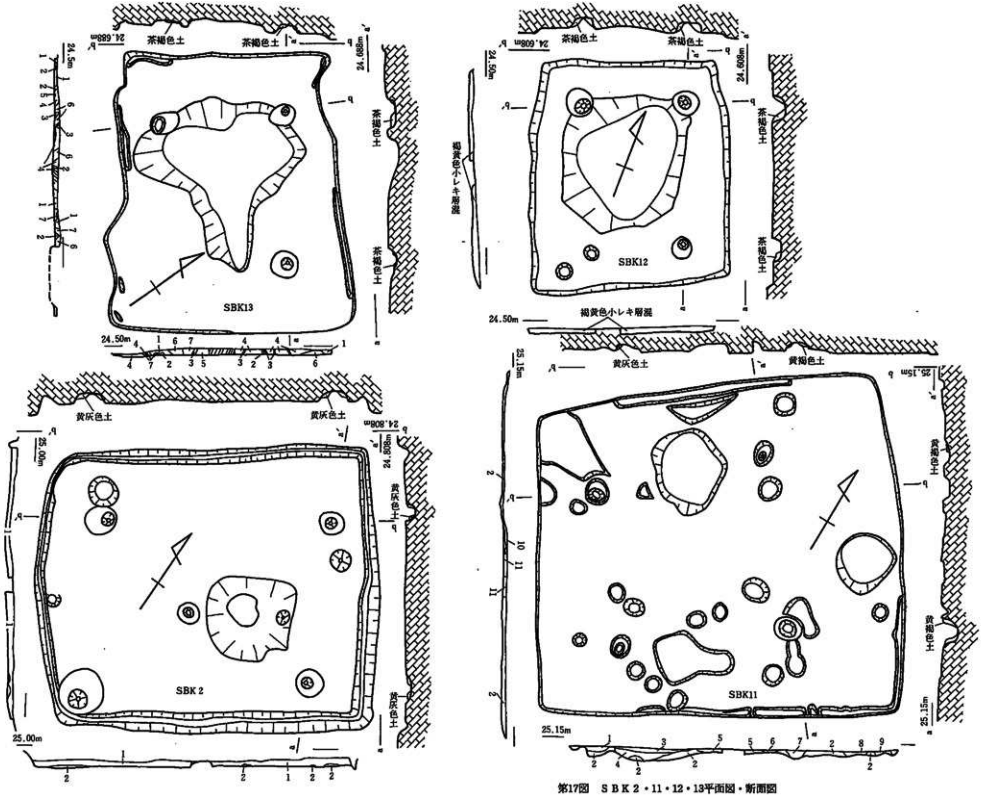
ＳＤＡ１　埋積谷のほぼ中央部で鍵状に屈曲している。全長19m、幅は1.2～0.8m、深さは検出面から５cmを測る。埋土は１層で淡茶褐色土よりなる。輪郭は不鮮明であった。

ＳＤＡ２　調査区の南側から続き、蛇行するように埋積谷の西側に到る。全長31mを測り、南に伸びる。幅は１ｍ～1.5m、深さは15cm前後を測る。

ＳＤＡ３　埋積谷の東側縁辺をほぼ南北に流れている。全長34mを測り、南北両方向に伸びている。幅は0.8～1.0m、深さは10～15cmである。いづれの溝も、その堆積状況から見て、常時水



第16図　ＳＢＫ１・３・４・５・６平面図・断面図



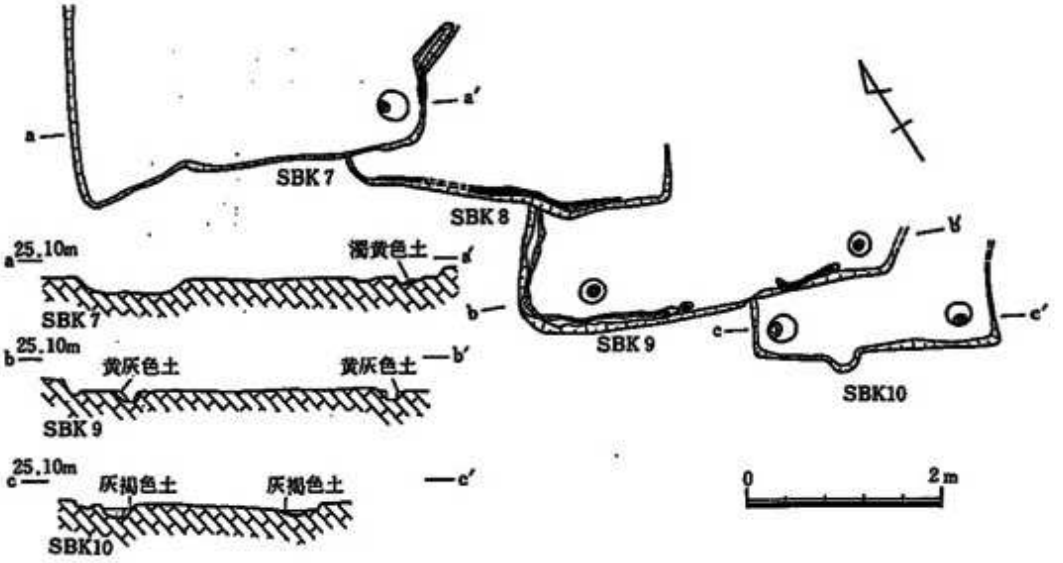
第17図　ＳＢＫ２・11・12・13平面図・断面図

SBK13　1．茶褐色土(淡黄色土混)
　　2．黄褐色土
　　3．灰黄褐色土
　　4．暗茶褐色土(灰色土混)
　　5．灰色土
　　6．茶黄色土
　　7．灰茶褐色土

SBK 2　1．黄色シルト(微砂を含む)
　　2．黄色シルト褐色斑点混

SBK11　1．茶褐色土
　　2．黄色土
　　3．茶褐色土(炭含む)
　　4．黄色土・褐色斑点混
　　5．茶黄褐色土
　　6．茶褐色土(炭多く含む)
　　7．茶黄色土
　　8．褐色土(炭含む)
　　9．黄褐色土
　　10．茶黄色土
　　11．茶褐色土

0　4m

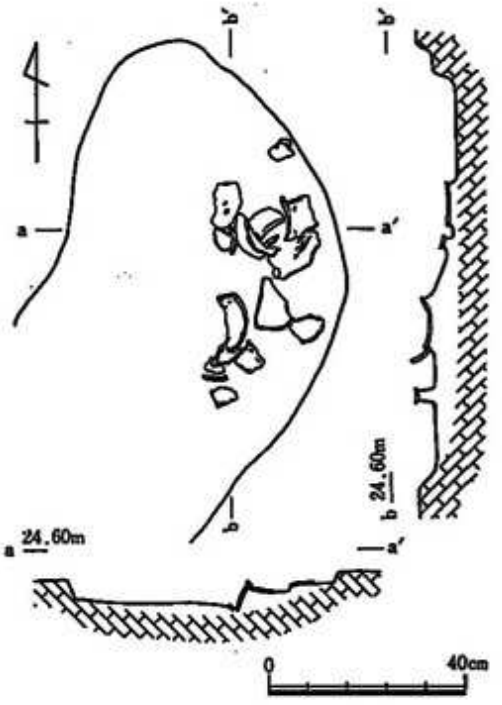


第18図　ＳＢＫ７・８・９・10平面図・断面図

が流れていた形跡は窺えない。溝底部の比高を見ると、ＳＤＡ２が東から西に向って傾斜していることがわかるが、それも部分的で、東端の一画に限られている。ＳＤＡ１・３についてはほとんど傾斜は見られない。いづれも遺物の出土は認められない。

土壙

土壙は３基確認されている。埋積浅谷上に１基、埋積浅谷、南東部縁辺に２基検出されている。いずれも、土師器等の遺物が出土している。この他にも落ち込みが幾つかみられたが、人為的に掘削されたものでなく、遺物も出土しなかったことから記述から除外した。

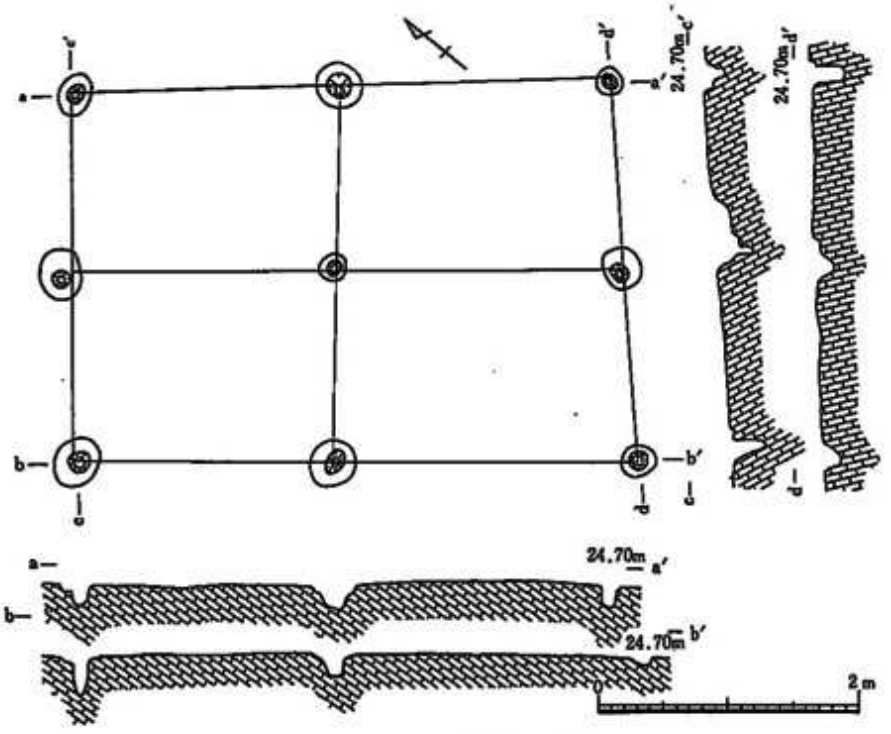


第19図　ＳＢＫ３土壙土器出土状態

ＳＫＡ２（第22図）　埋積浅谷の真中付近に位置する楕円形の土壙である。長軸は 1.7m、短軸は１m近くを測る。深さは30cm程度で、断面形状は段掘りのようになっている。土師器の甕が２個体出土している。

ＳＫＡ３　埋積浅谷の南東部縁辺に位置する小判形の土壙である。長軸1.5m、短軸1.2mを測る。深さは30cm程で、断面形状は逆台形を呈する。底は平坦面をなし、握拳大の礫を数個置いていた。土器は小片しか出土せず、埋土中に小量の炭化物を含んでいた。

ＳＫＡ４（第23図）　ＳＫＡ３の近くにある不定形の土壙である。長軸2.5m、短軸1.5m、深



第20図　ＳＢＰ14平面図・断面図

さ５～10cmを測る。底面には、緩やかな起伏がみられる。握拳大の礫を１ヶ所に集中して置いている。そこからやや離れた所に、土師器甕・小型丸底壺を置いていた。覆土内に微量の炭化物を含んでいた。

ＳＫＡ３、ＳＫＡ４は住居址からやや南方にあり、墓の可能性が高い。[2)]

土壙墓群　（第24図、第３表）

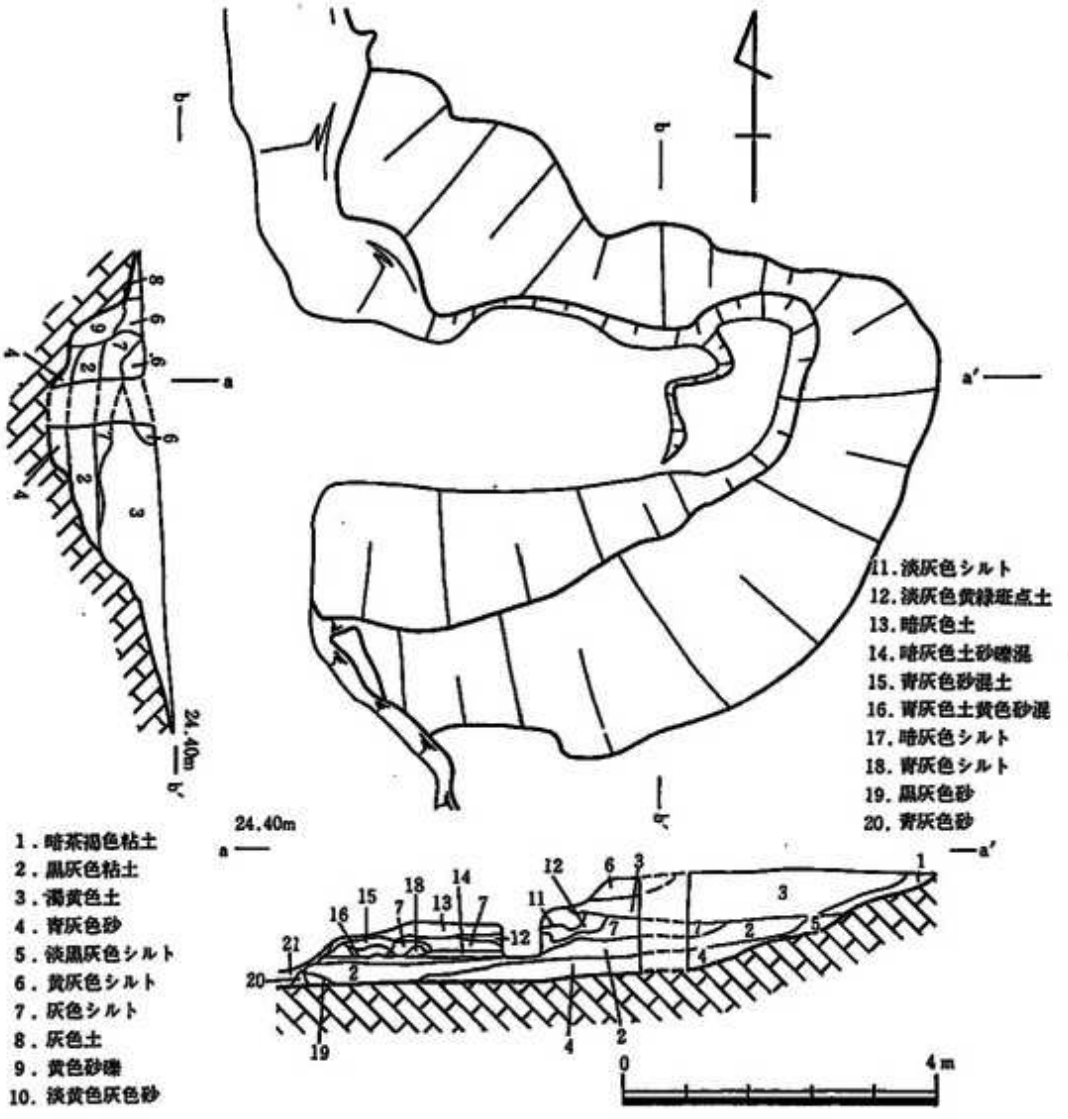
調査区の東端で土壙墓群が見つかっている。第Ⅴ調査区の土壙墓群と一連のものである。

立地　石津川に向かって流れ込む開析谷の小支谷に位置する。第Ⅳ調査区では東側に向かって緩やかな斜面になっている。谷の幅や深さ等の詳細は分からないが、小規模なものであろう。土壙墓のベースは、灰白色粘質土で谷の埋積土層である。段丘面にあがって黄褐色シルト層をベースにするものは極めて少ない。

形状　平面形状は３種類である。最も多いのが楕円形で 157基（ 77.33%）、隅丸方形が24基（11.82%）、円形が22基（10.83%）である。断面形状は逆台形が大半である。

規模　土壙相互の切り合いが激しく、正確な規模を測定できるものは少ない。ここでは長軸の長さを基準とした。長軸の長さを４段階に区分し、０～50cm、50～100cm、100～150cm、150cm～とした。最も多いのは50～100cmの規模を有するもので 168基（57.72%）、次に100～150cmが73基（23.77%）、０～50cmが61基（19.86%）、150cm以上は極めて少なく５基（1.62%）である。深さは大半が10～30cmを測り、10cm以下のもの、30cm以上のものは稀である。

層位　土壙内埋土は３層から５層に区分できる。標準土層は上層・中層・下層と分割すると、

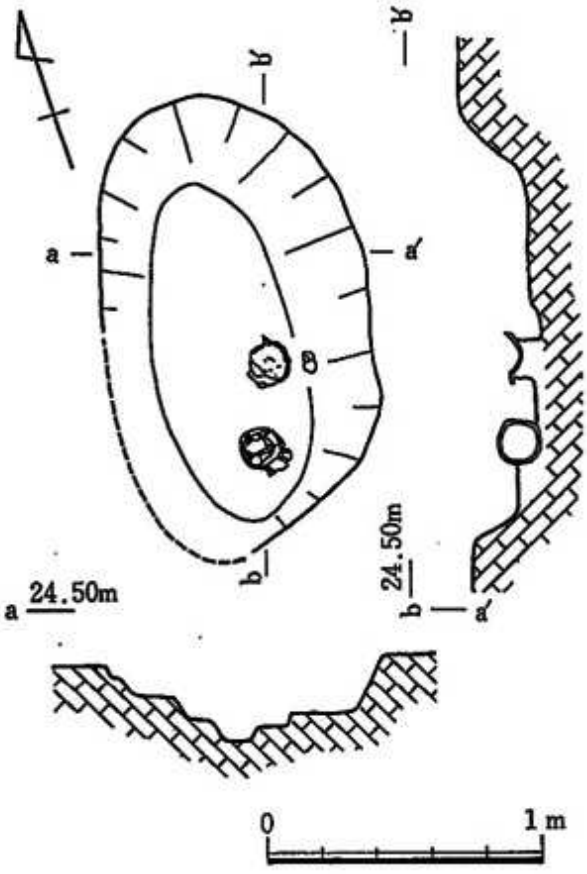


第21図　ＳＸ１平面図・断面図

上層は淡黄色又は黄色のシルト層、中層は紫灰色土、下層は黄灰色・灰色の粘質土で占められる。紫灰色土は大半の土壙墓中に認められ、遺骸そのものか、遺骸を包んだものが変化した土層と考えられる。リン分析の結果、この層は他の層、地山よりリン分が多いことが分っている。上層の淡黄色・黄色のシルト層はベースとなる地山層との区別が非常に困難であった。

分布　第Ⅳ調査区の土壙墓群はその密集度によって３群に分けられる。群の境界は不鮮明であるが、若干の空間が認められ、その空間によって区分できるようである。北群・中央群・南群の３群である。１群につき80基から90基の割合である。

遺物（第25図）　土壙内から須恵器が出土している。「枕」として使用されたものと思われる。器種は提瓶・甕・俵壺・坏で、完形を留めるものと、破片で置かれたものがある。又、遺構相互の切り合いが激しい事から、同一個体の破片が複数の土壙墓から出土している。総ての土壙墓が



第22図　ＳＫＡ２土器出土状態

須恵器を持っているわけではなく、小片も含めて須恵器を出土しているのは 277 基中53基（ 19.13%）である。切り合いによる破片の移動を考えれば、さらに少ないものと思われる。

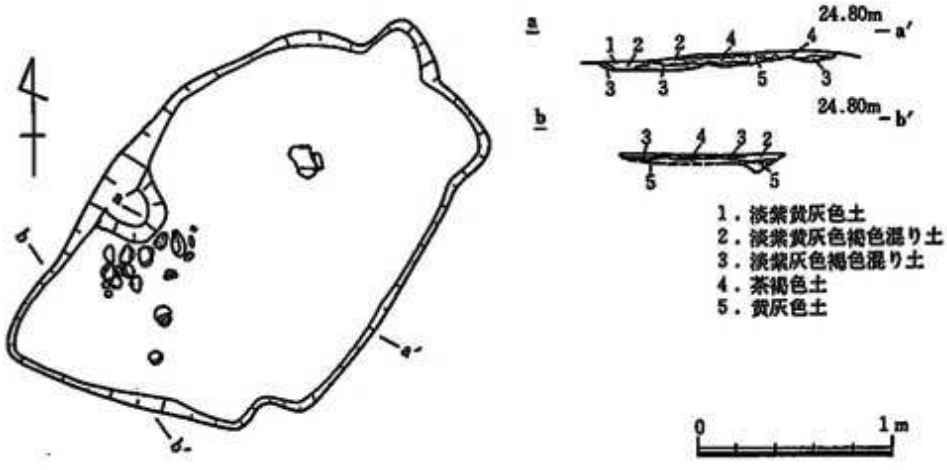
集落の変遷

総ての遺構が同時に存在したわけではない。調査成果として我々の眼前に置かれた資料は、時間的累積の結果としての姿であり、当時の生きた集落の姿ではない。遺構相互の切り合いからも、それは言え、たとえ切り合い関係がなかったとしても、同時性の証明にはならない。一定の居住空間をどのように把握したのか、時間的変遷を追いながら述べたい。

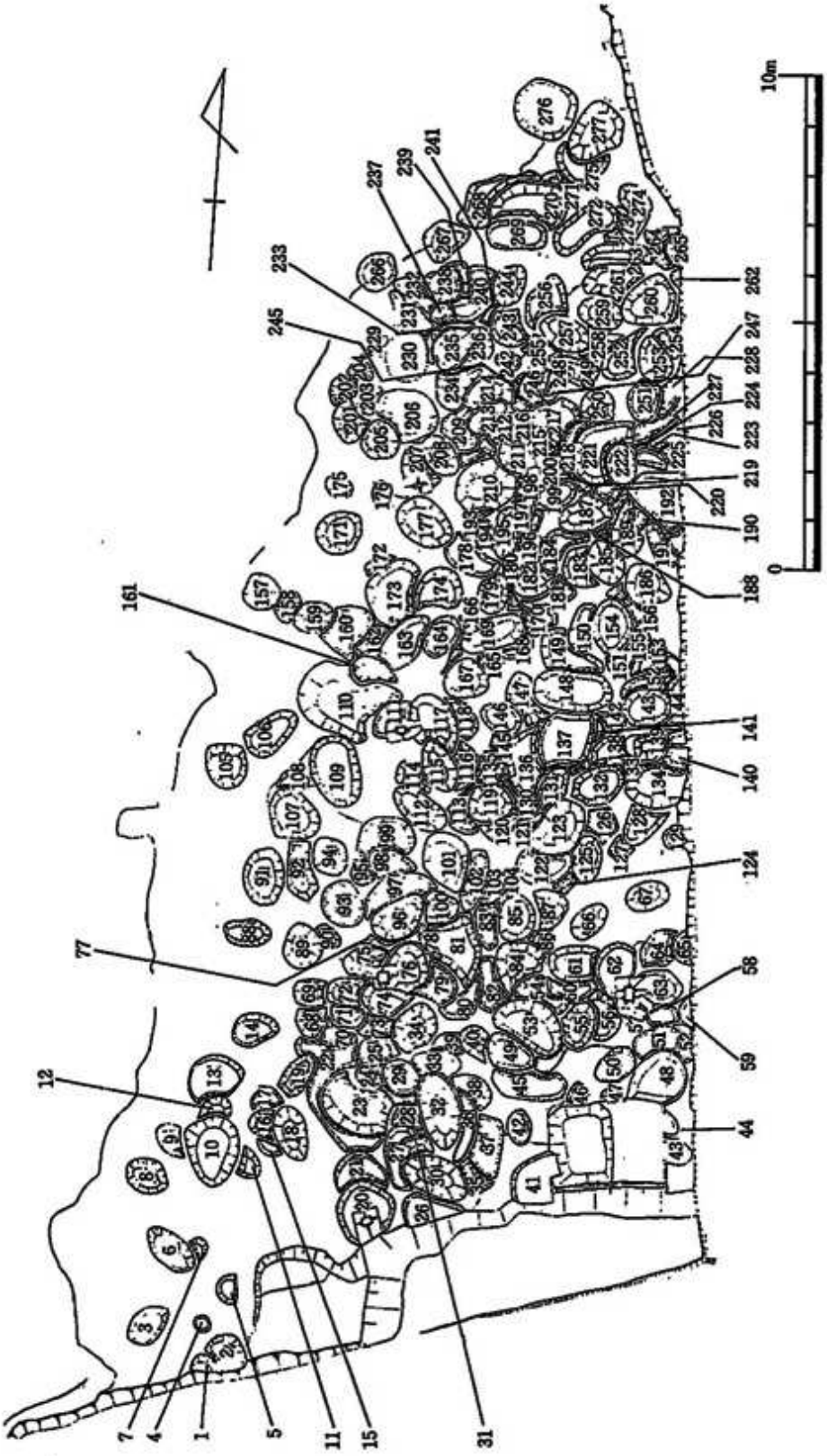
住居址相互の同時性については住居の一辺を軸としながら、その方位によってまとめた。平面形状が方形とは言え、同一住居址における相対時する辺が平行するとは限らず、掘立柱建物の様に厳密なものではない。一定の許容範囲をその都度与え、グルーピングを行った。その結果、２棟を除いて以下の３群に分けられる。

N—49°～51°—W　ＳＢＫ１・３・５・８・13

N—62°～63°—W　ＳＢＫ６・７・９



第23図　ＳＫＡ４平面図・断面図



第24図　土　壙　墓　群

第3表 土壙墓群一覧表(1)

土壙墓番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	長軸の方位	肩のレベル(m)	底面レベル (m)	形状	埋め土	遺物
1	(22)	—	20	—	25.49、—	25.29	(円)	—	—
2	(56)	(55)	24	(N—87°—E)	25.48、—	25.24	(だ円)	上層	須恵器
3	96	60	21	N—47°—E	25.57、25.54	25.36	だ円	上層	須恵器甕（体部）
4	30	—	25	—	25.53、—	25.28	円	—	—
5	(60)	(44)	16	(N—76°—E)	26.48、25.46	25.31	(だ円)	上・中層	—
6	114	66	21	N—50°—W	25.52、25.49	25.30	だ円	—	—
7	28	22	20	—	25.54、—	25.34	(だ円)	下層	—
8	90	70	20	N—64°—W	25.51、—	25.31	だ円	中層	—
9	(46)	(42)	12	(N—67°—W)	25.53、25.52	25.40	(だ円)	—	—
10	140	104	23	N—19°—W	25.54、—	25.31	だ円	中層	須恵器俊壺・甕（体部）・壺（体部）
11	(47)	(43)	22	(N—68°—W)	25.54、—	25.32	(だ円)	上層	—
12	(62)	(36)	26	(N— 9°—E)	25.55、25.50	25.29	(だ円)	—	—
13	(110)	(80)	20	(N—18°—E)	25.52、—	25.32	(円)	—	—
14	89	68	16	N—67°—W	25.54、25.51	25.35	だ円	中層	須恵器甕（体部）
15	(35)	(34)	20	—	25.54、—	25.34	—	上層	—
16	(56)	(42)	21	(N—90°—W)	25.50、25.49	25.28	(だ円)	—	須恵器・壺
17	(64)	(37)	26	N—12°—W	25.54、—	25.28	(だ円)	上・中層	須恵器
18	116	66	26	N—26°—W	25.51、25.46	25.24	だ円	—	須恵器 俊壺
19	51	30	13	N—37°—E	25.55、25.44	25.37	だ円	上層	須恵器
20	120	108	19	(N—25°—E)	25.48、25.36	25.24	円	—	須恵器甕（体部）
21	(100)	(55)	15	(N—68°—E)	25.41、25.39	25.26	(だ円)	—	須恵器 提瓶
22(1)	(28)	—	25	(N—37°—W)	25.39、—	25.14	—	中層	須恵器 俊壺
22(2)	(24)	—	31	(N—37°—W)	25.44、25.40	25.09	—	中層	須恵器甕（体部）
22(3)	47	31	18	N—88°—W	25.40、—	25.22	—	中層	須恵器壺（体部）
22(4)	72	31	18	N—83°—W	25.46、25.42	25.26	—	中層	—
23	(146)	(92)	26	N—72°—W	25.40、25.36	25.14	だ円	—	須恵器 甕（体部）
24	(26)	—	14	(N—78°—E)	25.43、—	25.29	—	上・中層	—
25	(72)	(64)	21	(N—87°—E)	25.41、—	25.20	(だ円)	—	—
26	(132)	(43)	15	(N—19°—W)	25.41、—	25.26	—	上・中・下層	—
27	(120)	(36)	20	(N— 9°—E)	25.41、25.40	25.22	(だ円)	—	—
28	(53)	(36)	20	(N—22°—W)	25.39、—	25.19	(だ円)	—	—
29	(14)	—	21	—	25.38、25.37	25.19	—	—	—
30	135	77	17	N—72°—W	25.37、25.34	25.19	だ円	上層	須恵器 俊壺・甕

第3表　土壙墓群一覧表(2)

土壙墓番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	長軸の方位	肩のレベル(m)	底面レベル (m)	形状	埋め土	遺物
31	(59)	(30)	19	(N—59°—W)	25.40、—	25.21	—	中層	—
32	153	80	18	N—20°—W	25.38、—	25.20	だ円	上・中層	須恵器　甕（体部）
33	(92)	(46)	17	(N—79°—E)	25.38、25.36	25.20	(だ円)	—	—
34	101	76	23	N— 7°—E	25.39、25.36	25.16	だ円	—	須恵器　甕（口縁）6C中
35	(73)	(22)	14	(N—54°—E)	25.40、25.35	25.21	—	—	—
36	(123)	(26)	13	(N— 0°—W)	25.34、—	25.21	(だ円)	上・中層	—
37	119	58	7	N—17—°W	25.36、—	25.29	隅丸方形	上層	—
38	(84)	(41)	16	(N—98°—W)	25.42、25.39	25.22	(だ円)	—	須恵器
39									
40									
41	87	77	13	(N—66°—E)	25.37、—	25.24	—	上層	—
42	71	50	11	N—15°—W	25.35、25.34	25.24	だ円	中層	—
43	(58)	(50)	15	(N—71°—W)	25.39、25.38	25.23	(だ円)	上・下層	—
44	(34)	(30)	12	(N—85°—W)	25.41、—	25.29	(だ円)	上層	須恵器壺（体部）
45	(153)	(54)	11	N—54°—E	25.35、—	25.24	だ円	—	—
46	42	42	14	N—50°—E	25.35、25.34	25.22	だ円	—	—
47	(48)	(18)	11	—	25.37、—	25.26	(だ円)	上層	—
48	(104)	(100)	22	(N—35°—E)	25.39、—	25.17	(だ円)	—	—
49	(62)	(59)	17	(N—81°—E)	25.41、25.38	25.21	(だ円)	中層	—
	98	62	12	N—65°—W	25.37、25.36	25.26	だ円	上層	須恵器　壺（体部）
50	91	57	17	N—57°—E	25.36、25.34	25.18	だ円	上層	—
51	(98)	(44)	15	(N—47°—E)	25.39、—	25.24	(だ円)	上層	—
52	(63)	—	14	—	25.39、—	25.25	—	—	—
53	144	86	21	N—68°—W	25.39、—	25.18	だ円	中層	—
54	108	(84)	16	(N—79°—E)	25.35、25.34	25.18	(だ円)	上・中層	—
55	86	(64)	18	N— 7°—E	25.39、25.38	25.21	だ円	—	—
56	(89)	(80)	18	(N—31°—W)	25.34、25.33	25.16	—	上・中層	—
57	(69)	(26)	10	(N—84°—E)	25.36、—	25.26	(だ円)	上層	—
58	(60)	(34)	16	(N—64°—E)	25.39、25.37	25.23	—	—	—
59	(28)	—	10	—	25.38、—	25.28	—	上層	—
60	(27)	—	11	(N—72°—E)	25.35、—	25.24	—	上層	—
61	(90)	(76)	20	N—90°—E	25.32、—	25.20	だ円	中層	—
62	110	88	15	N— 2°—W	25.35、—	25.20	だ円	—	—

第3表 土壙墓群一覧表(3)

土壙墓番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	長軸の方位	周のレベル(m)	底面レベル (m)	形状	埋め土	遺物
63	(87)	70	17	N—84°—E	25.37、25.34	25.18	だ円	中層	—
64	(77)	(60)	15	(N—27°—E)	25.34、—	25.19	(だ円)	中層	—
65	(34)	—	11	(N—11°—W)	25.35、—	25.24	—	上層	—
66	89	53	10	N—44°—E	25.37、—	25.27	だ円	上層	—
67	90	62	16	N—76°—E	25.30、—	25.14	だ円	上層	—
68	(60)	(58)	22	(N— 7°—E)	24.43、—	25.21	(円)	—	須恵器 甕(体部)・坏
69	60	58	22	(N—34°—E)	25.51、25.44	25.29	隅丸方形	中層	—
70	57	41	18	—	25.41、25.40	25.23	—	上層	—
71	(70)	(38)	17	(N—13°—E)	25.46、—	25.29	(円)	中層	—
72	(64)	(56)	18	(N—77°—E)	25.41、25.40	25.24	隅丸方形	上層	—
73	(70)	(37)	16	(N—89°—W)	25.42、25.36	25.24	(だ円)	上層	—
74	(88)	(66)	15	(N—89°—W)	25.41、—	25.26	(だ円)	—	—
75	(78)	(59)	15	(N—71°—W)	25.41、25.40	25.25	(だ円)	上・中層	—
76	(97)	(86)	23	(N—47°—E)	25.42、25.38	25.18	隅丸方形	上層	—
77	(56)	—	22	—	25.40、—	25.18	—	上・中層	—
78									
79	(62)	(59)	16	(N—63°—W)	25.41、—	25.25	(だ円)	中層	須恵器 甕(体部)
80	(92)	(50)	18	(N—35°—W)	25.41、—	25.23	(だ円)	—	—
81	(94)	(76)	20	(N—10°—E)	25.42、—	25.22	(だ円)	中層	—
82	(107)	(36)	19	—	25.36、—	25.18	(だ円)	上・中層	—
83	(88)	(44)	13	—	25.39、—	25.26	—	上層	—
84	(102)	(80)	15	(N— 3°—E)	25.40、25.36	25.21	(だ円)	上・中層	—
85	92	75	20	N— 9°—W	25.38、25.36	25.16	だ円	—	—
86	(44)	(42)	14	(N—45°—E)	25.34、—	25.20	—	上層	—
87	(76)	(61)	19	N—11°—W	25.38、—	25.19	(円)	—	—
88	96	68	15	N—90°—W	25.56、—	25.41	だ円	?	須恵器甕(体部)
89	94	82	12	N— 0°—W	25.46、25.41	25.30	だ円	上・中層	須恵器
90	52	32	16	N—57°—W	25.42、25.39	25.24	隅丸方形	上層	—
91	124	84	20	N—.6°—W	25.53、25.42	25.33	だ円	中層	須恵器
92	(121)	(51)	24	(N—39°—W)	25.41、—	25.17	(だ円)	中層	—
93	98	77	13	N—40°—W	25.44、25.42	25.28	円	—	須恵器使壺
94	(84)	(73)	19	N—38°—W	25.38、—	25.19	隅丸方形	中層	須恵器
95	(49)	(40)	14	(N—80°—E)	25.40、—	25.26	—	中層	—

第3表 土壙墓群一覧表(4)

土壙墓番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	長軸の方位	肩のレベル(m)	底面レベル (m)	形状	埋め土	遺物
96	117	72	25	N—50°—E	25.40、25.38	25.21	だ円	中層	須恵器 甕(体部)
97	(127)	(44)	14	—	25.35、25.34	25.20	(だ円)	上・中層	—
98	(79)	(48)	9	(N—71°—W)	25.38、25.36	25.28	(だ円)	下層	—
99	(115)	(62)	19	(N—78°—E)	25.39、25.36	25.22	(隅丸方形)	上・中層	—
100	70	64	22	N—77°—E	25.38、—	25.14	隅丸方形	中層	—
101	127	98	22	N—23°—W	25.36、—	25.14	だ円	中層	須恵器 提瓶・甕
102	(68)	(30)	24	(N—25°—E)	25.38、25.36	25.14	(だ円)	中層	須恵器甕(体部)
103	(126)	(34)	22	(N—69°—E)	25.39、—	25.18	—	上・中層	—
104	(48)	—	16	(N—62°—E)	25.34、—	25.19	(だ円)	上層	—
105	94	90	20	N—80°—E	25.54、25.51	25.31	だ円	中層	須恵器甕(底部)・弥生甕(底部)
106	130	70	16	N—48°—E	25.48、25.40	25.28	だ円	—	須恵器 甕フタ
107	110	92	15	N—58°—W	25.45、25.40	25.28	隅丸方形	上層	—
108	(62)	(38)	17	(N—34°—E)	25.37、25.31	25.20	—	上層	—
109	145	96	13	N—20°—W	25.40、25.38	25.25	隅丸方形	中層	須恵器
110	(83)	(70)	45	(N—68°—W)	25.41、—	24.96	(だ円)	中層	須恵器甕(体部)、石鏃
111	100	?	?	N—45°—E	?、—	25.23	だ円	?	—
112	120	67	16	N—58°—W	25.36、—	25.20	だ円	上層	—
113	(90)	(28)	16	(N—71°—E)	25.39、—	25.23	—	中層	—
114	(55)	(48)	20	(N—10°—W)	25.33、25.32	25.12	—	上・中層	—
115	108	63	15	N—25°—W	25.36、25.34	25.20	だ円	上・中層	—
116	(100)	(48)	20	—	25.37、25.36	25.16	—	?	—
117	(98)	(90)	29	(N—34°—W)	25.36、25.35	25.07	(隅丸方形)	上層	—
118	(80)	(34)	19	—	25.34、25.33	25.14	(だ円)	上層	—
119	89	73	22	N—79°—E	25.35、25.34	25.12	円	中層	—
120	(66)	(38)	16	(N—85°—W)	25.35、—	25.19	(円)	—	—
121	(85)	—	18	(N—55°—E)	25.34、25.30	25.14	(隅丸方形)	—	—
122	114	60	24	N—71°—W	25.36、25.35	25.16	だ円	—	—
123	122	84	15	N—15°—E	25.33、25.30	25.08	隅丸方形	中層	須恵器壺(肩部)・須恵器?
124	40	24	20	—	25.37、—	25.17	—	上・中層	須恵器 甕(体部)
125	100	56	18	N— 0°—W	25.30、25.29	25.12	だ円	中層	—
126	(64)	(60)	14	(N—84°—E)	25.30、—	25.16	(円)	—	—
127	(72)	(70)	21	(N—71°—E)	25.35、—	25.14	(円)	上・中層	—
128	(153)	(77)	12	(N—19°—E)	25.30、25.28	25.16	(だ円)	中層	—

第3表 土壙墓群一覧表(5)

土壙墓番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	長軸の方位	肩のレベル(m)	底面レベル (m)	形状	埋め土	遺物
129	(43)	—	16	(N—85°—W)	25.29、—	25.14	(円)	—	—
130	20	—	16	—	25.32、—	25.16	—	—	—
131	(94)	(55)	16	(N— 9°—W)	25.30、—	25.14	(円)	中層	—
132	(107)	75	24	N—65°—E	25.30、—	25.08	だ円	—	—
133	—	—	?	—	? 、—	25.18	—	?	—
134	(120)	(92)	24	—	25.31、—	25.07	—	?	—
135	(75)	(55)	20	(N—81°—E)	25.34、25.32	25.14	(円)	中層	—
136	(96)	(63)	14	N—83°—W	25.33、25.31	25.18	—	上層	—
137	106	93	12	N—36°—E	25.34、35.32	25.20	隅丸方形	上層	須恵器 壺（底部）生焼
138	(68)	(62)	17	(N— 0°—E)	25.28、—	25.11	(だ円)	上・中層	—
139	(88)	(60)	?	—	25.32、—	?	—	?	—
140	(76)	(27)	27	—	25.29、—	25.02	—	上・中層	—
141	(40)	—	11	—	25.34、—	25.23	—	上層	—
142	(36)	—	8	(N—84°—W)	25.35、25.34	25.27	(だ円)	—	須恵器
143	100	75	20	N—73°—E	25.31、25.30	25.10	隅丸方形	上層	—
144	(78)	—	(17)	N— 0°—E	25.28、25.26	(25.10)	(だ円)	—	—
	(78)	—	(18)	(N—65°—W)	(25.28)、(25.27)	(25.10)	—	—	—
145	(96)	(63)	14	N—83°—W	25.33、25.31	25.18	—	上層	—
146	88	60	16	N—70°—W	25.36、25.34	25.18	だ円	上・中・下層	—
147	(115)	(30)	15	(N—32°—W)	25.34、25.33	25.18	(だ円)	—	—
148	159	80	26	N—90°—E	25.34、—	25.08	だ円	中層	須恵器甕（体部）
149	(140)	(88)	12	—	25.37、25.33	25.21	—	?	—
150	114	(46)	23	N— 7°—E	25.33、—	25.10	だ円	中層	須恵器坏（完）
151	52	40	14	—	25.33、—	25.19	—	上・中層	—
152	(108)	(36)	14	—	25.31、—	25.17	—	?	—
153	(49)	(44)	16	(N—10°—E)	25.30、25.28	25.14	(だ円)	上層	—
154	122	83	25	N— 0°—W	25.32、—	25.07	だ円	中・下層	—
155	(62)	(42)	22	(N—73°—W)	25.30、25.29	25.08	(だ円)	上・下層	—
156	(118)	—	20	(N— 8°—E)	25.36、—	25.16	—	上・中層	—
157	80	75	18	N—85°—W	25.55、25.46	25.34	円	下層	—
158	(66)	(39)	20	—	25.50、25.49	25.30	(だ円)	—	—
159	96	84	18	N—20°—E	25.54、25.48	25.30	だ円	—	—
160	(82)	(79)	21	(N—75°—E)	25.44、25.42	25.22	(だ円)	上層	—

第3表 土壙墓群一覧表(6)

土壙墓番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	長軸の方位	肩のレベル(m)	底面レベル (m)	形状	埋め土	遺物
161	(95)	(42)	19	(N—49°—W)	25.40、25.37	25.12	(だ円)	中層	—
162	(79)	(32)	19	—	25.45、25.43	25.26	—	—	—
163	110	71	21	N—40°—E	25.41、—	25.20	だ円	—	須恵器 甕
164	110	64	24	N—34°—E	25.42、25.40	25.17	だ円	中・下層	—
165 (1)	(110)	—	17	(N—90°—E)	25.38、25.36	25.21	(だ円)	上・中層	—
165 (2)	30	—	17	—	25.41、25.40	25.23	—	—	—
166									
167	90	83	27	N—89°—E	25.40、—	25.13	隅丸方形	上・中層	—
168	(73)	(27)	19	(N—88°—E)	25.37、25.34	25.18	—	—	—
169	133	65	26	N—68°—E	25.42、25.37	25.13	隅丸方形	—	須恵器俊壺（生焼）
170	(52)	(42)	18	—	25.38、25.37	25.19	—	—	—
171	90	80	16	N—52°—E	25.49、25.48	25.32	隅丸方形	—	—
172	(64)	(19)	14	N—83°—E	25.46、—	25.32	(だ円)	上層	—
173	126	110	26	N—15°—E	25.44、25.40	25.17	隅丸方形	—	須恵器 甕（生焼）
174	(96)	(82)	17	(N—36°—E)	25.44、25.38	25.27	だ円	中層	須恵器俊壺（体部）
175	60	46	16	N—51°—W	25.52、25.50	25.35	円	—	須恵器？
176	48	40	12	N—S	25.46、25.43	25.34	円	—	—
177	118	100	31	N—49°—W	25.43、25.41	25.12	だ円	—	—
178	(108)	(56)	16	(N—57°—W)	25.42、—	25.26	(だ円)	中層	弥生 壺
179	73	60	23	N— 8°—E	25.42、25.40	25.18	だ円	中層	—
180	(105)	—	23	N—35°—W	25.39、—	25.16	(だ円)	中層	—
181	(110)	(54)	15	(N—20°—E)	25.39、25.37	25.24	(だ円)	中層	—
182	(72)	(71)	21	(N—36°—E)	25.39、25.36	25.15	(だ円)	中層	—
183	(75)	(50)	17	(N—36°—E)	25.34、—	25.17	—	—	—
184	(83)	(48)	21	(N—64°—E)	25.36、25.35	25.14	(だ円)	—	—
185	96	65	25	N—35°—W	25.36、—	25.11	だ円	—	—
186	99	68	26	N—70°—W	25.36、25.34	25.08	隅丸方形	中層	須恵器
187									
188	112	72	23	—	25.36、—	25.13	隅丸方形	—	—
189	70	64	17	(N— 8°—E)	25.34、25.32	25.17	だ円	下層	—
190	(38)	(30)	15	—	25.35、—	25.20	—	—	—
191	(100)	(33)	16	(N—77°—W)	25.34、25.32	25.16	(だ円)	—	—
192	(105)	(93)	16	(N—73°—W)	25.34、—	25.18	(だ円)	中層	—

第3表 土壙墓群一覧表(7)

土壙墓番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	長軸の方位	肩のレベル(m)	底面レベル (m)	形状	埋め土	遺物
193	(76)	(22)	27	(N—48°—W)	25.39、—	25.12	—	—	—
194	(68)	(24)	24	N—40°—E	25.39、—	25.15	(だ円)	下層	—
195	106	63	8	N—13°—E	25.39、—	25.31	だ円	上層	—
196	(68)	(32)	18	—	25.39、—	25.21	—	—	—
197	48	28	20	—	25.39、25.38	25.18	だ円	上層	—
198	25	—	16	—	25.39、—	25.27	—	—	—
199	(92)	(52)	5	N—62°—E	25.31、—	25.26	だ円	?	—
200	(20)	—	18	—	25.36、—	25.18	—	—	—
201	(64)	(60)	16	N—38°—E	25.58、25.48	25.36	(だ円)	中層	—
202	(60)	(54)	16	(N—51°—W)	25.52、25.48	25.34	(だ円)	—	—
203	(65)	(34)	18	N—24°—E	25.57、25.54	25.39	(だ円)	—	—
204	(42)	(32)	16	(N—32°—E)	25.58、25.46	25.32	(だ円)	—	—
205	80	74	13	N—84°—E	25.46、—	25.33	円	—	—
206	(130)	(88)	18	(N—61°—W)	25.45、25.42	25.26	だ円	上層	—
207	(82)	(58)	20	(N—40°—W)	25.45、—	25.25	(だ円)	—	—
208	87	60	20	N—58°—W	25.42、—	25.22	だ円	中層	—
209	(86)	(23)	20	(N—18°—E)	25.40、—	25.20	(だ円)	—	—
210	(111)	(106)	32	(N—68°—E)	25.43、25.40	25.10	(隅丸方形)	中層	—
211	102	72	24	N—71°—W	25.48、—	25.12	—	中・下層	—
212	(48)	(25)	18	(N—48°—W)	25.42、25.39	25.21	—	下層	—
213	87	36	24	N—46°—E	25.40、25.39	25.16	だ円	上層	—
214	(94)	(48)	21	(N—35°—E)	25.39、—	25.18	(隅丸方形)	—	—
215	(52)	—	17	—	25.38、—	25.21	—	—	—
216	(20)	—	12	—	25.40、—	25.28	—	—	—
217	(93)	(78)	18	N—66°—W	25.37、25.35	25.18	(だ円)	—	—
218	(82)	(36)	16	—	25.36、25.34	25.18	(だ円)	—	—
219	(21)	—	(13)	—	25.36、—	25.23	—	—	—
220	(36)	—	(14)	(N—15°—W)	25.34、—	25.20	—	—	—
221	(116)	(116)	20	(N—10°—E)	25.30、25.28	25.18	(だ円)	—	須恵器甕（底部）
222	80	70	28	N— 7°—W	25.36、—	25.08	だ円	—	—
223	(58)	(34)	20	—	25.32、25.31	25.11	—	中層	—
224	(12)	—	21	—	25.29、—	25.08	—	—	—
225	(50)	(31)	19	—	25.30、—	25.11	(だ円)	—	—

第3表 土壙墓群一覧表(8)

土壙墓番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	長軸の方位	肩のレベル(m)	底面レベル (m)	形状	埋め土	遺物
226	64	32	18	—	25.30、25.27	25.12	(だ円)	—	—
228	(64)	(38)	21	(N—24°—E)	25.31、—	25.10	(だ円)	—	—
229	30	28	(20)	N—47°—W	25.48、—	25.18	だ円	—	—
230	93	71	14	—	25.44、25.43	25.30	だ円	—	—
231	(80)	(55)	22	(N—50°—W)	25.48、25.42	25.26	—	—	—
232	(83)	(36)	22	—	25.44、—	25.22	—	—	—
233	128	18	23	—	25.44、—	25.21	—	—	—
234	(83)	(66)	22	(N—11°—E)	25.42、25.40	25.21	(だ円)	—	—
235	93	70	26	N—77°—E	25.44、—	25.18	だ円	中層	—
236	(72)	40	19	(N—77°—E)	25.40、—	25.21	だ円	上層	—
237	(50)	(40)	19	(N—21°—E)	25.40、—	25.21	だ円	—	—
238	76	55	15	N—90°—E	25.49、25.46	25.35	円	—	須恵器
239	(71)	(14)	(16)	(N—88°—W)	25.50、25.45	25.30	—	上層	—
240	(109)	(40)	15	—	25.47、—	25.32	(だ円)	—	サヌカイト
241	(52)	—	12	—	25.42、—	25.30	—	上層	—
242	50	35	16	N—83°—W	25.32、25.28	25.24	だ円	—	—
243	73	61	15	N—90°—E	25.40、25.38	25.24	だ円	中層	—
244	50	36	20	N—39°—E	25.45、25.42	25.22	だ円	中層	—
245	(27)	—	22	—	25.41、—	25.19	(だ円)	—	—
246	80	54	16	N—60°—E	25.40、25.38	25.22	だ円	下層	須恵器
247	(38)	—	(16)	(N—38°—E)	25.38、—	25.22	—	—	—
248	(35)	(33)	16	N—60°—E	25.37、—	25.04	(円)	中層	—
249	(90)	(48)	15	(N—79°—W)	25.37、—	25.12	(だ円)	—	—
250	68	65	14	(N—17°—W)	25.35、—	25.21	(隅丸方形)	—	須恵器 甕 底に密着
251	(78)	64	22	N—16°—E	25.33、—	25.11	だ円	—	—
252	(73)	(69)	21	N—43°—E	25.35、25.34	25.14	だ円	—	—
253	(96)	(68)	22	N—22°—W	25.36、—	25.14	だ円	?	—
254	(90)	(64)	21	—	25.34、25.31	25.13	(だ円)	上・中層	—
255	(64)	(46)	21	—	25.38、25.36	25.17	—	—	—
256	(114)	(66)	19	(N— 0°—E)	25.40、25.38	25.21	(だ円)	—	—
257	107	64	23	N—47°—W	25.39、—	25.17	だ円	下層	—
258	(60)	(35)	14	—	25.42、—	25.28	—	中層	—
259	(94)	62	17	N—74°—W	25.37、25.34	25.18	だ円	—	須恵器甕（底部）

第3表 土壙墓群一覧表(9)

土壙墓番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	長軸の方位	肩のレベル(m)	底面レベル (m)	形状	埋め土	遺物
260	121	99	26	N—63°—E	25.35、25.33	25.08	だ円	中層	—
261	(94)	(60)	21	(N—79°—W)	25.38、25.34	25.14	だ円	—	—
262	(142)	—	(57)	—	25.39、 —	25.20	—	—	—
263	142	(42)	20	N—83°—W	25.38、 —	25.18	だ円	—	—
264	(62)	(38)	18	—	25.38、25.36	25.20	—	中層	—
265	(34)	—	21	(N—88°—E)	25.38、25.35	25.17	—	上層	—
266	85	80	22	N—39°—E	25.60、25.52	25.38	ほぼ円	—	—
267	(100)	(50)	(26)	(N—51°—E)	25.62、25.52	25.32	—	—	—
268	155	(70)	18	N—85°—E	25.54、25.45	25.30	だ円	中層	—
269	123	53	12	N—87°—E	25.56、25.46	25.34	だ円	—	須恵器使壺（底部）
270	93	77	19	N—63°—E	25.62、25.46	25.36	だ円	—	須恵器 甕
271	(70)	—	(20)	N—80°—E	25.50、25.46	25.27	だ円	—	—
272	136	56	19	N—56°—E	25.42、25.40	25.25	だ円	—	須恵器 壺（生焼）
273									
274	(61)	(45)	(23)	(N—16°—E)	25.43、25.41	25.18	—	上層	須恵器 甕（体部）生焼
275	(96)	(42)	22	(N—75°—E)	25.56、25.44	25.22	だ円	中層	—
276	129	118	18	N—79°—W	25.59、25.57	25.43	隅丸方形	中層	須恵器 壺（生焼）
277	125	77	18	N—39°—E	25.57、26.50	25.36	だ円	中層	—

N—32°～34°—W　SBK2・11・4

以上のグループ以外のものとして、N—18°—Wを測るSBK12、N—58°—Wを測るSBK10がある。

軸を共有するとは言え、それらが総て同時期のものとは言えない。住居址相互の切り合い、規則性を考慮に入れた。又、住居址相互の位置関係を示す1つのモデルを設定したい。モデルとしてはSBK2、SBK11の関係が挙げられる。軸の方位としては同一のグループに入り、約5mの間隔をあける。SBK11は1辺約5m、SBK2は1辺4m弱を測り、住居址の規模に大小関係がある。この位置関係を参考にしながら、再度同一軸方向を共有するグループを細分してみた。

SBK2・11、SBK6・9、SBK5・8、SBK1・3の4グループに分けられる。いづれも、住居址相互に大小関係、一定の間隔を置いている。さらに、南西側の1群が南から北に向かって随時切り合いを見せており、北に向かって建て替えを行っていたことが推定される。さらに、西群の最北にあたるSBK1・3の2棟からは須恵器が出土しており、遺物の面からも新しい様相を呈している。この様な事実と傾向を踏まえながら考察した変遷は次のとおりである。

Ⅰ　SBK2・11・12

↓……Ⅱ　SBK4＋1棟

↓……Ⅲ　SBK10＋1棟

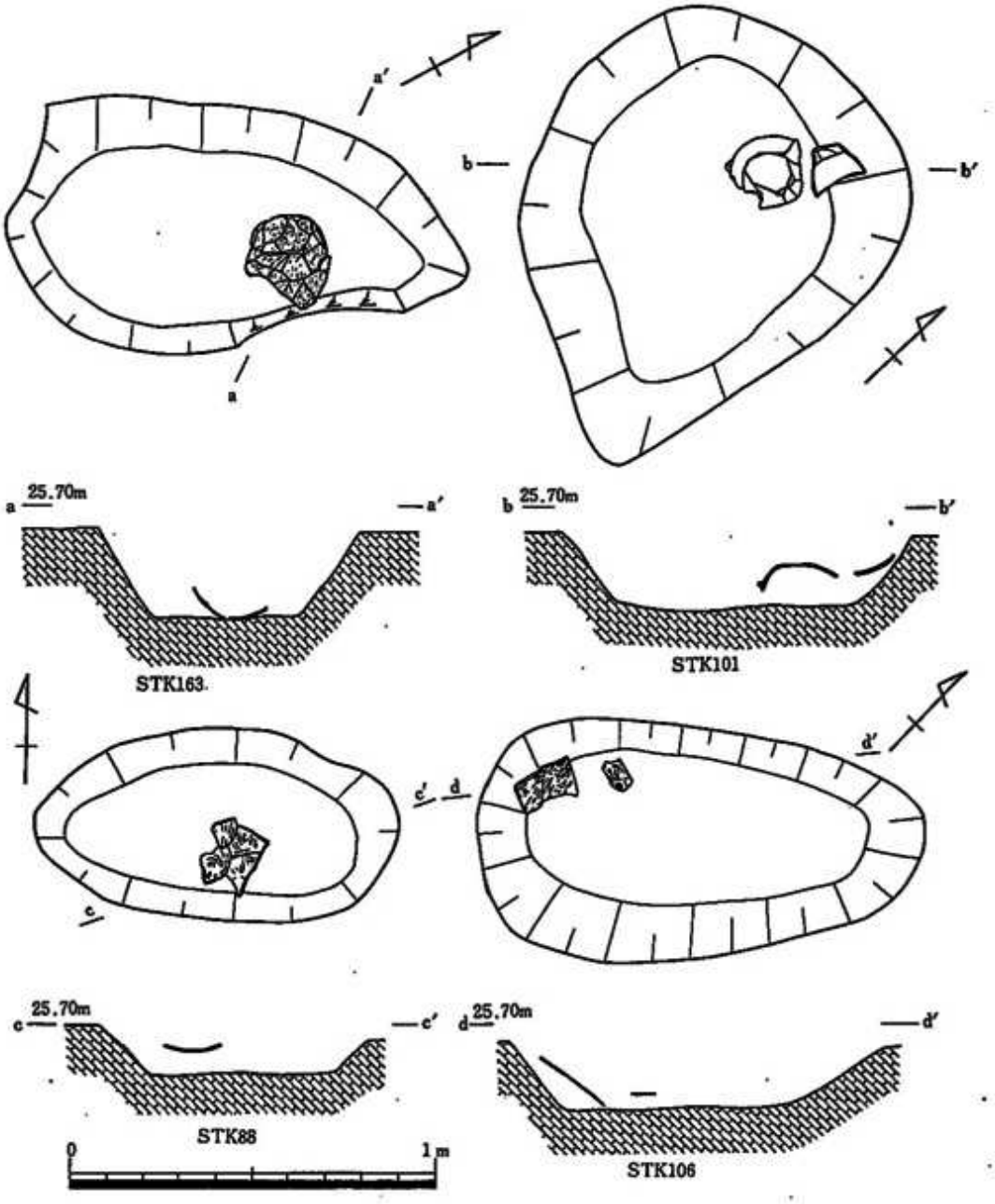
Ⅳ　SBK6・9

↓

Ⅴ　SBK5・8

↓——SBK7

Ⅵ　SBK1・3・13



第25図　土壙墓須恵器出土状態

2棟もしくは3棟単位で5～6時期の変遷を行うと考えられる。軸の方位はⅠ・N—32°～34°—W、Ⅱ・N—62°～63°—W、Ⅲ・Ⅳ・N—49°～51°—Wの順に変化する。ⅠからⅡにかけては大きく西に振り、Ⅲ～Ⅳはやや東に軸を戻す。この傾向に即してどのグループにもあてはまらないＳＢＫ４・７・10を考えると、ＳＢＫ４（N—32°—W）、ＳＢK10（N—58°—W）はⅠからⅡの大きく西に軸を振る過程の中でとらえる事ができる。しかしながら、いづれも１辺３ｍ前後の小規模な住居で、もう１棟づつやや大型の住居と構成されると考えられる。ＳＢＫ４・10は共に調査区の南端近くにあり、共存すると考えられる住居址が調査区の南方に位置すると推定できる。ＳＢＫ７に関しては軸の方位にN—63° —Wを測り、本来ならばＳＢＫ６・９と同一グループに属するが、切り合い関係から考えて共存しない。よってＳＢＫ７の時期はＳＢＫ５・８からＳＢＫ１、３に移行する過程に位置付けるしかない。ＳＢＫ７は周辺に共存するやや小型の住居址を持たない事から、ⅤからⅣの移行期に存在する住居と考えたい。

以上の住居址の変遷に他の遺構を加えると、次の様になる。

Ⅰ、住居址ＳＢＫ２、ＳＢK11と共に存在する遺構として、ＳＢＰ14、ＳＢＰ15・16、ＳＤＡ２を考えたい。

ＳＢＰ14はN—35° —Wを測る掘立柱建物で、束柱を有する事から倉と考えられる。軸の方位から、ＳＢＫ２・11との共存が考えられる。ＳＢＰ15・16はN—28°—W、N—16°—Wを測り、ＳＢＫ２、ＳＢK12とやや近い方向を持つ。掘立柱建物とは成り得ず、部分的に区画の機能を有する柵列と考える。このＳＢＰ15・16を避ける様にＳＤＡ２が流れており、明らかに共存関係を示している。ちなみに、ＳＤＡ２はＳＤＡ１埋没後に掘削されている。

Ⅱ、ＳＢＫ４と調査区の南側に住居址が想定される。

Ⅲ、Ⅱと同様にＳＢK10の他に住居址が想定される。

Ⅳ、ＳＢＫ６と９が共存する。ＳＢＫ６は１辺４ｍ前後を測り、ＳＢＫ９より一回り大きい。

Ⅴ、ＳＢＫ５と８が共存する。ＳＢＫ５は一辺４ｍ前後を測り、ＳＢＫ８より一回り大きい。

Ⅵ、ＳＢＫ１・３・13が共存する。共に大・中・小と格差を持ち、同時にＰ24が形成される。

ＳＤＡ３はＳＢＰ14の廃棄後掘削されたと考えられ、Ⅱ期以降にその存在を考えたい。ＳＸ１は集落成立当初から綿々と使用されていたものであろう。

集落の展開とその意味

遺構をⅠ～Ⅵの各時期に設定した。これを基に万崎池の集落がどの様に展開したかを考える。

Ⅰ期　定着の時期である。埋積浅谷の東側の縁辺に３棟の竪穴住居、１棟の掘立柱建物が作られる。同時に１本の溝が谷を横断するように掘削される。２棟の竪穴住居には大・小の格差が認められる。溝は区画のために掘削されたものと思われるが、溝の南側にはそれに値する遺構は認められない。掘立柱建物は束柱を持つ事から倉と考えられ、集落成立当初から 11.24㎡とこの時期にしては比較的大きな倉を保有していた事になる。[3]

Ⅱ期　西側縁辺に住居が移動する。住居の移動に伴う形で溝ＳＤＡ３が掘削されたものと思われる。ＳＤＡ３の機能については、溝を境に西側が居住域、東側が墓域という空間の分割が行われたものと思われる。ＳＤＡ３の東側にあるＳＫＡ２・３等の握拳大の礫を置き、小形丸底壺を置く土壙は西側では認められない。Ⅰ期にもＳＤＡ２が存在するが、住居と反対方向には墓と思われる土壙は認められない。

Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期　西側縁辺に定着した住居址が徐々に北へ向かって、さらに移動する時期である。住居址間の大・小関係はある程度維持され続ける。ＳＤＡ３も持続しているものと考えられ、東側には墓域が展開している。

Ⅵ期　最大の住居址ＳＢＫ３の出現する時期である。他にＳＢＫ１・13が同時に存在している。ＳＤＡ３は依然、居住域と墓域を区切っている。Ｐ24の土器溜りが出現する。ＳＢＫ１・３には炉跡が確認されず、屋外炉を想定できる。又、共に貯蔵穴を持つ。ＳＢＫ１・３の住居址から須恵器が出土している。又、ＳＢＫ３からは直弧文を描いた高坏も出土している。

ＳＸ１は永続的に使用されたと考えられる。倉は、Ⅰ期に関して確実に保有されていた事実は窺えるが、Ⅱ期以降に関しては認められない。唯、Ⅰ期の倉と考えるＳＢＰ14の西側には柱穴が散在しており、掘立柱建物が幾つか構築されていた可能性が充分残されている。Ⅱ期以降も、この周辺に倉がその都度建て替えられていたと考えたい。

Ⅰ期は集落の試行の時期である。２棟の竪穴住居と１棟の倉から構成されるこの単位集団は、開析谷の開発に伴って、この地に移動したのである。この集団は最小限度の労働力を保持していたものと考えられる。これは倉の側面からも言え、面積 11.24㎡と言う、この時期にしては比較的大きな倉を保有している。開析谷を経営・維持するにあたっての農耕技術も一定所持しており、技術的側面から見て、この地域における先進的な部分の末端に位置していたのかも知れない。耕地面積がある程度制限されている開析谷の開発は、一定の技術的水準と耕地を拡大できない地理的限界―多人数を養えない収穫量と言う効率の悪さから、竪穴住居２棟と比較的大きな倉からなる１単位集団をここに定着させた。北・西・南方向を谷に囲まれたこの地が、一種隔絶された土地である事は言うまでもないが、Ⅰ期の住居が唯一の他との通路である東よりに位置している事は他集団との共同労働―開発の処女地である開析谷の開発期だからと考えるのは愚見であろうか。[4]

Ⅱ期になると住居は埋積谷西側縁辺に移動する。同時にＳＤＡ３が設けられ、東側が墓域とな

る。北・西・南と開析谷に囲まれ、東に墓域を持つⅡ期以降は、真に隔絶した空間に集落が位置することになる。当然、何処かに通路は確保していると考えられる。この時期から居住域と墓域と言う関係が集落の廃絶まで継続する。又、倉の位置、作業場＝広場の位置もこの時期に固定される。倉の位置はⅠ期の倉であるＳＢＰ14の西側に見られる柱穴群、作業場＝広場は柱穴群から南側あるいは西側に固定される。Ⅰ期を集落の試行の時期とするならばⅡ期は定着の時期である。

Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期はⅡ期にある程度固定化された集落内の位置関係が、踏襲されるようである。倉を持っている事からも窺える、この単位集団の自立性＝排他性は、三方を谷に囲まれると言う立地的特質と東側に墓域を構成する意識の中に、さらに高くなることが観取できる。Ⅱ期以降、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ期は自立性がやや高まる時期である。

Ⅵ期は集落が廃絶に向かう時期である。しかし、それは突然やってくるようである。埋積谷西側縁辺の最北に位置する一群の住居で、それは１辺５ｍ前後を測る住居ＳＢＫ３を中心に構成されている。ＳＢＫ３はⅠ期に見られるＳＢＫ11に続いて出現する大型の住居である。Ⅱ・Ⅲ期は未確認であるが、Ⅳ・Ⅴ期に見られなかった規模を持ち、共存するＳＢＫ１も１辺４ｍを測る。住居２棟の総合面積も41㎡と、これまでにない広い面積を有す。住居面積の拡大は単位集団＝家族人口の増大を示唆する。又、大型の住居は一般的に世帯共同体家長の人格を体現するものと言われる。ＳＢＫ２からは直弧文を描いた土師器高坏や砥石が出土しており、遺物の面からも家長の存在が予想される。Ⅵ期になって出現する遺構としては、Ｐ24の土器溜りがある。住居の南側に位置するＰ24からは多量の土師器と共に縄蕨文土器を出土している。土師器の器種別組成から見て、高坏の量が圧倒的に多く、約60%を占めている。一般的に高坏の多さは祭祀的色彩を帯びると考えられている。[5] 遺構別土器組成の傾向から見て、住居址とＰ24、ＳＸ１の間には高坏の多寡の点で相違が認められる。ＳＸ１では高坏が圧倒的に多量で、管玉と共に須恵器高坏・甕が出土していることから、Ｐ24においても祭祀的機能が推測される。祭祀に関しては集落の成立当初からＳＸ１において行われていたものと考えられる。井戸の機能と祭祀機能を兼ね備えていたのか、井戸故に祭祀の場とされたのかはわからないが、集落の存続期間中祭りの場として使用されていた事は間違いなかろう。Ⅵ期におけるＰ24の出現は、万崎池の集落祭祀において１つの画期と言えるであろう。成立当初から行われていたＳＸ１の祭祀と共にＰ24での祭祀が開始される。当然、種々の要素を持った祭祀が幾つか行われていた事は想像に難くないが、調査の結果現われたのは２つの姿である。Ｐ24の祭祀がどのような形で執り行われていたかは不明であるが、集落における須恵器出現以後の祭祀として、西側の谷から出土した須恵器筒形器台と不可分ではなかろう。

Ⅵ期になると住居に広い面積を確保し、須恵器の所有も許されるという、一見物心共に充実したかのように見えたこの単位集団が忽然と姿を消す。集落の消滅は内的要因か外的要因によるものかは定かではない。集落の内部にその原因を求めれば、住居面積の拡大に伴う家族人口の増加、それと相反する狭隘な耕地、この矛盾から起る集落の移動を考えたい。しかし、人口増加の解消

等としては弥生時代以来の伝統を引く分村として[6]、別個の単位集団を同一共同体内で編成する事が考えられる。万崎池に見られる一単位集団の消滅は、この様な単位集団を幾つか結集させた「ムラ」――筋の谷を媒介とする一の移動であろう。そしてそれは、須恵器筒形器台を使用する祭祀の摂取等、地域における新たなイデオロギーの貫徹を前段階として始まる極めて政治的なものである[7]。

生業と祭祀

集落の変遷については、既に述べた。しかし、幾つか残された問題がある。生業、祭祀、須恵器生産との関連等である。総てについては資料的制約、調査担当者の不勉強もあって充分に語りえない。

生業　開析谷における谷水田を考えている。弥生時代以来、谷水田の開発は行われていたと思われるが、谷自体の立地によって、幾つかの段階に分かれるのではなかろうか。沖積地に面した広い開析谷の水田化、沖積地から深く入り込んだ谷奥での水田化等、一概に谷水田といっても、一まとめにできない。万崎池遺跡の場合、集落の立地からみて、北側の谷、又は、西側の谷に谷水田を求めることができよう。西側の谷は、調査の対象となっているが、平安時代の堤構築に伴って谷底に手を加えたと思われ、古墳時代の単一包含層等の水田耕作層は認められなかった。ただ、集落と同時期の土器は多量に出土しており、当時、多量に投棄されたものだが、後世に攪乱されたと考えられる。故に、北側の谷は、未調査であるが、谷水田として活用されていたのではなかろうか。沖積地から深く入り込んだ開析谷に谷水田を想定することができる。

祭祀　何を持って祭祀とするかは難しい問題である。ＳＸ１、Ｐ24を祭祀と関連する遺構であることは既に述べているが、祭祀遺構と考えるに到る幾つかの媒介項が欠落している。

ＳＸ１は、集落の存続期間、綿々と使用されている遺構である。井戸としての機能を担っていたと考えられ、多量の土師器と共に管玉、須恵器高坏・甕が出土している。土師器の割合は、高坏６割、壺２割、甕２割と高坏が圧倒的に多い。小形丸底壺は少ない[8]。Ｐ24はⅥ期に限って使用された遺構である。土師器が多量に集中しており、共に縄席文土器の破片が散乱していた。土師器の割合は高坏６割、壺２割、甕２割である。

上記の遺構の他に祭祀的色彩を持つものに筒形器台がある。西側の谷から破片となって出土したものであるが、型式的に筒形器台としては古式に位置するものである。

筒形器台の集落内における使用は、５世紀中葉から５世紀後葉にかけて一般化し、６世紀代まで続く、石津川流域においても、５世紀中葉から後葉の陵南、東上野芝、土師遺跡において筒形器台の出土が報告されている。少なくとも、石津川流域では、５世紀後葉からは各集落で使用されていたものであろう。筒形器台の特殊性から考えて集落祭祀に使用されたことは想像に難くない[9]。

集落の変遷の中でＰ24の出現と筒形器台との関連を想定して、集落における１つの画期とした。このことは、集落祭祀の１つの変化として捉えることが可能かもしれない。泉北丘陵における須

恵器生産の開始が集落に与えた影響の１つが、まず祭祀の姿で現われたのではなかろうか。

須恵器生産との関連

集落内から僅かであるが須恵器が出土している。いずれも、ＴＫ73型式の範疇で把えられ、一般的に初期須恵器と言われるものである。集落の変遷から考えて、最終段階に近い時期に須恵器生産が開始されるのであろう。そして同時に、万崎池の集落において、その所有が許されるわけである。集落が須恵器を所有する経過としては極めて政治的な関係―須恵器工人→地域首長→万崎池集落―が考えられる。地域における分業関係の中で須恵器の移動が可能になる。須恵器の焼成・胎土からみて、１つの窯で生産されたものではない。複数の窯で生産されたのと考えられ、初期須恵器窯としてのＴＫ73号やＴＫ85窯以外の窯の存在を示唆するものかもしれない。故に、万崎池集落と須恵器工人集団との直接的な交流は考えられず、地域首長を媒介とする交換によって成立する関係である。

第26図　ＳＤＡ４出土須恵器壺

Ｂ　奈良時代　（第26図）

溝が１本検出されている。古墳時代の集落が埋没した後、埋積谷の東側縁辺を南北に流れる溝である。ＳＤＡ４と呼称され、幅は１ｍから 1.2m、深さは30cmを測る。土層堆積の観察から常時流れていたものではないと思われる。埋積谷を水田化し、それを維持する為の灌漑用水路と考えられ、その源は南側の開析谷で、北側の開析谷に向かって流れ込んでいたと推定される。埋積浅谷が古墳時代の廃絶以後、８世紀段階に水田化された事を示唆するものである。埋土から須恵器の小壺が出土している。

Ｃ　平安時代

調査区の東側、段丘東側の緩やかな斜面に平安時代の掘立柱建物、土壙が検出された。

掘立柱建物

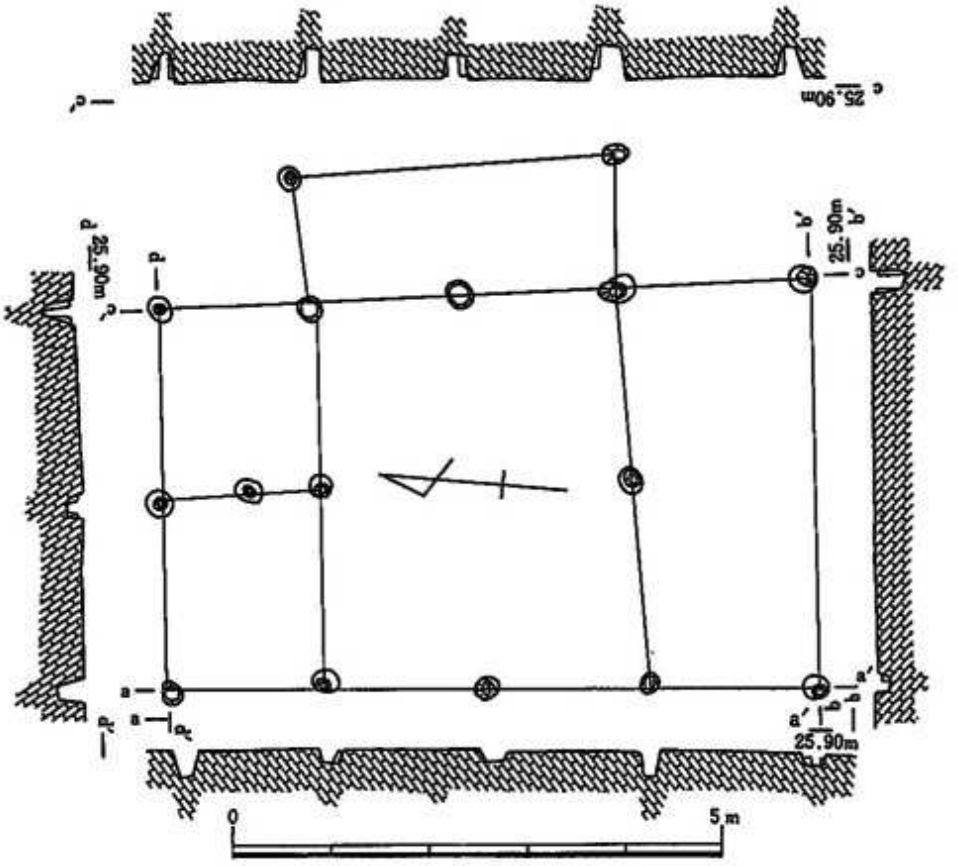
第Ⅳ調査区の東南部で２棟の掘立柱建物が検出されている。立地は段丘東側の緩やかな斜面である。その東側10数ｍの所には狭い開析谷が入っている。２棟の建物の中でもっとも遺存状態が良いのが東側にあるＳＢＰ17である。

ＳＢＰ17（第27・28図）　２間×４間の規模を持ち、東側に廂がつく。梁行 4.0m前後、桁行6.5m、柱間は梁行1.9～2.1m、桁行1.4～1.9mを測る。 柱穴は径20～40cmの円形で深さは検出面から10～20cmを測る。柱穴の底に握拳大の礫を置いたものや、柱を抜取った後、黒色土器Ａ類の椀を置いたものがある。主軸の方位はＮ－３°－Ｗを測る。面積は約30㎡を測る。

ＳＢＰ18（第29図）　２間×１間以上の規模を持つと思われるが、南側の柱穴は確認できなかった。梁行3.8mで柱間は1.9m、桁行は１間しか見つからず柱間は1.8～1.9mを測った。柱穴の径は25～40cm、柱根径は20cm前後、深さは30cmを測る。主軸の方位はＮ－９°－Ｗである。

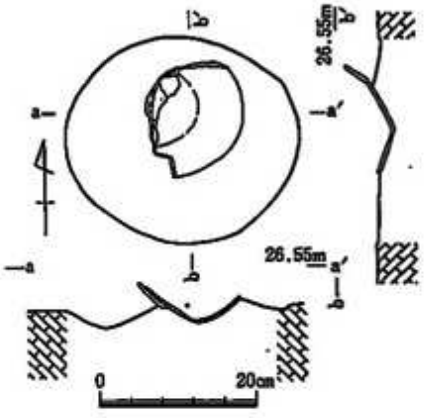
土壙

ＳＫＡ５　これらの建物群の東側に浅い落ち込みＳＫＡ５がある。形状は楕円形を呈し、長軸



第27図　ＳＢＰ17平面図・断面図

1.6m、短軸1.2m、深さ15cmを測る。埋土は単一層で形成されており、黄灰褐色を呈していた。ＳＢ　に付属する施設と思われる。遺構内からは、黒色土器Ａ・Ｂ類の椀、土師器の皿・鉢・甕・羽釜・緑釉陶器の小片が出土している。時期は10世紀後半に位置づけられよう。



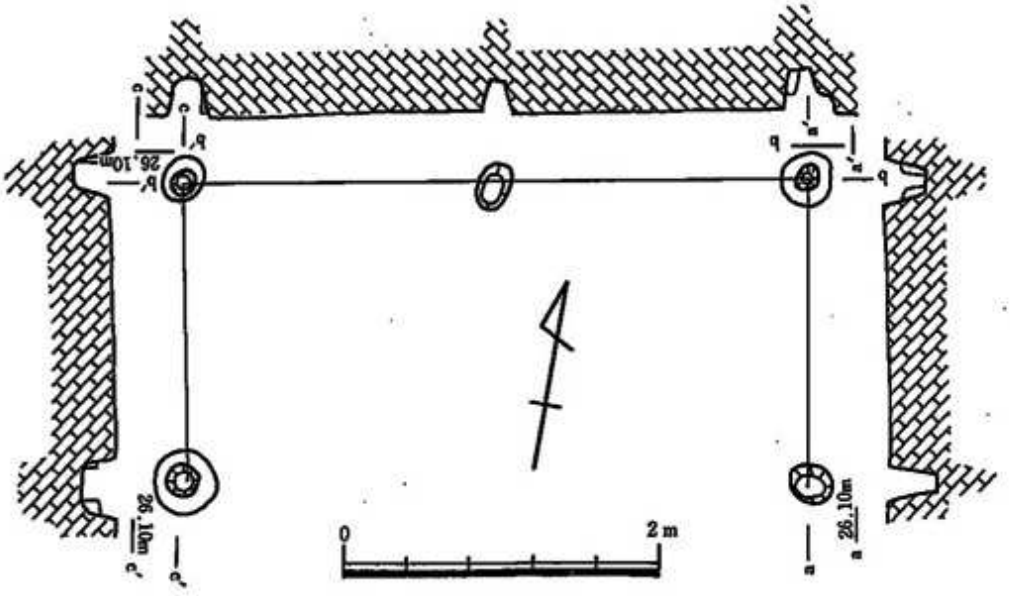
第28図　ＳＢＰ17柱穴内黒色土器出土状態

Ｄ　室町時代

調査区の西側で溝・土壙墓が検出されている。

溝

ＳＤＡ５は段丘の北側斜面に位置する。小規模な溜池をかね備えた溝である。検出された範囲は全長23mを測る。幅は最も広い部分で 7.5m、狭い所で約１m、深さは40cm前後を測る。埋土はシルト層、粘土層からなり、互層を呈している。緩やかな流水と溜水を繰り返していた事を物語っている。遺構のベースとなっている土層は、シルト層か粘土層で形成されており、40cm程の深さでは湧水を期待できない地盤である。つまり、導水による溜池として機能していた事が考えられる。導水の為の溝は検出されていないが、遺構の南側に段丘崖に沿って流れる南北の現水路があり、当時も



第29図　ＳＢＰ18平面図・断面図

この水路が導水の為に使用されていたものと考えられる。それに比高の高い開析谷を利用する溜水から導水したのであろう。中世後期の段丘における治水管理の一面を窺わせる遺構である。ＳＤＡ５が埋没した後、周辺は墓域となる。

土壙墓　（第30図、第４表）

ＳＴＫ201～ＳＴＫ208　９基の土壙墓が確認されている。

規模はいづれも長軸1.5m～2.0m、短軸１m～ 1.5m、深さ0.4～0.6mを測る。形状は楕円形を呈し、底は平坦である。埋土はシルト、粘土からなる。木棺等の痕跡は認められなかったが、底に握拳大の礫を散漫に置いていた。遺物は少なく、副葬品は無い。埋め戻しの際に混入した須恵器、瓦片が僅かに出土しているのみである。尚、ＳＴＫ205からは人骨が出土している。土壙墓相互の切り合いは少なく、一定の間隔を置きながらほぼ直線的に並んでいる。埋葬直後には外部表象等があった可能性が高い。時期は遺物から見て15世紀から16世紀に置くことができよう。

谷を隔てた北側には江戸時代から現代にかけての墓地があり、谷の周辺において墓地が連続していることも考えられる。

ＳＫＡ６（第31図）　調査区の中央付近で検出された土師皿溜めである。長軸50cm、短軸20cmを測る不定形の土壙に土師皿10枚を重ね合わせて置いていた。土壙の深さは５cm程で浅い。土師皿の型式から室町時代後期のものと思われる。

Ｅ　江戸時代

埋甕　（第32図）

調査区の西側において須恵の埋甕が２基出土している。江戸時代のものであるが口縁部等が欠損しているため、形態の詳細等はわからない。

ＳＫＡ７　掘り肩は長軸70cm、短軸40cmの楕円形を呈す。上半部は後世の削平をうけ、底部か

ら10cmしか残存していなかった。

ＳＫＡ８　ＳＫＡ７と同様に掘り肩は楕円形を呈する。長軸60cm、短軸35cm、残存高30cmを測る。

ＳＫＡ７・８は同時期のものと考えられ、その機能については墓、肥溜、水甕等が考えられる。

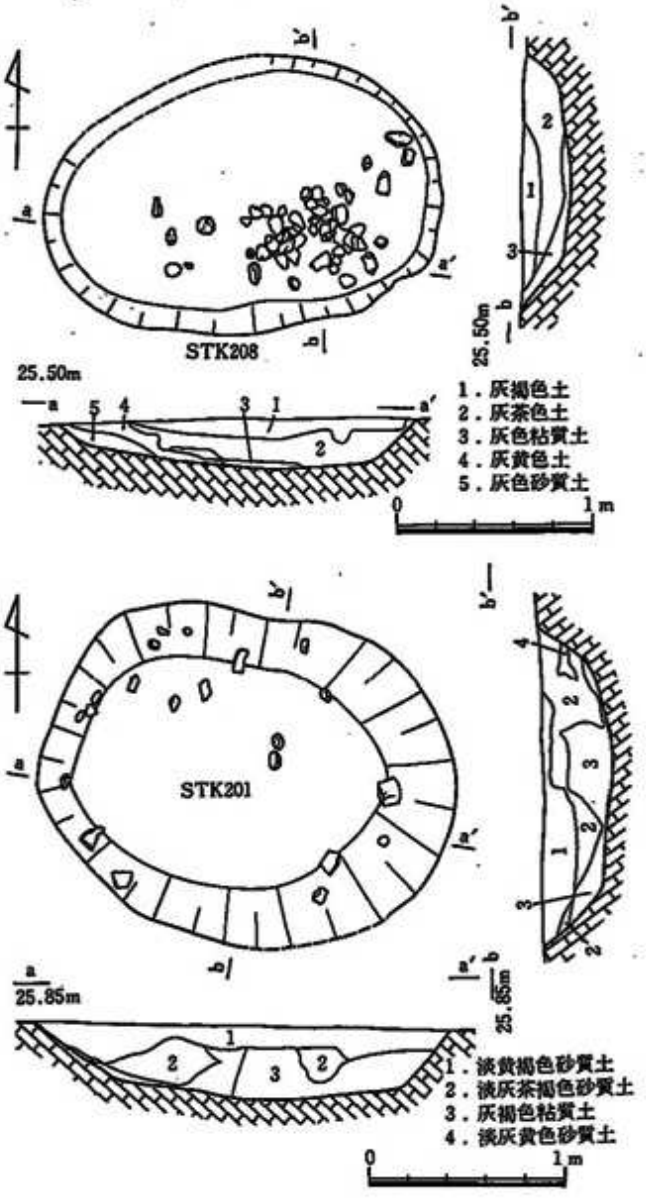
第４節　遺　　物

１　第Ⅱ調査区

Ａ　弥生時代　（第33・37～44図；図版222～224）

調査区の西側にある段丘部から、弥生式土器（畿内第Ⅱ様式新・Ⅳ様式）が出土している。土壙、または周辺の耕土層中から検出したもので遺存状態が極めて悪く、表面が剝落し、成形・調整等の観察ができないもの、図化できないものが多い（第37～39図）。

器種としては広口壺形土器、高坏形土器、小形手捏土器、水差形土器、甕である。量的には広口壺形土器が最も多く15個体を数え、中でもＣ類が多い。高坏形土器は１個体、小形手捏土器２個体、水差形土器は１個体、甕形土器は８個体を数える。



第30図　ＳＴＫ201・208平面図・断面図

胎土等から見て、他からの搬入品は認められず、在地で製作されたもののようである。

調査区東側の開析谷からも多量に土器が出土している。主に青灰色粘土層、暗黒色粘土層からの出土である。いづれも、平安、鎌倉時代の包含層で、時期に相当する土器は非常に少なく、多量の弥生式土器、布留式土器が混在していた。

弥生式土器、弥生時代中期後半から後期（畿内第Ⅱ新・Ⅳ～Ⅴ様式）の土器が出土している。

西側谷の青灰色粘土層（第38図）、広口壺形土器Ａ・Ｃ、無頸壺形土器、鉢形土器、高坏形土器Ａ、甕形土器、蛸壺形土器が出土している。広口壺形土器Ａ３個体、Ｃ８個体、無頸壺形土器

第4表 中世土壙墓一覧表

	長軸	短軸	深さ	層位	備考
STK201	2.1 m	1.6 m	40cm	淡黄褐色土、灰茶色砂質土 淡灰茶褐色砂質土 淡灰黄色砂質土	N－99°－E
STK202	1.6 m	1.4 m	40cm	淡黄灰色砂質土、淡黄褐色砂質土 茶灰色土、灰茶色土、淡黄灰色粘質土 茶灰色粘質土、淡灰茶褐色砂質土 灰茶色粘質土、淡灰茶色砂質土	N－ 9°－E
STK203	1.6 m	1.5 m	38cm	淡黄褐色砂質土、淡黄褐色粘質土 茶灰色土、淡茶灰色粘質土 淡黄灰色粘質土、茶灰色砂質土 茶灰褐色砂質土	N－71°－E
STK204	1.75m	1.4 m	22cm	茶灰色土、淡灰茶色粘質土 灰褐色砂質土	N－129°－E
STK205	(2.0)m	(1.0)m	38cm	灰黄色砂質土、黄灰色土 茶灰色土	人骨 N－65.5°－E
STK206	1.1 m	1.0 m	18cm	灰黄色砂質土、黄灰色土、茶灰色土	N－85°－E
STK207	2.1 m	1.92m	44cm	淡黄灰色砂質土、茶灰色土 淡茶灰色粘質土、黄褐色土 黄灰色粘質土、灰色粘質土 淡茶褐色砂礫土	N－86°－E
STK208	(2.1)m	(1.4)m	40cm	灰褐色土、灰茶色土 灰色粘質土、灰黄色土 灰色砂質土	N－105.5°－E

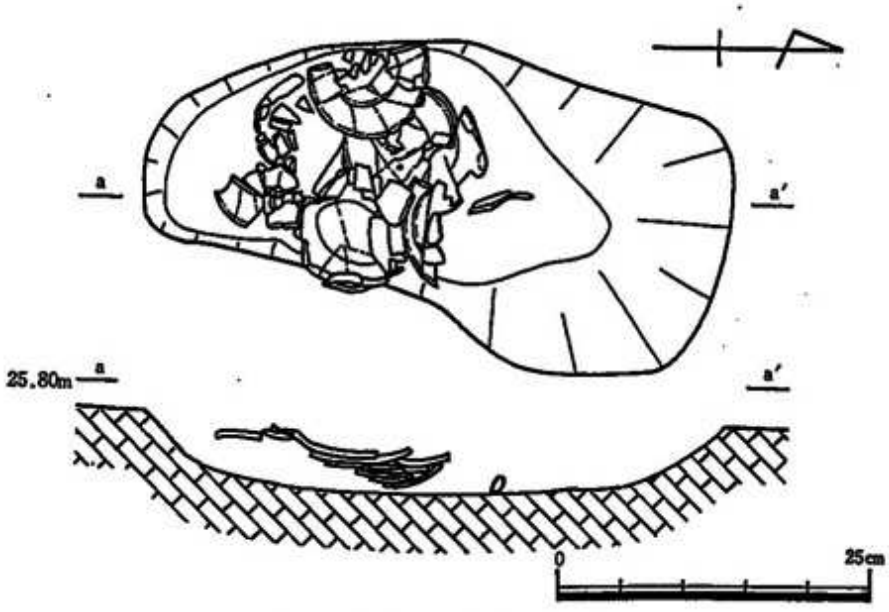
1個体、高坏形土器A1個体、鉢形土器1個体を数える。又、生駒西麓産の甕形土器が1個体出土している。

東側谷青灰色粘土層（第40図）、広口壺形土器A・C、無頸壺形土器、鉢形土器A・C、高坏形土器A、甕形土器が出土している。数量は広口壺形土器Aが9個体、Cが4個体、無頸壺形土器1個体、鉢形土器A2個体、Cが1個体、高坏形土器Aが1個体を数える。

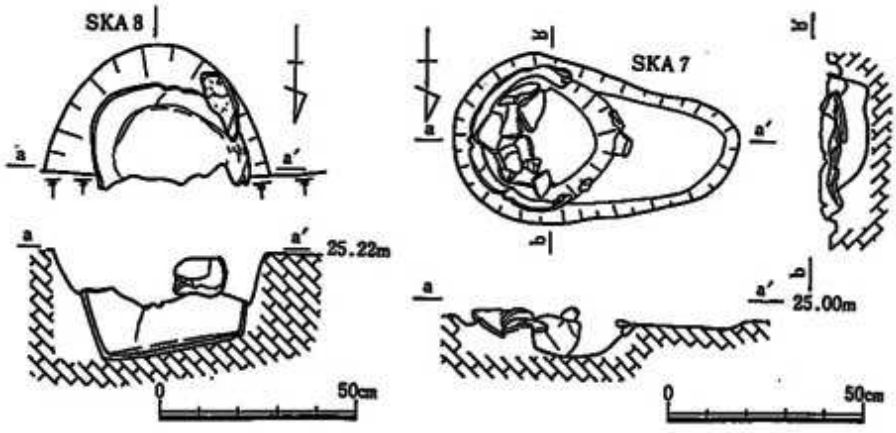
東側谷暗黒色粘土層（第41～43図）、広口壺形土器A・B・C、無頸壺形土器A・C、壺蓋、鉢形土器、甕形土器が出土している。数量は広口壺形土器Aが6個体、Bが2個体、Cが16個体、無頸壺形土器Aが2個体、Cが4個体、壺蓋が2個体、鉢形土器Aが3個体、Cが1個体、甕形土器が22個体出土している。壺形土器の中に口縁部を欠損して、胴部に穿孔したものがある。段丘面の墓域からの流入であろう。

B　古墳時代　（第45～49図；図版224～226）

東側谷暗黒色粘土層（第45～47図）土師器では、甕E、壺F、高坏A、小型丸底壺が出土して



第31図　ＳＫＡ６土師皿出土状態



第32図　ＳＫＡ７・８平面図・断面図

いる。

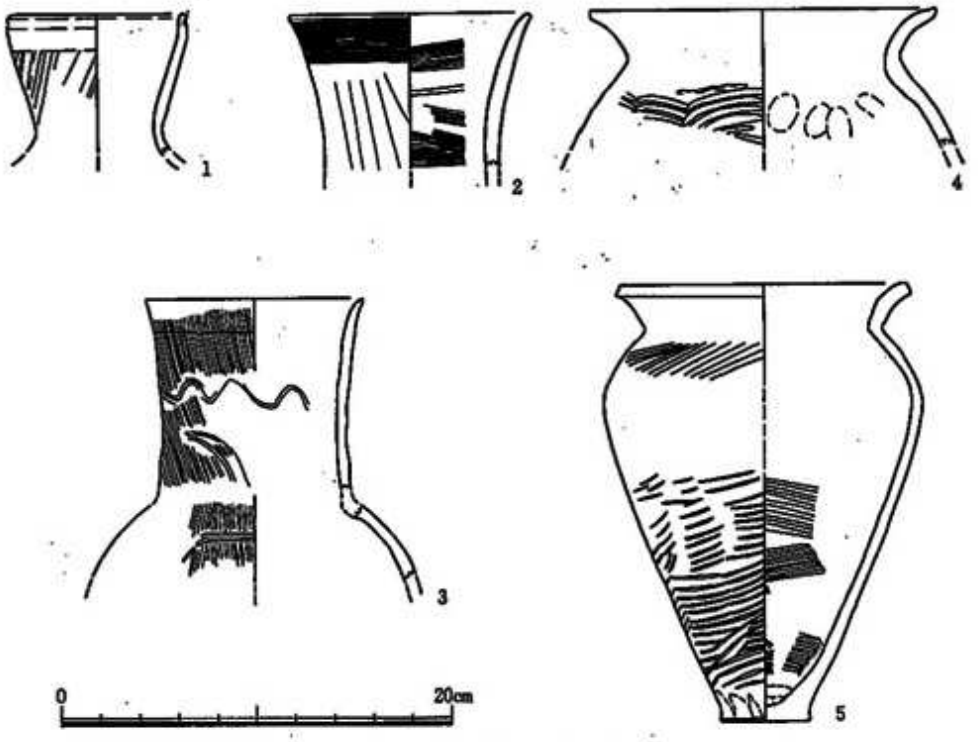
２　第Ⅳ調査区

Ａ　古墳時代　（第34・54～59図；図版 232 ～ 235）

集落の遺物は主として土師器である。他に須恵器・砥石・管玉等が出土している。出土場所は住居址・土壙・井口状遺構等の遺構内と、Ｐ24区と呼んでいる集落のほぼ南端近くの地点にほぼ集中している。

土師器

約900個体が出土している。器形は甕・壺・鉢・小型丸底壺・高坏・手捏ねミニチュア土器で、器台は含まれていない。 遺構に伴う全個体数は約500個体で、その内、甕が107個体、壺が159個体（内小型丸底壺33個体）、高坏が214個体を占めている。



第33図　谷出土弥生式土器

土師器の各器種に対して型式分類を試みた。

甕　主に口縁部の形状に着目しながら分類をおこなったが、観察が可能なものについては体部の形状・成形・調整技法等も考慮にいれた。又、破片から復原したものが多いため、正確な法量は除いた。

A₁　口縁部は僅かに内湾しながら立ち上がる。口縁端部の内側は丸く肥厚する。

A₂　口縁部は僅かに内湾しながら立ち上がる。口縁端部の内側に肥厚を持つが、強い横ナデを加えて、稜部を持つ。

B₁　口縁部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部の内側に内傾面を持つ。

B₂　口縁部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味に終る。

C₁　口縁部は外反しながら長く立ち上がる。端部は尖り気味に終る。

C₂　口縁部は外反しながら短かく立ち上がる。端部はやや丸味を帯びる。

D₁　口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がる。端部は上方に突出し、平坦面を持つ。

D₂　口縁部は長く、ほぼ直線的に斜め上方に立ち上がる。端部は上方に突出し、尖り気味に終る。

壺　甕と同様に口縁部の形状に着目しながら分類を行った。大別すると、二重口縁を持つ壺と直口壺とに分類することができる。分類上は前者をA類、後者をB類とし、口縁の立ち上がり、端部の形状によって1～8に細分した。

A₁　短い口縁部を持つ。立ち上がりは垂直気味乃至は僅かに内湾する。

A₂　比較的長い口縁部を持つ。立ち上がりは僅かに外傾する。

A₃　長い口縁部を持つ。立ち上がりは僅かに外反乃至外傾する。端部は平坦面を呈し、内側に鋭く突出する。器壁は薄い。

A₄　短い口縁部を持つ。立ち上がりは外傾する。端部は内傾面を持つもの、尖り気味のものがある。

A₅　短い口縁部を持つ。口縁の屈曲部は外方へ突出する。開き気味の長い頸部を持つ。

A₆　口縁部は朝顔状に開く。端部は面を取る。

A₇　口縁部は朝顔状に開く。端部は尖り気味である。器壁は薄い。

A₈　直立する口縁の外面に突帯を付け二重口縁状にしている。

B₁　やや外反気味に立ち上がる口縁部を持つ。端部は内側に肥厚し、器壁は厚い。

B₂　口縁部は若干内湾する。端部は平坦面を取り、器壁は厚い。

B₃　口縁部は若干外反気味に立ち上がる。端部は上方に突出する。器壁は薄い。

小型丸底壺　口縁部、体部の形状に着目して、4型式に分類した。

A　斜上方に開く短い口縁部を持つ。体部の型はいわゆる算盤玉形で、体部最大径がほぼ真中にくる。

B　やや直立気味の短い口縁部を持つ。体部最大径は上位にあり、肩が張るような形である。

C　口縁基部の径と体部最大径の差がさ程無い。胎土は他の小型丸底壺より精選されている。

D　平底状になると考えられるものである。外面、口縁部内面にハケを使う。

高坏　体部に段を持つものと持たないものがある。前者をAとし、後者をBとした。

A₁　全体的に器壁が厚く、やや外反する口縁を持つ。段から口縁までが比較的長い。大形品が認められる。

A₂　器壁が薄い。稜の様な段を持つ。段から口縁までが短い。

B₁　坏の底部は平坦面をなし、直線的に斜上方に伸びる口縁部を持つ。

B₂　坏の底部は平坦面をなす。口縁部はやや外反する。

B₃　坏の底部の平坦面が狭い。脚基部から立ち上がりがきつくなる。

鉢　口径と胴部最大径の差が小さいものを鉢と呼称する。口縁の立ち上がりで2種類に分けられる。共に二重口縁を有するものである。

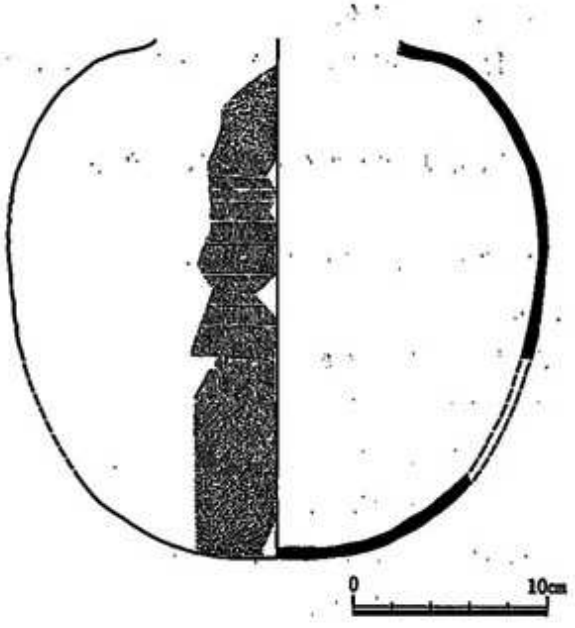
A　直立気味の口縁部を持つ。内面に鈍い凹線を持つ。

B　口縁の屈曲部はやや鈍い。口縁は開き気味に立ち上がる。

住居址出土の遺物　（第33・54・55図）

SBK1　土師器21個体、須恵器1個体が出土している。

土師器：甕A₁・A₂・B₂、二重口縁壺、高坏、小型平底壺がある。細片が多く図化できるものは少なかった。各器種の数量は甕A₁が4個体、A₂が3個体、B₂が1個体、高坏は10個体、二重口縁壺1個体、小型平底壺1個体である。無蓋高坏の破片が出土している。口縁下に鈍い凹線

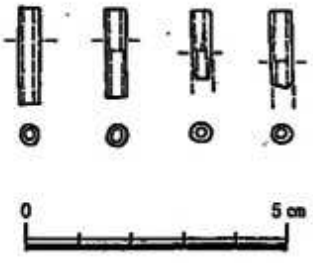


第34図　P24出土縄帯文土器

をめぐらすもので、端部の形状は破片のためわからない。成形・調整技法は底部がヘラ削りの後ナデ調整を施している。内面もナデ調整の痕跡を留めているが、底部は不定方向である。外底面の脚部との接合面にはヘラ状工具で同心円と放射線を刻んでいる。色調は外面が淡青灰色、内面が淡赤褐色である。胎土は長石・石英・黒色粒を含む緻密な土である。断面の色調は淡赤褐色で、焼成が甘い。

ＳＢＫ２（第54図）　土師器甕、壺、小型丸底壺、高坏が出土している。

土師器：甕12個、壺４個、高坏10個が出土している。各形式は甕A_1・A_2、壺A_3、高坏である。細片が多く、分類に耐えられるもの、図化できるものは少なかった。13は壺の底部と思われる。器壁は非常に厚く、粗いハケ目を留めている。



第35図　ＳＸ１出土管玉

ＳＢＫ３（第54図）　土師器の甕、壺、高坏、小型丸底壺、須恵器の甕が出土している。住居址埋土中だけでなく、貯蔵穴中より土師器と須恵器の良好な一括資料を得た。

土師器：個体数は甕７個、壺６個、高坏３個である。貯蔵穴内より甕D_2、壺A_4が各１個体出土している。甕D_2は外面不調整で内面には粗いヘラ削りが見られる。他には、甕A_1・C_1、小型丸底壺Ａ、高坏脚部が出土している。高坏脚部の外面には直弧文がヘラ状工具によって描かれている。文様は２本１組の沈線から成っている。又、裾部内面には布の圧痕が残っていた。

須恵器：貯蔵穴から出土した壺である。口縁部、体部の破片が土師器と共に重なる様に出土している。下半部の破片が無いため、全体の正確な形状は掴み難いが、肩部のカーブから見て体部は球形に近いと思われる。口縁部は外反しており、端部は丸く納めている。成形・調整技法は外面に平行叩きの後、丁寧なナデ調整、内面には縦方向のナデが施されている。色調は外面が暗青灰色、一部暗紫褐色、内面は青灰色を呈する。胎土は長石、石英を含み、緻密である。断面は赤褐色に発色している。

砥石：砂岩製の砥石が１点出土している。

ＳＢＫ４（第54図）　土師器甕11個体、壺11個体、高坏３個体が出土している。甕はA_1・A_2、壺はA_3、小型丸底壺はＢの各型式である。

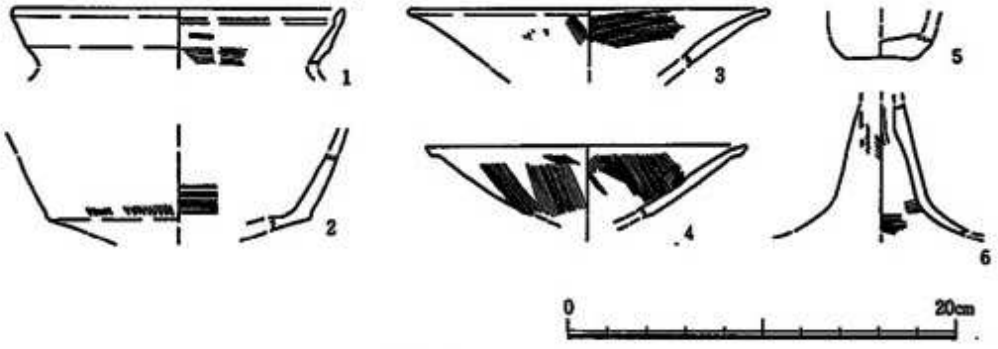
ＳＢＫ５（第55図）　土師器甕、壺、小型丸底壺、高坏が出土している。

土師器甕A_1・A_2・B_2、壺A_4、高坏A_2・B_1・B_2・B_3がある。個体数は甕30個体、壺７個体、小型丸底壺３個体、高坏は21個体である。５の高坏は内外面共にヘラ磨きを丁寧に施しており、坏部と脚部の接合部に粘土紐を巻いている。やや時期の下る要素を持っている。

ＳＢＫ６（第55図）　土師器甕、壺、小型丸底壺、高坏が出土している。

土師器甕A_1、壺A_6、小型丸底壺Ａ、高坏B_1が出土している。 個体数は甕12個体、壺８個体、小型丸底壺　個体、高坏11個体である。

ＳＢＫ11（第33図）　土師器甕A_1、高坏A_2・B_2、手捏ねミニチュア土器が出土している。個体数は甕16個体、壺13個体、小型丸底壺８個体、高坏21個体である。



第36図　ＳＢＫ13出土土器

ＳＢＫ12　土師器甕A_1、高坏A_2、壺が出土している。個体数は甕６個体、壺５個体、高坏４個体である。

土壙出土の土器　（第56・57図）

ＳＫＡ２（第56図）　土師器の甕が２個体出土している。

６は甕B_1 に相当する。又、　は口縁端部が欠損しているため、正確な形状はわからないが、口縁部の立ち上がりから見てC_1、乃至はC_2に相当するものと思われる。

ＳＫＡ３（第56図）　土師器A_2の甕と小型丸底壺Ｄが出土している。

Ｐ24（第57図）　不定形の浅い落ち込みの中から土師器、須恵器が出土している。土師器には甕、壺、小型丸底壺、高坏、須恵器には、高坏、縄席文甕の各器種がある。

土師器：甕A_1・A_2・B_1・D_1、壺A_2・A_5、鉢Ｂ、小型丸底壺Ｄ、高坏A_1・B_1、坏がある。器形のわかる破片は全部で 166個体ある。その内、甕が38個体、壺が63個体、小型丸底壺が４個体、高坏が61個体ある。その割合は第４表のとおりである。次に型式分類に耐えられるものとして55個体が数えられる。

須恵器：高坏の脚部、縄席文甕胴部破片が出土している。第57図―25が高坏脚部の破片である。全体に歪な形態である。坏部と脚部の接合は粘土紐を巻き、接合部から下には縦方向のナデ調整を施している。脚部内面はヘラ状工具を回転させ粘土を円滑に掻き取っている。成形・調整技法

の観察から輔轤は使用されていないと考えられる。

第34図は縄席文の甕である。口縁部の破片は無く形状は不明である。胴部は球形に近く、やや肩が張る。縄席文叩きは肩部のやや下から底部まで及んでいる。叩きの原体の巾は明確でないが1cm単位で8本のより糸が見られる。肩付近には横ナデが丁寧に施されている。内面は底部が不定方向のナデ、底部から上が横ナデを施している。色調は肩部が暗紫灰色、暗青灰色、胴部が暗青灰色を呈する。胎土はやや粗く、紫灰色と暗灰色がサンドウィッチ状になっている。器壁は薄く4mm前後を測る。

ＳＸ１（第56図） 井口状の遺構である。埋土中から土師器、須恵器、管玉が出土している。

土師器：甕A_1・A_2・B_1・B_2・C_1・C_2、壺からA_3・A_7、高坏A_1・A_2・B_1・B_2、小型丸底壺Ｃ・Ｄ、ミニチュア土器が出土している。数量は甕11個体、壺５個体、小型丸底壺２個体、高坏45個体、ミニチュア土器１個体である。その割合は第４表のとおりである。

須恵器：無蓋高坏、甕が各１個体出土している。無蓋高坏は口縁端部に平坦面を持ち、脚基部は細く、ラッパ状に開く脚部を持つ。円形の透しが四方に穿たれている。脚端部には一条の突帯を回す。成形・調整は坏底部には縦方向のハケの後回転ナデ、脚部上半は縦方向のヘラ磨きが施されている。脚部内面は上半がヘラ工具を回転させて粘土を円滑に掻き取っている。

甕は口縁端部が欠損している。口縁端部のやや下に断面台形の突帯を一条回している。

管玉：管玉が４本出土している。内２本が完形品で、その他は一部欠損している。長さは 1.2～1.4cm、径は４mm前後、孔径が２mm前後を測る。 色調は暗緑灰色を呈し、濃淡が斑状にある。素材は流紋岩と考えられる。

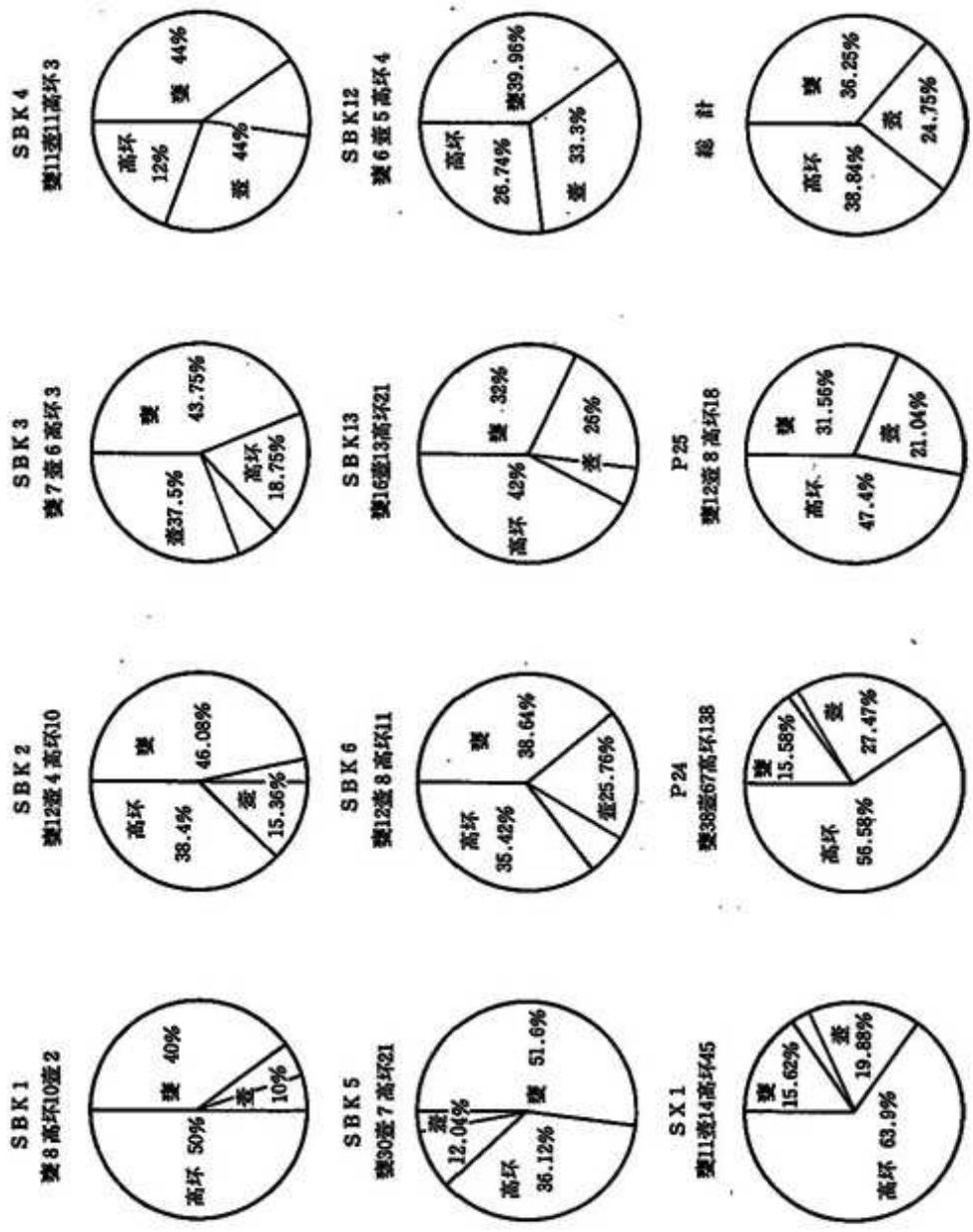
土師器の器種別割合について （第５表）

遺構から出土した土師器を甕・壺・高坏の３器種に分け、その割合をグラフにしてみた。遺構は操作にたえうる資料を出土した住居址８棟とＳＸ１、土器溜りと考えられるＰ24、Ｐ25である。もっとも遺構が廃棄された後の時間的累積の結果としての資料＝土器組成であり、必ずしも使用段階のものではない事は明らかである。資料としての信憑性にやや難がある事は承知の上で論ずる。

住居址出土の土器で最も多いのは甕である。大半の住居址で40%～50%の割合を示している。次に高坏が多く、住居址全体の出土率は32%である。しかしながら住居址によって大差があり、ＳＢＫ１のように全体の50%を占めるものもあれば、ＳＢＫ４のように10%近くしか出土していないものもある。壺は３器種の中で最も少なく、住居址全体の25%を占める。高坏と同様に住居址によって差がある。最も多く出土しているＳＢＫ４では44%、少ない所ではＳＢＫ１の10%しか出土していない。

ＳＸ２、Ｐ24、Ｐ25では高坏が最も多い。ＳＸ２、Ｐ24では60%近く、Ｐ25でも50%の割合で高坏が出土している。甕は少なく、ＳＸ１、Ｐ24では15%しか出土されていない。住居址と比較するとその比率は半分である。壺は住居址とほぼ同じ割合で20%～30%の数字を示している。

第5表　遺構別主要器種出土量



住居址に甕が多く、その他の遺構で少ないという現象は、甕の本来の機能から考えてうなずけるものである。甕は、煮沸容器として住居の中に固定されて使用するもので集落の中で最も動かない土器である。高坏は、供勝又は供献の機能がうかがえ、住居内においても一定の使用が当然ながら想像できる。

住居址以外の遺構で、高坏が多く出土している。ＳＸ１、Ｐ24では60%近い割合を高坏がしめ、これとは反対に甕は少なく15%程度しか出ていない。壺に関しては、住居址と他の遺構との間に大差はない。

従来から高坏が多量に出土する遺構は祭祀的色彩が濃いと言われている。当遺跡においても、

ＳＸ１、Ｐ24については同じことが言える。ＳＸ１は集落内において井戸の役割を担っていたものと考えられると同時に、管玉の出土からも祭祀場としての性格をかね備えていたものと思われる。又、Ｐ24からは縄蔕文土器の破片が集中しており、ＳＸ１とは、又別の祭祀の場と考えていても想像に難くない。

一般的に大形の住居には、世帯共同体の家長の存在を考える傾向がある。当集落においても、大形の住居であるＳＢＫ３からは直弧文を描いた高坏や砥石が出土しており、他の住居とは異質な面が、遺物の側からもうかがえる。この様に、住居間に階層差を想定してもかまわないと考える。土器組成に焦点をあてると、ＳＢＫ３は、甕40%、高坏20%、壺40%という数値をあらわしている。小形の住居址であるＳＢＫ４でも甕40%、高坏20%、壺40%とほぼ同じ傾向を示す。このことから推測するに、５世紀前葉における単位集団内における住居址間の階層差は、土器組成の点では認められない。

集落出土の須恵器

近年、初期須恵器、陶質土器が集落址から出土している。須恵器が日常用器として集落に流布する以前の、集落における須恵器の在り方はそれ以後と異質であることは言うまでもない。かかる万崎池遺跡においても、集落内から若干の須恵器、陶質土器が出土しており、その例にもれない。住居址・井戸状遺構から出土した須恵器・陶質土器は甕・高坏・壺の器種であった。

ＳＢＫ１　無蓋高坏が出土している。住居址埋土に含まれていたもので、坏部の破片である。外面に脚部の接合痕が残っている。口縁部直下に鈍い凹線を認める。口縁端部の形状は定かではないが、体部のカーブから見て、やや外反するものと思われる。胎土は一概に精良とは言えず、やや砂粒の混った粘土を使用しており、初期須恵器特有の緻密さに欠ける（第54図―９）。

ＳＢＫ３　住居址の中央付近にあった土壙から出土した壺である。口縁部は外反し、たれ下る様な端部を持つ。胴部は下半部が欠損しているため正確な形状はわからないが、肩のやや張る球体を呈すものと思われる。内面には縦方向の丁寧なナデ調整の跡が認められ、外面はヘラで磨いたような光沢がある。胎土は砂粒の少い緻密なもので、焼成もかたくセピア色に発色している。土壙内からは他に土師器の甕も出土している。又、同一住居址の覆土から直弧文を裾部にヘラ描きした土師器高坏も出土している（第54図―21）。

ＳＸ１　井戸の役割を担っていたと考えられる土壙である。多量の土師器が出土しており、共に須恵器高坏、甕があった。高坏は無蓋のもので、口縁端部に平坦面を把る、坏部外面に僅かながら平行叩きの痕跡を留める。脚部はラッパ状に開き、脚端部近くにやや尖り気味の突帯を一条まわす。脚部中程に径８㎜程の円形透しを４つうがっている。脚柱部外面に縦方向の磨きを施している。外面は灰白色で、降灰を受けている。胎土は緻密で、セピア色を呈している。甕は口縁部の先端が欠損している。口縁直下に太い凸線を一条めぐらしている。胎土は粗く、黒灰色を呈する。この遺構からは管玉も出土しており、土器も単に投棄されたものではないであろう。

Ｐ24（第34図）　集落の一画に土器が集中している所があった。そこをＰ24区と呼ぶ。多量の

土器が集中しており、その中から須恵器高坏、縄席文甕が出土している。高坏は脚部の破片で坏部、脚端部の形状はわからない。全体に手捏ね成形で、ロクロは使用されていない。胎土は然程精緻とは言えない。縄席文土器の甕は細片になって出土した。口縁部は欠損している。胴部はやや肩の張る球形を呈し、底部はいくぶん平底気味になっている。外面には細い細席文の叩きが丁寧に施され、その上から鋭いヘラ描き沈線が螺旋状に施されている。内面は丁寧なナデ調整である。器壁は薄く、胎土は暗褐色のやや砂っぽい土である。外面は光沢を帯びている。胎土等からみて他からの搬入品と考えられる。

谷出土の須恵器　（第48・49図）

集落から流出、又は投棄されたと考えられる須恵器が東側の谷から出土している。原位置を保つものではなく、後世の堆積土中にあったもので、大半が平安時代の暗黒色粘土層から出土している。器種は坏、筒形器台、甕で、量はきわめて少ない。

坏　口縁から受部にかけての破片である。口縁部は垂直に立ち上がり、端部は丸くおさめられている。受部は水平にのびる「土釜形」を呈している。底部外面にはヘラ削りが施されている。胎土はきわめて精良で、いわゆるセピア色である。

筒形器台　東側の谷から小片で出土したものである。口縁部は外傾する平坦面をとり、やや肥厚する。口縁部の下には、鈍い凸線をめぐらし、その下にさらに波状文を回す。口縁部から筒部に致る屈曲部には鈍い凹線をめぐらしている。筒部は鈍い凹線によって五段に区切られており、各段に長方形透しと波状文を持つ。長方形透しは１段８個で、波状文は最上段に２条、それ以下に１条ずつめぐらしている。筒部から裾部に致る屈曲部には、僅かに斜上方に立上る箍を持つ。裾部は、スカート状に内湾しながら開くもので、筒部同様鈍い凹線で区切られている。各段に２条の波状文がめぐり、最上段には櫛描列点文が施されている。全体に器壁は薄く、洗練された雰囲気を持つ。内面は丁寧なナデ調整が施されている。

甕　口縁部から肩部にかけての破片である。口縁端部は尖り気味で、口縁直下に逆三角形の突帯を一条めぐらしている。外面には細い平行叩きを施し、内面は同心円叩きを擦り消している。色調は外面が降灰を受け漆黒色を、内面は灰黒色を呈している。胎土は緻密で、セピア色に発色している。器壁は薄い。全体に丁寧な製作である。

上記３個体が古墳時代集落と同時期の須恵器で、集落内で使用され、その後、谷中で人為的、あるいは自然に移動したものと考えられる。この中でも筒形器台の存在が特に注目され、集落内祭祀の在り方について、１つの示唆を与えてくれる。近年、同時期の集落において筒形器台が度々発見されている。とりわけ、泉北地域において顕著である。これまで、堺市東上野芝遺跡[10]、土師遺跡[11]、陵南遺跡[12]、和泉市大園遺跡[13]で集落に伴うかたちで出土している。時期的には、田辺編年ＴＫ73～ＴＫ216段階の須恵器と共存しており、上記４遺跡では須恵器の他の器種も量的に豊富で、万崎池遺跡よりはやや時期的に下る。又、裾部のスカート状に内湾する形状からも、型式的に古式に属すものと思われる。

谷出土の木器　（第53図；図版230・231）

鋤、曲物の底、箸、漆塗り椀、斉串、不明木製品が出土した。

鋤　身部が隅丸長方形状を呈し、残存長39.1cm、幅15.2cm、厚さ 3.4cmを測る（1）。柄部分の表面には柄と直交する線条痕があり（図版230下段左）、何かに緊縛した痕跡かと思われる。身部には幅約3.2cmの加工痕が残る（図版230下段右）

曲物底　径19.1cm、厚さ 0.7cmの曲物底が約½残存する（2）。1カ所、樹皮様のもので綴じ付けた痕がみられる（図版231－1・1′）

箸　折損した破片が3点出土した。4は残存長16.1cm、径0.75×0.55cm、5は残存長11.9cm、径0.55×0.45cm、6は残存長7.6cm、径0.6×0.45cmを測る。

漆塗り椀　高台を含む小破片が出土した（7）。残存高1.8cm、高台径6.6cmを測る。漆の色調は生地が黒色、松葉状の文様は朱色である。

斉串　上半部と下半部の破片が出土した（8）。上半部は上端を山形にかたちづくっており、残存長5.9cm、幅1.9cm、厚さ0.2cmを測る。下半部は先端にむかい先すぼりになって尖がり、残存長13.5cm、幅2.0cm、厚さ0.15cmを測る。

不明木製品　棒状の一端を周囲からの抉り入れにより丸く形づくり、他端は鉋刃状に2方向から削り出したものである（3）。長さ12.1cm、幅2.0×1.8cmを測る。

B　平安時代

第Ⅳ調査区の東端付近にあるＳＢＫ17、ＳＫＡ6に伴う遺物である。遺構の位置関係、埋土から考えて一括遺物として取り扱う事が可能であろう。器種構成は供膳：黒色土器、A・B類椀、土師器、皿、調理：土師器鉢、煮沸：土師器甕からなっている。供膳：黒色土器、A・B類の椀がある。内外面共に磨きを施しており、口縁端部に内傾する平坦面を持つ。高台は、ふんばり気味に付けられている。皿は口縁部が上方にやや突出し、いわゆる「て字状口縁」の退化した型式を思わせる。器壁は厚い。調理：第60図－6、7は土師器の鉢である。6はやや外反する口縁端部を持つ。体部の調整は粗く、外面には粘土紐の継ぎ目を留めている。7はやや小型で口縁部の型状が異なる。胎土・色調も異なり、7の方が若干丁寧な作りを見せている。又、両者とも遺存状態が非常に悪いが、7の内面には使用痕と思われる摩耗した部分が認められる。6と7の生産地は異なると考えられる。煮沸：第60図－4、5、8は土師器の甕である。8は立ち上がり気味の口縁で端部に平端面を持つ。体部は不調整で、肩の張りは強く球形の胴部を持つものと思われる。5はやや小型のものである。4は口縁端部を内側に突出させている。

この他に土師器土釜、緑釉陶器の小片が出土している。土師器土釜は角閃石を含み、生駒西麓産と思われる。

C　室町時代

ＳＫＡ5から出土した土師皿である。重ねて埋納されていたもので同一型式のものが10枚出土している。淡黄橙色の色調を持つ緻密な胎土である。器壁は全体的に薄い。

ＳＤＡ５からは、瓦器の羽釜、甕、軒平瓦、平瓦等が出土している。羽釜は大・中・小とあり、それぞれ口縁部・鍔の型状が異なる。又、焼成もかたく焼きしまり、灰白色の須恵器に近い色調を呈しているが第60図―17と19は軟質である。第60図―20は瓦器の甕である。口唇部が若干外反している。体部外面に平行叩きを施している。軒平瓦は第60図―21、22共に均整唐草文を配している。

ＳＤＡ５から出土している遺物は非常に少なく、埋没時に混入したものが大半と考えられる。又、時期的にも15世紀から16世紀とやや幅が見られる。

Ｄ　江戸時代　（第50～52図；図版 227 ～ 229）

東側谷東斜面から江戸時代の陶磁器等が出土している。投棄された状態で出土しており、段丘の改変の際に２次的に埋積したものと思われる。出土陶磁器の中では伊万里焼の椀が最も多く152点、他に京焼、唐津焼、備前焼、いわゆる湊焼の製品がある。

供膳　伊万里焼の椀が最も多く 152点、他に唐津焼１点、京焼６点が認められた。伊万里焼の椀はいわゆるくらわんか茶椀と呼ばれるものである。器壁は厚く、低い高台を持つ。外面に描かれている文様は梅の折り枝文と雪持ち笹が大半で、他には丸文、網目文等がある。内面に五弁花をあしらうものとそうでないものとがある。又、内底面の釉薬を輪状に掻き取ったものが多い。くらわんか茶椀の他には関東茶椀、口縁部が端反りになるやや口径の大きい椀がある。何れも伊万里焼の製品と考えられる。椀としてはこの他に京焼の製品がある。

供膳形体としては椀以外に、鉢、皿、仏供椀がある。鉢には伊万里焼と唐津焼の製品が認められる。両者とも量的には少なく、何れも図示（第50図）した限りである。伊万里焼の鉢は色絵磁器と呼称されるもので、内面に赤、黄、緑等の彩色を施している。唐津焼の鉢には片口の付くものがある。皿、仏供椀は伊万里焼に限られている。皿は厚手の器壁を持ち、文様は内面にしか描かれていない。仏供椀は外面に蝶の文様を持つ。

調理　備前焼の擂鉢が２個体出土している。上下に拡張した口縁部の内外面に段を有するもので擂し目は内面に一様に施されている。第51図―９は低い高台を有する。

煮沸　ここでは火にかける用器として炮烙を取り上げる。湊焼と呼ばれているものである。底部は型造りと考えられ、その上に取手の付く口縁部を巻き上げている。

その他、上記の炮烙以外に湊焼の製品が幾つか出土している。火消壺・火鉢・七輪・行火等に使用されたと考えられるが、機能については判然としない。

以上、谷Ⅱの東斜面から出土した江戸時代の土器・陶磁器について若干の説明を加えてきた。２次埋積と考えられる事から、その一括性についてはまだ異論をはさむ余地はあるが、ほぼ同時期のものと考えられる。その時期は多量に出土しているくらわんか茶椀から見て18世紀後半頃と思われ、当時の日常用器組成の一端を表わすものである。

３　第Ⅲ・第Ⅳ調査区の石器　（第61・62図；図版 236 ・ 237）

Ａ　旧石器時代　（第61図・第62図―９、10；図版 236 ・図版 237 ―６・７）

本地区出土の旧石器は2点である。いずれもナイフ形石器である。9は翼状剥片を素材とした松藤分類による形態A_2である。又10は横長の剥片の両側辺に調整剥離を施したものである。打面は残存しており平坦である。典型的な形態Cである。素材の剥離形態を異にするが、喜志部遺跡出土の切出形石器とよく類似している。9と10を同時期とする根拠はないが、隣接する万崎池遺跡第Ⅴ調査区出土の旧石器のあり方からみて国府型ナイフ型文化期の所産としてよいのではないかと考える。

B　縄文時代、弥生時代　（第62図－1～8；図版237－1～5・8）

本地区で出土した旧石器以外の石器は全部で11点であった。この地区には弥生時代の遺構も出土しており、今回出土した石器のほとんどは弥生時代中期の所産であろう。しかし、石鏃のうち3は縄文時代の可能性を有している。その他の石鏃（第62図中2と5）は弥生時代中期のものであろう。1は未製品であろう。6・7は不定形石器である。6は一面に自然面を有しているが、1辺に片面加工が施され、スクレパーとしての機能を有していたと考えられる。7は部厚い剥片の一辺を粗く両面加工したもので、ナイフ様に使用したものであろう。石庖丁が1点出土した。緑色片岩製である。

第5節　ま　と　め

弥生時代　第Ⅱ調査区の段丘面で検出された墓はもっと群在していたものと思われる。弥生時代中期後半になって沖積地から分村をはたし、段丘面に生活の場を求めた集団の墓域である。西側の谷からは多量に出土した土器は後世削平され流入した墓域からの土器（胴部穿孔土器等）と周辺に位置する集落から流入した土器であろう。墓域を形成した集団の居住域は見つかっていないが、北側と東側に谷を望み、西側の第Ⅱ調査区では該当する遺構を検出していないことから、ほぼ調査区の南側に集落が位置すると思われる。規模としてはそれほど大きなものではなく、狭隘な開析谷を利用した水田を維持、管理する集団であろう。一連の松原一泉大津線の調査でも弥生時代の遺構が相当数検出されている。西浦橋・菱木下遺跡では中期前半の集落、方形周溝墓群、水田に導入する為のせき等が見つかっている。又、万崎池遺跡第Ⅴ調査区においても後期の集落が認められている。周辺では石津川のやや下流で中期前半の方形周溝墓を持つ鈴の宮遺跡[14]、同じく中期前半の毛穴遺跡[15]、上遺跡[16]では前期の土器が採集されている。この様に弥生時代前期から中期前半に渡って沖積地から段丘縁辺の沖積地に展開―分村―を余儀なくされた弥生人は中期後半になって中位段丘上に住居を構え、開析谷を開発するようになる。初めは沖積地に近く、そして、徐々に沖積地から離れた所に展開したのであろう。万崎池遺跡に中期後半墓域を営んだ集団は石津川水系を軸とする農業共同体の中で、劣悪な環境に位置するものの1つであろう。中期前半から後半に致る沖積地から段丘面への移動は、農業技術の進歩をもってはたしうるものである。そして、それは幾度かの試行錯誤をくりかえし、段丘面への進出と後退をくりかえしていたものであろう。その一過程が第Ⅱ調査区の墓域に象徴される集団である。

古墳時代　古墳時代中期前葉の集落、古墳時代後期の土壙墓群が検出された。集落についての分析は既に「集落の変遷」のところで述べた。

2～3棟単位で4～5回の建て替えが考えられる。生産地＝水田の位置は開析谷に想定できる。発見された玉類は管玉4本で、鉄器は検出されていない。以上の事から考えても、比較的小規模な集団であり、他集団を指導するような位置にはいないようである。ところが、集落内又近接地からはいわゆる初期須恵器や漢式土器が出土している。須恵器には大甕、杯、筒形器台があり、集落の規模、推測できる性格から見ても分不相応な所有物であるが、この様な集落がそれらを所有していることが、陶邑内にある集落＝石津川流域の古墳時代集落の特質の1つと考えたい。この様なことからも、万崎池遺跡の古墳時代集落は何らかの形で初期須恵器生産と結びついていたことは充分考えられ、地域首長を媒介とする生産・分配のシステムの中に須恵器生産と共に組み込まれていた集団である。

土壙墓群は第5調査区で検出されたものと一群であり、総数 500基を数える。上記の中期前葉の集落に共う土壙墓とはまったく性格を異にするものであり、世帯共同体ごとに墓域を営むものと、世帯共同体が集合して墓域を作るのとの相違と考えられ、古墳時代中期から後期に移行する過程で、墓制のあり方に表象される、集団＝共同体の再編が行われると考えたい。

奈良・平安時代　奈良時代の遺構としてはＳＤＡ4があげられるのみである。埋積浅谷の灌漑用水路と考えられ、段丘開発に伴う所産であろう。

平安時代になると掘立柱建物と共に開析谷に築堤の痕跡を認める。掘立柱建物は2×4間、2×1間以上の対になる建物群で、1時期だけで消滅していく小規模な集団である。黒色土器、土師器と供に緑釉陶器も所有しており、堤等の構築を先導した集団―富豪層―の末端に位置するものと考えられる。同時期の建物は、東側の第Ⅴ調査区、菱木下遺跡でも認められ、小規模、建替のないこと＝短期間の居住という点では共通している。

堤の構築に関しては、開析谷をせき止め、溜池を築造するためのものであることは既に述べた。おそらく、谷の最奥に位置する溜池で、北方に大規模な灌漑用溜池―現在の万崎池の前身―を想定することができる。

この様な継続性の無い建物群の出現、開析谷における堤の構築は、中世における領主的大規模開発の前身として位置づけることが可能であろう。

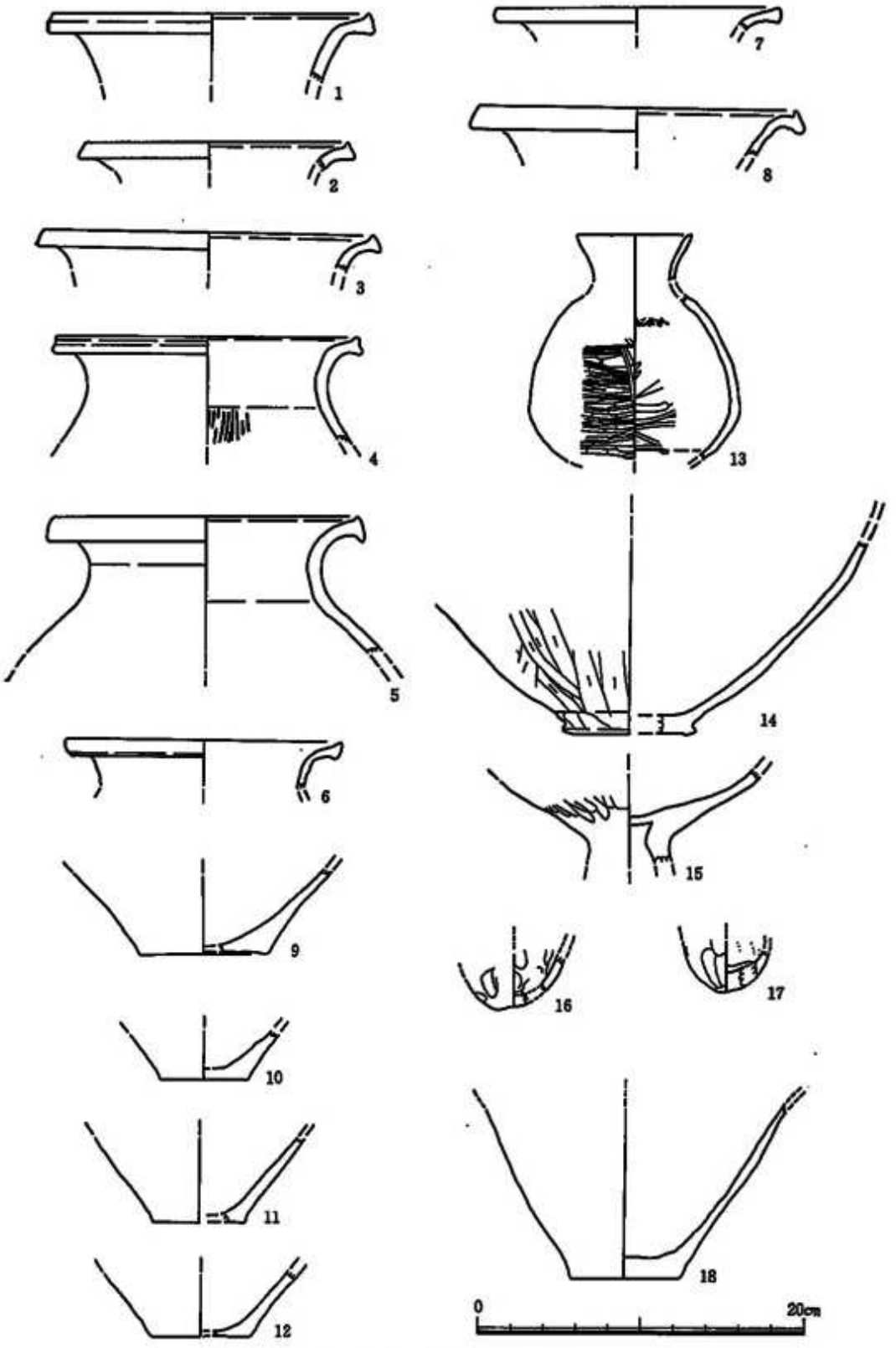
室町・江戸時代　室町時代の遺構としてはＳＤＡ5、ＳＴＫ 201～ＳＴＫ 209があげられる。ＳＤＡ5は灌漑用水路と小規模な溜池を兼ね備えたものと考えられる。段丘面の恒常的な耕地化が、一旦、可能になった証明であろう。又、ＳＤＡ5埋没後に形成される土壙墓群ＳＴＫ 201～ＳＴＫ 209は、江戸時代以降に継続する谷の対岸に位置する現在の墓地の前身と考えられ、中世後半―室町時代―には、集落、墓地、水田等の位置関係が構成され、現景観の基礎が成立する。

万崎池遺跡は、段丘の歴史である。歴史的変遷の過程の中で、村落社会が構成された。この地域は、現在もその面影を強く留めている。南側では、泉北ニュータウンが造成され、村落社会に

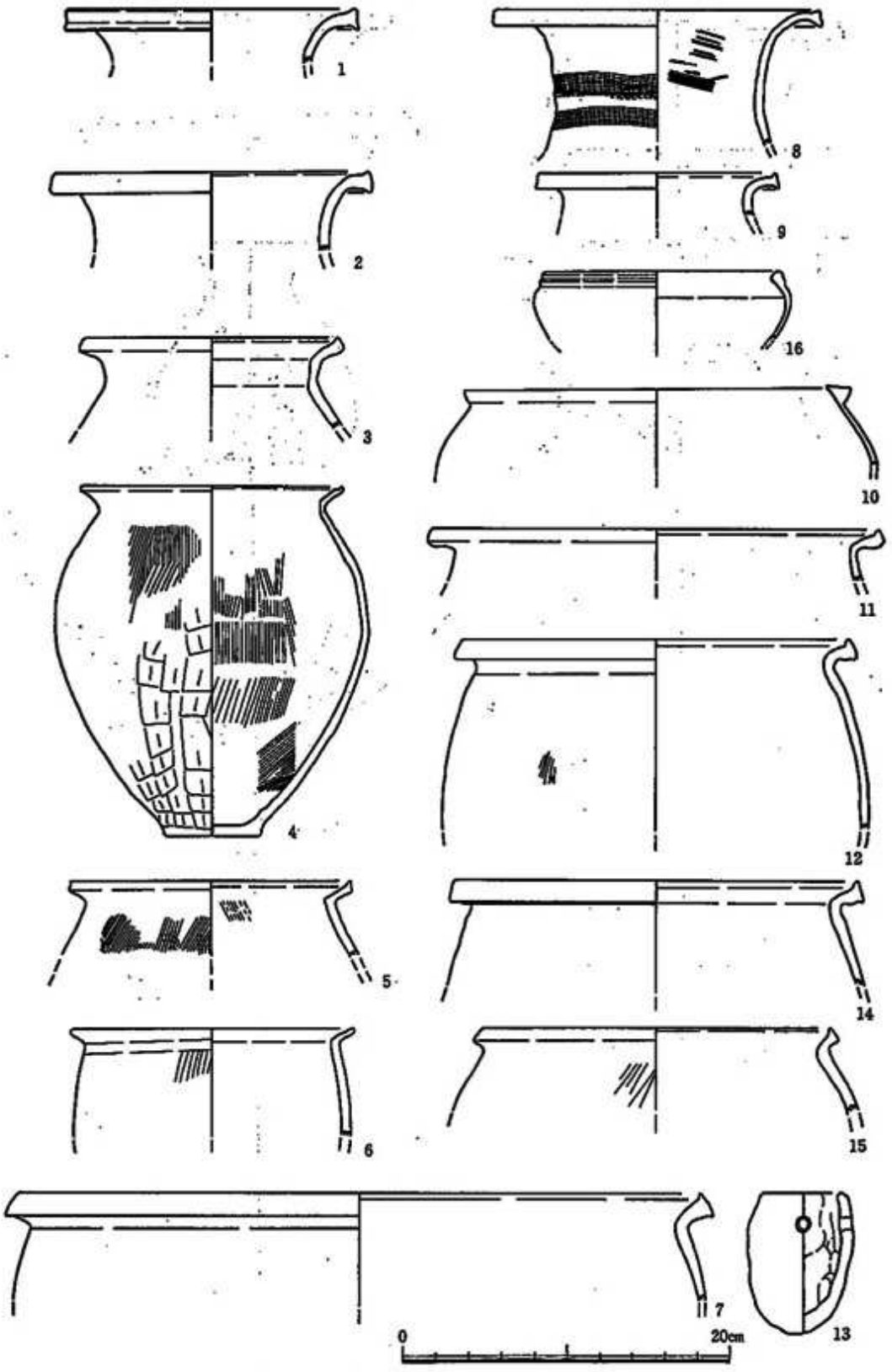
一大変革をもたらした。そして、再度、近畿自動車道から分岐する府道松原一泉大津線が建造されようとしている。村落社会における歴史的経過を無視した形での無差別開発である。開発の結果は、いずれ歴史の中で語られるであろうが、開発の先兵に位置している我々にとって、常に繰り返し自戒の念を込めて考え続けていかなければならないことである。担当者としての責務を充分果たしたとは言えない。述べなければならない事は多々残されており、今後、自らの課題とすることを約束し、筆を置く。

註

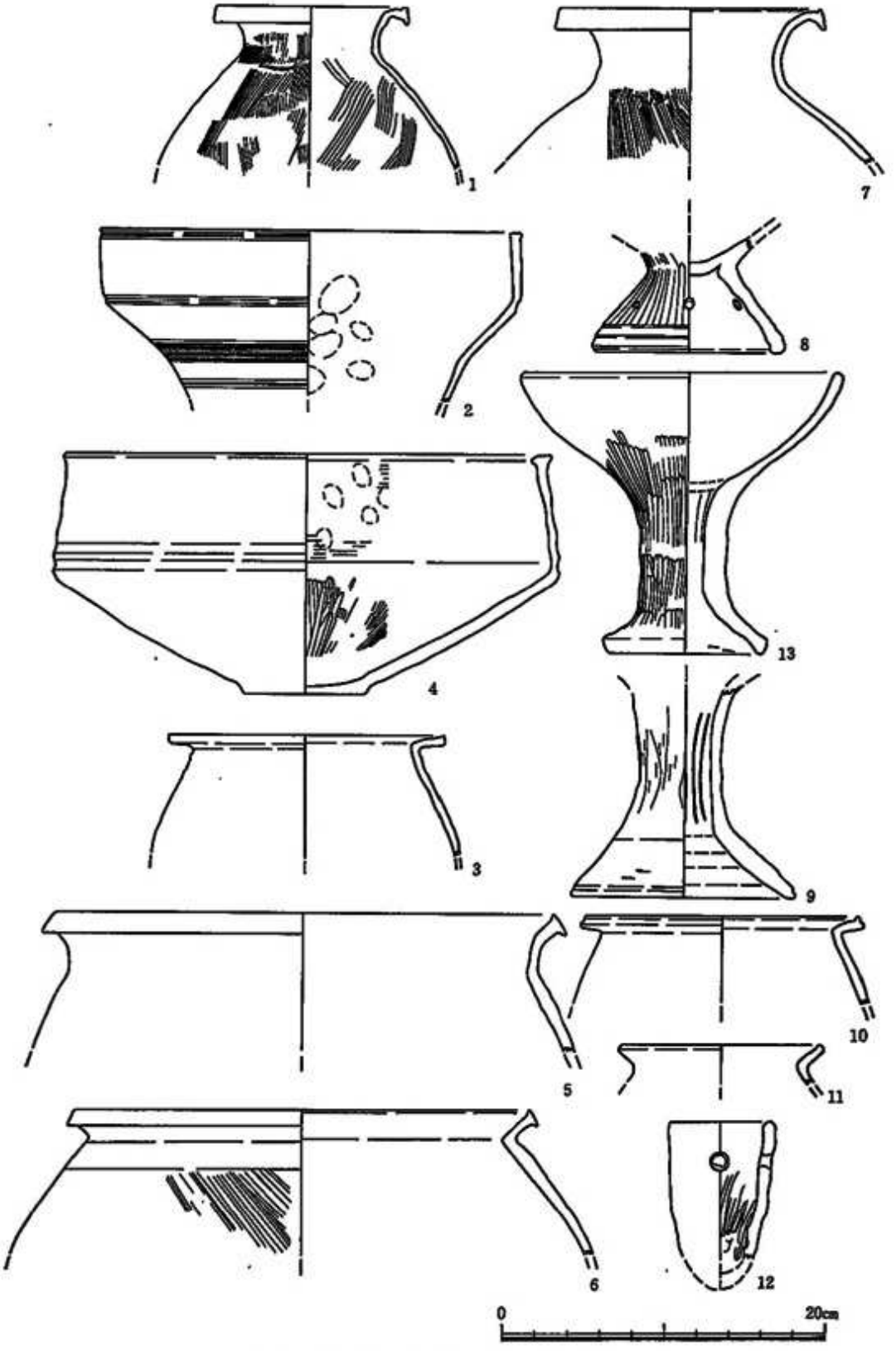
1） 芦屋市会下山遺跡においても、大きな土壙を持つ住居址が確認されている。
2） ＳＫＡ３、４共に埋土中に炭灰色土を含み、第Ⅳ調査区東端で検出された土壙墓と類似した土層を呈していた。時期は異なるが同様の土壙墓である可能性が高い。
3） 高石市大園遺跡で検出された５世紀後半の倉は、ほぼ同規模の11．㎡を測り、時期差等を考慮に入れると、比較的大きな倉と言えられるのではなかろうか。
4） 現在の万崎池につらなる開析谷の縁辺に集落が展開していたものと思われる。
5） 一般に高坏を多量に出土する遺構は祭祀との関係が強いと言われているが、供膳容器として主に高坏しか用いられていないこの時期において、高坏の多さと祭祀とを結びつけるのはまだ幾つかの思考が必要であろう。
6） 「共同体と単位集団」考古学研究 196 近藤義郎
7） 石津川流域の５Ｃ中頃から後半にかけて集落址において筒型器台の出土が見られる。東上野芝遺跡、陵南遺跡、土師遺跡、四ッ池遺跡等で出土している。陶邑地域における須恵器生産を契機にしておこる集落祭祀の一定の変化を考えたい。古墳以外での筒型器台の使用は石津川流域において特に顕著な様である。陶邑における須恵器生産と百舌鳥古墳群の造営とをかかえた一地域内での集落祭祀の変化であろう。
8） 祭祀土壙と考えられるものについては幾つかの報告がある。その中には湧水点まで掘削されたと記述されているものもいくつかあり、祭祀専用の土壙では無く、井戸の機能も担っていた可能性も充分考えられる。
9） 註７）に同じ
10） 東上野芝遺跡一堺市文化財調査報告第10集 堺市教育委員会
11） 土師遺跡一堺市文化財調査報告書第９集、1981．3 堺市教育委員会
12） 大阪府文化財調査概要1974―13、百舌鳥陵南遺跡発掘調査概要、1975．3 大阪府教育委員会
13） 大園遺跡
14） 堺市文化財調査報告、第11集、鈴の宮Ⅲ、堺市教育委員会
15） 堺市教育委員会北野俊明氏の御教示
16） 大阪府教育委員会森井貞夫氏の御教示



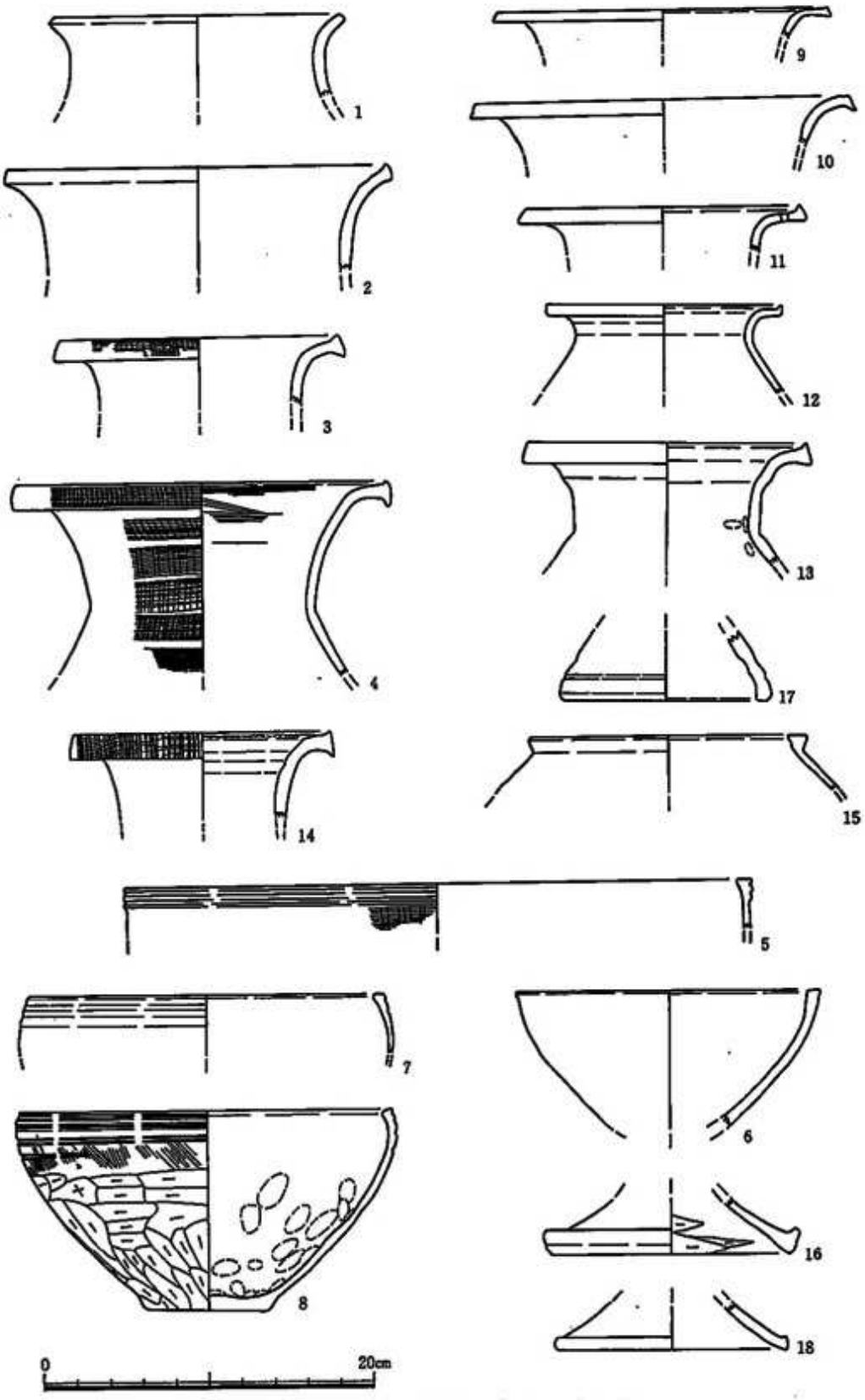
第37図　西側段丘面出土弥生式土器



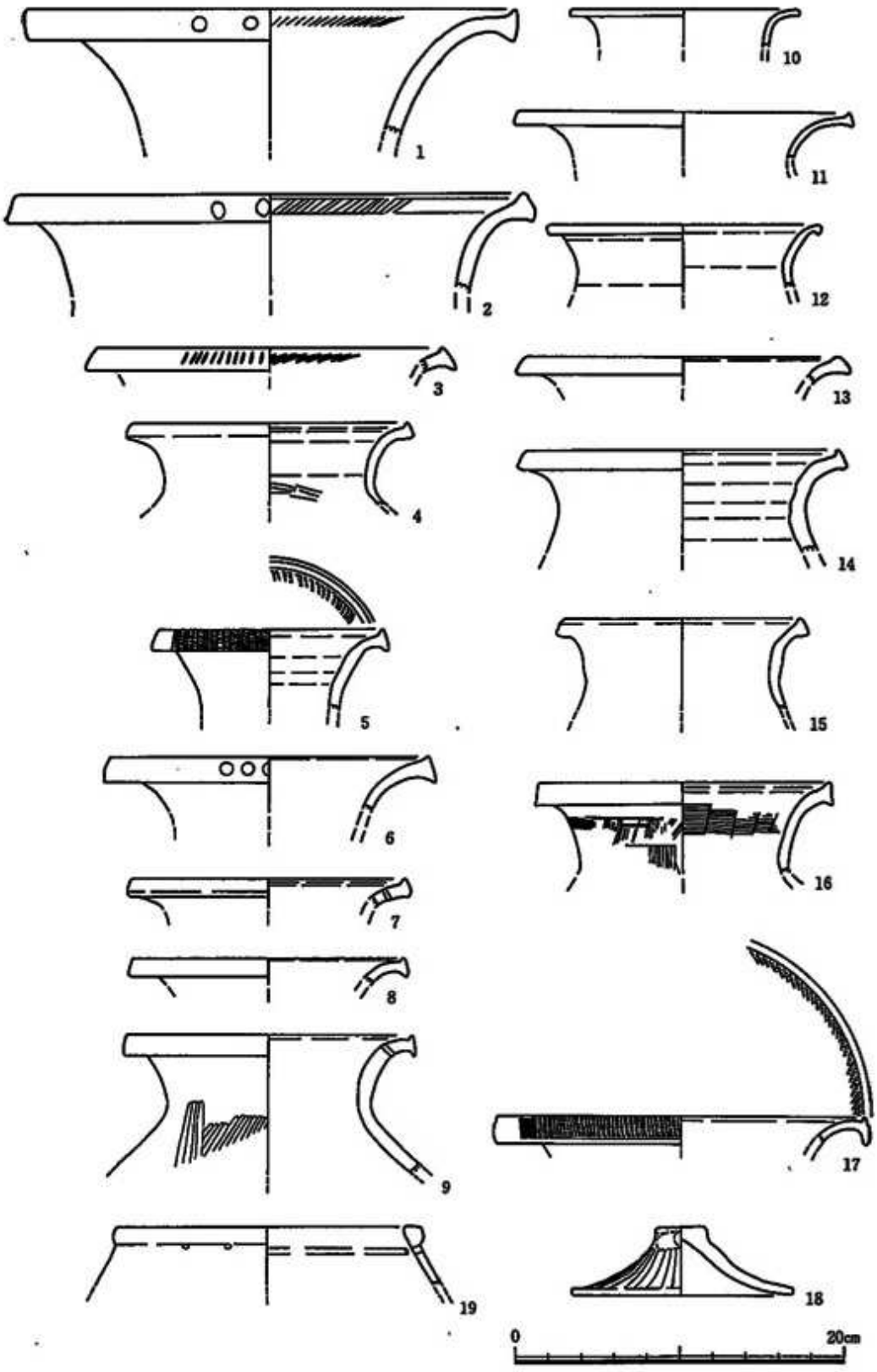
第38図　西側谷青灰色粘土・青灰色砂層出土弥生式土器



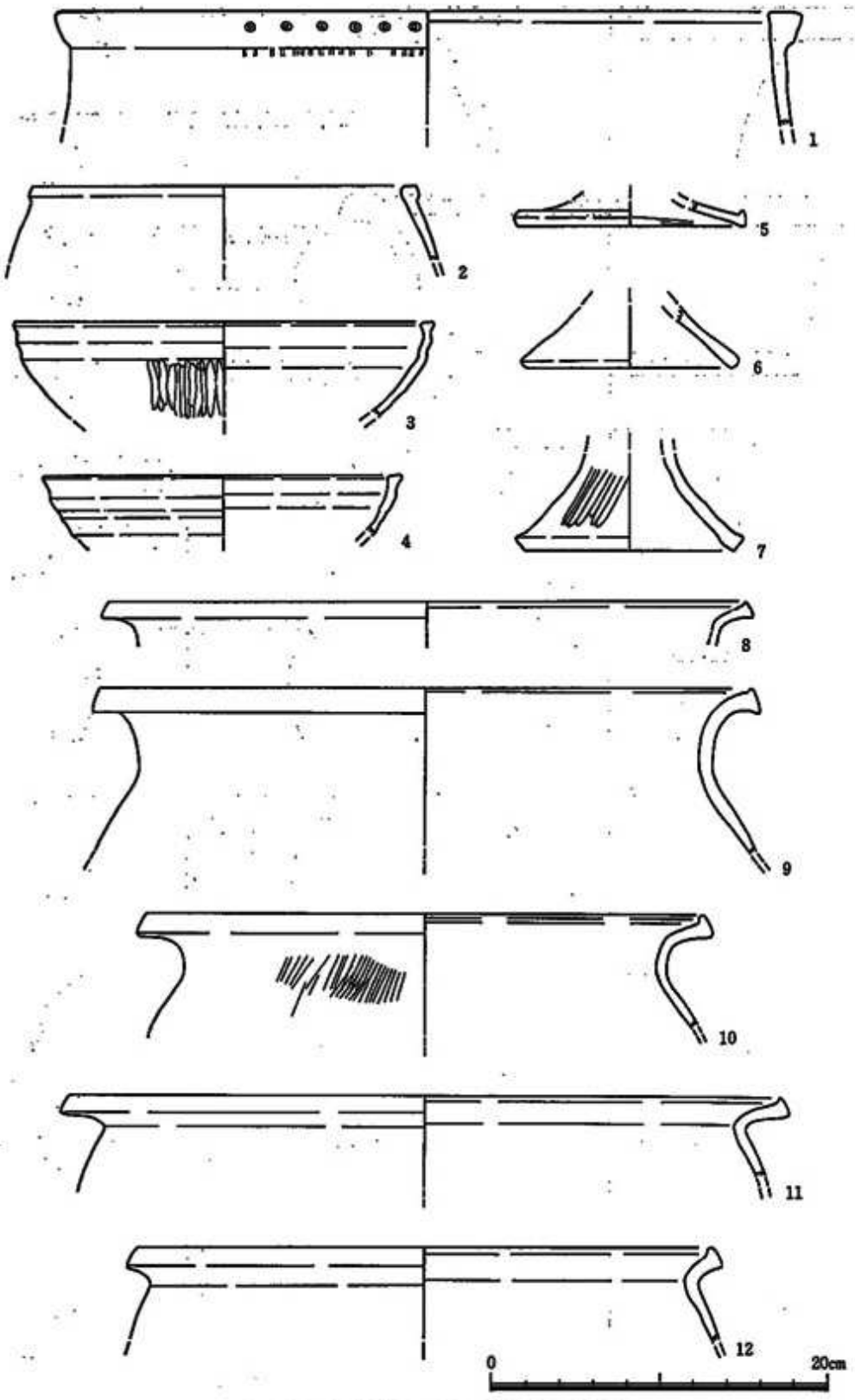
第39図　西側谷暗黒色粘土層出土弥生式土器



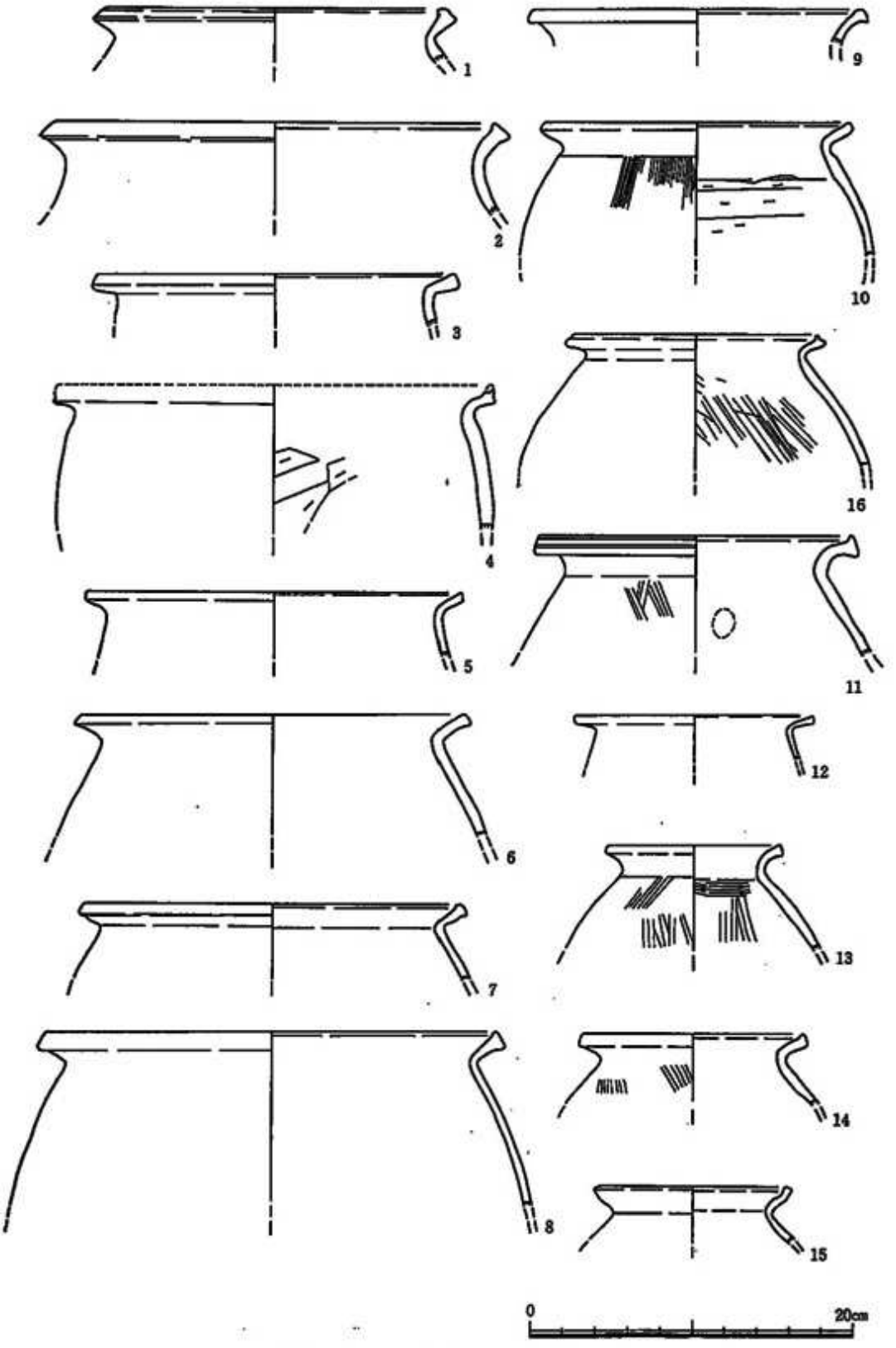
第40図　東側谷青灰色粘土層出土弥生式土器



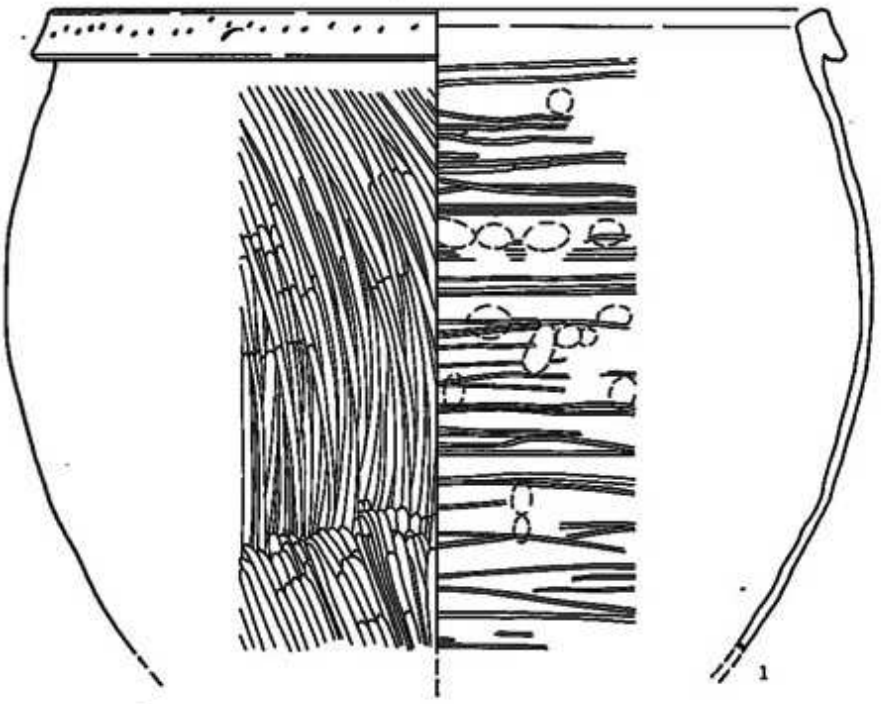
第41図　東側谷暗黒色粘土層出土弥生式土器

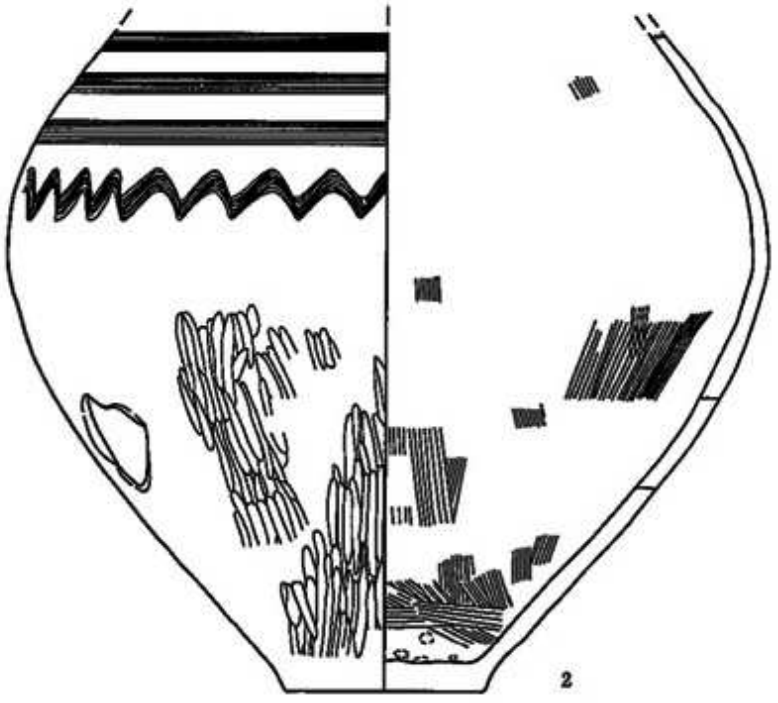


第42図　東側谷暗黒色粘土層出土弥生式土器

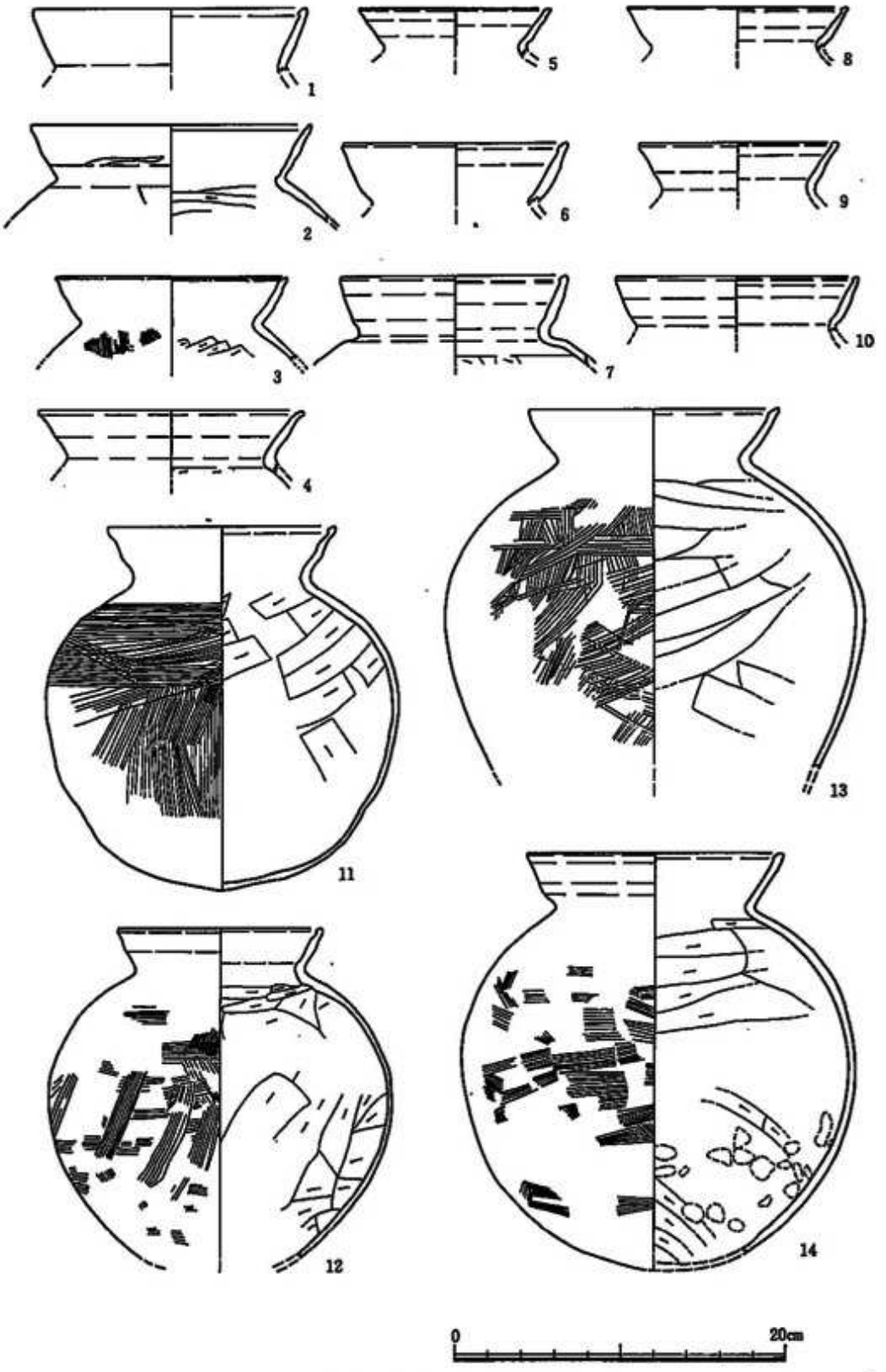


第43図　東側谷暗黒色粘土層出土弥生式土器

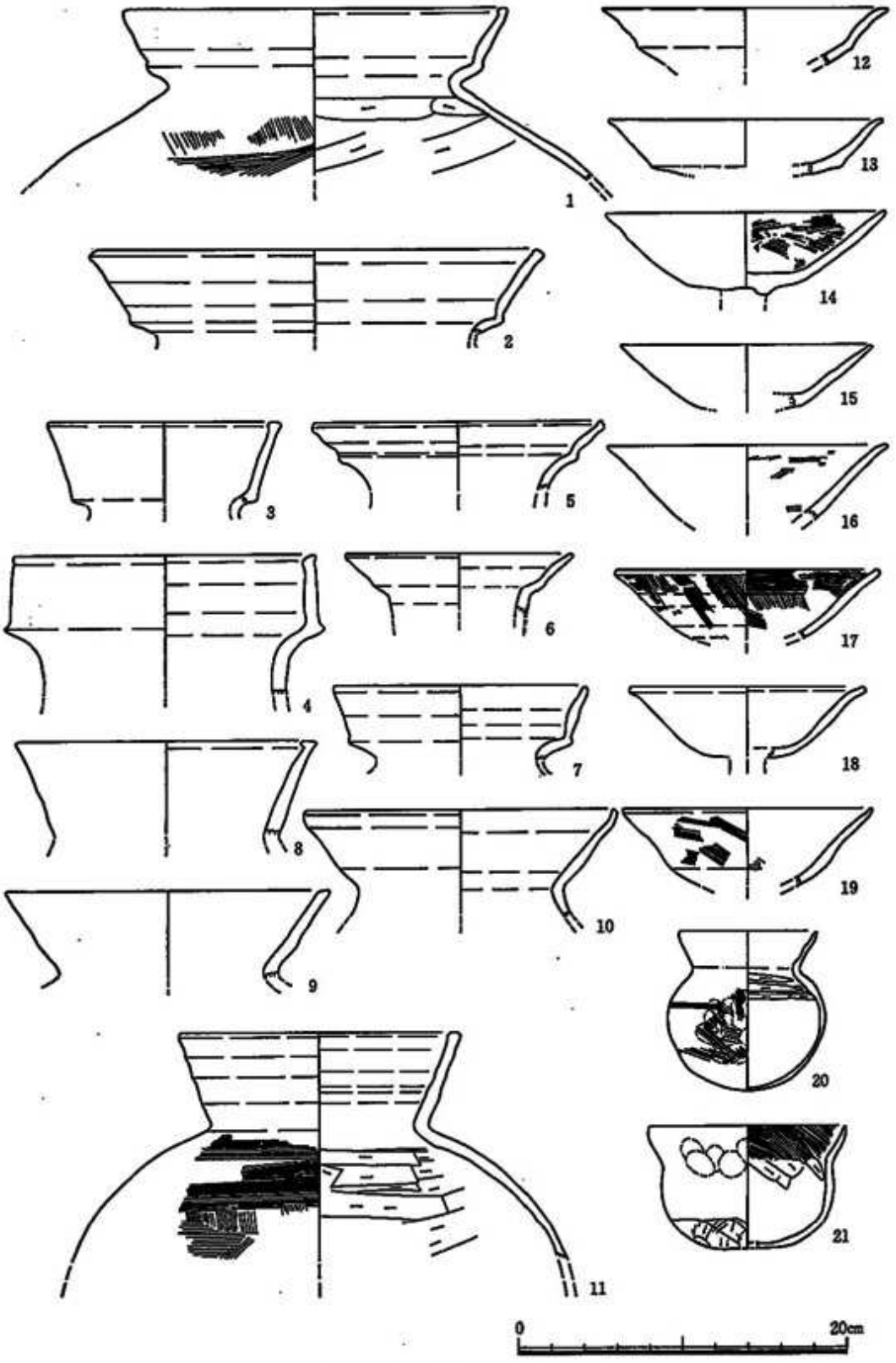




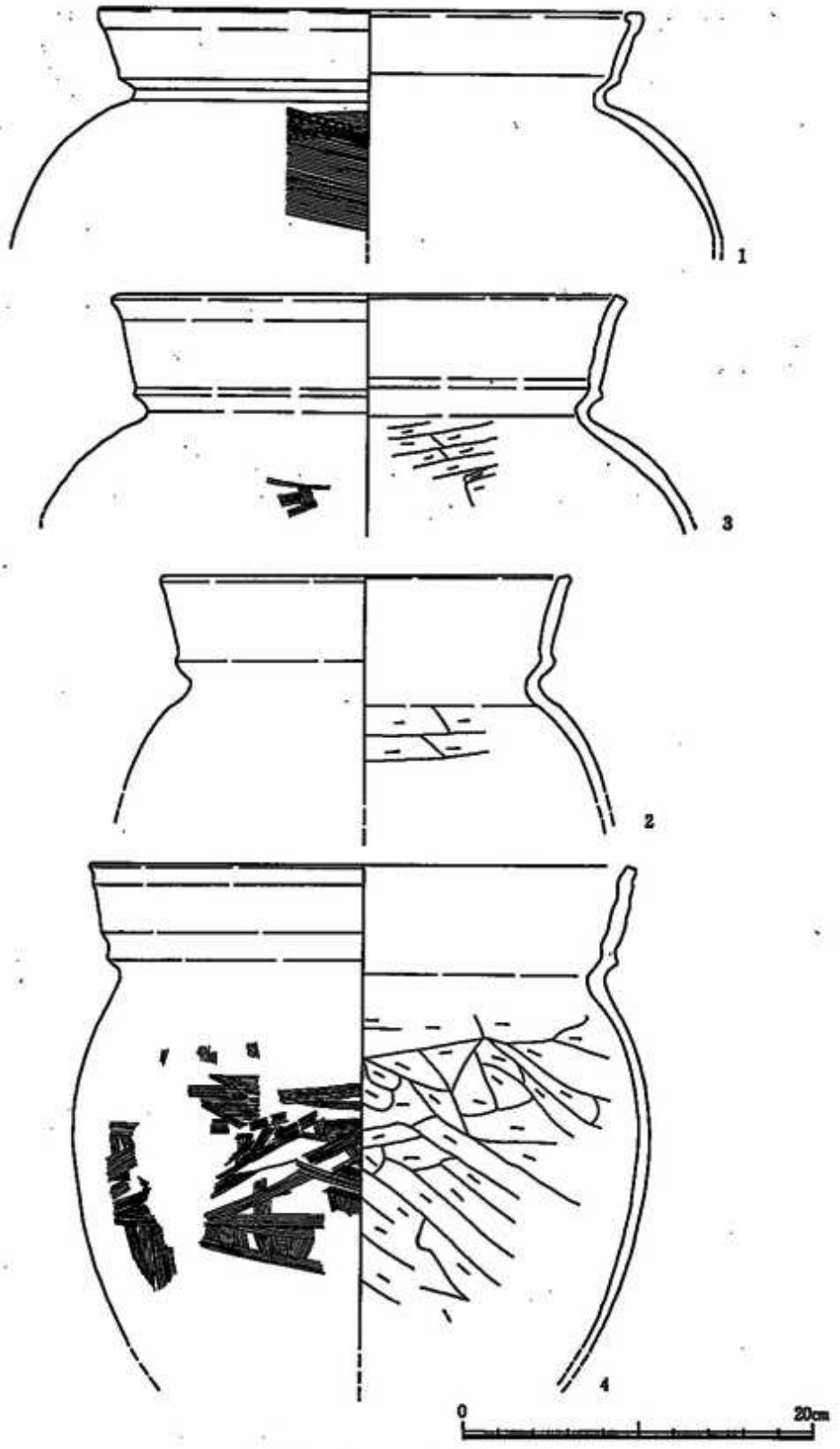
第44図　谷青灰色粘土層出土弥生式土器



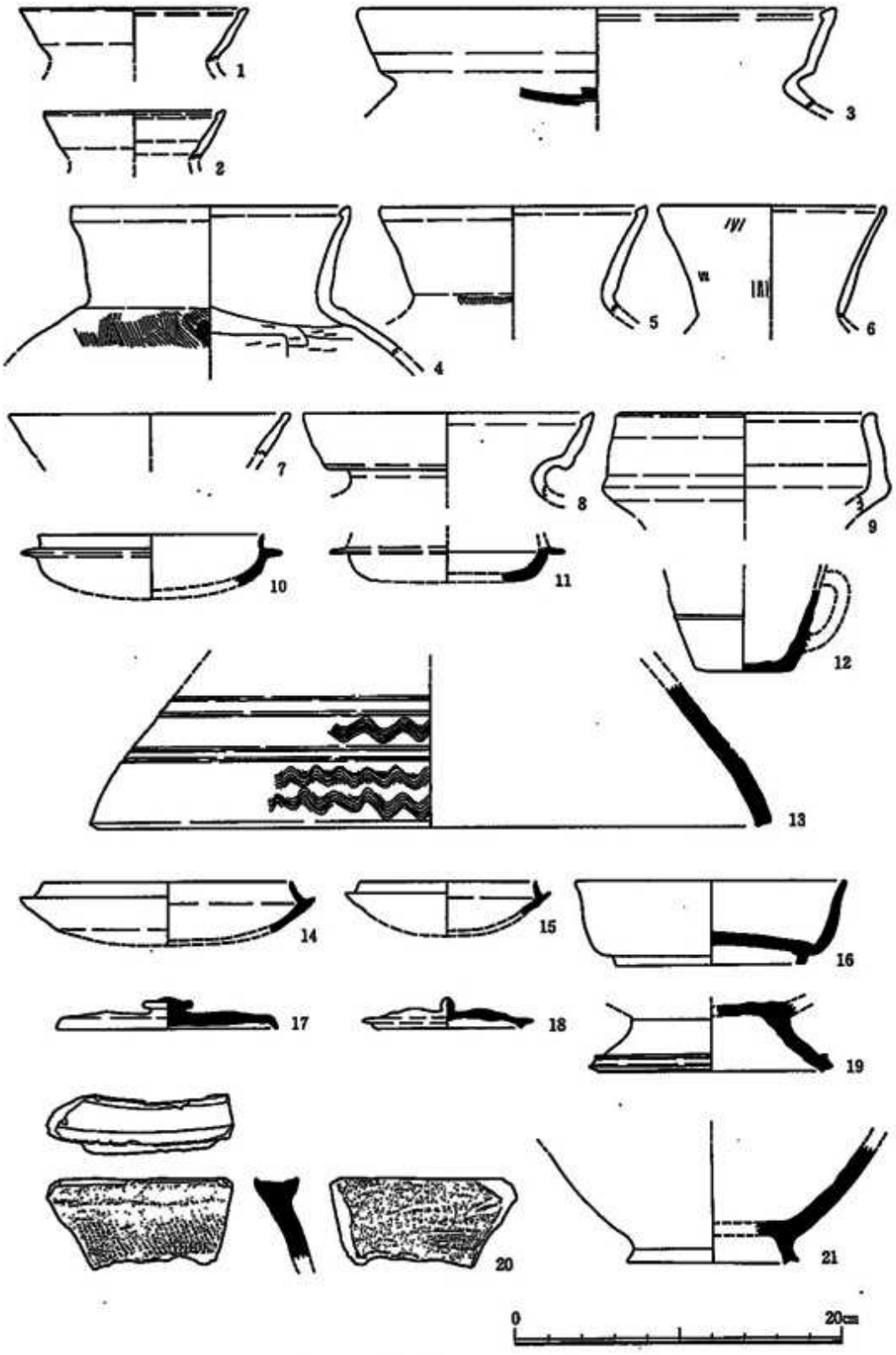
第45図　東側谷暗黒色粘土層出土土器



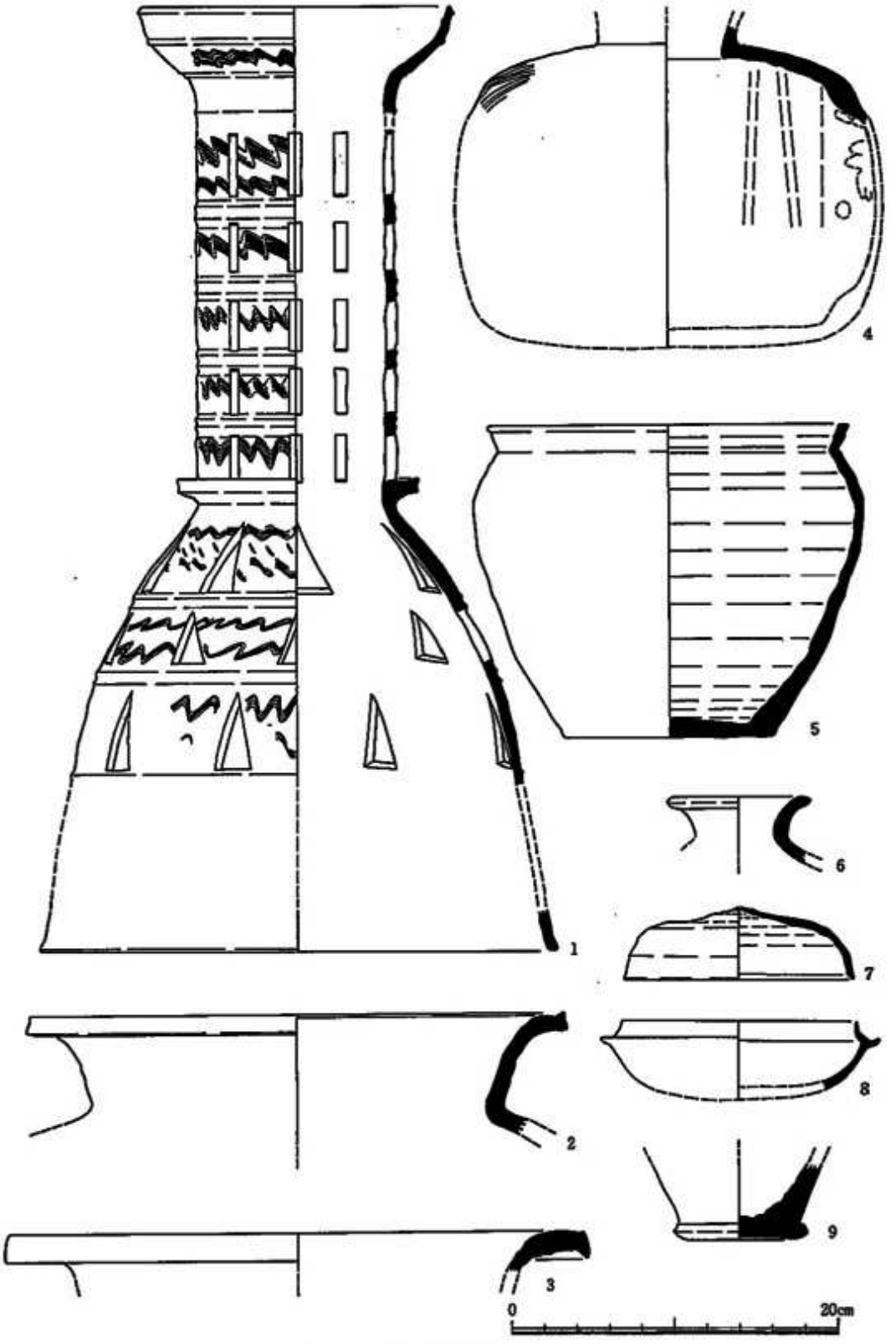
第46図　東側谷暗黒色粘土層出土土器



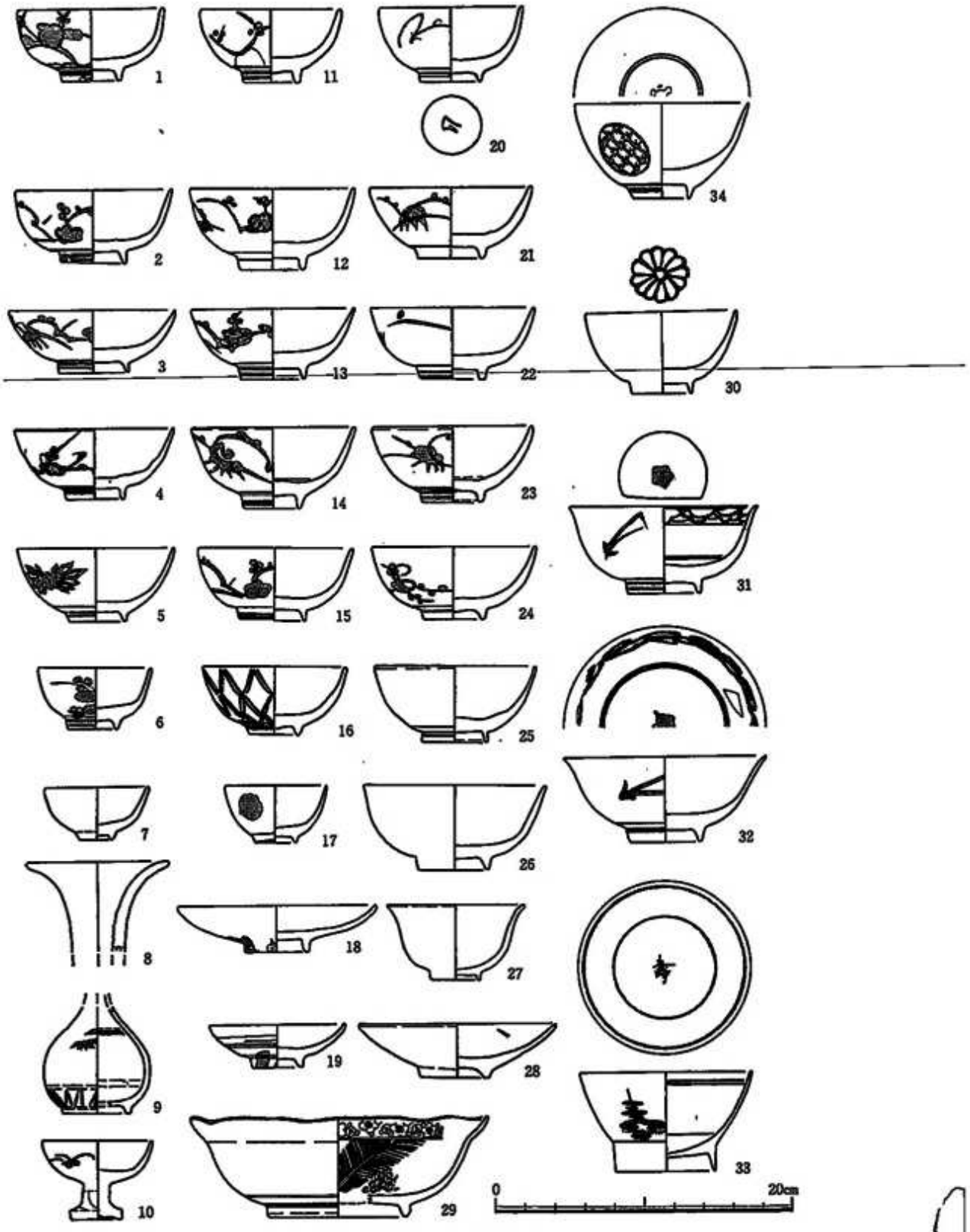
第47図 東側谷暗黒色粘土層出土土器



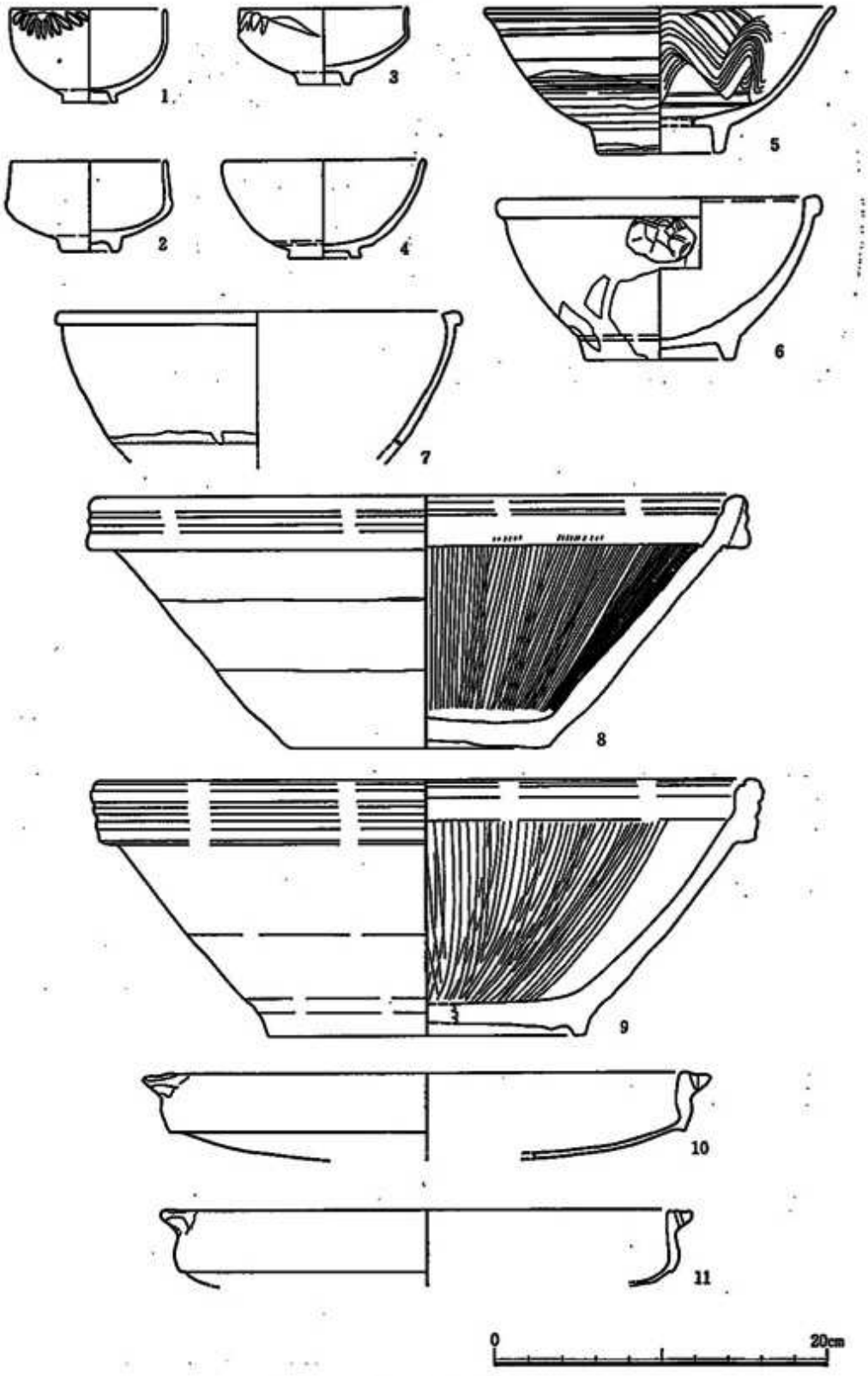
第48図　東側谷青灰色粘土層出土遺物



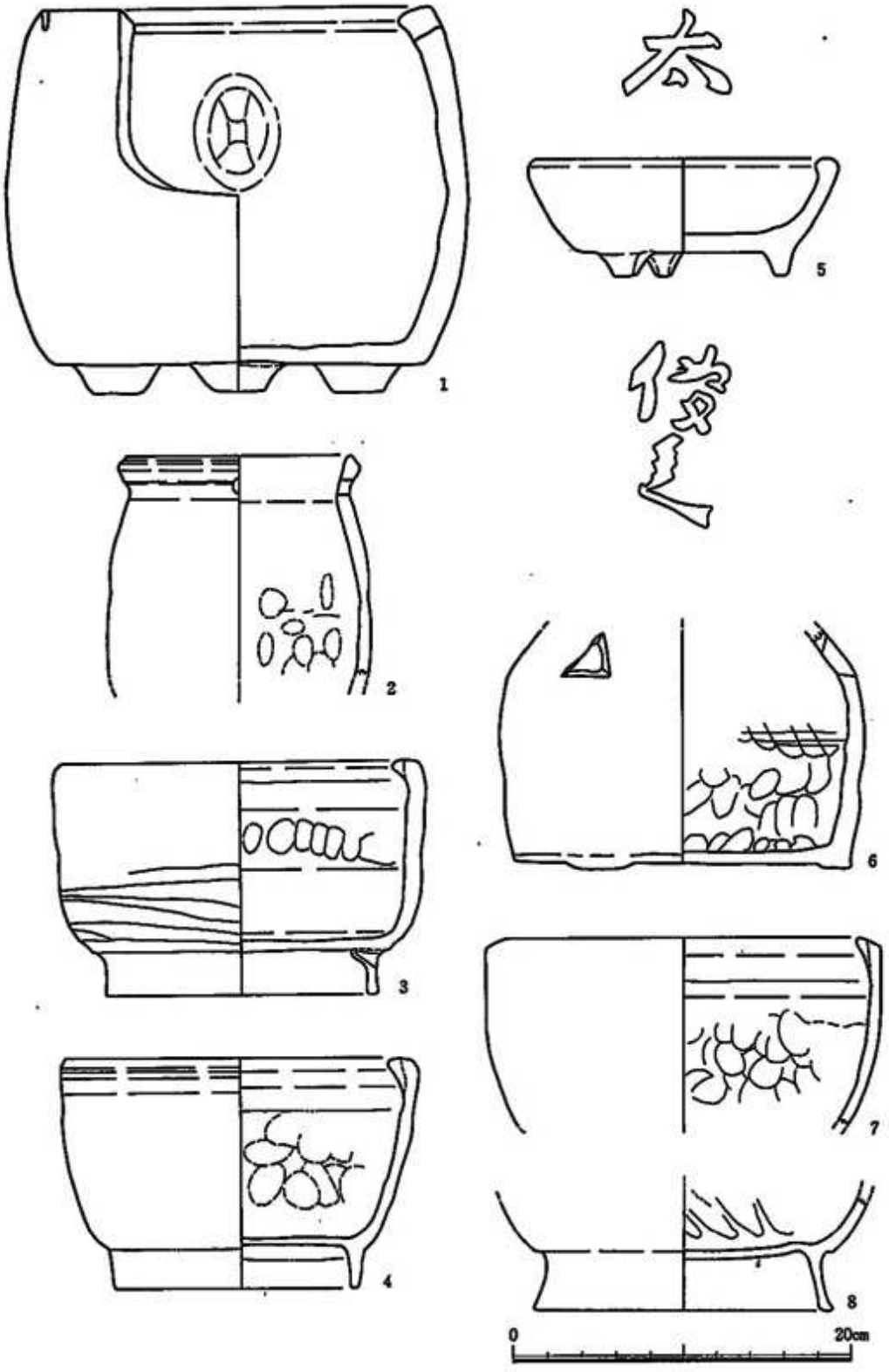
第49図　東側谷暗黒色粘土層出土須恵器



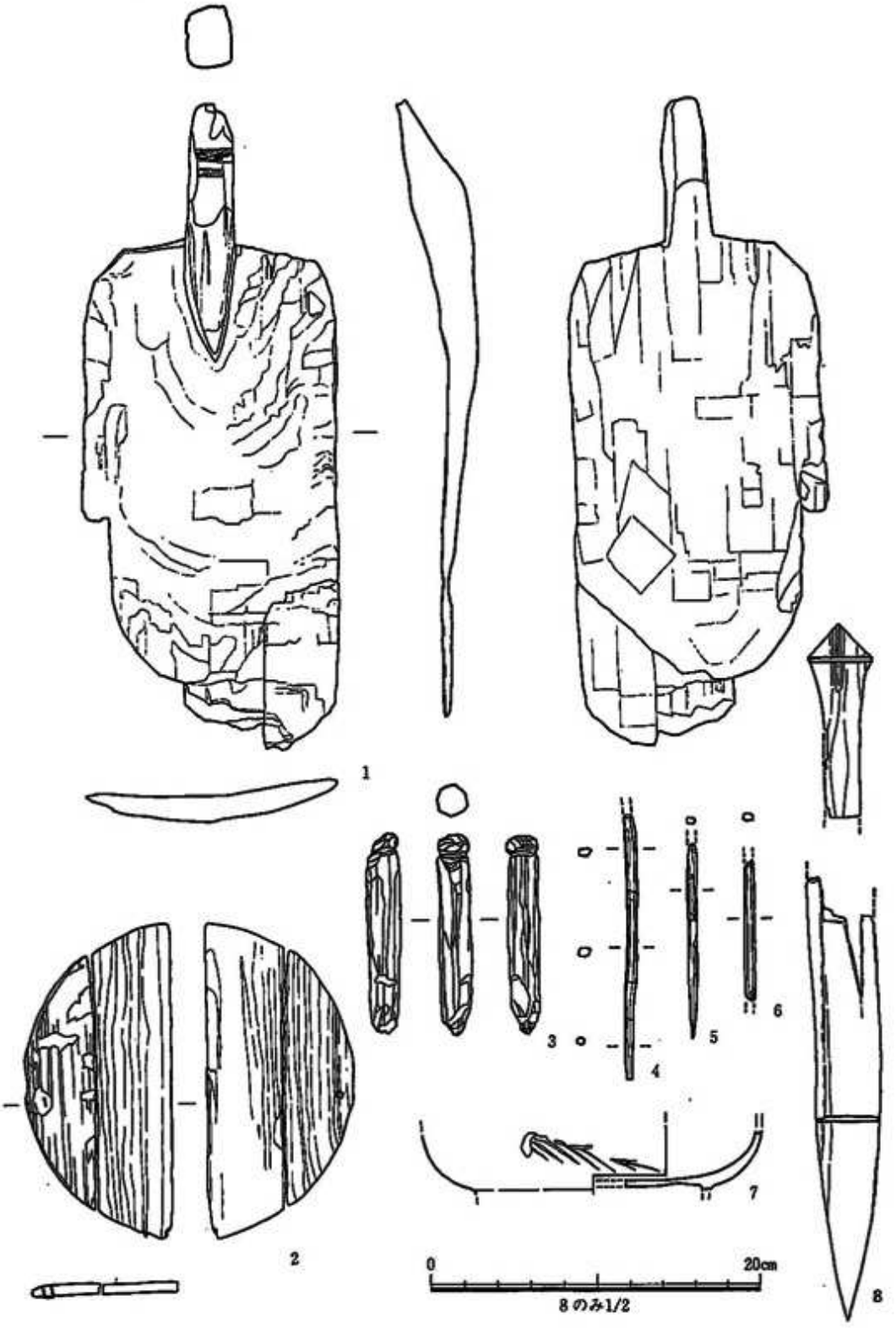
第50図　東側谷出土江戸時代磁器



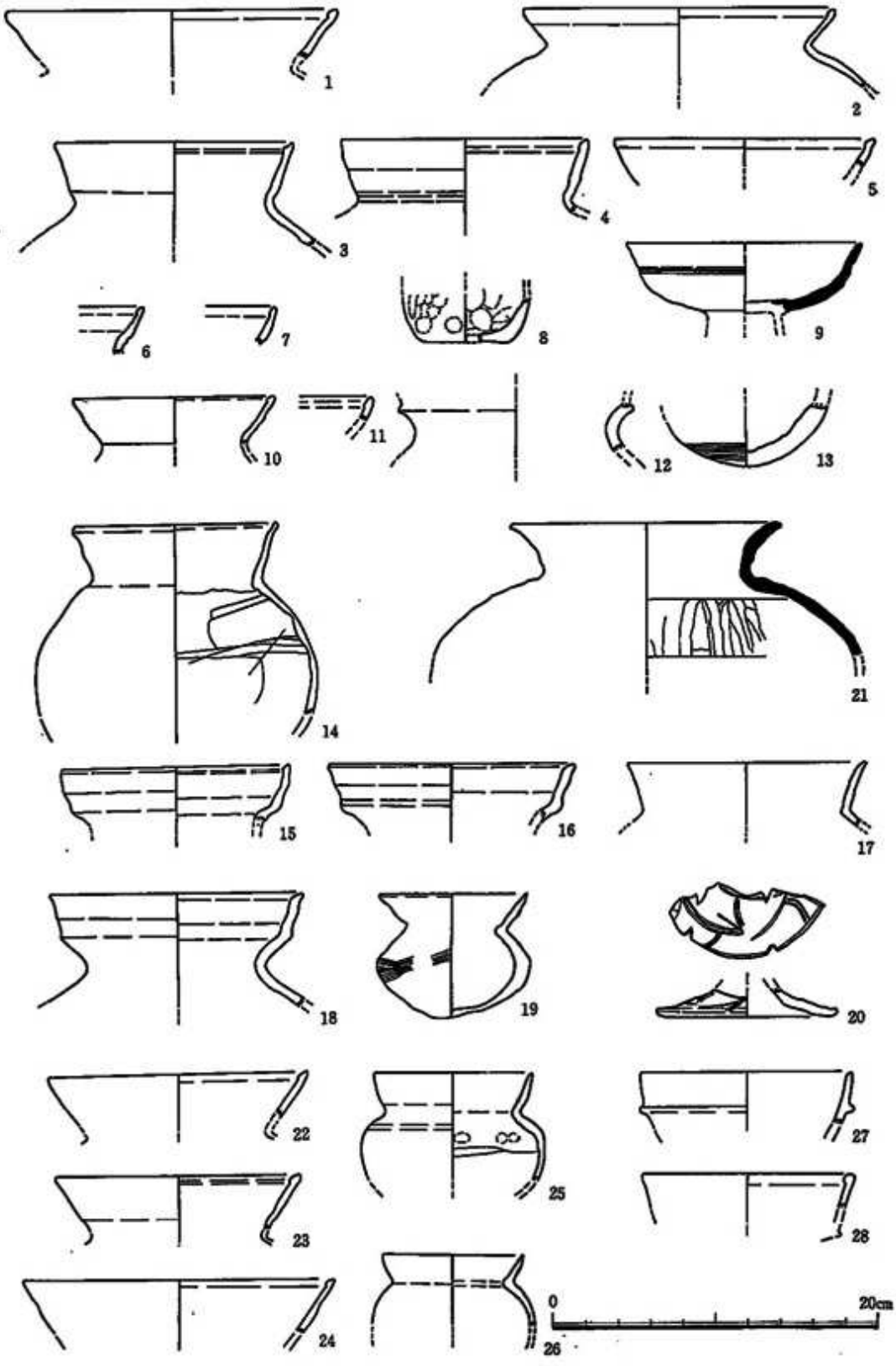
第51図　東側谷出土江戸時代土器



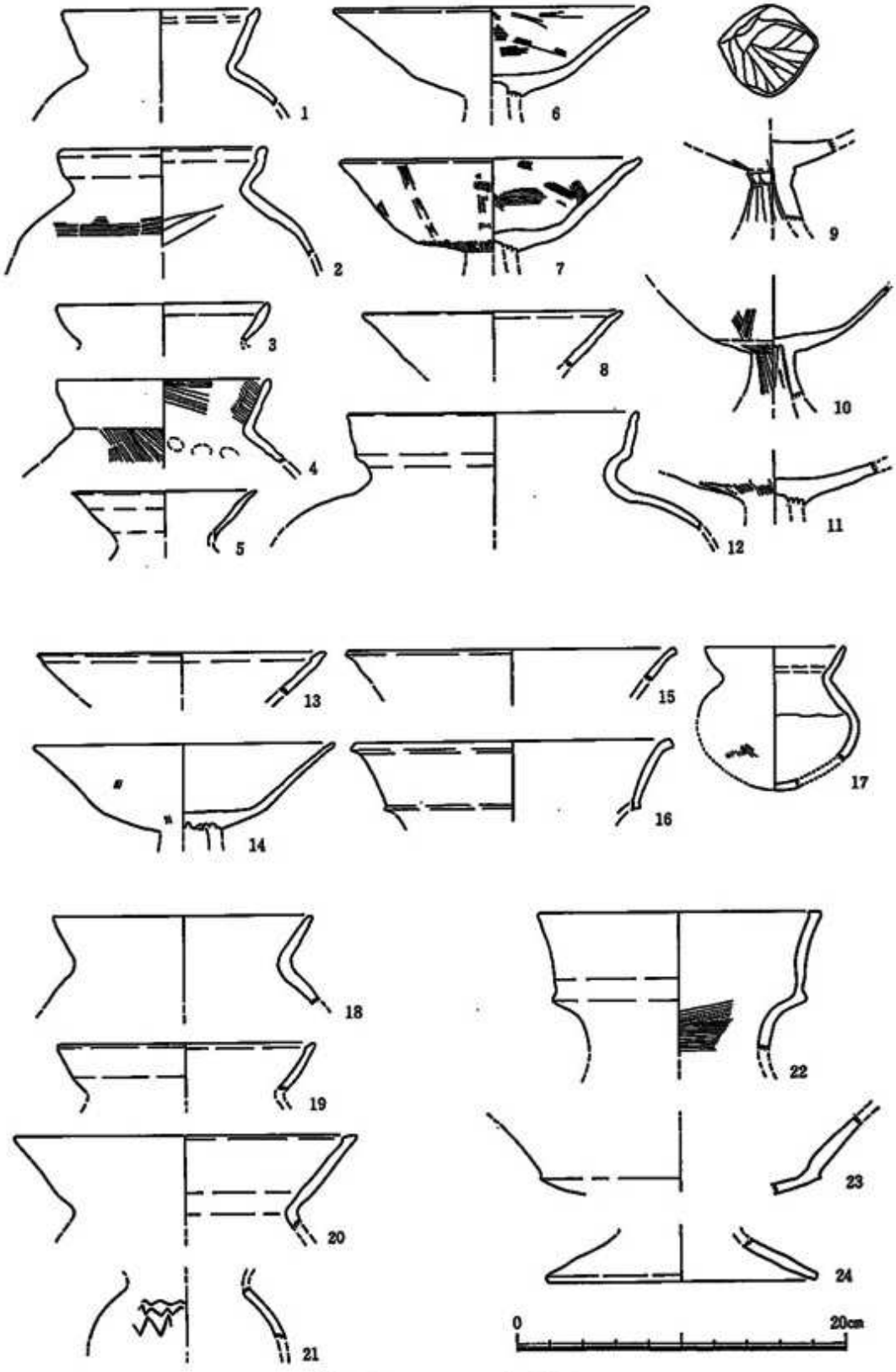
第52図　東側谷出土江戸時代土器



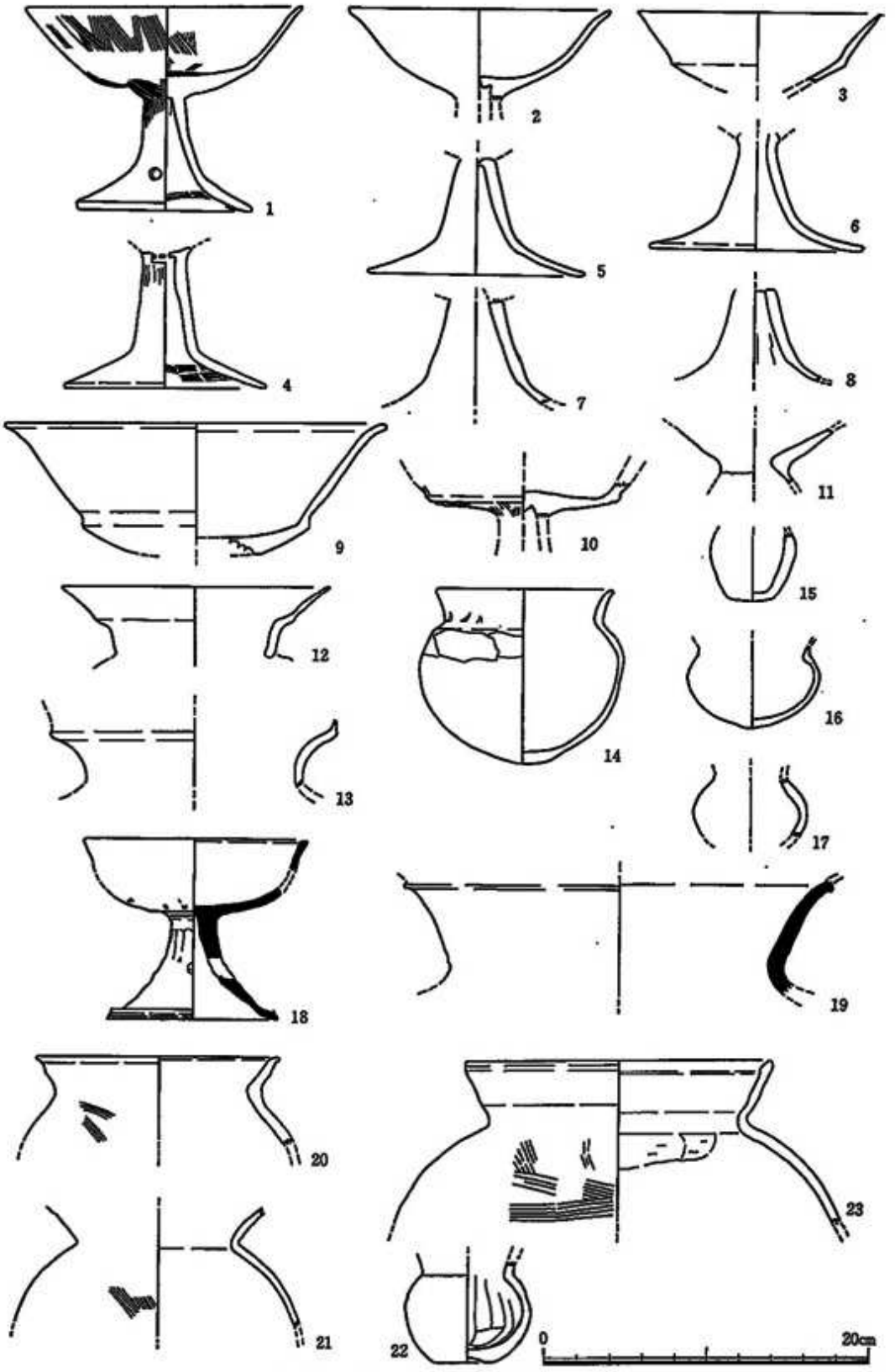
第53図 谷 出 土 木 器



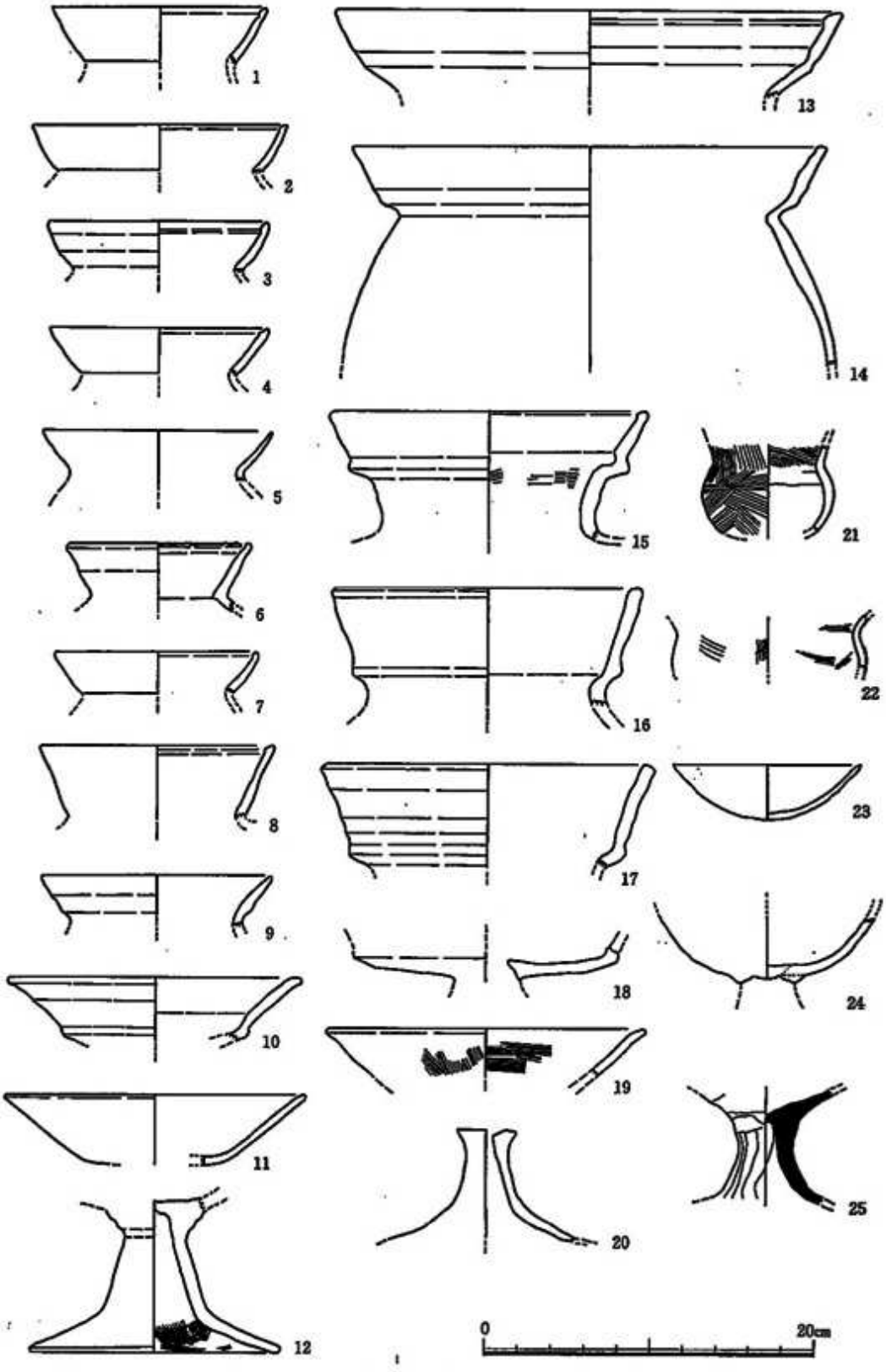
第54図　ＳＢＫ１・２・３・４出土土器



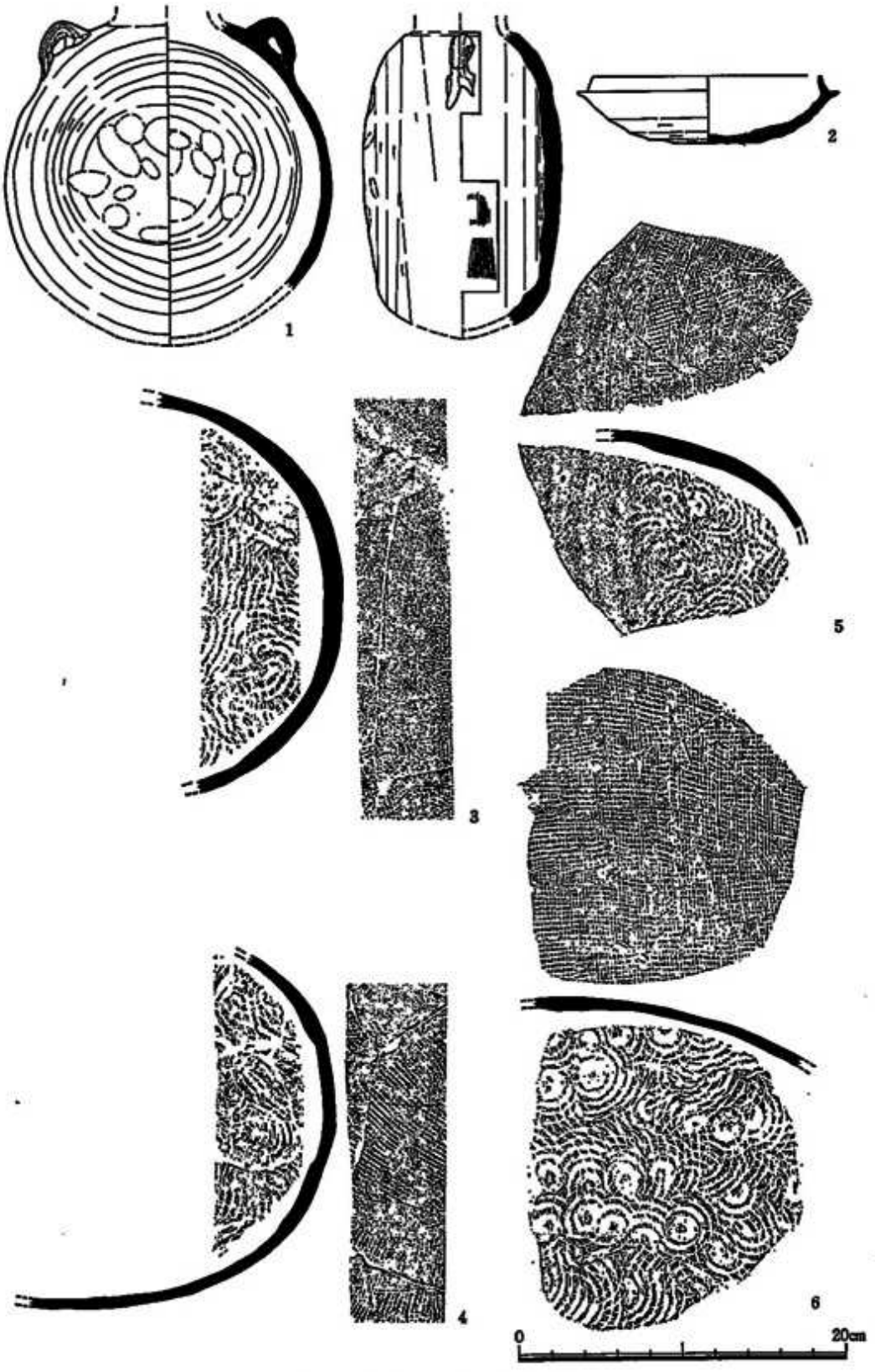
第55図　ＳＢＫ５・６出土土器



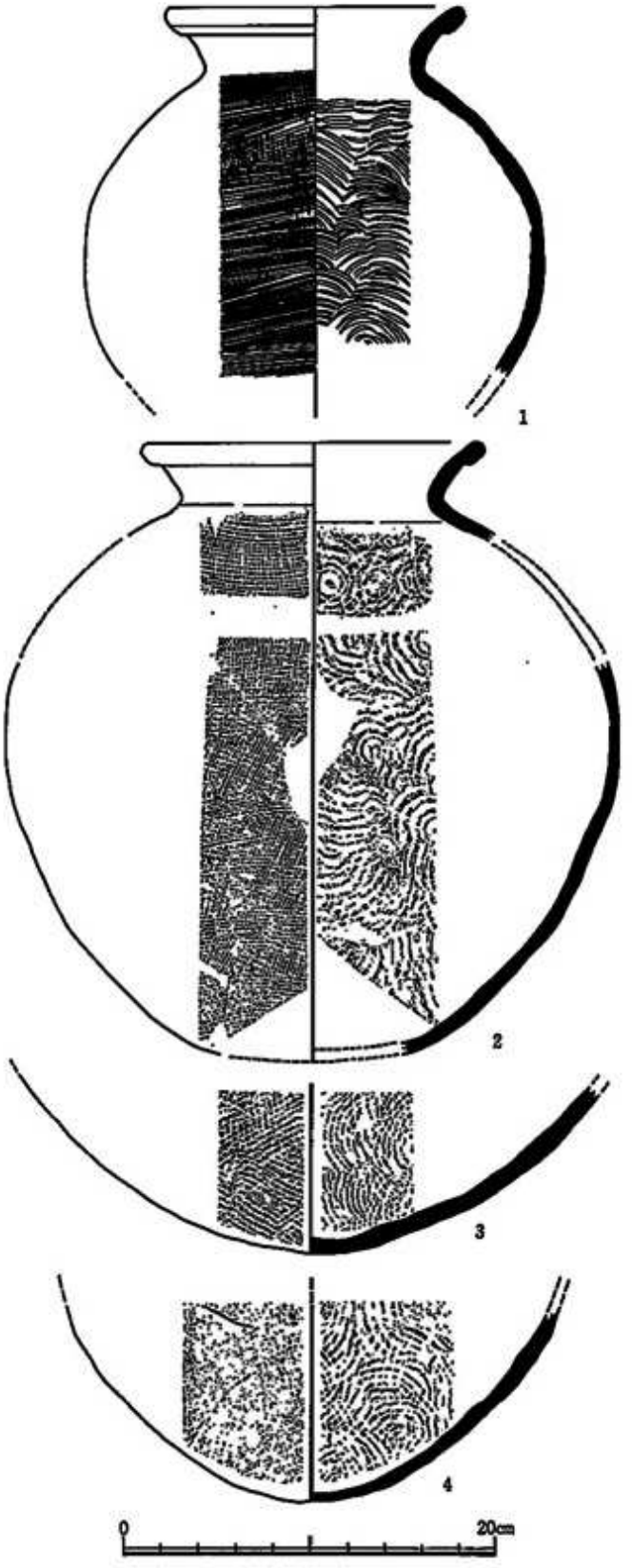
第56図　ＳＫＡ２・４、ＳＸ１出土土器



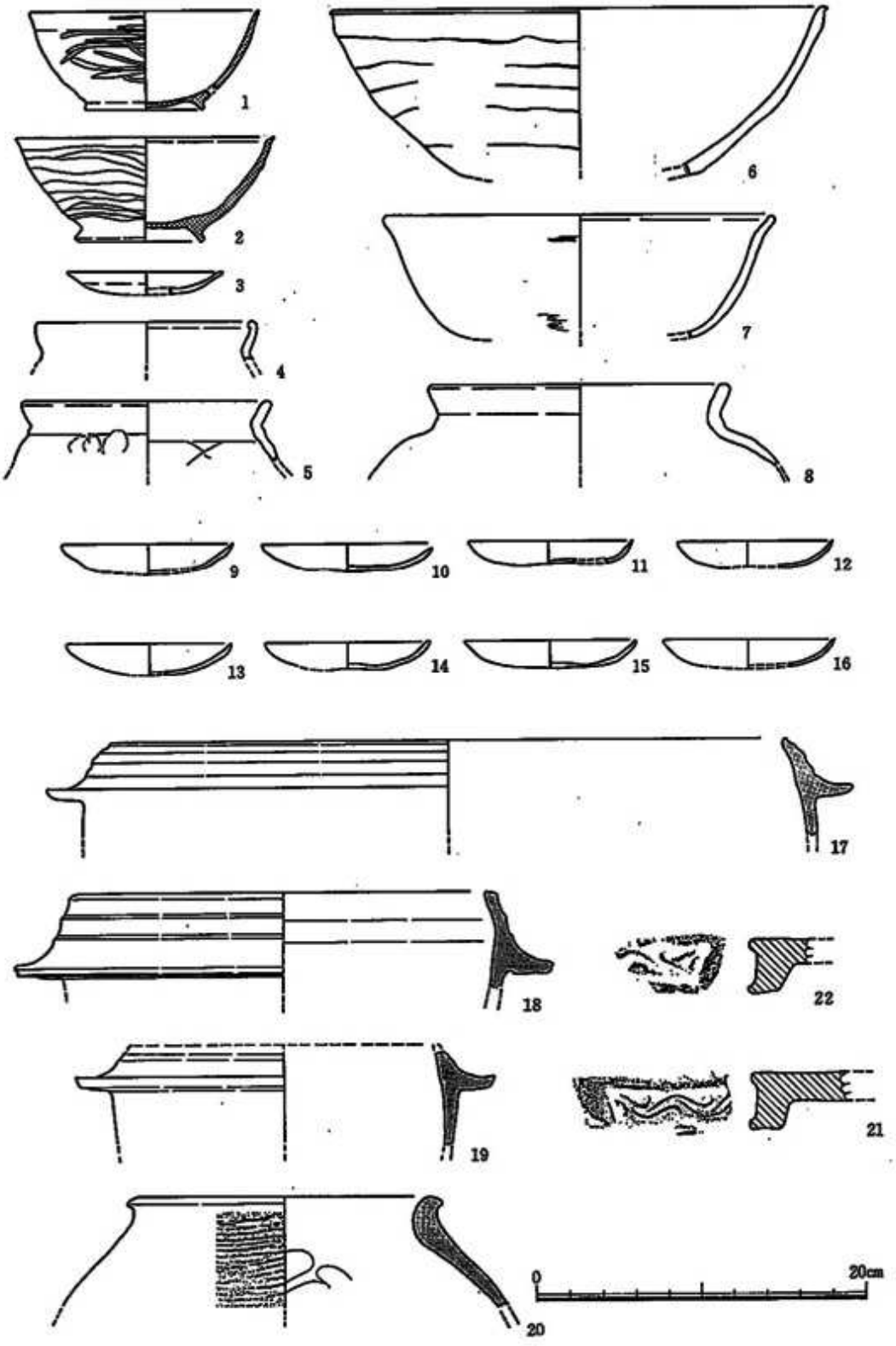
第57図 P 24 出 土 土 器



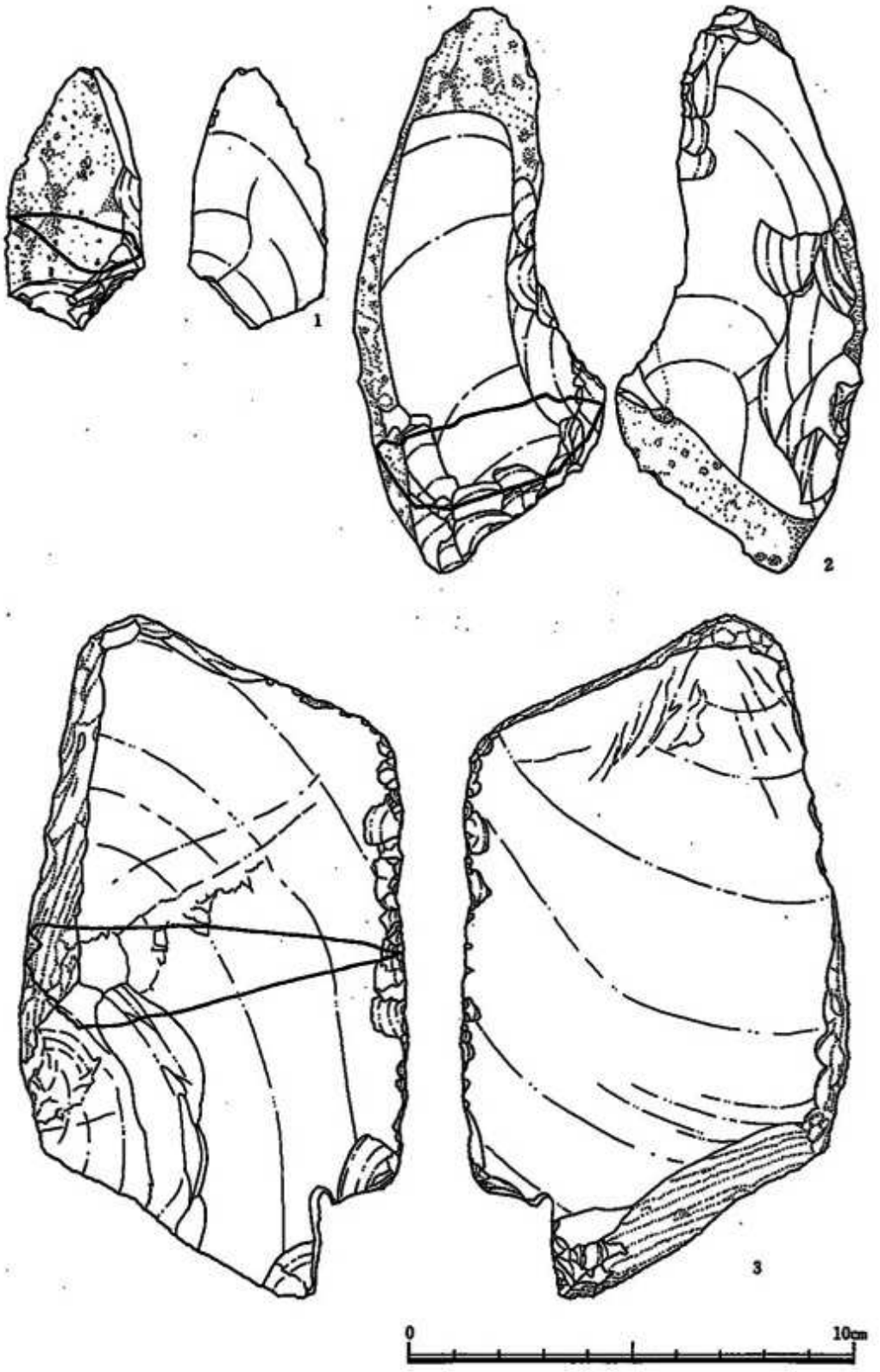
第58図 土壙墓出土須恵器



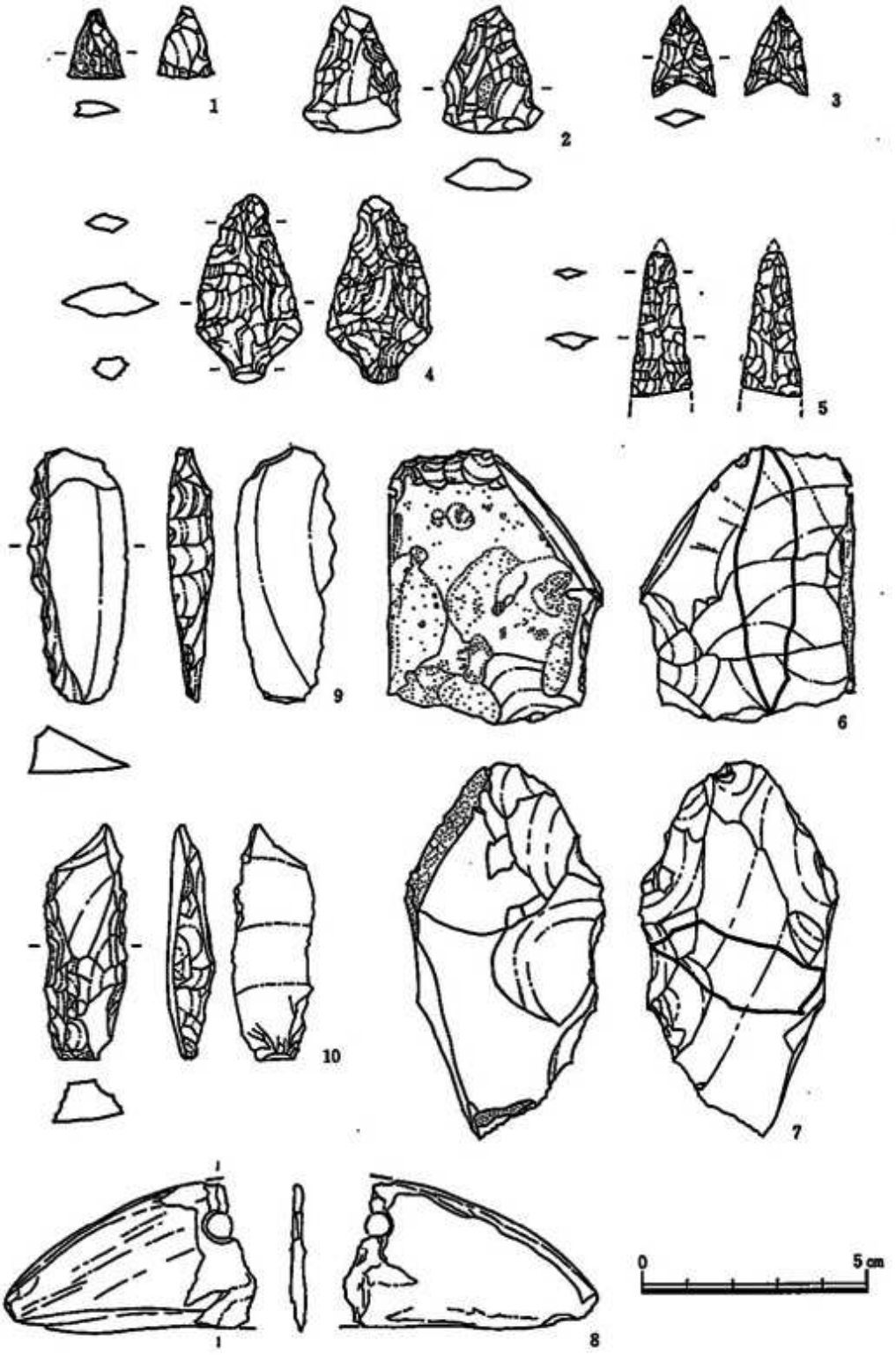
第59図 土壙墓出土須恵器



第60図　ＳＫＡ５・６、ＳＤＡ５、他出土遺物



第61図 石　　器



第62図 石　　器

付、万崎池遺跡第Ⅲ、第Ⅳ調査区出土遺物観察表

凡 例

1．法量については、( )内残存値、推：推定値、復：復原値、高：器高、残存：破片の残存値を示し、口、胴、底などは径を示す。

2．胎土には長石、石英、チャート、くさり礫砂粒を主に含むが、それ以外の特徴的な砂粒を記入した。砂粒は大きさにより、大＞5mm、2mm＜中≦5mm、0.5＜細≦2mm、微≦0.5mmとした。

谷出土弥生式土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
33-1	224-2	弥生式土器	壺	西側谷 青灰色砂	口 8.6、高(7.3)	剥落が著しい。	砂粒(中・細)、にぶい黄橙色、普通
2	3	弥生式土器	壺頸部	東側谷 暗黒色粘土	口11.7、高(7.9)	(外・内)ハケ。	砂粒(中・細)、橙色、普通
3		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	口11.1、高(14.5)	(外口)ナデ。(外頸)ハケメ。(内口)ナデ。(内頸)不明(指オサエ?)。	砂粒(大・中)、灰黄色、良好
4		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	口17.2、高(7.1)	(外)スス付着、タタキ、ナデ。(内)ナデ、指オサエ。	砂粒(大・中)、(外)灰黄褐色・(内)灰褐色、普通
5	224-4	弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	口14.7、底 4.5、器高22.4	(外)タタキ。(外底一外体の境)ナデ。(内)ハケメ。(内底一内体の境)指オサエ。	砂粒(中)、(外)褐灰色・(内)にぶい黄橙色、良好

SBK13出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
36-1		土師器	甕	SBK13 茶褐色土	口16.8、高(3.0)	(内)ハケ後ナデ、ハケメが薄く残っている。	砂粒(中・細)、(外)明赤褐色・(内)赤褐色、普通
2		土師器	高坏	SBK13	高(3.9)	(外・内)ハケメの痕跡。	砂粒(中)、明褐色、良好
3		土師器	高坏(坏部)	SBK13 茶褐色土	口18.0、高(3.0)	(外)9本/1cmのハケメ横方向。(内)9本/1cmのハケメ縦方向。	砂粒(細)、橙色、普通
4		土師器	高坏	SBK13 黄褐色土	口16.8、高(3.6)	(外)縦方向のハケ後横ナデ。(内)縦方向のハケ。	砂粒(含)、(外)明褐灰色(内)橙色、普通
5		土師器	小型壺(底部)	SBK13	底 5.0、高(1.4)	剥落が著しい。	密・砂粒(含)、にぶい黄橙色、普通
6		土師器	高坏(脚部)	SBK13 茶褐色土	高(6.7)	(外)6本/1cmのハケメ縦方向。(内)6本/1cmのハケメ横方向。	砂粒(中・細)、(外)明赤褐色・(内)浅黄橙色、普通

西側段丘面出土弥生式土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
37-1		弥生式土器	壺	西側段丘面赤土	口19.2、高(4.2)	(外)口～頸にかけてナデ。	砂粒(細)、(外)暗黄褐色・(内)黄橙色、普通
2		弥生式土器	壺	SKA 1	口16.0、高(1.7)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、浅黄橙色、良好
3		弥生式土器	壺	東側谷 黄灰色粘土	口20.1、高(2.3)	(内口)ナデ。	砂粒(中)、灰黄褐色、普通
4		弥生式土器	壺	SKA 1	口18.2、高(6.5)	(外口)ナデ。(内口)ナデ。(頸内)ハケ。	砂粒(細)、(外)黒褐色・(内)浅黄色、良好
5		弥生式土器	壺	西側段丘面赤土	口18.6、高(8.3)	(外口)横ナデ。(外頸)縦ナデ。(内口)横ナデ。(内頸)粗い縦ナデ。	砂粒(細)、橙色、普通
6		弥生式土器	壺	SKA 1	口16.8、高(2.8)	(外)ナデ。(内)剥落。	砂粒(中・細)、浅黄橙色、良好
7		弥生式土器	壺	SKA 1	口17.2、高(1.3)	(外口・内口)ナデ。	密・砂粒(含)、(外)橙色・(内)浅黄橙色、良好
8		弥生式土器	壺	SKA 1	口19.4、高(2.75)	(外・内)ナデ。	砂粒(中・細)、(外)灰白色・黄橙色・(内)褐灰色、良好
9		弥生式土器	壺(底部)	西側段丘面赤土	底 8.0、高(5.0)	(外)剥離の為不明。(内)ヘラミガキ。	砂粒(細)、(外)赤色・黒色・(内)浅黄橙色、普通
10		弥生式土器	壺(底部)	SKA 1	底 5.4、高(3.0)	(外底・内底)ナデ。	粗・砂粒(含)、にぶい橙色・褐灰色、普通
11		弥生式土器	壺	東側谷 黄灰色粘土	底 5.6、高(3.2)	(外・内)ハケメ。	砂粒(細)、(外)褐灰色・橙色・(内)灰白色、普通
12		弥生式土器	壺	SKA 1	底 5.8、高(4.2)	(外)ケズリ? (内)ナデ。	砂粒(中・細)、(外)灰白色・(内)明黄褐色、普通
13		弥生式土器	壺	SKA 1	口 7.0	(外頸)ナデ。(外下頸)ミガキ。(内頸)粘土のしわあり。(内下頸)ミガキ。(内底)ヘラ削り。	砂粒(細)、浅黄橙色、良好
14		弥生式土器	壺(底部)	SKA 1	底 7.0、高(12.0)	(外体)ヘラ削り。(外底)ハケ。(内)縦方向のナデ。(内底つけ根部)指オサエ。	砂粒(中)、褐灰色、普通
15		弥生式土器	高坏	西側段丘面赤土	高(5.6)	(外・内)ヘラミガキ。円板完成法。	砂粒(中・細)、黄橙色、普通
16		弥生式土器	手づくね土器	西側段丘面赤土	高(3.2)	(外・内)指オサエ。	密・砂粒(含)、にぶい黄橙色・褐灰色、良好
17		弥生式土器	手づくね土器	SKA 1	高(2.6)	(外・内)指オサエ。	密、浅黄橙色、良好
18		弥生式土器	壺	西側段丘面赤土	底 6.6、高(10.4)	(内底)指オサエ。(外・内)剥離の為調整不明。	砂粒(大・中)、白灰色・浅黄色、良好

西側谷青灰色粘土・青灰色砂層出土弥生式土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
38-1	222-2	弥生式土器	壺	西側谷 黄灰色砂	口17.4、高(3.5)	(外口)凹線があり。ナデ。(内口)ナデ。	砂粒(細)、褐灰色・浅黄褐色、良好
2	3	弥生式土器	壺	西側谷 黄灰色粘土	口19.3、高(4.6)	剥離著しい。	砂粒(細)、浅黄色、普通
3		弥生式土器	壺	西側谷 青灰色砂	口15.2、高(5.4)	(内)ナデ。	砂粒(細)、灰黄褐色、普通
4	222-1	弥生式土器	壺	東側谷 灰褐色砂	口15.7、底 6.0、高21.3	(外体)上部ハケメ、下部ヘラ削り。(内体)ハケメ。	砂粒(中)、灰褐色、良好
5		弥生式土器	壺	西側谷 青灰色砂	口17.0、高(4.8)	(外)ハケ。(内)ハケ後ナデ。	砂粒(細)、灰黄褐色・黒色、良好
6		弥生式土器	壺	西側谷 青灰色砂	口17.0、高(6.6)	(外)ナデ、ハケ。(内)ハケ後ナデ。	砂粒(細)、灰黄褐色・黒褐色、普通
7		弥生式土器	壺	西側谷 青灰色粘土上層	口41.4、高(6.5)	剥離著しい。	粗・砂粒(含)、浅黄橙色・灰色、普通
8		弥生式土器	壺	西側谷 青灰色砂	口19.3、高(8.4)	(外)ナデ、一部ナデ後擬状文。(内)ナデ、一部ハケメ。	砂粒(中・細)、にぶい黄橙色、良好
9		弥生式土器	壺	西側谷 青灰色粘土	口14.4、高(2.6)	(外)ナデ(?)。(内)ナデ。	砂粒(含)、にぶい褐色、浅黄橙色、普通
10		弥生式土器	無頸壺	西側谷 青灰色粘土	口20.6、高(4.9)	(外口)凹線文。	砂粒(中・細)、浅黄色・黒色・灰白色、普通
11		弥生式土器	壺	西側谷 青灰色粘土	口27.0、高(3.1)	(外)ナデ。	粗・砂粒(含)、褐灰色・浅黄橙色、良好
12		弥生式土器	壺	西側谷 青灰色粘土	口23.4、高(11.5)	(外)ハケ。	砂粒(含)、にぶい褐色・灰白色、普通
13	222-4	弥生式土器	壺	西側谷 青灰色砂	口 4.8、高8.52	(外)指オサエ、ナデ。(内)指オサエ。	砂粒(含)、灰褐色、良好

図番号	図版番号	種部	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
38－14	223－5	弥生式土器	壺	西側谷　青灰色砂	□24.2、高(6.8)	(外)ナデ。(内)ナデ。	砂粒(中・細)、にぶい黄橙色、良好
15		弥生式土器	壺	西側谷　青灰色砂	□21.0、高(5.0)	(外口)ナデ。(外体)ハケ。(内)ナデ。	砂粒(中)、にぶい黄橙色、普通
16		弥生式土器	鉢？	西側谷　青灰色粘土	□14.0、高(4.2)	(外口)回線文。(内)ナデ。	砂粒(中)、にぶい黄橙色・褐灰色、普通

西側谷暗黒色粘土層出土弥生式土器

図番号	図版番号	種部	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
39－1	222－8	弥生式土器	壺	西側谷　暗黒色粘土	□11.6、高(9.7)	(外・内)口縁部を除きハケメ。	砂粒(中)、うす茶色、良好
2	5	弥生式土器	壺	西側谷　暗黒色粘土	□25.8、高(10.3)	(外)ナデ、所々表面剥落し、詳細不明。(内)指オサエ。	砂粒(大)、うす茶色、良好
3	7	弥生式土器	壺	西側谷　暗黒色粘土	□16.8、高(7.4)	(外)叩き後ハケ？。(内)ナデ？。	砂粒(含)、灰黄色、普通
4	6	弥生式土器	鉢	西側谷　暗黒色粘土	□29.8、底 7.4、高14.9	(外体・口)ナデ。(内口)ナデ。(内体)ヘラミガキ。	砂粒(中)、うす茶色・(一部)黒色、良好
5		弥生式土器	壺？	西側谷　暗黒色粘土	□30.6、高(8.5)	(外)ナデ。(内)ナデ。	砂粒(細)、灰黄褐色、良好
6		弥生式土器	壺	西側谷　暗黒色粘土	□28.0、高(8.9)	(外)ナデ、粗いハケ。(内)ナデ、粗いハケ。	粗・砂粒(細)、(外)褐灰色・(内)にぶい黄橙色、普通
7		弥生式土器	壺	西側谷　暗黒色粘土	□16.0、高(9.3)	(外口部)横ナデ。(外体)ハケ5本/1cm。(内口部)横ナデ。(内体)ナデ。	砂粒(中)、うす茶色、良好
8	222－9	弥生式土器	高坏	西側谷　暗黒色粘土	底11.4、高(7.25)	(外)ミガキ。(内)脚柱を下にして右回りのケズリ。	砂粒(中)、にぶい黄橙色・脚一部黒色、良好
9		弥生式土器	高坏	西側谷　暗黒色粘土	底13.8×13.3、高(12.7)	(外脚柱)ケズリ。(外裾)ケズリ後ナデ。(内脚柱)ケズリ。(内裾)ケズリ後ナデ。シボリメ有り。	砂粒(大)、うす茶色・一部黒色、良好
10		弥生式土器	壺	西側谷　暗黒色粘土	□16.8、高(5.4)	(外体)ハケメ。(内)ナデ、ハケ。	砂粒(中・細)、(外)暗灰黄色・(内)黄灰色、普通
11		弥生式土器	壺	西側谷　暗黒色粘土	□12.1、高(2.5)	(外・内)剥落著しく調整不明。	砂粒(細)、淡黄色、普通
12	223－1	弥生式土器	蓋	西側谷　暗黒色粘土	□16.0 、高(8.8)	(外)指オサエ、ナデ。(内穴より上)横ナデ。(内穴より下)ナデ。	砂粒(含)、うす茶色、普通
13	7	弥生式土器	高坏	西側谷　暗黒色粘土	□19.0、底10.3、高17.5	(外)ヘラミガキ。(内)ヘラミガキ。(内脚柱)しぼりメ。(内裾)ヘラ削り。	砂粒(大)、うす茶色・一部黒色、良好

東側谷青灰色粘土層出土弥生式土器

図番号	図版番号	種部	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
40－1		弥生式土器	壺	東側谷　青灰色粘土	□17.2、高(5.0)	剥落著しい。	砂粒(中)、赤白色、普通
2		弥生式土器	壺	東側谷　青灰色粘土	□22.6、高(6.6)	剥落著しい。	砂粒(細)、暗灰黄色、普通
3		弥生式土器	壺	東側谷　青灰色粘土	□16.6、高(4.3)	(外口)櫛状文。(外体)ナデ。(内)ナデ。	砂粒(中・細)、にぶい黄橙色、普通
4	223－2	弥生式土器	壺	東側谷　青灰色粘土	□22.4、高(11.5)	(外)櫛状文。(内)ハケ。	砂粒(中・細)、にぶい黄橙色、普通
5		弥生式土器	鉢	東側谷　青灰色粘土	□37.8、高(3.0)	(外口)回線文。(外体)櫛状文。(内)ナデ。	砂粒(中・細)、(外)黒色・(内)にぶい黄橙色、普通
6		弥生式土器	鉢	東側谷　青灰色粘土	□18.2、高(8.4)	(外)剥落著しく調整不明。(内)ナデ。	砂粒(細)、(外)にぶい黄橙色・(内)灰黄褐色、普通
7		弥生式土器	鉢	東側谷　青灰色粘土	□21.2、高(3.4)	(外)回線文(3本)。	砂粒(細)、(外)淡赤橙色・(内)灰黄色、普通
8	223－3	弥生式土器	鉢	東側谷　灰褐色砂	□22.6、底 7.1、高 12.2	(外口)ヘラ削り後ハケ後ナデ後回線。(外体)ヘラ削り。(内口)横ナデ。(内体・底)指オサエ後ナデ。	砂粒(中)、うす茶色、良好
9		弥生式土器	壺	東側谷　青灰色粘土	□19.6、高(1.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、(外)暗褐灰色・(内)灰褐色、普通
10		弥生式土器	壺	東側谷　青灰色粘土	□22.3、高(3.0)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、にぶい黄橙色、普通
11		弥生式土器	壺	東側谷　青灰色粘土	□16.5、高(2.8)	(外)ナデ。(内)ナデ。	砂粒(中・細)、(外)淡赤橙色・(内)黄橙色、普通
12	223－4	弥生式土器	壺	東側谷　青灰色粘土	□14.2、高(5.3)	(口)穿孔がある(2ヶ所)。	砂粒(含)、褐灰色・にぶい黄橙色、普通
13		弥生式土器	壺	東側谷　黄褐色土	□16.8、高(7.4)	(外)ナデ。(内)ナデ、指オサエ。	砂粒(大・中)、灰黄色、普通
14		弥生式土器	壺	東側谷　青灰色粘土	□15.6、高(5.3)	(外)ナデ。(内)ナデ、指オサエ。(外口)櫛状文。(内口縁)刻点文。	砂粒(細)、にぶい黄橙色、良好
15		弥生式土器	無頸壺	西側谷　北西部　青味色粘土	□16.6、高(3.4)	(口縁端部)4条の回線文、櫛状文、調整不明。	砂粒(中・細)、灰黄褐色、普通
16		弥生式土器	高坏脚部	東側谷　青灰色粘土	□14.4、高(3.4)	(外)ナデ。(内)ヘラ削り。	砂粒(細)、灰黄褐色、普通
17		弥生式土器	高坏脚部	東側谷　青灰色粘土	底12.1、高(4.2)	(外脚)回線文。(外)ナデ。(内)ヘラ削り。	砂粒(中)、灰黄色・(一部)黒色、普通
18		弥生式土器	脚部	東側谷　青灰色粘土	底13.6、高(2.9)	(外)調整不明。(内)ナデ。	砂粒(中)、(外)にぶい黄橙色・(内)黒～灰黄褐色、普通

東側谷暗黒色粘土層出土弥生式土器

図番号	図版番号	種部	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
41－1		弥生式土器	壺	東側谷　暗黒色粘土	□29.6、高(7.6)	(外口)円形浮文の痕跡あり。(内口)刺突文。	砂粒(細)、灰白色、良好
2		弥生式土器	壺	東側谷　青灰色粘土	□30.4、高(6.1)	(外)円形浮文。(内)1cm幅に3本ナデ。(内口)刺突文。	砂粒(細)、にぶい黄橙色、普通
3		弥生式土器	壺	東側谷　暗黒色粘土	□20.6、高(1.5)	(外)ナデ。(口)櫛状文、刺突文。	砂粒(中)、灰白色、普通
4		弥生式土器	壺	西側谷　暗黒色粘土	□16.6、高(4.9)	(外)ナデ。(内)ナデ、ハケ。	砂粒(細)、淡黄色、普通
5		弥生式土器	壺	東側谷　暗黒色粘土	□13.5、高(5.0)	(外口)櫛状文。(内口)刺突文。	砂粒(含)、(外)灰黄色・(内)灰白色、普通
6		弥生式土器	壺	東側谷　暗黒色粘土	□19.2、高(3.3)	(口)円形浮文。	砂粒(中)、浅黄橙色、普通
7		弥生式土器	壺	東側谷　暗黒色粘土	□16.4、高(1.8)	穿孔が2つある(直径5mm)。	砂粒(細)、灰黄褐色、普通
8		弥生式土器	壺	東側谷　暗黒色粘土	□16.4、高(1.6)	(外)ナデ。	砂粒(含)、(外)淡黄色・(内)赤白色、普通
9	223－6	弥生式土器	壺	東側谷　暗黒色粘土	□17.2、高(8.2)	(外口縁)ナデ。(外体)ヘラミガキ。	砂粒(中・細)、にぶい黄橙色・黒色、良好

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
41－10		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□13.4、高(2.0)	(外)ナデ、ハケ。	砂粒(細)、灰黄褐色、普通
11		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□20.2、高(2.7)	(外・内)剥落が著しく調整不明。	砂粒(含)、淡黄色、普通
12		弥生式土器	壺	西側谷 暗黒色粘土	□16.5、高(4.0)	剥離著し。	砂粒(細)、(外)淡黄色・(内)にぶい赤橙色、普通
13		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□16.6、高(1.7)	(外)ハケ。	砂粒(細)、(外)灰黄褐色・(内)灰黄色、普通
14		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□19.0、高(6.2)	(外)ナデ。(内)ナデ。	砂粒(細)、にぶい灰褐色、普通
15		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□14.2、高(5.5)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、(外)灰白色・(内)淡黄色、普通
16		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□17.8、高(5.4)	(外・内)ハケ、ナデ。	砂粒(密)、(外)橙色・(内)にぶい橙色、良好
17		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□22.2、高(1.7)	(口)縄状文、刺点文。(外・内)ナデ。	砂粒(細)、にぶい黄褐色・(口一部)黒色、普通
18		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□13.5、底 3.1、高 4.2	(外)(内)ミガキ。(内)(内)不明。	砂粒(細)、灰褐色、良好
19		弥生式土器	無頸壺	東側谷 暗黒色粘土	□18.4、高(3.6)	(外)ナデ、ハケ、穿孔が2つある。(内)ナデ。	砂粒(中・細)、にぶい黄橙色・灰白色、普通

東側谷暗黒色粘土層出土弥生式土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
42－1		弥生式土器	鉢	東側谷 暗黒色粘土	□44.2、高(6.7)	(外口)竹管文。(外体)縄状文。(内)ナデ。	砂粒(含)、にぶい黄橙色・黒褐色、普通
2		弥生式土器	無頸壺	東側谷 暗黒色粘土	□22.8、高(4.4)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、白灰色、やや脆弱
3		弥生式土器	鉢	東側谷 暗黒色粘土	□24.8、高(5.6)	(外)凹線文、ヘラミガキ。(内)ナデ。	砂粒(中)、にぶい黄橙色、普通
4		弥生式土器	鉢	東側谷 暗黒色粘土	□21.2、高(3.6)	(外)凹線文。(内)ナデ。	やや粗・砂粒(細)、にぶい黄橙色、良好
5		弥生式土器	高坏	東側谷 暗黒色粘土	底13.0、高(1.4)	(外)ヘラミガキ。(内)ヘラ削り。	粗・砂粒(含)、にぶい黄橙色、普通
6		弥生式土器	高坏脚部	東側谷 暗黒色粘土	底12.0、高(3.6)	ナデ。	砂粒(細)、にぶい黄橙色、普通
7		弥生式土器	高坏脚部	東側谷 黒灰色土	底12.3、高(5.7)	(外・内)ナデ。	砂粒(中・細)、灰白色、普通
8		弥生式土器	壺?	東側谷 青灰色粘土	□27.8、高(1.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、(外)灰白色・(内)淡黄色、普通
9		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□36.8、高(9.6)	(外・内)剥落著しく調整不明。	砂粒(含)、(外)淡黄色・(内)にぶい黄橙色、やや脆弱
10		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□32.9、高(6.7)	(外)ナデ、ハケメ。(内)ナデ。	砂粒(細)、灰白色、良好
11		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□42.2、高(4.6)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、褐色、普通
12		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□34.0、高(5.7)	(外)ナデ。(内)ナデ、ヘラ削り。	砂粒(中・細)、にぶい黄橙色、普通

東側谷暗黒色粘土層出土弥生式土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
43－1		弥生式土器	壺	西側谷 暗黒色粘土	□20.8、高(3.3)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、暗灰黄色、普通
2		弥生式土器	壺	西側谷 暗黒色粘土	□26.8、高(5.7)	(外)ナデ。(内)剥落著しく調整不明。	砂粒(中)、灰黄褐色、普通
3		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□22.0、高(3.3)	(外・内)調整不明。	砂粒(細)、淡黄橙色、普通
4		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	口(26.6)、高(9.0)	(外)ナデ。(内)ナデ、ヘラ削り。	砂粒(含)、にぶい黄橙色、良好
5		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□23.3、高(4.2)	(外・内)ナデ。	粗・砂粒(含)、にぶい黄橙色、普通
6		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□23.6、高(7.4)	(外)ハケ、ナデ。(内)ヘラ削り、ナデ。	砂粒(大・中)、灰白色、普通
7	223－8	弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□23.0、高(4.7)	(外・内)ナデ。	粗・砂粒(中)、灰褐色、良好
8	224－1	弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□27.6、高(10.7)	(外)ハケ、ナデ。	砂粒(細)、灰黄色、普通
9		弥生式土器	壺?	東側谷 暗黒色粘土	□20.0、高(2.2)	(外)ナデ。	砂粒(細)、灰黄褐色、普通
10		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□18.8、高(8.2)	(外)ナデ、ハケメ(1cm/8本)。(内)ナデ、ヘラ削り。	砂粒(中・細)、(外)黒褐色・(内)灰褐色、普通
11		弥生式土器	壺?	東側谷 暗黒色粘土	□19.4、高(7.2)	(口)ミガキの後が少しある(2本)。(外)ミガキの後が少しある。(内)指オサエの後がある。	やや密、褐灰色、良好
12		弥生式土器	壺	西側谷 暗黒色粘土	□14.6、高(2.7)	(外・内)剥落著しく調整不明。	砂粒(含)、にぶい黄橙色、不良
13		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□10.6、高(6.5)	(口)ナデ。(外・内)ハケ。	砂粒(細)、灰黄褐色・(口)黒色、良好
14		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□13.6、高(4.4)	(外)ナデ、ハケ後ナデ、1cm間に4本。	砂粒(細)、灰黄褐色、普通
15		弥生式土器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□11.4、高(3.5)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、にぶい黄橙色、普通
16		弥生式土器	壺	西側谷 暗黒色粘土	□15.0、高(8.1)	(外)ナデ。(内)ハケ。	砂粒(微)、にぶい黄橙色、普通

谷青灰色粘土層出土弥生式土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
44－1		弥生式土器	壺	西側谷 青灰色粘土	□39.0、高(32.0)	(外)ヘラミガキ後[illegible]。(内)指オサエ[illegible]。(内口部)ヨコナデ。	金雲母・砂粒(大)、茶褐色[illegible]、良好、こげ茶色、良好
2		弥生式土器	壺	東側谷 青灰色粘土	底10.0、高(33.5)	(外体上)櫛書き沈線文、波状文。(外体下)ヘラミガき。(内底)指オサエ。(内体)ハケ。	砂粒(大)、褐灰色、良好

東側谷暗黒色粘土層出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
45－1		土師器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□16.7、高(3.8)	(外)ナデ、ススが付着。(内)ナデ。	砂粒(含)、(外)黒色・(内)にぶい黄橙色、普通

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
45-2		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□16.8、高(5.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、白灰色、良好
3		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□13.7、高(5.1)	(外)ハケ、ナデ。(内)ヘラ削り、ナデ。	砂粒(中)、褐色・(外口)やや黒色、良好
4		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□15.8、高(3.9)	(外上)横ナデ。(外下)ヘラ削り。	やや粗・砂粒(中)、灰黄褐色・灰黄色、普通
5		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□11.3、高(3.6)	(外・内)ナデ。	密・砂粒(含)、暗灰黄色、普通
6		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□13.2、高(3.8)	ナデ。	砂粒(中・細)、灰黄褐色、普通
7		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□13.4、高(5.5)	(外)ナデ。(内口)ナデ。(内下)ヘラケズリ。	砂粒(細)、灰黄褐色、普通
8		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□13.1、高(2.8)	ナデ。	砂粒(細)、暗灰黄色、普通
9		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□11.8、高(3.2)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、灰黄褐色、普通
10		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□14.5、高(3.4)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、(外)黒褐色・(内)灰黄褐色、普通
11	225-2	土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□13.6、高22.0	(外)1cm幅にハケメ7本。(内)ヘラ削り。	粗・砂粒(含)、灰黄褐色・黒色、普通
12	3	土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□12.2、高(19.9)	横ナデ。(外)ハケ。(内)ヘラ削り。	砂粒(中)、灰黄褐色、普通
13	5	土師器	壺?	東側谷　暗黒色粘土	□15.0、高(21.8)	(外)ハケメ。(内)ヘラ削り。口縁部ナデ。	やや粗・砂粒(大・中)、(外)にぶい黄橙色・(内)灰黄褐色、良好
14	6	土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□15.5、高(24.9)	(外口縁)ナデ。(外体)ハケメ。(外底)ナデ。(内口縁)ナデ。(内体上)ヘラ削り。(内体下)指オサエ。(内底)ヘラ削り。	砂粒(細)、灰白色、良好

東側谷暗黒色粘土層出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
46-1		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□22.6、高(10.5)	(外)ハケ、ナデ。(内)ナデ、ヘラ削り。	粗・砂粒(含)、(外)暗褐色・黒色・(内)灰黄褐色・黒褐色、普通
2		土師器	甕F型	東側谷　暗黒色粘土	□26.3、高(5.2)	(外・内)ナデ。	やや密・砂粒(含)、にぶい黄橙色、不良
3		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□14.0、高(5.0)	(外・内)剥落著しく調整不明。	砂粒(中・細)、(外)褐灰色・(内)灰黄色、普通
4		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□18.4、高(8.5)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、(外)暗灰色・(内)灰黄褐色、普通
5		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□17.4、高(4.2)	ナデ。	密・砂粒(含)、(外)灰白色・(内)浅黄色、普通
6		土師器	甕E型	東側谷　暗黒色粘土	□13.6、高(4.6)	ナデ。	砂粒(細)、灰黄褐色、普通
7		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□15.2、高(4.5)	(外・内)ナデ。	やや密・砂粒(含)、灰白色・灰色、不良
8		土師器	甕(口縁部)(ふんりん部)	東側谷　暗黒色粘土	□17.4、高(5.7)	(外)ナデ。(内)ナデ。	やや粗・砂粒(含)、にぶい黄橙色、普通
9		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□19.6、高(5.4)	(外・内)ナデ。	比較的密・砂粒(含)、(外)灰黄色・(内)浅黄色、普通
10		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□18.6、高(6.3)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、(外)暗灰黄色・(内)灰黄色、普通
11	225-1	土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□16.6、高(13.9)	(外口)ナデ。(外体)ハケメ10本/1.3cm。(内口から肩上)ナデ。(内体)ヘラ削り。	砂粒(中・細)、灰黄褐色・(口一部)黒色、普通
12		土師器	高坏脚部	東側谷　暗黒色粘土	□17.0、高(3.7)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、(外)浅黄色・(内上)黒褐色・(内下)褐色、良好
13		土師器	高坏脚部	東側谷　暗黒色粘土	□16.5、高(3.3)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、にぶい黄橙色、良好
14		土師器	高坏	東側谷　暗黒色粘土	□17.0、高(5.0)	(内)ハケメが一部残っている。	粗・砂粒(細)、浅黄橙色、普通
15		土師器	高坏脚部	東側谷　暗黒色粘土	□15.0、高(3.8)	(外・内)ナデ。	やや粗・砂粒(中)、褐灰色、良好
16		土師器	高坏	東側谷　暗灰色粘土	□17.0、高(4.5)	(外)ナデ。(内)ハケ後ナデ。	砂粒(細)、暗灰黄色、普通
17		土師器	高坏	東側谷　暗灰色粘土	□15.7、高(4.3)	(外)10本/1cmのハケメ後ナデ。(内)8本/1cmのハケメ。	砂粒(細)、にぶい褐色、普通
18		土師器	高坏A型	東側谷　暗灰色粘土	□14.0、高(4.3)	ナデ。	砂粒(中・細)、灰黄褐色、普通
19		土師器	高坏	東側谷　暗灰色粘土	□15.0、高(4.7)	(外)ハケメ。(内)ハケ後ナデ。ハケメが少し残っている。	砂粒(中・細)、暗灰黄色、普通
20		土師器	小型丸底壺	東側谷　暗黒色粘土	□8.5、高9.5	(外)指オサエのちハケ。(内)ヘラ削り。	金雲母・砂粒(中)、灰黄褐色、良好
21		土師器	小型丸底壺	東側谷　暗黒色粘土	□11.8、高7.5	(外)指オサエ、ナデ。(外底)上一下ヘラ削り。(内)ハケ、ナデ。	砂粒(細)、オリーブ黒色、良好

東側谷暗黒色粘土層出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
47-1		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□30.8、高(12.8)	(外)ハケメ、すすをかぶっている。	砂粒(中)、黄灰色、良好
2		土師器	甕F型	東側谷　暗黒色粘土	□23.2、高(13.0)	(外)ナデ。(内)ナデ、ヘラ削り。	砂粒(細)、灰黄褐色、普通
3		土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□28.1、高(12.5)	(外)ナデ、一部ハケ残存、剥離著しい。(内)ナデ、ヘラ削り。	砂粒(細)、灰褐色・黒色、良好
4	224-6	土師器	甕	東側谷　暗黒色粘土	□31.0、高(27.6)	約分残存。(外)ハケ、ナデ。(内)ナデ、ヘラ削り。	砂粒(中多)、褐灰色、良好

東側谷　青灰色粘土層出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
48-1		土師器	甕A型	東側谷　青灰色粘土	□13.6、高(3.4)	ナデ。	砂粒(細)、(外)黒褐色・(内)灰黄褐色、普通
2		土師器	甕K型	東側谷　青灰色粘土	□10.9、高(3.1)	ナデ。	砂粒(中)、灰黄褐色、普通
3		土師器	甕G	東側谷　青灰色粘土	□29.0、高(6.2)	ナデ。(外)一部ハケ残存。	やや密・砂粒(含)、灰黄色・黒色、普通
4	224-5	土師器	甕	東側谷　青灰色粘土	□17.0、高(9.2)	(外)ハケ、ナデ。(内)ナデ、ヘラ削り。	砂粒(中)、(外)灰褐色・(内)にぶい橙色、普通
5		土師器	甕	東側谷　青灰色粘土	□16.0、高(6.7)	(外)ハケ、ナデ。(内)ナデ。	砂粒(中)、灰黄褐色、普通

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
48－6		土師器	壺	東側谷 青灰色粘土	□13.8、高(7.0)	(外)ハケ。(内)ナデ。	やや密・砂粒(含)。(外)灰褐色・(内)明灰色、普通
7		土師器	甕口縁A型	東側谷 青灰色粘土	□15.9、高(2.5)	(外・内)ナデ。	やや密・砂粒(含)、灰黄色、普通、一部剥離
8		土師器	甕G	東側谷 青灰色粘土	□17.4、高(5.3)	(外)ナデ。(内)ハケ後ナデ、ヘラ削り。	やや密・雲母・砂粒(含)、(外)黄褐色・(内)にぶい黄橙色、良好
9		土師器	甕	東側谷 青灰色粘土	□15.2、高(6.2)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、明褐灰色、普通
10		土師器	坏	東側谷 青灰色粘土	□13.5、高(3.2)	(外)ナデ、手持ちヘラ削り。(内)ナデ。	密、(外)黒色・(内)暗青灰白色、良好
11		須恵器	坏	東側谷 青灰色粘土	高(2.3)	(外)ナデ、手持ちヘラ削り。(内)ナデ。	密、(外)暗灰色・(内)暗青灰色、良好
12	226－3	須恵器	把手付き椀	東側谷 青灰色粘土	底 5.9、高(5.0)	ヘラ削り。	砂粒(含)、灰色、良好
13		須恵器	異形器台	東側谷 青灰色粘土	底40.0、高(8.6)	ナデ。波状文。	密、青灰色、良好
14		須恵器	坏	東側谷 青灰色粘土	□15.1、高(3.1)	(外)ナデ、左回りのヘラ削り。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
15		須恵器	坏	東側谷 青灰色粘土	□10.8、高(2.2)	(外・内)ナデ。	密、白灰色、良好
16	226－7	須恵器	高台付坏	東側谷 青灰色粘土	□16.2、底11.2、高 5.2	(外体)ナデ。(外底)左回りのヘラ切り。(外)ヘラ記号×。(内)ナデ、仕上げナデ。	砂粒(含)、暗青灰色、良好
17	6	須恵器	坏蓋	東側谷 青灰色粘土	□13.2、高 1.9	(外)ケズリ、ナデ。(内)ナデ。	密、(外)灰白色・(内)青灰色、良好
18	5	須恵器	坏蓋	東側谷 青灰色粘土	□ 9.0、高 2.0	(外)ナデ、左回りのヘラ削り。(内)ナデ。	砂粒(含)、(外)自然釉、(内)灰白色、良好
19	8	須恵器	高盤	東側谷 青灰色粘土	底13.6、高(4.2)	(外・内)ナデ。	密、灰色、良好
20		須恵器	陶棺	東側谷 青灰色粘土	高(5.0)	(外)タタキ、ナデ。(内)タタキ後ナデ、ハケ。	砂粒(細)、青灰色、良好
21	226－9	須恵器	鉢	東側谷 青灰色粘土	底 9.8、高(7.0)	(外体)左回りのヘラ削り。(外高台)ナデ。(内)ナデ。	砂粒(細)、青灰色、良好

東側谷暗黒色粘土層出土須恵器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
49－1	226－1	須恵器	異形器台	東側谷 暗黒色粘土	□16.8、推高57.4	ナデ。波状文。	密、(外)灰色・(内)青灰色・(一部)灰白色、良好、焼状
2		須恵器	蓋	東側谷 暗黒色粘土	□32.6、高(7.4)	ナデ。	密、暗青灰色、良好
3		須恵器	蓋	東側谷 暗黒色粘土	□35.0、高(2.6)	ナデ。(外端寄り)縦方向ナデ。	砂粒(細)、暗青灰色、良好
4		須恵器	横瓶	東側谷 暗黒色粘土	高(6.0)	(外)叩キ、ナデ。(内)指オサエ、ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
5	226－2	須恵器	鉢	東側谷 暗黒色粘土	□21.8、底12.8、高 19.2	(外)ナデ。(外底直上)右回りのヘラ削り。(外底)指オサエ、ヘラ削り。(内)ナデ。	精緻、青灰色、良好
6		須恵器	壺	東側谷 暗黒色粘土	□ 7.8、高(4.2)	(外頸)叩キ。(外口)ナデ。(内頸)叩キ、ハケ。(内口)ナデ。	砂粒(含)、暗灰色、良好
7		須恵器	坏蓋	東側谷 赤褐色土	□14.2、高 4.2	(外)ヘラ削り。(内)ナデ。	砂粒(大・中)、灰色、良好
8		須恵器	坏	東側谷 暗黒色粘土	□14.5、高(4.3)	(外)ナデ。左回り？のヘラ削り。(内)ナデ。	砂粒(中)、暗青灰色、良好
9		須恵器	鉢	東側谷 暗黒色粘土	底 5.4、高(4.7)	(外)ナデ。(外底周)左回りのヘラ削り。(外底中)縦・斜の圧痕。(内)ナデ。	砂粒(中)、暗青灰色、良好

東側谷出土江戸時代磁器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(色調・焼成・その他)
50－1	227－1	磁器	碗	東側谷 南部上層 赤褐色土	□ 9.5、底 3.6、高 4.8	(圏線)高台2条、体下1条。(文様)梅併状文。砂高台	(色)青灰色・暗青灰色、(釉)明緑灰色。
2	2	磁器	碗	東側谷 東南斜面 明褐色土	□10.3、底 4.2、高 5.0	(内)輪状に上釉をふき取っている。(圏線)体下1条、高台2条。(文様)竹持笹。	(色)青灰色・暗青灰色、(釉)明青灰色
3		磁器	碗	東側谷 南東斜面 黄褐色土	□11.4、底 4.7、高 4.2	(内)輪状に上釉をふき取っている。(圏線)体下1条、高台2条。(文様)竹持笹。	(色)暗緑灰色、(釉)明青灰色
4		磁器	碗	東側谷 南東斜面 黄褐色土	□10.5、底 3.8、高 4.8	(圏線)腰1条、高台2条。	(色)明灰色、(釉)透明に近い、良好
5		磁器	碗	東側谷 東南斜面 黄褐色土	□10.3、底 3.8、高 5.0	(内)輪状に上釉をふき取っている。(圏線)体下1条、高台2条。	(色)青灰色・暗青灰色、(釉)明青灰色
6	227－6	磁器	碗	東側谷 東南斜面 明褐色土	□ 7.6、底 3.3、高 4.1	(外高台)上釉がとれている。(圏線)体下1条、高台2条。	(色)青灰色・暗青灰色、(釉)明青灰色
7		磁器	碗	東側谷 南部上層 赤褐色土	□ 7.0、底 2.1、高 3.5	底付のみ釉なし。	(色)灰白色、白磁
8		磁器	蓋	東側谷 青灰色粘土	□ 9.2、高(6.0)	(内)頂部釉なし。	(釉)明緑灰色、青磁
9	228－3	磁器	蓋	東側谷 東斜面 黄褐色土	底 4.5、高(7.2)	(外高台底)釉なし。(文様)。	(釉)明青灰色、(文様)竹持笹・暗青灰色
10	8	磁器	仏供碗	東側谷 南東斜面 黄褐色土	□ 7.2、高 5.3	(文様)双線文。	(色)暗青灰色・(釉)(外)灰白色・(内)明緑灰色
11		磁器	碗	東側谷 南部 赤褐色土	□ 9.1、底 3.5、高 4.9	(圏線)体下1条、高台2条	(色)青灰色、(釉)明青灰色
12	227－4	磁器	碗	東側谷 東南斜面 黄褐色土	□10.6、底 4.2、高 5.4	(圏線)体下1条、高台1条。	(釉)明青灰色、(胎)灰白色
13		磁器	碗	東側谷 北東斜面 黄褐色土	□11.2、底 4.4、高 4.7	(圏線)体下1条、高台2条。	(色)青灰色・暗青灰色、(釉)明青灰色
14	227－5	磁器	碗	東側谷 北東斜面 黄褐色土	□11.0、底 3.8、高 5.6	(圏線)腰1条、高台2条。	(色)明灰色、(釉)透明、良好
15		磁器	碗	東側谷 南東斜面 明褐色土	□10.2、底 4.3、高 4.9	(圏線)体下1条、高台2条。	(色)青灰色・暗青灰色、(釉)明青灰色
16	227－7	磁器	碗	東側谷 東南斜面 明褐色土	□ 9.5、底 3.2、高 4.6	(圏線)体下1条、高台2条。(文様)網目文。	(色)暗オリーブ灰色、(釉)オリーブ灰色
17	9	磁器	碗	東側谷 北東斜面 黄褐色土	□ 6.8、底 2.7、高 3.8	(圏線)体下1条、高台1条。	(色)暗青灰色、(釉)明青灰色
18		磁器	皿	東側谷 東南斜面 明褐色土	□13.2、底 4.2、高 3.1	(外底)釉薬がかかっていない。(内)輪状に釉薬がふきとってある。	(色)青灰色・暗青灰色、(釉)明青灰色
19		磁器	皿	東側谷 北斜面上層4－3	□ 8.9、底 3.3、高 2.85	(内)輪状に釉薬がふきとってある。	(釉)明青灰色
20		磁器	碗	東側谷 南東斜面 黄褐色土	□ 9 3、底 3.8、高 5.0	(内)上釉を輪状にふきとっている。(圏線)体下1条、高台2条。	(色)青灰色・暗青灰色、(釉)明青灰色

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
50-21	227-3	磁器	碗	東側谷　東斜面　黄褐色土	□10.6、底 4.1、高 4.75	(内)上釉を輪状にふきとっている。(圏線)体下1条。(文様)雰囲気。	(色)緑灰色・暗緑灰色、(釉)淡青灰色
22		磁器	碗	東側谷　東南斜面　黄褐色土	□10.8、底 4.3、高 4.9	(圏線)体下1条、高台2条。	(色)青灰色、(釉)明青灰色
23		磁器	碗	東側谷　東南斜面　黄褐色土	□10.8、底 3.8、高 5.2	(圏線)腰1条、高台2条。(文様)梅折枝文。	(色)灰色、(釉)浮白色、良好
24		磁器	碗	東側谷　東南斜面　黄褐色土	□10.8、底 3.8、高 4.9	(圏線)体下1条、高台1条。	(色)灰白色、(釉)明緑灰色、梅折枝文、(文様)黒色・青灰色
25		磁器	碗	東側谷　東南斜面　黄褐色土	□10.6、底 4.2、高 5.2	(圏線)腰1条、高台2条。	(色)明灰色、良好
26		磁器	碗	東側谷　東南斜面　黄褐色土	□12.4、底 4.7、高 5.7	(内)上釉を輪状にふきとっている。(圏線)なし。(文様)なし。	(釉)明青灰色
27	228-1	磁器	碗	東側谷　東南斜面　明褐色土	□ 8.9、底 3.3、高 5.0		(色)灰白色、白磁
28	2	磁器	皿	東側谷　東南斜面　黄褐色土	□12.9、底 4.6、高 3.6	輪状に釉薬をふきとっている。	(釉)灰黄色・灰白色
29		磁器	鉢	東側谷　東斜面　黄褐色土	□19.8、底 9.2、高 6.7	(圏線)外体下3条。内底3条。	(色)柳・唐草・圏線・赤色、(釉)外圏線・青色、灰白色
30	228-5	磁器	碗	東側谷　東斜面　黄褐色土	□10.0、底 3.9、高 5.5	圏線なし。	丸文
31	227-8	磁器	碗	東側谷　東斜面　黄褐色土	□12.5、底 4.7、高 5.9	(内)輪状に釉薬をふきとっている。(圏線)体下1条、高台2条。	(釉)明緑灰色、(文様)暗青灰色
32	229-6	磁器	碗	東側谷　北東斜面　黄褐色土	□13.4、底 4.6、高 5.7	(内)輪状に釉薬をふきとっている。(圏線)体下1条、高台2条、内2条。	(色)青灰色、(釉)明青灰色
33	7	磁器	碗	東側谷　東斜面　黄褐色土	□11.5、底 6.7、高 6.7	(圏線)体下1条。	(釉)明灰色、(文様)暗灰色
34	227-10	磁器	碗	東側谷　東南斜面　明褐色土	□11.6、底 3.7、高 6.4	(圏線)体下1条、高台2条。	(釉)明青灰色、(文様)青灰色・暗青灰色

東側谷出土江戸時代土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
51-1	229-4	京焼	碗	東側谷　東南斜面　黄褐色土	□ 9.2、底 3.1、高 5.6	(高台)釉がかかっていない。	(釉)灰白色、(文様)明青灰色・赤色
2		京焼	碗	東側谷　東南斜面　黄褐色土	□ 9.1、底 3.1、高 5.4	(外体下・高台)釉がかかっていない。	(釉)淡黄色、(高台)灰白色
3	229-9	磁器	碗	東側谷　東南斜面　黄褐色土	□ 9.9、底 3.3、高 4.5	(文様)雷。	(色)暗オリーブ色、(釉)灰オリーブ色
4		磁器	碗	東側谷　東南斜面　黄褐色土	□11.8、底 4.4、高 5.8	(外体下半・高台)釉薬がかかっていない。	(色)オリーブ黄色、(断・高)灰白色
5	229-1	唐津焼	鉢	東側谷　東南斜面　黄褐色土	□20.8、底 7.3、高 8.7	(外体下半・高台)釉がかかっていない。(内)輪状に釉をふきとっている。	砂粒(含)、にぶい橙色・褐灰色・(断)にぶい赤褐色
6	2	唐津焼	鉢	東側谷　東南斜面　黄褐色土	□18.6、底 8.5、高 9.7	(外底口)粘土貼り付け。(外体中央・高台)釉がかかっていない。(内底口)三角形状に穿孔。	褐灰色、にぶい橙色・暗赤褐色・(断)赤褐色
7		唐津焼	鉢	東側谷　東南斜面　黄褐色土	□23.4、高(8.1)	(外体下半)右回りのヘラ削り。(外体中央一部)釉がかかっていない。	褐色・灰黄色・にぶい黄橙色
8		備前焼	擂り鉢	東側谷　表土	□38.0、底14.0、高 15.2	粘土のつぎめ跡。すり目後口縁部のナデ。	砂粒(中)、極暗褐色・赤褐色・(底)明赤褐色
9		備前焼	擂り鉢	東側谷　東南斜面　黄褐色土	□39.0、底18.8、高15.2	(外)横ナデ、底部にワラの痕。(内)底部に擂し目。横ナデ。	砂粒(細)、(外・断)明赤褐色・(内)赤褐色、普通
10		土師器	羽釜	東側谷　東南斜面　黄褐色土	□30.7、高(5.2)	(外)ナデ。(外底直上・外底)右回りのヘラ削り。(内)ナデ。	金雲母・砂粒(細)、(外)オリーブ黒色・(内)にぶい橙色、良好
11		土師器	羽釜	東側谷　東南斜面　黄褐色土	□28.9、高(4.4)	(外)ナデ。(外底直上・外底)右回りのヘラ削り。(内)ナデ。	金雲母・砂粒(細・微)、にぶい橙色、良好

東側谷出土江戸時代土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
52-1	229-6	土師器	火鉢	東側谷　東南斜面　明褐色土	□22.6、高 22.5	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、明褐色、良好
2	7	土師器	瀬戸焼	東側谷　東南斜面　明褐色土	□13.2、高(13.1)	(外)ナデ。(内)指オサエ。	密・金雲母・砂粒(含)、(外)にぶい橙色・(内)にぶい赤褐色、良好
3		土師器	火鉢	東側谷　南東斜面　黄褐色土	□20.8、高 13.7	(外)ナデ。(内)指オサエ、ナデ。	金雲母・砂粒(含)、にぶい橙色、良好
4	229-4	土師器	火鉢	東側谷　南東斜面　黄褐色土	□20.3、高 13.6	(外)ナデ。(内)指オサエ、ナデ。	砂粒(細)、にぶい橙色、良好
5	3	土師器	火鉢	東側谷　南東斜面	□17.0、高 7.0	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、淡橙色、普通
6	5	土師器	火鉢	東側谷　東斜面　黄褐色土	底19.7、高(14.2)	(外)ナデ。(内)指オサエ。	砂粒(中・細)、オリーブ褐色、良好
7		土師器	火鉢	東側谷　東斜面　黄褐色土	□20.8、高(11.0)	(外)ナデ。(内)指オサエ。	金雲母・砂粒(中・細)、橙色、良好
8		土師器	火鉢	東側谷　東南斜面　明褐色土	底17.5、高(6.4)	(外)ナデ。(内)指オサエ。	金雲母・砂粒(細・中・微)、橙色、良好

SBK1・2・3・4出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
54-1		土師器	甕	SBK1	□30.0、高(3.2)	(外)ナデ。(内)ハケ後ナデ。	砂粒(細)、明赤褐色・にぶい橙色、普通
2		土師器	甕	SBK1	□18.8、高(4.8)	(外)ハケ。	砂粒(中)、褐色、普通
3		土師器	甕	SBK1　淡茶褐色土	□14.3、高(6.2)	(外)ナデ。(内)ナデ、ヘラ削り。	砂粒(中)、にぶい橙色・橙色、普通
4		土師器	甕	SBK1　淡茶褐色土	□15.0、高(4.4)	(外)ナデ。(内)ナデ。	やや密・砂粒(含)、橙色・にぶい橙色、普通
5		土師器	甕	SBK1	□15.8、高(1.8)	剥離している。	やや密・砂粒(含)、(外)褐灰色・(内)橙色、普通
6		土師器	甕	SBK1　淡茶褐色土	高(2.6)	(外・内)ナデ。	密・砂粒(含)、(外)橙色・(内)明黄褐色、普通
7		土師器	甕	SBK1　上層	高(2.3)	ナデ。	やや密・砂粒(含)、(外)橙色、(内)明黄褐色、普通
8		土師器	甕底部	SBK1　淡茶褐色土	底 5.0、高(2.7)	(外・内)指オサエ。	密・砂粒(含)、(外)淡黄橙色・(底)黄灰色、普通
9		土師器	高坏	SBK1　上層　淡茶褐色土	脚□14.2、高(4.5)	(外)ケズリ後ナデ。(内)不定方向にハケに近いナデ。	密、(外)淡黄褐色・(内)淡黄赤褐色、良好
10		土師器	甕	SBK1	□12.4、高(2.9)	(外・内)ハケ後ナデ。	砂粒(細)、橙色、良好

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
54-11		土師器	甕	SBK 5	高(1.5)	ナデ	砂粒(多)、橙色、良好
12		土師器	壺	SBK 2	高(3.0)	(外)ナデ。(内)ハケ後ナデ。	砂粒(中)、(外)明灰色・(内)橙色、普通
13		土師器	壺(HE)	SBK 2	高(3.8)	(外・内)ハケ。	砂粒(中)、(外)明灰色・(内)橙色、普通
14	232-1	土師器	壺	SBK 3　土坑	□12.2、高(11.8)	ナデ、ヘラ削り。	砂粒(細)、茶褐色、良好
15		土師器	甕	SBK 3	□13.8、高(3.4)	ナデ。	雲母・砂粒(中・細)、赤褐色、普通
16		土師器	甕	SBK 3　貯蔵穴	□14.8、高(3.7)	ナデ。	砂粒(細)、(外)にぶい黄橙色・にぶい橙色、普通
17		土師器	甕	SBK 3	□14.6、高(3.95)	(外)ナデ。(内)ハケ。	やや粗・砂粒(含)、(外)にぶい赤褐色・(内)にぶい橙色、普通
18		土師器	大型壺	SBK 3　貯蔵穴	□15.5、高(6.9)	(内)ヘラ削り。	粗・砂粒(含)、にぶい橙色、普通
19	232-6	土師器	小型丸底壺	SBK 3	□ 8.9、高 7.5	ハケメ、ナデ、粘土紐つなぎめあり。	砂粒(含)、橙色、良好
20		土師器	高坏	SBK 3　上層	底10.0、高(1.6)	(外)2条の沈線によって直弧文を描いている。	砂粒(中)、明赤褐色、普通
21		須恵器	壺	SBK 3　A区	□16.0、高(8.1)	ナデ。	砂粒(中)、(口)にぶい赤褐色・灰色・(胴)灰色、良好
22		土師器	甕	SBK 4　上層	□15.7、高(2.9)	(外・内)ナデ。	砂粒(中・細)、明褐色、普通
23		土師器	甕	SBK 4　Pit内　茶褐色土	□14.6、高(3.4)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、褐色・橙色、良好
24		土師器	甕	SBK 4　上層	□18.8、高(3.3)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、黄橙色、普通
25	232-7	土師器	小型丸底壺	SBK 4	□ 9.5、高(6.6)	(外)剥落著しく調整不明。(内)指オサエ。	砂粒(中)、浅黄橙色、普通
26		土師器	小型丸底壺	SBK 4	□ 8.3、高(4.3)	(内)ナデ。	粗・砂粒(細)、浅黄橙色、普通
27		土師器	壺	SBK 4	□12.9、高(3.2)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、明褐色、良好
28		土師器	壺	SBK 4　上層	□12.8、高(2.1)	(外・内)ナデ。	砂粒(中)、(外)褐色・(内)暗褐色、良好

SBK 5・6・12出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
55-1		土師器	甕	SBK 5	□11.8、高(5.9)	ナデ。	やや粗・砂粒(細)、(外)橙色・(内)灰黄色、普通
2	232-2	土師器	壺	SBK 5　茶褐色土	□12.4、高(6.4)	(外)ナデ、ハケメ。(内)ナデ、ヘラ削り。	砂粒(細)、(外)明赤褐色・(内)にぶい赤褐色、普通
3		土師器	甕	SBK 5	□12.6、高(2.2)	ナデ。	砂粒(含)、(外)橙色・黄褐色、普通
4		土師器	甕	SBK 5　茶褐色土	□12.9、高(5.0)	(外)ハケ、ナデ。(内)指オサエ、ハケ。	砂粒(中)、明赤褐色、良好
5		土師器	壺	SBK 5	□11.2、高(3.0)	ナデ。	砂粒(中)、(外)にぶい褐色・(内)にぶい橙色、普通
6		土師器	高坏	SBK 5	□18.6、高(5.5)	(外)剥離著しく調整不明。(内)ハケ。	砂粒(中)、橙色、良好
7	232-8	土師器	高坏	SBK 5　茶褐色土	□17.8、高(5.6)	(外)ハケメ後ナデ、底部付近はナデなくハケメがそのまま。(内)ハケメ後ナデ。	砂粒(中)、橙色、良好
8		土師器	高坏	SBK 5・6　茶褐色土	□15.5、高(3.4)	(外)剥離著しく調整不明。	やや粗・砂粒(中・細)、橙色、普通
9		土師器	高坏の脚部	SBK 5	高(4.9)	(外)ヘラ削り、指頭圧痕、ヘラミガキ。(内・脚)ヘラミガキ。	砂粒(中)、橙色、良好
10	232-4	土師器	高坏	SBK 5	高(6.9)	(外)ハケメ。	砂粒(細)、灰黄褐色、良好
11		土師器	高坏	SBK 5・6　茶褐色土	高(2.4)	(外)ハケ5本/1cm。	砂粒(細)、橙色・(基)赤色、普通
12		土師器	壺	SBK 5　茶褐色土	□17.3、高(7.2)	ナデ。	砂粒(含)、橙色・明褐色、良好
13		土師器	甕	SBK 6	□17.3、高(2.6)	ナデ。	砂粒(細)、橙色、普通
14	232-5	土師器	高坏	SBK 6　茶褐色土	□17.8、高(4.9)	ハケメ。	砂粒(含)、浅黄橙色、良好
15		土師器	壺	SBK 6	□19.6、高(2.0)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、赤褐色、良好
16		土師器	壺	SBK 6	□18.9、高(4.3)	(外・内)ナデ。	やや粗・砂粒(中・細)、(外)明赤褐色・(内)黄橙色～黒褐色、良好
17	232-9	土師器	小型壺	SBK 6	□ 8.2、最高 8.8	(外)ハケ。(内)粘土の粒が目立存。	砂粒(細)、橙色・(外一部)灰色、普通
18		土師器	甕	SBK12	□15.8、高(5.4)	(外)ナデ。(内口)ナデ。	やや粗・砂粒(細)、(外)にぶい褐色・(内)にぶい橙色、普通
19		土師器	甕	SBK12　茶褐色土	□15.5、高(2.9)	(外・内)ナデ。	密・砂粒(細)、浅黄橙色、普通
20		土師器	甕	SBK12　茶褐色土	□20.7、高(5.8)	ナデ。	密・砂粒(細)、橙色、良好
21		土師器	壺	SBK12　茶褐色土	高(3.2)	(外)ハケ後ナデ。櫛描文。	やや粗・砂粒(細)、黄橙色、普通
22	232-3	土師器	受口状口縁二重	SBK12　茶褐色土	□17.2、高(8.4)	(外)ナデ。(内)ハケ。	粗・砂粒(細)、にぶい橙色・(内一部)暗褐色、普通
23		土師器	高坏	SBK12	高(4.7)	(外・内)ナデ、ハケ。	やや粗・砂粒(細)、にぶい橙色、普通
24		土師器	高坏	SBK12	底15.3、高(2.5)	(外・内)剥落著しく調整不明。	砂粒(細)、浅黄橙色、普通

SKA 2・4、SX 1出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
56-1	233-1	土師器	高坏	SX 1　黒色粘土	□16.7、底10.5、高12.4	(脚)穴がひとつ。ハケメ。	砂粒(中)、(外)にぶい黄橙色・(内)灰黄褐色、良好
2		土師器	高坏	SX 1	□15.8、高(5.6)	(外・内)剥落著しく調整不明。	砂粒(大・細)、(外)橙色・(内)にぶい橙色、普通
3	233-4	土師器	高坏	SX 1　黒灰色粘土	□14.8、高(4.3)	(外・内)ナデ。	砂粒(中・細)、(外)浅黄橙色・(内)灰白色、普通

図番号	図版番号	種　別	器　種	遺構・地区・層位	法　量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
55－4	233－2	土師器	高坏	SX1　黒灰色粘土	底12.0、高(8.6)	(外)坏部と脚部の継ぎ目に穿孔が2つある。(内)ハケメ。	砂粒(細)、(外)淡黄色・(内)灰色・淡黄色、普通
5	5	土師器	高坏(脚部)	SX1　黒灰色粘土	底12.7、高(7.0)	(外・内)剥落著しく調整不明。	砂粒(中・細)、赤褐色・にぶい黄橙色、普通
6	234－1	土師器	高坏	SX1	底13.1、高(7.1)	(外・内)剥落著しく調整不明。	砂粒(中・細)、橙色、普通
7		土師器	高坏(脚部)	SX1　黒灰色粘土	高(6.4)	(外・内)剥落著しく調整不明。	砂粒(中・細)、淡黄橙色、普通
8	233－6	土師器	高坏(脚部)	SX1　暗灰色粘土	高(5.6)	(外)剥落著しく調整不明。(内)絞り目。	砂粒(中・細)、(外)にぶい黄褐色・(内)にぶい黄橙色、普通
9	3	土師器	高坏(C型)	SX1　黒灰色粘土	口22.8、高(7.9)	(外・内)剥落著しく調整不明。	砂粒(大・中・細)、(外)にぶい黄橙色・(内)にぶい橙色、普通
10		土師器	高坏(坏部)	SX1	高(2.2)	(外)ハケ。	砂粒(含)、(外)淡黄色・(内)淡黄橙色、普通
11		土師器	高坏	SX1	高(3.2)	ナデ。	砂粒(細)、(外)淡赤橙色・(内)灰白色、普通
12		土師器	壺	SX1	口16.2、高(4.4)	(外・内)調整不明。	砂粒(微)、灰白色、普通
13		土師器	壺(二重口縁)	SX1	高(4.0)	ナデ。	砂粒(含)、(外)灰白色・(内)灰黄色、普通
14	233－7	土師器	小型丸底壺	SX1　黒色粘土	口10.6、高10.7	(外)ヘラ削り、ナデ。(内)ナデ。	砂粒(中)、にぶい褐色、良好
15		土師器	手づくねミニチュア	SX1	高(4.2)	ナデ。指オサエ。(底)黒斑あり。	やや密・砂粒(細)、にぶい褐色・橙色・(底)黒色、普通
16	234－2	土師器	小型丸底壺	SX1	高(5.2)	(外・内)剥落著しく調整不明。	砂粒(細)、にぶい黄褐色、普通
17		土師器	小型丸底壺	SX1　黒灰色粘土	高(3.7)	(外・内)剥落著しく調整不明。	砂粒(中)、灰黄色・(底)黒色、普通
18	233－8	須恵器	高坏	SX1	口13.5、底10.3、推高11.0	(外部)自然釉付着、穿孔が2つあり、ナデ。(内口)自然釉付着。	密・砂粒(大)、(外)灰色・オリーブ灰色・(内)灰色・(部)暗赤褐色・(底)オリーブ灰色、良好
19		須恵器	壺	SX1	高(7.2)	ナデ。	密・砂粒(細)、灰色、良好
20		土師器	壺	SKA 2	口14.8、高(5.1)	不鮮明なヘラ削り。ナデ。	密・砂粒(含)、(外)にぶい橙色・(内)淡黄橙色、普通
21		土師器	壺	SKA 2	高(7.2)	(外)ハケ、ナデ。(内)ナデ、ヘラ削り。	粗・砂粒(中)、(外)明赤褐色・(内)橙色、普通
22		土師器	小型丸底壺	SKA 4	底 3.7、高(6.1)	(外)ナデ。(内)指ナデ、ナデ。	砂粒(含)、淡黄橙色、良好
23	234－3	土師器	壺	SKA 4	口18.6、高(9.8)	(外)ハケ、ナデ。(内)ナデ、ヘラ削り。	砂粒(細)、淡黄橙色、普通

P24出土土器

図番号	図版番号	種　別	器　種	遺構・地区・層位	法　量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
57－1		土師器	壺	P24－c 2　茶褐色土	口13.0、高(3.3)	ナデ。	砂粒(細)、淡黄橙色、普通
2		土師器	壺	P24－d 3・4　暗茶褐色土	口15.3、高(2.7)	ナデ。	砂粒(細)、(外)にぶい橙色・(内)橙色、普通
3		土師器	壺K型	P24－c 3	口13.1、高(3.1)	ナデ。	砂粒(細)、(外)暗赤灰色・(内)橙色、普通
4		土師器	壺	P24－a 3　灰黄色土	口13.2、高(2.6)	ナデ。	砂粒(中・細)、(外)にぶい橙色・(内)淡黄橙色、普通
5		土師器	壺	P24－a 1　茶褐色土	口13.9、高(2.8)	(外・内)ナデ。	やや粗・砂粒(含)、(外)にぶい黄橙色・(内)黄橙色、普通
6		土師器	壺	P24－d 3・4　暗茶褐色土	口10.6、高(4.2)	ナデ。(内)粗ヘラ削り。	砂粒(中)、(外)橙色・(内)にぶい橙色、普通
7		土師器	壺	P24	口12.2、高(2.4)	ナデ。	密・砂粒(含)、(外)淡黄橙色・(内)にぶい黄橙色、普通
8		土師器	壺	P24	口14.0、高(4.4)	(外・内)調整不明。	砂粒(細)、(外)にぶい橙色・(内)橙色、普通
9		土師器	壺型	P 24－d 3・4　暗茶褐色土	口13.8、高(3.0)	ナデ。	砂粒(中)、淡黄橙色、普通
10		土師器	高坏	P24－d　暗茶褐色土	口17.6、高(3.8)	ナデ。	砂粒(中・細)、(外)にぶい橙色・(内)明赤褐色、普通
11		土師器	高坏(脚)	P24－d 3　茶褐色土	口17.9、高(4.25)	(外・内)剥落著しく調整不明。	砂粒(中・細)、橙色、普通
12	234－6	土師器	高坏	P24－d 4　茶褐色土	底15.2、高(9.5)	(内)ハケ、粘土のつぎめ残存。	砂粒(中・細)、(外)にぶい橙色・(内)にぶい黄橙色、普通
13		土師器	壺B型	P24－d 3・4　暗茶褐色土	口20.0、高(5.2)	ナデ。	砂粒(中)、橙色、普通
14	234－5	土師器	壺?	P24－d 3　茶褐色土	口28.4、高(13.1)	(外口)ナデ。(外肩)ハケ。(内口)ナデ。(内肩)不明。	砂粒(中)、黄橙色、普通
15	4	土師器	大型壺	P24－c 4　茶褐色土	口18.8、高(7.8)	(外)横ナデ。(内)ハケ後ナデ調整。	砂粒(中)、(外)にぶい橙色・良好
16		土師器	壺	P24－c 4　茶褐色土	口18.0、高(7.2)	ナデ。	砂粒(中)、淡黄橙色、普通
17		土師器	壺(二重口縁)	P24　茶褐色土	口18.8、高(6.3)	ナデ。	砂粒(細)、橙色、普通
18		土師器	高坏	P24－d 3　茶褐色土	高(2.0)	ナデ。	砂粒(細)、淡黄橙色、普通
19		土師器	高坏	P24－d 3	口19.0、高(2.9)	(外)縦方向のハケ後ナデ。(内)横方向のハケ。	砂粒(細)、橙色、普通
20		土師器	高坏	P24－a 1　茶褐色土	高(6.7)	(外・内)ナデ。	やや粗・砂粒(中)、(外)橙色・(内)黄橙色、普通
21	234－7	土師器	手づくねミニチュア	P24－d 3・4　暗茶褐色土	高(5.3)	(外)ハケ。(内)ハケ、粘土のつぎめ残存。	粗粒、(外)にぶい黄橙色・(内)褐灰色、良好、黒色物質付着
22		土師器	壺	P24－d　暗茶褐色土	高(3.3)	ハケ。	砂粒(細)、橙色、良好
23		土師器	坏	P24－d 2　茶褐色土	口11.3、高 3.3	(外・内)剥落著しく調整不明。	砂粒(中)、淡黄橙色、普通
24		土師器	坏	P24－c 4　茶褐色土	高(3.9)	ナデ。	砂粒(含)、淡黄橙色、普通
25	234－8	須恵器	高坏	P24－d 2　茶褐色土	高(5.9)	ナデ。	砂粒(細)、灰色、良好

土壙墓出土須恵器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
58－1		須恵器	きけ系	STK101	高(16.4)	(外)中央部指オサエ後右回りのヘラ削り。一部カキメ。(内)指オサエ、ナデ。	砂粒(中・細)、灰白色、良好
2		須恵器	坏	STK150	□13.7、高 4.1	(外)左回りのヘラ削り、ナデ。	砂粒(中・細)、青灰色、良好
3		須恵器	供膳	STK74・269	高(24.2)	(外)タタキ後カキメ。(内)タタキ。	砂粒(大少・細多)、灰白色、軟
4		須恵器	供膳	STK169	高(22.2)	(外)タタキ後カキメ。(内)タタキ。	砂粒(細・微)、(外)暗赤褐色・淡黄色・黄オリーブ色・(内)淡黄色、やや軟
5		須恵器	供膳	STK93	高(6.2)	(外)タタキ後カキメ、ナデ。(内)タタキ。	精良・砂粒(中・細)、(外)黄灰色・(内)灰色、良好、自然釉
6		須恵器	供膳	STK22・18・30	高(4.3)	(外)タタキ後カキメ。(内)タタキ。	精良・砂粒(微)灰白色、やや不良

土壙墓出土須恵器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
59 1		須恵器	壺	SKA44	□15.6、高(19.8)	(外)タタキ後カキメ。(内)タタキ。	砂粒(粗・多)、(外)暗灰色・(内)青灰色・オリーブ灰色、良好
2		須恵器	壺	SKA14・3・32・23・96・40・10・22・79・30・68	□17.5、推高33.5	(外)タタキ後カキメ。(内)タタキ。	精良・砂粒(細・微)、(外)青灰色・(内)灰赤色、良好
3		須恵器	壺頸部	SKA59、21	高(9.1)	(外)タタキ後カキメ。(内)タタキ。	精良・砂粒(細)、(外)青灰色・(内)暗赤褐色・一部青灰色、良好
4		須恵器	壺	SKA88、SKA 3	高(10.6)	(外)タタキ後カキメ。(内)タタキ。	砂粒(含)、灰白色、不良、軟

SKA 5・6、SDA 5、他出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
60－1		黒色土器	椀	O19-b 2　灰黄褐色土	□13.6、底 7.0、推高 6.0	ヘラミガキ。	やや密・砂粒(太)、黒色・(内底)オリーブ黒色・(断)にぶい黄色、普通
2		黒色土器	椀	SBK 1～3	□15.4、底 7.4、高 6.3	ヘラミガキ。	砂粒(中)、(外)黒灰色・淡赤褐色・(内)灰色・黒灰色・(断)灰色、良好
3		土師器	皿	O19-b 2　灰黄褐色土	□ 9.4、高(1.3)	ナデ。	砂粒(中・細)、淡黄橙色、普通
4		土師器	壺	N19-e 1　黄灰色土	□12.9、高(2.3)	ナデ。	砂粒(細)、赤褐色、良好
5		土師器	壺	O19-b 2　灰黄褐色土	□14.6、高(3.7)	ナデ。	砂粒(細)、(外)淡黄色・(内)にぶい褐色、普通
6		土師器	鉢	O19-b 2　灰黄褐色土	□29.2、高(10.2)	(外)粘土のつぎめ残存。	砂粒(大・中)、(外)赤褐色・(内)暗赤褐色、普通
7		土師器	鉢	O19-b 4　灰黄褐色土	□22.9、高(7.4)	ナデ。	砂粒(大・細)、淡黄橙色、普通
8		土師器	壺	O19-b 2　灰黄褐色土	□17.6、高(4.8)	(外)横ナデ、指オサエ。	砂粒(中)、(外)にぶい橙色・(内)にぶい黄橙色、普通
9		土師器	皿	SKA 5	□10.3、高(1.6)	(外・内)ナデ。	密、淡黄橙色、普通
10		土師器	皿	SKA 5	□10.2、高 1.5	(外・内)ナデ。	密、(外)淡黄橙色・(内)灰白色、普通
11		土師器	皿	SKA 5	□ 9.8、推高 1.5	(外・内)ナデ。	密、(外)淡黄色・(内)灰白色、普通
12		土師器	皿	SKA 5	□ 9.3、高(1.6)	(外・内)ナデ。	密、(外)にぶい橙色・(内)淡黄橙色、普通
13		土師器	皿	SKA 5	□ 9.9、高(1.9)	(外・内)ナデ。	密、(外)淡黄橙色・(内)淡黄色、普通
14		土師器	皿	SKA 5	□ 9.9、高 1.7	(外・内)ナデ。	密、(外)淡黄色・(内)淡黄橙色、普通
15		土師器	皿	SKA 5	□10.3、高 1.6	(外・内)ナデ。	密、(外)淡黄橙色・(内)淡黄色、普通
16		土師器	皿	SKA 5	□10.3、高(1.6)	(外・内)ナデ。	密、(外)明淡黄橙色・(内)淡黄橙色、普通
17		瓦質土器	羽釜	SX 1	□40.2、高(5.7)	(外)ヘラ削り。	砂粒(細)、灰色、普通
18		瓦質土器	羽釜	SDA 5	□24.6、高(5.7)	(外)ヘラ削り。(内) 6本/1cmのハケメ、指ナデ。	砂粒(中・細)、灰白色、普通
19		瓦質土器	羽釜	SDA 5	□(18.3)、高(5.6)	(外)ヘラ削り。	砂粒(細)、(外)灰黄褐色・(内・断)灰白色、普通
20		瓦質	壺	SDA 5	□17.4、高(6.8)	(外)タタキ。(内)指オサエ。	砂粒(細)、(外)黒色・(内)灰白色・(断)にぶい黄色、良好
21		瓦	軒平	SDA 5	幅 3.4	(文様)唐草文。	砂粒(細)、(外)灰白色・灰色・(断)灰白色、普通
22		瓦	軒平	SDA 5	幅 3.3	(文様)唐草文。	砂粒(中・細)、(外)灰白色・灰色・(断)灰白色、普通

石　器

図番号	図版番号	種類	遺構・地区・層位	長・幅・厚(cm)	重量	備考(石材・その他)
61－1	236－1	不定形石器	東側谷　青灰色粘土	5.85×3.08×1.12	15.5 g	サヌカイト。
2	2	不定形石器	東側谷　青灰色粘土	12.2 ×5.78×2.16	148.5 g	〃
3	3	楕状石核	東側谷　暗黒色粘土	15.4 ×8.75×2.4	306 g	〃　使用痕。
62－1	237－1	石鏃未製品	SX 1　東端	1.51×1.17×0.44	0.75g	〃
2	2	石　鏃	東区　N19-e 4　青灰色土	2.72×2.1 ×0.58	2.85g	〃
3	3	石　鏃	STK110	1.88×1.39×0.35	0.59g	〃
4	4	石　鏃	東側谷　P28　青灰色粘土	4.08×2.3 ×0.77	6.17g	〃
5	5	石　鏃	SBK 6　埋土中	(3.15)×1.32×0.42	1.5 g	〃
6		不定形石器	東側谷　表土	6.02×4.72×1.56	52.83g	〃
7		不定形石器	東側谷　青灰色粘土	8.15×4.41×1.7	54.5 g	〃

図版番号	図版番号	種　類	遺構・地区・層位	長・幅・厚(cm)　重量	備　考(石材・その他)
62－8	237－8	石剣丁	東側谷　南西部　暗黒色粘土	(5.53)×3.2 ×0.54　12.33g	緑色片岩。
9	6	ナイフ形石器	東区　N19-c3　黄灰色土	5.57×2.19×0.95　9.67g	サヌカイト。
10	7	ナイフ形石器	第1調査区	5.16×1.75×0.93　9.0 g	〃